
デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

【Nコード】

N5138W

【作者名】

超人カットマン

【あらすじ】

バグラ軍の皇帝「バグラモン」を倒した工藤タイキは、仲間達とデジタルワールドの復興に取り組んでいた。そんな中、不思議な声に導かれ、タイキは仲間のデジモン達と共に、魔法文化が栄える異世界「ミッドチルダ」にやってくる。彼らはそこで「機動六課」の魔道士達と出会う。

これは、タイキとデジモン達、そして機動六課の魔道士達の、友情と戦いの物語。

プロローグ（前書き）

この作品は、作者の考えたクロスオーバー小説です。本編とは一切関係ないので、本来ならクロスハート軍に加入していないデジモンが仲間になっている事があります。

なお、素人の書いた作品なので、読みにくさ諸々についてはご了承ください。

プロローグ

デジタルワールド、それは不思議な生き物「デジモン」が住む世界。人間のネットワーク技術では確認できないところに存在し、あらゆる事物がデータで構成されている。

長いあいだ平和だったこの世界に、ある日大いなる危機が訪れた。皇帝バグラモン率いる「バグラ軍」が突如デジタルワールドに現れ、デジタルワールドをも破壊せんとする勢いでデジタルワールドを平定した。これにより、デジタルワールドは恐怖と絶望が支配すると思われた。

しかしある日、転機が訪れた。人間界から六人の子供がやってきて、その内の五人の子供がデジタルワールドの各地を侵攻するバグラ軍を蹴散らし。その後二人戦線から離れるも、三人の子供が七人の悪のデスジェネラル、悪に染まったもう一人の子供とバグラモンを討ち破り、彼らはデジタルワールドを救った。

これが、後に「伝説のジェネラル」として後世にまで語り継がれる「工藤タイキ」「蒼沼キリハ」「天野ネネ」の武勇伝である。

「貴方の……力が……必要……です……」

「……!?!?」

「どうしたタイキ?」

何か驚くべき事実を知ったような顔をしている「工藤タイキ」を見て、「蒼沼キリハ」が声をかけた。彼らは今、バグラ軍によって荒

らされたデジタルワールドの復興を手伝っている。

「あ、いや、なんでもない。」

タイキはこう答えて、クロスハート軍のデジモン達が作業を行っている場所へ向かっていった。

「あまり無理はするなよ。」

キリハはとりあえずタイキにこう言うと、自分のブルーフレア軍が作業している現場を見た。

彼の軍団のデジモンは真面目に作業を……………していないやつもいた。

「ボムモン」や「ガオスモン」「ゴレモン」「サイバードラモン」は黙々と働いていたが、「グレイモン」「メールバードラモン」は空を見上げていた。

「どうしたグレイモン？メールバードラモン？」

とりあえずキリハは、彼らに働いていない理由をきいた。万が一バグラ軍の残党か何かが攻めてくる事が分かったというのであれば、無関係なデジモンと非戦闘員を安全な場所まで逃がす必要があるからだ。

「違う。」

「俺たちに助けを求めているやつがいるようだ。」

彼らはキリハにこう答えた。

「何故その事が分かるんだ？」

キリハがたずねると、

「声が聞こえた。」

グレイモンが答えた。しかし、キリハ本人はそんな声を聞いていない。

「お前達、まさかタイキと同じ事は言わないだろうな？」

「ほっとけない、って？」

タイキのチームメイト「天野ネネ」がキリハに声をかけた。傍には

「スパロウモン」「モニタモン」が侍っている。

「ところで、タイキ君がどこにいるか知らない？」

と、ネネはキリハにたずねた。

「タイキならあの辺りで作業してるはずだが、何かあったのか。」

「私は聞いてないんだけど、この子達が自分達に助けを求める声を聞いたって言うから。だからタイキ君と相談しよう。」

キリハの問いに、ネネはこう答えた。

キリハも、自分のグレイモン達も同じような声を聞いたと言っていたことをネネに伝え、タイキと合流する事にした。

「世界を…救って……」

タイキの頭に、消え入りそうなかすかな声が響いた。

「おいタイキ！どうしたんだよ！！」

間の抜けたような顔をしていたタイキに、「シャウトモン」が声をかけた。

「声が、聞こえたんだ。」

タイキはシャウトモンに説明した。

「お前やナイトモン、スパードモンと出会った時と同じように今にも消え入りそうなやつが助けを求めてきたんだ。でも今回はメロデイじゃなくて声が響いたんだ。」

「どういう事だ？ここはモニタモン達が隅々まで搜索してんだ、助けを求めるやつがいるならその時点で分かっているはずだし。そもそもメロデイじゃなくて声なんて……」

シャウトモンも考え込み始めた。そこへ、先ほど合流したキリハとネネの二人と、件のデジモン達がやってきた。

キリハから、自分のグレイモン達とネネのスパロウモン達がタイキと同じように助けを求める声を聞いた、と報告を受けたタイキは、
「俺だけならともかく、他にもあの声を聞いたやつがいるとなると、ただ事じゃないのかもしれない。」

と、考えた。

「って事は、やっぱりあれか！？」

隣にいたシャウトモンは、タイキが何を言いたいのか理解したように、勢い込んでいる。

「ああ、ほっとけない。」

工藤タイキの代名詞とも言える一言がタイキの口から飛び出した。

「受けてくださるのですね。」

その時、ネネを除くクロスハートメンバー、グレイモンとメールバードラモンの頭の中に声が響いた。今度は消え入るような微かな声ではなく、はつきりした声だった。

「ああ、誰が相手でも助けを求めるならほっとけない。」

タイキは頭の中で声の主に語りかけた。

「ではこちらのゲートを通ってきてください。但し、私の声を聞いていない方はこちらに来ることはできません。」

この一言が響いた後、誰の頭にも声は響かなかった。代わりに、白い光を発する光球が現れた。

「キリハ、ネネ。どうやら今回行けるのは俺達とスパロウモンとモニタモン達、グレイモンとメールバードラモンだけみたいなんだ。

二人には悪いけど……」

タイキは、申し訳なさそうに二人に言った。自分一人、二人の主戦力デジモンを連れて違う場所に行くのだ。二人にとってはあまりいい事ではないだろうと思ったのだ。しかし、

「まあ、まだ倒すべき敵がいるのなら話は別だが、今ここでやるべきなのは一日も早い復興だ。俺達でも十分にできる。」

「でも、あなた達の言う声の助けに応じられるのはあなた達だけ。

だから助けてきてあげて。」

二人はこう言って、自分達のデジモンを託してきた。

タイキは二人の心遣いに感謝して、デジモン達を自分の赤い「クロスローダー」に入れると。

「それじゃあ、行ってくる。」

と二人に言って、白い光球の中に飛び込んでいった。

プロローグ（後書き）

次回予告

謎の声に導かれ異世界にやってきた工藤タイキ。

彼はそこで一人の魔道士と出会い、こんな話を持ちかけられる。

「よかったらうちで働かない。」

次回、デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

第一話「タイキ異世界に着く」

第一話 タイキ異世界に着く（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ、バグラ軍との戦いで荒廃したデジタルワールドの復興をしていた俺は、ある日突然謎の声に導かれ、仲間と共に異世界へとやってきたんだ。」

第一話 タイキ異世界に着く

光の中に飛び込んだタイキは、次の瞬間街のような場所に現れた。

しかし街といってもそれは過去の話であり、かなり長い間人の営みが無かったのか、今タイキが立っている道路や周りに建っている建物は、あちこちが欠けたりしてとても人が生活できるような有様では無かった。

「なんだここ？もしかしてサイバーランドに戻ってきちまったのか？」

クロスローダーより出てきたシャウトモンは、開口一発こう叫んだ。
「いや、それはないと思う。元々サイバーランドには誰も居なかったとはいえ、スプラッシュモンが倒された後、少しずつだけ他の国のデジモン達が集まってきていた。そんな中でここまで荒廃する事は有り得ない。」

「それに、サイバーランドにはもっと高い建物が多かったはずだ。」
タイキの説明に、後からクロスローダーから出てきたドルルモンが付け足した。彼にとってサイバーランドは、お守りに苦労したり、敵に捕まったりと、悪い意味で思い出深い場所である。それ故、他より詳しくサイバーランドについて覚えていたのだろう。

「それならタイキ、俺がクロスローダーから出てこの場所について調べてきてもいいが？」

クロスローダーの中から声が響いた。声の主はベルゼブモン。かつてデジタルワールドがゾーンに分かれていた頃は、バアルモンというデジモンとしてバグラ軍に協力するフリーの殺し屋だった。サンドゾーンでの戦いでタイキ達を狙うも、その後元々このゾーンに存在したが、バグラ軍三元士であるリリスモンに滅ぼされた女神の戦士の生き残りである事が判明、リリスモンの放った刺客から捨て身でタイキ達を護ったとき女神に認められ、今の姿であるベルゼブモンとなり、クロスハートに協力するようになったのだ。

「いや、それはやめたほうがいい。」

しかしタイキは、ベルゼブモンの言葉に反対した。

「ここが何処か分からない以上、誰か一人が別行動を取るのは危険だと思うんだ。」

しかし、だからと言ってここで突っ立っていても何も進展しないので、とりあえず人の居る場所を探してそこに行くことにした。

では早速、とタイキが思った瞬間、背後で爆発音が響いた。

これはしめた、と考えたタイキは、すぐさま回れ右をしてその場所へと向かっていった。誰も居ない、何も無いような場所で爆発が起きる事は無い。と思ったからである。

「うう……どうしよう。」

現場では、一人の少女が壁に背を預け、数十体の機械兵器を相手に向かいあっていた。左手には本のような物を持ち、右手に握った長い杖を前に突き出している。

彼女の名は八神はやて。一仕事を終えて戻る時、偶然目の前の機械兵器ガジェットドローンを見つけ、一般人に危険が無いようにこの場所まで誘導し対処しようとしていたのだが、人の居ない所というのが良くなかったようで、多勢に無勢がいまって現在危機的状态にある。

「この場所じゃ、なのはちゃん達もすぐにはこれないし……」

はやてはこの状況下で、自分の目標を応援すると言ってくれた友人の事を考えていた。苦勞に苦勞を重ね、ようやく目標を達成できると言ったときに、悪くて殉職、良くても大怪我をした私の事がニユースになったら彼女達はどんな反応をするだろう、と。

「ごめんなみんな、後の事はまかせ……」

はやてが覚悟を決めたとき、

「大丈夫か!!」

突然、赤と青のツートンカラーのTシャツと普通の長ズボンを身に付け、頭に青いレンズの入ったゴーグルをつけた少年が現れた。はやては、突然の乱入者には驚いたが、

「君、ここは危ないよ。」

と、声をかけた。自分の失敗に他人、それも一般人を巻き込んだとあつてはかなりの大問題である。

「確かにこの場合は危険かもしれない。」

少年は目の前の敵を見据えて、真剣な口調で言った。

「でも、誰かが傷つこうとしているのなら、俺はほっとけない!!」そして彼は、腰につけていた赤いマイクのような形のデヴァイスを掲げた、実際はクロスローダーなのだが、そんな物の存在を知らない彼女にはこう見えたのだ。

「リロード!! シャウトモン! バリスタモン! ドルルモン! スターモンズ!」

タイキが声の限り叫ぶと、クロスローダーが光だし中から、頭にV字型の角の生えた小竜、青いボディを持つカブトムシ型のロボット、茶色と白の毛並みを持ち頭と尻尾の先にドリルを持った超大型犬、星のような形の生き物とそれにしたがうおにぎり型の銀色のデジモンが現れた。

ガジェットドローンは、突然の新たな敵の登場に驚いたのか、一斉に砲撃を開始した。デジモン達はそれを上手く回避すると、

「いくぜ!! ラウディロッカー!!」

シャウトモンは何処から取り出したマイク型の棍棒でガジェットを殴り倒し、

「アームバンカー!!」

バリスタモンは自身の太い腕でガジェットを殴り飛ばし、

「ドリルブリーダー!!」

ドルルモンは大きくなった尻尾のドリルに乗っかり、回転しながらガジェットに体当たりし、

「メテオスコール!!」

スターモンの指示を受けたピクモンズが、複数のガジェットに襲い掛かる。これによりあつという間に雑兵は片付き、親玉らしき大きな目のガジェットが一体残った。

「アイツが親玉か! ソウルクラッシャー!!」

シャウトモンは、自分の情熱を声に変化させた雄たけびを飛ばし、
「ヘヴィスピーカー!!」

バリスタモンは、腹部のスピーカーから衝撃波を発射し、

「ドリルバスター!!」

ドルルモンは、額についたドリルを打ち出した。

ガジェットに三つの攻撃が当たり、辺りに砂煙が舞った。その砂煙が晴れたとき、ガジェットは健在であった。元から張られているシールドと、何処からか出てきている触手で防いだようだ。

「! どうするんや!!」

後ろのはやては心配そうだが、タイキはまるで動じる事はない。再びクロスローダーを掲げると、再び声の限り叫んだ。

「シャウトモン、バリスタモン、デジクロス!!」

クロスローダーから発せられた光がシャウトモンとバリスタモンを包み込み、その光が一つになると、頭にシャウトモンの角、腹部にバリスタモンの頭部が付いた機械型デジモンが出てきた。

「シャウトモン×2!!」

シャウトモン×2は元気良く名乗りを上げた。ガジェットは触手を伸ばして掴みかかろうとするも、シャウトモン×2は素早い動きで回避すると、手刀を振り下ろして触手を切断し、バリスタモン単体で放つときよりも威力が上がったアームバンカーで、ガジェットを取り巻くシールドと一緒に光線発射口を潰し。逃がさないようにとガジェットを捕まえた。

「バディブラスター!!」

バリスタモンの頭部から発射する、二人の息がぴったり合って初めて撃つことのできる破壊光線で、ガジェットを粉々に吹き飛ばした。

「やったぜ！一丁あがり！！」

バリスタモンと分離したシャウトモンは、飛び上がって喜んでいる。すると後ろから、

「なんか良く分からない所も多いけど、助けてくれてありがとうな。」

「はやてが声をかけた。もう必要ないと考えたのか、長い杖は光に包まれた途端何処かへ引っ込み、服装も茶色を基調とした制服に変わった。」

この一連の流れに、タイキ達が驚いて呆然としていると。

「とりあえず、ここじゃなんだから。うちについて来てくれる？」

とはやてに言われたので、とりあえずついて行ってみる事にした。

その後、タイキ達は完成したばかりの、明日ある部隊の隊舎となる巨大な建物に來たタイキは、明日隊長の部屋になるという部屋で、はやてと話をしていた。

タイキはとりあえず、自分の身の上と、どうやってここへ來たのかという事を簡潔に説明した。はやては、タイキが自分と出身世界が同じという事に驚いていたが、その後謎の声に呼ばれてここに来た、と言った時は、

「ようするに、次元漂流者か。」

と、言った。

「すいません、詳しい説明をしてもらえますか？」

タイキは何のことかちんぷんかんぷんなので、分かりやすく教える事を要求した。

なのではやては、

世界というのは、自分達の出身世界一つではなく、様々な文明の発

達した世界が数多く存在しており。自分がその世界の治安の管理を行う「管理局」という組織に所属していることと、ここがその次元世界の中心である「ミッドチルダ」と呼ばれる世界である事。

時折、事件や事故で違う世界に飛ばされてしまう人がいて。そういった次元世界での迷子になった人を「次元漂流者」と呼んでいる。

といった内容の説明を簡潔に行った。そして、

「とりあえず、タイキ君が元々居た、でじたるわーんど、まで帰る方法はうちらが責任を持って見つける、だから。」

この世界でタイキ達の運命を決める一言を言った。

「それまでの間、うちの部隊、機動六課、で働かない？」

第一話 タイキ異世界に着く（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモン

「モニタモンの。」

二人

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて、本編の開始と同時に始まりましたこのコーナー。ここではこの小説に登場するデジモンを一話につき一体紹介していきます。」

モニタモン

「さて、今回紹介するのは、シャウトモンですな。」

カットマン

「シャウトモンは小竜型のデジモン。必殺技は情熱の力で生成した火炎弾を投げつけるロックダマシーと、持っているマイクで殴りつけるラウディーロツカー、殺人級の大声を上げるソウルクラッシュ。」

モニタモン

「非常に攻撃的な性格ですが、一度仲良くなれば種族を超えて友情を育むことができますな。」

カットマン

「そして、ラウディロッカーを使うときに使用するマイクは、マクフィルド社という会社で作った特注品で、シャウトモンは常にこれを持ち歩く修正がある。もし失くした暁には、自分がシャウトモンではない、というショックでショック死するらしい。」

モニタモン

「だから、シャウトモンのマイクを取り上げる事だけは絶対にしてはいけないんですな。」

二人

「次回もお楽しみに!!」

次回予告

ついに始動する機動六課。民間協力者として活動に参加する事になったタイキは、管理局のエースオブエースと、彼女の教え子である新人達と出会う。

そして、シャウトモン×4 VS シグナム、夢の対決が実現？

第二話「機動六課始動、お前の力を見せてみる」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる（前書き）

工藤タイキ「俺は工藤タイキ。ある日突然仲間達と共に異世界に飛ばされた俺は、そこで八神はやてと会い、しばらく彼女に協力することになった。」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる

工藤タイキと八神はやてが会見した次の日、機動六課隊舎の部隊長室には二人の女性がいた。一人は八神はやて本人であり、もう一人は人形のようなサイズの銀髪の女性である。

「ようやくこの部屋も部隊長室らしくなったな。ラインにもぴったりの机が見つかってよかったね。」

はやては、初めての机を堪能する銀髪の女性に言った。彼女の本名は「ラインフォース？」八神はやてを補佐する存在である。

「ラインにぴったりサイズですう。」

玩具なのか、それとも何かのパーツの余りなのかは分からないが、ライン本人はこれで満足しているようだ。

すると、部隊長室の扉が開いて、女性が二人入ってきた。一人は、割と長い栗色の髪をサイドポニーで纏めた活発そうな女性。もう一人は、腰まで届く長い金髪をストレートに下ろした大人しそうな女性である。

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

「二人ともよく似合ってるです。」

入ってきた二人の女性を、はやてとラインは快く受け入れた。そして二人が自分と同じ、茶色を基調とした制服を着ているのを見て、昔を思い出しながら言った。

「にしても、三人で同じ制服なんて中学校以来だな。なんや懐かしいわ。」

それでも何か思い出したのか、

「でもなのはちゃんの場合、飛んだり跳ねたりできる教導隊の制服でいることのほうが多いだろうけど。」

と付け足した、

「うん、でも公式の場の時はこっちって事で。」

栗色の髪的女性ははやてにこう言うと、隣に立っている金髪の女性

と共にはやてに敬礼すると、

「本日をもつて、高町なのは一等空尉と。」

まず栗色の髪的女性が始め、

「同じく、フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官。」

次に金髪的女性が続き、

「両名共に、機動六課へ出向となります。」

最後に二人でしめた。

「はい、よろしく願います。」

はやても、二人の挨拶に笑顔で答えた。

「そういえば、昨日はやてちゃんが会ったっていう民間協力者の子
つて？」

突然、思いついたかのようになのはが言うと、

「あ、そうやった、まずは二人に紹介しとくね。」

思い出したかのようにはやてが言くと、

「入ってきてええよ。」

と、扉の向こうへと声をかけた。すると扉が開いて、頭に青いレン
ズのはまったゴーグルをつけた少年が入ってきた。

「紹介するね、民間協力者の工藤タイキ君。」

「工藤タイキです。」

はやての紹介にあわせて、タイキも名乗った。

「初めまして、私は高町なのは。」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンです。」

二人も一緒に名乗った。その後、

「で、私はリンフォース？ですよ。」

今まではやてと一緒にいたリンフォース？が前へ出てきた。彼女
が名乗ると同時に、

「何！！これは妖精か？！！珍しい早速解剖を！！！！」

全身をローブとフードで隠した謎の存在が、大量の金属器を持って
タイキの背後から現れた。謎の存在の正体は「ワイズモン」であり、
特に謎ではないが。

「ひえええーですう!!!」

突然の事態に驚いたのか、リインフォース？は全速力で逃げるエリマキトカゲの如きスピードではやての後ろに隠れた。ちなみに、本気で走るエリマキトカゲは水の上でも走れるのだ。

はやて、なのは、フェイトの三人もこの事態には驚いたが、次の出来事には更に驚いた。

「テメエはなんでもかんでも解剖しようとする!!!」

前に出て来たワイズモン同様にタイキの背後より飛び出したV字型の角を持つ赤いトカゲが、ワイズモンを殴り倒したのだ。殴った瞬間かなりいい音がしたので割とダメージは多いはずだが、ワイズモン本人はピンピンしており、

「すまない、珍しい物が多すぎてつい好奇心が抑えられなくなってしまっていたようだ。」

と言うと、そのままクロスローダーの中に戻っていった。

「あの、ところでこちらは？」

フェイトが今までの出来事に呆然としながら、現れたトカゲについてタイキにたずねた。

「俺はシャウトモン、いずれキングになる男だぜ!!!」

フェイトの問には、タイキではなくシャウトモンが答えた。言わなくてもいい事も言っていたが、

「タイキ君はこういう生き物をたくさん連れいるんや。」

はやてはこれからの事も考え、とりあえずなのはとフェイトの二人に説明しておいた。タイキ本人が言うには、自分の連れてくるデジモン達だけで既に一つの軍団を結成しているとの事である。

「とりあえず、そろそろ行かへん？もうみんな集まった頃やし。」

はやてにこう言われ、部隊長室にいる五人と一体は、とりあえずこれから始める部隊のメンバーが集まるロビーへ向かっていった。

ちなみに、何故タイキが機動六課に協力することになったのかとい

うと、昨日まで遡る。

「うちで働かない？」

はやてにこう言われたタイキは、

「俺個人としてはいいんだけど、みんなはどう思う。」

と仲間のデジモン達に伺いをたてた。

「俺は勿論ジエネラルを信じるぜ！」

と、シャウトモン。

「タイキガイイナライイ。」

と、バリスタモン。

「考えてもみる、お前の判断が間違ったことがあったか？」

と、ドルルモン。

このような調子で他のデジモンも次々と賛成意見を表明し、晴れて工藤タイキは機動六課入りになった。

「それじゃあ、制服用意するから身体のサイズ計らんとね。」

と言って巻尺を用意したはやてに色々されたのも、ある意味いい思い出である。

「……とまあ、長い挨拶は嫌われるので以上で終わります。」

ロビーに集まる隊員達の前に設えられた舞台の上で簡単な挨拶をした部隊長八神はやてを、隊員達は拍手で送った。

工藤タイキは他の隊員と混じってはやての挨拶を聞いていたが、挨拶終了後はやてに話しかけられた、

「タイキ君の実力を正確に測りたいから。地図に書いてある場所まで来てくれへん。」

簡単な内容の指示と一緒に、六課隊舎の地図が渡された。その一箇所に丸が付けられていたので、タイキはその場所へ向かった。

一方のなのはは、これからこの部隊のフォワード部隊に入る事になる四人の新人達を先導していた。

「そういえば、お互いの自己紹介は済んだ？」

「はい、お互いの名前と出身と経歴と……」

なのはの問いに、なのはから見て一番右にいたツインテールの髪型の少女が答えた。

「そう、それじゃあ改めて機動六課の隊舎の案内をするから付いてきて。」

なのはは四人にこう言って、隊舎を隅々まで案内し、最後に自分が一番よく居ることになるだろう場所、演習場へ向かっていった。

「んがー！暇だあー！」

シャウトモンが叫んでいる。目の前には透き通るほどに青い海、天気は快晴だが、やる事が無い為シャウトモンにとっては退屈極まりないのだろう。

「落着けシャウトモン！」

「騒いだところでなんにもなんねえぞ。」

そのシャウトモンを、バリスタモンとドルルモンがいさめた。最初のうち、キュートモンと共に銀色のおにぎり型生物「ピクモン」を積み上げて遊んでいたシャウトモンだったが、すぐに飽きてしまったのだ。一方のワイズモンは、なにやらパネルをいじっていた。

「ところでワイズモン、なにやってんだ？」

タイキにたずねられたワイズモンは、

「ふむ、なるほど、これをこうすれば……」

ぶつぶつ呟きながらパネルをいじった、すると、突然目の前に広がる何も無いサッカー場のような場所が、あっという間に廃ビル街に変わった。

「すげえー!!」

「ビルが生えたっキュー!!」

その突然の出来事にシャウトモンとキュートモンは大喜びである、

「ワイズモン、あれは一体。」

「あれはかなり精巧な立体映像だ。データさえ入力すれば、動くものであっても忠実に再現できるんだ。」

次のタイキの問いには、ワイズモンは即答した。

「それに、データを変えれば。」

ワイズモンは再びパネルをいじった、すると再び変化が起きた。これまで廃ビル街だった場所が、一瞬で森に変わったのだ。

「すげえ！また変わった!!」

見ているシャウトモンは大喜びである、しかし、

「ちよつと！なにやってるんですか!!」

突然大きなトランクを持った、眼鏡をかけた少女に怒鳴られた。

「これは沢山電気を使うんですから！訓練する時以外は使わないで下さい!!」

今までパネルの前にいたワイズモンをどけると、パネルを操作して出てきていた森を消した。

タイキ達が、今の剣幕に驚いていると、

「あ、シャーリー!!」

どこかで聞いた声が聞こえてきた。新人達に隊舎の案内を終えたなのはが、新人達を連れてやってきたのだ。

「紹介するね、彼は民間協力者の工藤タイキ君。」

なのはが後ろの新人達にタイキの紹介をすると、

「あ、初めまして、スバル・ナカジマです。」

まず最初に、タイキから見て一番右にいる、ボーイッシュな青髪の少女が自己紹介し、

「ティアナ・ランスターです。」

次に、その隣にいるツインテールの髪型の少女、

「エリオ・モンディアルです。」

次に、その隣の少し背の低い少年、と続いていき。

「キャラ・ル・ルシエです。」

一番左にいた、大人しそうな少女が自己紹介を終えると、

「キユクルー。」

キャラの背後から、白い色の鳥のような生き物が現れた。

「この子はフリード・リヒ、私のドラゴンです。」

フリードについてキャラが紹介すると、

「デジモンではないドラゴンだと！！珍しい！！早速解剖を！！！！」

ワイズモンの悪い癖が発動した、何処に隠していたかは不明だが大量の金属器を携えて現れたのだ。

「キユクー！！！！！！」

フリードは電光石火と言えるほどのスピードで、キャラの背後に隠れた。新人フォワード四人が驚いていると、

「だからテメエは何でもかんでも解剖しようとするな！」

ワイズモンは、タイキの近くにいたシャウトモンをはじめとするデジモン達に取り押さえられた。

「すまない、この世界は珍しい物が多すぎてつい。」

取り押えたワイズモンは、面目なさそうに言った。

「あの、ところでそちらは？」

と、ティアナがたずねた。両隣が啞然としている中で、新人最年長の面目躍如である。

「俺はシャウトモン。」

「バリスタモン。」

「ドルルモンだ。」

「俺はスターモン、こいつらはピックモンズ。」

「イエーイ」

「キユートモンだっキユ。」

「ワイズモンだ。」

部隊長や分隊長と会った時とは違い、無駄の無い簡潔な自己紹介を

した。

「皆集まったんやね。」

みな の自己紹介が終わった所で、何も無かったところにモニターが展開され、はやての顔が映し出された。

「突然やけどタイキ君。演習場でスタンバイしてくれる。」

はやてが言うには、今からタイキの実力テストをするのだと言う。

「よっしゃあ、ようやく出番か!!」

今までやる事が無く、暇だと叫んでいたシャウトモンが張り切り始めた。

「それじゃあシャーリー、ターゲットはガジェット50体でいくで。」

はやてはモニター越しで、部隊のメカニックであるシャーリーに指示を出した。

「それじゃあタイキ君、課題は今から現れる敵の全滅や、それじゃあいくで。」

はやての合図と同時に、シャーリーはパネルのキーの一つを押した。これで50体のガジェットが登場しテストが始まるはずだったのだが、キーを押した瞬間シャーリーがある事に気がついた。

「しまった、プログラムミスで桁が一つ多くなっています!」

その上、

「ロックが掛かってしまって全部倒すまで止められません!!」

これには、はやては勿論、その場で見ていたなのはと新人達、そして一緒にいた部隊の副隊長も驚いた。500体といえば、たとえ自分達のように高威力の魔法攻撃をバンバン打てる魔道士であっても無傷ではすまない数である。

でも、現場のタイキ達はまったく動じなかった。彼らはこれまで、一騎当千と言っても過言ではない数多くの強豪デジモンと渡り合っ

てきたのだ。雑魚兵500等敵のうちにも入らないのだろう、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、デジクロス!!」

「シャウトモン×4!!」

クロスローダーを掲げたタイキの声が響いた瞬間、彼の横にいたデジモン達が光で包まれ、その光が一つになった途端、巨大な剣「スターソード」を携えた竜戦士型デジモン「シャウトモン×4」が現れた。

「うわ!合体しちゃった!!」

「しかも凄く大きくなってる。」

見ている新人達は驚きを隠せないようである、

「スリービクトライズ!!」

シャウトモン×4は、スターソードを構えると赤いV字型の光線を発射した。撃たれた光線は、ガジエットの群れに突っ込み、一気に百体以上のガジエットを吹き飛ばした。

「凄い、今の一発でガジエット百体以上撃破、威力はなのはさんのデイバインバスター一発に相当します。」

シャウトモン×4の戦闘データを記録していたシャーリーはなのはに報告した。なのは本人も予想より遥か上をいく彼らの実力に驚きを隠せないようで、無言で返した。

そんな中でも、シャウトモン×4の剣劇は止まらない。頭に搭載されたバルカン砲で狙撃し、太い足で踏み潰し、スターソードで真つ二つにする。これらを繰り返す事で、ターゲットであるガジエットはどんどん数を減らしていく。そんな様子を見て、精神が高ぶるのを止められなくなっている者が居た。なのはや新人フォワードと共に様子を見ていたシグナムである。生粋のバトルマニアである彼女は、シャウトモン×4が戦っている様子を見て、いてもたってもいられないのである。自分も戦ってみたいと、

「ビクトライズブーメラン!!」

シャウトモン×4が赤いブーメランを投げつける、この一発がガジ

エットたちのとどめの一撃になったようで、ブーメランが戻る頃には、ガジエットは一体も居なくなっていた。

「よし、これで全滅……」

帰ってきたブーメランをキャッチしたシャウトモン×4が剣をおろそうとした時だった。突如何かが迫ってくる感覚を感じ、剣を構えなおした。そしてそのまま振り下ろされた剣をスターソードで受け止めた。

「まだだ、まだ私という敵が残っているぞ!!」

剣を振り下ろしたのは、バリアジャケットを身に付け愛用の剣「レヴァンティン」を携えたシグナムだった。

「いけるか？ シャウトモン×4。」

恐らく簡単には退いてくれない、と判断したタイキはシャウトモン×4にたずねた。

「ああ、まだいけるぜ!!」

シャウトモン×4 VS シグナム、第二ラウンドが開始された。

「なあはやて、大丈夫なのか？」

新人達と共にテストの様子を眺めていた小柄な少女「ヴィータ」は、はやてに訊いた。

「いいんや、なんか面白そうやし。」

はやては即答した。いい加減な部隊長の判断に若干呆れながらも、演習場で行われている戦いに目を向けた。

シャウトモン×4が剣を振る、シグナムはそれをかわすか上手くそらすことで彼の剣を掻い潜り、ここぞという所で渾身の一撃を叩き込む。シャウトモン×4も負けじと防御し、シグナムを遠くへふっ飛ばす。シグナム自身も、自分より体格差のある相手との戦いの経験が無いわけではない。しかし、巨大なだけの獣ならともかく、一流の武人同様の動きをする獣と戦う経験はそんなに無い。なので、

大技で一気にケリを付けようとシャウトモン×4から距離を取り、カートリッジをロードした。シャウトモン×4も大技が来る事を悟り、剣に自身の力を注ぎ込んだ。そして、

「紫電一閃！！！！」

「バーニングスタークラッシュャー！！！！」

二人の渾身の斬撃がぶつかり合った、その反動は凄まじく、遠くで見えていたなのは達のところまで衝撃が飛んできた。

そして衝撃と共に発生した砂煙が晴れ、そこに立っていたのは、シャウトモン×4だった。しかし、無傷とまではいかず、体中に傷を負っている。一方のシグナムは、身につけているバリアジャケットは衝撃でボロボロとなり、方膝を付いて肩で息をしていた。

「フフ、私の負けだな。」

シグナムが負けを認めた事で、シャウトモン×4は見事課題をクリアした。

「本当に凄いです、最後の一撃の威力はオーバーSランクをマークしています。」

シャーリーは、目の前で演じられた勝負と、そこから導き出された結果を見て啞然としていた。

その後、部隊長室にてシャーリーとなのはの作った報告書を見たはやてはこう思った。

「凄い、これならあの予言も覆せるかも。」

第二話 機動六課始動 お前の力を見せてみる（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモン

「モニタモンの。」

二人

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて記念すべき第二話。今回紹介するのはバリスタモン。」

モニタモン

「バリスタモンはマシン型デジモン。得意技は太い腕で殴りつけるアームバンカー、硬い角でつくホーンブレイカー、腹部のスピーカーから放つ衝撃波で相手を吹き飛ばすヘビースピーカーですな。」

カットマン

「硬い装甲と凄まじいパワーを持つデジモンだが、基本的には心優しいのでむやみにその力を振るう事は無い。」

モニタモン

「ところで、バリスタモンは実はダークボリュウモンというデジモンだったという設定がアニメで登場しましたが、この小説では登場するんですか？」

カットマン

「それはまたのお楽しみという事で。」

二人

「それじゃあまたねー！」

次回予告

機動六課が活動を開始して数日後、新人フォワード四人にデヴァイスが渡される日が出てきた。四人がデヴァイスを受け取った瞬間、突如緊急出動がかかる。

次回「機動六課初出動」

第三話 機動六課初出動

クロスハートのデジモンと500体のガジェット、そしてシグナムがやりあってから数日が経過した。会場となった演習場では今日も喧騒が響いていた。高町なのはが、新入り達をしごいているのである。

「じゃあ今日のまとめ、私一人対みんなでシュートイベーション。白を基調としたドレスのようなバリアジャケットを装備したなのが、空中から呼びかけた。

「はい！！！！」

地上からは四人の新人、そしてクロスハートのデジモン、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズの声も響いてきた。なのはは、彼らの能力や特技を考え、新人と同じポジションにつけて一緒に訓練しているのだ。デジモン達は、基本的にすることがないから、とこの訓練に参加している。工藤タイキも、かつてデジタルワールドで戦っている時は、作戦を考える時間こそあったがこのように訓練を行う時間は無かった事を思い出し、訓練には自分も参加している。ちなみに、シャウトモンはスバルと、バリスタモンはエリオと、ドルルモンはティアナと、スターモンズはキャロと、それぞれ同じポジションについている。

「五分私の攻撃をかわしきるか、私に一発決定打を与えれば合格。」

「このボロボロの状態で、なのはさんの攻撃を五分かわしきる自信有る？」

なのはが合格の条件を提示すると、ティアナは即座に他の面子に聞いた。

「無理。」

とスバル、

「同じくです！」

とエリオ、

「さすがにちよつとキツイな。だが頭数はこちらの方が多い、なんとか前半は回避に徹し、すきをみつけて一気に突撃するとするか。」とドルルモンが提案し、皆その策で行く事にした。その横でティアナが思った。

（ほんの少し味方の状態を確認し的確な策を考えるなんて、でも関係ない）

「そついえば、シャウトモン達が合体すれば一発で済んじゃうんじゃないかな？」

スバルが突然気付いたように言った。しかし、

「いや、今回はデジモンの個々の力を上げるのが目的なんだ。だからなるべくデジクロスは使わない。」

と、タイキが言った。この言葉に、スバルは少し残念そうにしていた。

「準備はいい？それじゃあいくよ！」

訓練はなのはの掛け声で開始した。最初の攻撃をかわしたスバルとシャウトモンは一番槍を狙い飛び込んでいった。

「うおおおおおー！！！」

スバルは拳を、シャウトモンはマイクを掲げて殴りかかった。しかしなのはは、右手でバリアーを展開し攻撃を防御、そのまま遠くへ弾き飛ばした。

「二人とも、いい攻撃だったけど、まだまだだよ！！！」

そう言うのと、バリアーを展開していた右手から複数の光弾を発射した。

「やべ、ラウディロッカー！！！」

シャウトモンはマイクを振り回して飛んでくる光弾を弾き飛ばした。弾きながら思った、

（ベルゼブモンやツワーマンの光弾より速い、これでまだ手加減してるって？）

かつてベルゼブモンらと特訓していた時の事を思い出した。そうしているとき、

「しまった!!」

光弾2発を見逃してしまったのだ。相手に気付かれないように弾を放つ、これも高町なのはの技術の一つである。

「え、えええ!!」

スバル本人の驚きは最たるものだろう、前と横に進めない状態で光弾が飛んでくるのだから。

「ああ、もう!!」

ティアナが見かねて援護射撃をしようとしたが、出たのは弾が発射された時の音だけであった。

「ええ!弾切れ!!」

ティアナは大急ぎでカートリッジを入れ替えるも、そんな中でも光弾はスバルへと近づいていく。シャウトモンも駆けつけようとするも間に合わない、しかし、

「ドリルバスター!!」

ドルルモンが額のドリルを二発発射し、飛んでいく光弾を打ち落としたのだ。

「助かったぜドルルモン!!」

シャウトモンが礼を言つと、

「なに、仲間なら当然だろ。」

と、ドルルモンは返した。

一方エリオとキャロ、バリスタモンとスターモンズが何をしていたかというと、キャロはバリスタモンの後ろに控え、エリオはスターモンとピックモンズがデジクロスして作った「スターシューター」に乗っかり、バリスタモンがそれを引っ張っていた。

「大丈夫エリオ君、かなりスピードが出ちゃうと思うけど。」

「大丈夫だよ、スピードだけが取柄だから。」

彼らの作戦はこうである、まずはスバル、ティアナ組がなのはの注意をひき、意識を自分達側へ集中させたところで、エリオが突貫するというものである。

(そろそろだな)

とドルルモンは思ったのか、右後足でこれから突進する闘牛のように地面を蹴った。これがエリオ突貫の合図である。

「今だシスターー!!」

合図を受け取ったスターモンズは、キャロに合図した。合図を受けたキャロは、エリオに速度上昇の力を与えた。

「イクゾー!!」

バリスタモンはこう言って、スターシューターから手を離れた。すると、エリオは弾丸の如き勢いで飛び出した。飛んでいくエリオは真っ直ぐなのはの方へ向かっていき、見事命中した。

「うわああ!!」

結果は弾き返されたようで、エリオがふっ飛んできた。しかし、

「合格だよ。」

なのはのバリアジャケットには、一箇所焦げ目がついていた。そこにエリオの攻撃が少しあたったようだ。

これにより彼らは最後の訓練を終了した。一度皆で集合した時、

「おい、なんか焦げ臭くねえか?」

突然ドルルモンが言った、

「きゅくうー」

フリードも同じように思っている、とキャロが説明した。

「あーもしかしたら!」

スバルが思いついたかのように言った、そして屈みこむと自分の履いているローラを確かめた。

「あー、やっぱりだ。相当無理させちゃったかな。」

彼女の抱えるローラーからは煙が立ち上っている。これが焦げ臭さの正体だったようだ。

「それに、ティアナの銃の調子も悪いんじゃないか?」

ドルルモンは、ティアナに言った。

「うーん、まあ、ちよつと現場で使うにはまずかなってくらいだけだ。」

ティアナは、自分の銃を詳しく確かめながらブツブツ言っている。

そんな皆を見たのはは、

「みんなもそろそろ実戦用のデヴァイスに切り替えるべきかな。」
と思ったように、

「それじゃあみんな、着替えたらメカニックルームまで来てくれる。
渡したいものがあるから。」

と言つて、訓練場を後にした。

新人四人とタイキとクロスハートのデジモン達が隊舎の前に戻つてくると、隊舎の前に黒いスポーツカーが止まっているのが目に入った。乗っていたのは、

「あ、みんな。」

「訓練終わつたんやね。」

はやてとフェイトだった。二人が言うには、フェイトは外回り、はやては聖王教会へ用があるため、二人で出かけるのだという。

「タイキ君は部隊での調子はどうや。」

ふとははやてがタイキにたずねた。

「みんな絶好調です。」

「いつ事件があつてもいけるぜ!」

タイキ、シャウトモンの順番で答えた。

「それは良かった。でもあまり空回りせえへんようにな。」

はやては集まっていた皆にこう言つと、そのまま車で目的地へ向かつていった。

しばらくして、訓練用の丈夫で動きやすい服装から、六課の制服に着替えたフォワード四人が、タイキ達と一緒にメカニックルームへやって来た。そこには、クリスタル型の端末がついたペンダント、

白いカード型の端末、エリオとキャロが元々持っていた腕時計とブレスレットがあった。四人の新人に渡される新デヴァイスである。

「そうでーす！設計私、協力、なのは隊長にフェイト隊長、リイン曹長にレイジングハート、そしてワイズモン。」

自称六課のメカニックの「シャリオ・フィニーノ」通称シャーリが元氣よく言っている。その後、

「後これ、調べさせてくれてありがとう。」

と言うと、タイキにクロスローダーを渡した。実は訓練が終わった後、はやて、フェイトの二人とわかれてからすぐに、シャーリーからクロスローダーを見せて欲しいと言われ、こうして今まで貸していたのだ。タイキ自身も、クロスローダーの仕組みについては気になっていたのだ。

「ほんとにこれ作った人すごいよ、中は精密機械と有機体で構成されていて、それが何を意味しているのかすら私たちじゃまるで分からない。」

すると、扉が開いてなのはとリインフォース？が入ってきた。

「どうかなシャーリ？午後からの訓練で使える？」

「はい、遠隔操作でのコントロールも可能ですし、状況に合わせて微調整すれば。」

なのはの質問に、シャーリは即答した。そして、四機のデヴァイスの詳しい説明を始めようとしたとき、突如赤い明かりが点灯し警報が鳴った。

「これって、第一級警戒態勢！？」

新人四人は勿論、なのはやリイン、シャーリも驚いた。

報告によると、山岳地帯を走る貨物運搬用のリニアレールが、多数のガジェットに制圧されたのだという。

なので、なのは、リイン、スバル。ティアナ、エリオ、キャロ、そしてタイキ達はヘリコプターに乗って現場へ向かっていった。

「はやて、本当に大丈夫？」

事件発生の報告を聞いていそいそと帰り支度をするはやてに、黒い修道服姿の金髪の女性「カリム・グラシア」がたずねた。

「大丈夫や、カリムのおかげで今六課は好きなように動かせる。」

はやてはこう答えているが、それでも心配らしく、

「でも、最近は新型のガジェットも出てきているっていうけど……」
と、言っている。

「本当に大丈夫や、みんな強いし。」

それでもはやては笑顔でこう言った。カリムは呆れたのか安心したのかは分らないが、

「シャツハ、はやてを機動六課隊舎まで全速力で届けてあげて。」
通信で部下にはやてを送る準備をするように言った。

一方、外回りの用事で高速道路を車で走っていたフェイトは、連絡を受けた場所から一番近いパーキングエリアに来ていた。車を停め外に飛び出すと、

「これから現場に向かいます。飛行許可を。」

通信で現場まで空を飛んでいく許可を求めた。

「了解、飛行許可を与えます。」

通信で許可を取ると、ポケットから三角形の黄色いアクセサリを取り出し、

「バルディッシュザンバー！セットアップ！！」

と叫んだ。すると、服装がいつもの六課の制服から、動きやすい黒い服の上に白いコートを身につけた服装に変わり、バルディッシュ本体は変形して斧のような形になった。

この姿になったフェイトは空へ飛び出し、それこそ稲妻のようなスピードで現場へ向かっていった。

外へ出ていた隊長二人が行動を開始した頃、ヘリで現場へ向かう新人達はというと、

「今回の任務は、リニアレール内のガジェット全てを逃亡なしで殲滅し、積み立てるロストログア、レリックの回収ですよ。」

「いきなりのハードな任務かもしれないけど、訓練どおりやれば大丈夫だからね。」

同伴しているリイン、なのはの二人から任務の内容を聞いていた。新人の中で、スバル、ティアナ、エリオの三人は割りと落ち着いていたが、キャロだけは違った。彼女は任務の内容に不安があったのではない、自分の力に不安があったのだ。

フェイトの保護児童である彼女は、自らの生まれた里に居場所が無かったのてこうしてフェイトに引き取られたのだ。その居場所が無かった理由が、自分の力が危険すぎるから、なのである。

彼女は召喚魔法の中でも特に珍しい竜召喚を行えるうえ、召喚できる竜の中でも特に強力な竜を二体召喚できるのだ。しかし、呼び出すのはともかくとして、肝心のコントロールが上手くいかないため、危険扱いされているのだ。

「どうしたシスター！調子が悪いのか？！」

スターモンズが心配して話かけた、その後、いつだったかに少しだけ聞いたキャロの昔の話を思い出したのか。

「大丈夫だシスター、シスターの魔法でみんなを護るんだ！！」

本人は励ましているつもりなのだろう、ピックモン達と一緒にこう言っている。

「そうだよ、僕やバリスタモンもいる。きっとできるよ。」

「ウム。」

それに続いてエリオ、バリスタモンも励ました。

「うん。」

緊張は抜けないが、それでも決心はついたらしく、キャラは少し力なく返事した。

タイキ、なのは、リインの三人は、そんな新人達の様子を見て安心して、

「東の方角より飛行型ガジェット数十機接近。」

現場の様子を遠くから見ているロングアーチスタッフから連絡が入った。

「それじゃあ、私とフェイト隊長で空をおさえるから、レリックの回収はみんなに任せるよ。」

なのはそう言い残すと、自分のデヴァイス「レイジングハート」と一緒に飛び出そうとしたが、

「あ、待って下さい。」

と、タイキにとめられた。タイキはクロスローダーを取りだすと、

「リロード！スパロウモン！！」

と叫んだ。すると、クロスローダーから光が飛び出し、光の中から両手に銃を持った黄色い飛行機型のデジモンが現れた。

「呼んだ？！タイキ。」

ここに来てようやく出番が回ってきたので、スパロウモンは嬉しそうにしている。

「スパロウモン、この人と一緒に空の敵をおさえていて欲しいんだ。」

タイキはスパロウモンに今回の任務について説明した。

「うん、分かった！！」

スパロウモンはこう言うつと、早々に飛び出し上空の敵の群れに向かっていた。

「じゃあ行ってくるね。」

なのはもスパロウモンに続き、ヘリから飛び出した。

「レイジングハート、セットアップ！！」

なのはの手元にあった赤い球体のアクセサリーが光と同時になのは

がその光に包まれ、光がやむと今日の訓練で装備していたバリアジヤケットの姿になった。

「お待たせ、スパロウモンだっけ？よろしくね。」

「そういうそっちは高町なのはだっけ？こっちもよろしくね。」

空で合流した二人は、互いに挨拶を交わした。

（この人、なんかネネに似ているな）

改めてなのは見たスパロウモンはこう思った後、先行して敵の中に飛び込んでいった。

「ウイングエッジ！！」

スパロウモンは腕の良いパイロットの乗る戦闘機のような動きで敵を上手く誘導し、両翼に仕込んだ刃物でガジェットを切り裂いた。

「アクセルシューター！シュート！！」

なのはも、自分の周りに発生させたエネルギー弾で複数のガジェットを撃ち抜いた。

「なのは、お待たせ！」

フェイトも合流し、なのは、フェイト、スパロウモンによる空中制圧が始まった。

「よし、新人共！俺のヘリじゃ近づけるのはここまでだ。」

一方の新人達は、現場への降下ポイントに来ていた。現場へ向かうのは、スバル、シャウトモン、ティアナ、バリスタモン、エリオ、バリスタモン、キャロ、スターモンズ、そしてリインフォース？である。タイキは任務が終わるまでヘリの中で後方支援に当たることになった。

「スターズ3、スバル・ナカジマ、シャウトモン。」

「スターズ4、ティアナ・ランスター、ドルルモン。」

「「行きます！！」」

最初にスターズ部隊の二人がヘリから降り、それに相棒のシャウトモン、ドルルモンが続いた。

「俺達ノ番ダ。」

スターズ部隊の後ろで待機していたエリオ、キャロの二人にバリスタモンが言った。

「いこうぜシスター、俺達やフリードと大活躍しようぜ!!」

スターモンズも元気良く言った。

「一緒に行こう。」

最後にエリオに声をかけられ、二人で手をつなぐと、

「ライトニング3、エリオ・モンディアル、バリスタモン。」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエ、スターモンズ。」

「行きます!!」

現場へと降りていく新人四人は、同時に叫んだ。

「マツハキヤリバー!!」

「クロスミラージュ!!」

「ストラーダ!!」

「ケリユケリオン!!」

「セツトアップ!!」

そして、スバルは動きやすい短パンと半袖のジャケットに、右手にリボルバーナックルを装備した姿。ティアナは白と黒を基調とした服装に、両手に銃を装備した姿。エリオは赤い装備の上に白いコートを身に付け、槍を装備した姿。キャロはピンク色のドレスのようなゆったりとした服装に、甲に宝石のような物がついた手袋をはめた姿になった。

スターズ部隊は車両の進行方向から見一番後ろの車両に着地し、シャウトモンは持ち前の身軽さで柔らかく着地し、ドルルモンは右側の岩壁をつたって降りてきた。その反対側にはライトニング部隊が着地し、バリスタモンは足のバーニアを使って着地し、スターモンズは持ち前の浮遊能力で降りてきた。

新人達が改めて自分達の身につけるバリアジャケットを見て、自分

達の隊長のバリアジャケットに似ているな、と思っていると、車両の内部からガジェットの砲撃が飛んできた。この砲撃が任務開始の合図となり、四人と四体は列車の中に突撃していった。

まずスバルとシャウトモンは、ティアナ達とは別ルートで問題の車両へ行く事になり。スバルは持ち前の格闘技、シャウトモンはマイクを振り回して大暴れしている。またティアナ、ドルルモン組のほうも、得意のヒットアンドアウェイ戦法で確実にガジェットを潰している。

そんな中、彼らに連絡が入った。

「ライトニング部隊、大型ガジェットと交戦。」

ライトニング部隊も、スターズ部隊同様着実にガジェットを潰しながら問題の車両を目指していたが、その問題の車両の扉の前にその大型ガジェットが頑張っていたのだ。

「ヘヴィスピーカー!!!」

バリスタモンは腹部のスピーカーから強烈な音波を発射したが、ガジェットの重さに勝つ事が出来ずまるで効いていない。次にエリオが槍で貫こうと向かっていたが、今まさに槍が突き刺さろうという瞬間、突如エリオの槍の先端の魔力が四散してしまった。ガジェットが持つ特有の対魔法用の波長「アンチマギングフィールド」略して「AMF」の効果である。

ガジェットは持ち前の触手でエリオを掴むと、軽々と外へ投げ飛ばした。

「エリオ君!!!」

「俺達がいくぜ! シスター!」

エリオを救出しようと手を伸ばしたキャラに、スターモンズは互いの手をつないで一本のロープのような物を形成すると、一番端のピクモンがエリオの手を取り、反対側のスターモンがキャラの手を

取った。しかし、エリオの基本の体重と一緒に、ガジェットに投げ落とされた時の勢いが付加され、耐え切れずにエリオ、キャラ、スターモンズは落ちていった。

落ちていきながらキャラは思った、私がみんなを護るんだ、と。

「フリード、一緒に活躍しよう。ちゃんとコントロールしてみせるから。」

キャラの元にフリードがかけつけた時、キャラとフリードは巨大な光に包まれ。光がやんだ瞬間、落ちていつているエリオとスターモンズを白い飛翔物が救出した。

「竜魂召喚、フリード・リヒー！」

正体は、キャラがいつも連れている竜フリードだった。しかし今回の姿はいつもの鳥のような小さい姿では無く、畳三枚分はかくある大きくて立派な翼を持つ逞しい竜の姿となっている。

「これが、フリードのちゃんとした姿。」

「うひょー！ かけえー！」

この姿を初めてみたエリオとスターモンズは勿論驚いている。

「ウガガガガガ！！！！」

すると、頭の上から聞き覚えのある声がした。見ると、バリスタモンが敵ガジェットの触手に捕まって、今にも落とされそうになっている。

「あ、たいへん！」

「バリスタモンが！」

キャラとエリオがこう言った瞬間、触手の拘束から開放されたバリスタモンが落ちてきた。エリオとスターモンズがフリードの背中で受け止めてから、

「さあ、反撃だぜシスター！」

スターモンズの一言で再び現場に戻って行つた。そして、再び件の敵と対峙した。

「キャラ、僕とバリスタモンに強化を！」

エリオは、たった今考え付いた作戦を実行する事にして、みなに内

容を耳打ちした。そして、

「フリード、ブラストフレア!!」

フリードが口から大量の炎を吐き出した。普通の相手ならこの一発で灰になるが、ガジェットは特殊な材質の金属で出来ているので並大抵の炎ではびくともしない。だが、大量の炎に遮られ、ガジェットのカメラは前が殆ど見えない。そこに突然、エリオが飛び込んできた。

「いくぞ!!」

エリオは強化された槍を突き刺すと、ガジェットのボディに大きな切り傷を入れた。

「今だ!バリスタモン!!」

「ホーンブレイカー!!」

エリオの考えた作戦は、まずフリードの炎で相手の目くらましを行い、相手の視界が制限された所でバリスタモンに投げてもらい高速で相手のそばに近づき、自分の技で傷を与えた後、バリスタモンでとどめをさす、というもののだ。作戦は見事成功し、バリスタモンの硬い角はガジェットに付いていた切り傷に当たり、ガジェットは真っ二つに割れ爆発した。

「どうやら、これで任務は終わりみたいですな。」

リニアレールを止めるため運転室に向かっていたリインは、無事にリニアレールを止めスバルたちと合流していた。スバルたちも、自分達が遭遇したガジェットを全て倒し、問題のブツである「レリック」を回収し、入れ物を抱えている。

この時は皆、これで任務完了と思っていた。

この任務の様子を見ていたのは何も、機動六課の援護スタッフだけではない。ミッドチルダのある場所で一人の男がこの様子をモニタで眺めていたのだ。

「しかしドクター、よろしいのですか？いきなりここまでの戦力をつぎ込んでしまつて？」

その後ろでは、一人の女性がパネルを操作しており、作業の途中、女はドクターと呼んだ男に訊いた。

「彼らは仮にも一度世界を救つたんだ。これくらいどうという事もないはずだ。」

ドクターと呼ばれた男は、気味の悪い笑みを浮かべて答えた。

「あつちの方も済んだみたいだし、ここもそろそろ終わらせようか？」

新人達の邪魔をさせないため、空の敵を相手にしていたのは、フエイト、スパロウモンはそろそろとどめにいこうと考えた。

「アクセルシューター！」

「ハーケンスラッシュ！」

「ランダムレーザー！」

三人はそれぞれの得意技を放ち、残るガジェットを全て打ち落とした。

「二人はどれくらい倒した？」

早速スパロウモンはなのは、フエイトにたずねた。

「四十機かな。」

「私も。」

「僕と同じだ。」

それぞれ四十機という結果だった。

早速新人達のもとへ向かおうとした三人、そして新人たちのもとに驚くべき連絡が届いた。

「巨大なエネルギーを持つ飛行編隊が近づいてきます！」
言われた方向を見ると、鳥やドラゴンのような姿の巨大な生き物が
ここへ向かって飛んできた。

第三話 機動六課初出動（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「今回のテーマはドルルモン。ドルルモンは獣型デジモン。必殺技は額のドリルを飛ばすドリルバスター、とてつもないドリルの回転で発生させた竜巻で吹き飛ばすドルルトルネード、ドリルに乗って回転しながら体当たりするドリルブレード。」

モニタモンA

「額のドリルは自分の毛で出来ているので、取れてもまた生えてきますな。」

モニタモンB

「ドリルの回転はミキサーやドライバーにも使えますな。」

モニタモンC

「今度うちのイス直してよ。」

カットマン

「日曜大工かよ！」

全員

「それじゃあまたね！」

次回予告

突如襲来した飛行デジモンの大艦隊。やつらと渡り合う為、ついにやつらが参戦する。

次回「逆転のシャウトモン×3GM」

第四話 逆転のシャウトモン×3GM

リニアレールがガジェットに制圧されたと連絡があり、現場へ出動し見事ガジェットの全機殲滅とレリックの回収を終えた機動六課の面々に、突如驚くべき報せが入った。

「現場へ向けて強大なエネルギー反応が向かっています。」

見ると、小さな翼が生えた竜、オウムのような姿だが両手が付いた鳥、赤い体で両手が武器になっているドラゴンが群れをなして飛んできた。極めつけは彼らの群れの中央にいる、とてつもなく巨大な竜である。

「あれは！エアドラモンにパロットモン、メガドラモンじゃ！中央の巨大なドラゴンはギガシードラモンじゃ！」

ヘリの中で様子を見ていたタイキのそばで声が響いた。いつのまにかリロードしていた「ジジモン」の声だった。

「でもどうして？他の三体はともかくギガシードラモンが活動可能範囲は地上と水中だけだったはずです。」

すると、タイキのクロスローダーの中から女性の声が響いた。しかし、今はその声の疑問に応じている暇は無い。突如、ギガシードラモンの腹部が開くと、中から丸い大型ガジェットが次々と出てきた。そして下で停車しているリニアレールめがけて降下していった。

空にいたなのは、フェイト、スパロウモンの三人は、突然の援軍を食い止めようとしたが、エアドラモン、パロットモン、メガドラモンの砲撃で牽制され身動きが取れなくなった。

「なあ、もっとヘリをリニアレールに近づけられないか？」

タイキは、ヘリの操縦桿を握るヴァイスにたずねた。

「無理っすよ、これでも危険地帯ギリギリを飛んでるんすから。」

しかし、肝心のヴァイスはこう答えた。

（仕方ない）

タイキはこう思うと、なのはや新人四人がやったように飛び降りた。

そして、空中でクロスローダーを掲げると、

「リロード！メデューサモン！」

と、叫んだ。するとクロスローダーから光が迸り、全体を白で統一した装備を身に付け、背中から巨大な白い翼を生やした女性の姿をしたデジモンが飛び出した。

彼女はタイキを空中で捕まえると、そのまま着衣を乱さず華麗にリニアレールの上に着地した。

「ありがとう、メデューサモン。」

「いえいえー、またいつでも使って下さいね。」

タイキは彼女、メデューサモンに礼を述べ、メデューサモンはそれに答えた。そしてその声は、先ほどクロスローダーの中から響いたものだった。

その直後、タイキ達とフォワードメンバーの周りに、先ほどギガシードラモンから放出された大型のガジェットが多数降りてきた。

「おいおい、さすがにまずくねえか？」

シャウトモンにしては珍しく弱音のような事を言っている。それもそうだ、リニアレールの上は狭いので×3以降のデジクロスを使えないのだから。

「大丈夫ですよ。私一人でもこのガラクタ全部フルボッコに出来ますから。」

メデューサモンは皆にこう言い放った。清楚な見た目と凛々しい声からは想像できない物騒な言い方に、この場にいる皆は一樣にこう思った。

（見た目は可愛いのに、すごくもったいない）

しかし、今は呑気な事を考えていられる場合ではないので、

「リロード！ベルゼブモン！ディアナモン！」

タイキは新しく二体のデジモンをリロードした。ベルゼブモンと一緒に出てきたのは、全身を輝く銀の忍装束で包んだ、女性の姿の神人型デジモンである。この「ディアナモン」そしてメデューサモンのクロスハート加入の経緯については、後日改めて明らかになりま

す。

「二人で上空の敵を牽制して、できれば三人を助けてここまで護衛してくれないか。」

「分かった！」

「はい！」

タイキから仕事の説明を受けた二人は、早速上空の敵へと向かっていった。そして、ベルゼブモンは銃をぶっ放しながら、ディアナモンは取り出した諸刃の大鎌を弓のように使い、敵の部隊を混乱させている所を見届けると、改めて周りを見た。

「ともかく、この状況をなんとかしよう。」

タイキのこの言葉で、皆はとりあえず背中合わせになって敵に対応する事にした。

「シャウトモン、バリスタモン、メデューサモン、ナイトモン、ポーンチエスモンズ、デジクロス！」

タイキはクロスローダーを掲げて力の限り叫んだ。

「シャウトモン×2！！！」

「メデューサモンNP」
ナイザリンセス

シャウトモンはバリスタモンと合体した姿になり、メデューサモンはナイトモン、ポーンチエスモンズとのデジクロスで純白の鎧とドレスを身につけた姿になった。

「いくぞみんな！！！」

「応！！！」

タイキの掛け声と共に皆はガジェットに向かっていった。

「アームバンカー！！！」

「リボルバーナックル！！！」

シャウトモン×2とスバルは渾身のパンチを繰り出すも、ガジェットの硬いボディの前には余り効いていないようだ。

「グングニル！！！」

メデューサモンNPも、槍に変化させた剣で一体ずつ確実にガジェットを潰していくが、数が多いので埒が明かない。

空の方も、なんとかベルゼブモン達のは達と合流するも、敵の囲み撃ちに合い、ディアナモンが作り上げた幻影のおかげで護られているという芳しくない状況になっている。

（なんとかこいつらを手短になんとかしないと。）

タイキが周りのガジェットたちをみながらこう思うと、

「俺がいくぞタイキ。」

「そろそろ俺達の出番をよこせ。」

クロスローダーの中から声が響いた。タイキは思い出した、デジタルワールドからミッドチルダに来るさいに、奴らがついて来ていた事を、

「よし！行くぞ！」

タイキはクロスローダーを掲げると、思い切り叫んだ。

「リロード！グレイモン！メールバードラモン！」

クロスローダーから光が発せられ、中からティラノサウルス型の黒いデジモンと、青い猛禽型の戦闘機のようなデジモンが現れた。

「いくぞ！グレイモン！！」

メールバードラモンはガジェットを一体足で掴むと、グレイモンめがけて飛んでいった。

「ホーンストライク！！」

グレイモンは角を突き出してガジェットに突進し、ガジェットを一体角に突き刺しメールバードラモンに向かっていき、メールバードラモンが掴まえたガジェットとぶつけ合った。

「ああ、そうだ。」

グレイモンとメールバードラモンの戦い方を見ながら、メデューサモンNPもいい作戦を思いついたようだ。

「ドルルモン！スターモンズ！あれやるよ！！」

と呼びかけた。

「バインド・オブ・ゴルゴン！！」

メデューサモンの眼が怪しく光ると共に、複数のガジェットの動きが鈍り始めた。彼女の眼から発せられた光を受けた事で表面の材質

は勿論、触手の間接から内部の構造に至るまで、彼方此方が石のようになってるのだ。

「ドリルブリーダー!!」

「メテオスコール!!」

ドルルモンは、巨大化した尻尾のドリルで敵に突撃し、スターモンズはその反対側から大量のピックモンを投げつけた。

二つの技がぶつかり合った瞬間、石化ガジェットの表面がみるみるうちに剥がれていき、しだいに内部構造があらわになり始めた。

これが、メデューサモン考案の「対石化ガジェット用りんごの皮むき戦法」である。

「ティアナ、とどめをお願い。」

半分以上の外殻が無くなったところで、メデューサモンNPはティアナに言った。

「クロスファイヤーシュート!!」

ティアナは待つてましたと言わんばかりに両手の銃から数発の光弾を放ち、ガジェットの中枢を完璧に打ち抜いた。その間にもグレイモンとメールバードラモンが大暴れして、リニアレールのガジェット第二陣は殲滅された。

一方空中では、これまで静観するに留まっていたギガシードラモンが動き出そうとしていた。

ギガシードラモンは、リニアレールの上に集まっている機動六課のフォワード達に狙いを定め、その途端、雲の子を散らしたように前に出ているデジモン達がギガシードラモンの前から退いた。

「ギガシードストロイヤー!!」

ギガシードラモンの放つ破壊光線が、リニアレールの上にタイキ達めがけて飛んでいった。

「やば、シール・ザ・アイギス!!」

いち早くこの動きにきずいたメデューサモンは、すぐにみなの前に出ると、どこからか取り出した光り輝く盾を掲げた。

メデューサモンの盾にギガシーデストロイヤーが当たり、衝撃で発生した埃が静まった時、

「仮にもタンクモン40体の砲撃にも耐えた盾なんだけど。それなのに盾には罅が入って私が翼と腕を犠牲にしてようやくこれだけ……」

メデューサモンの取り出した盾は、輝きを失い罅だらけになっていた。そして盾を持っていた両腕は傷だらけになっており、衝撃から皆を護った翼は、半分以上の羽を失っていた。そして、後ろの六課メンバー達は、重症というほどではないが皆怪我をしていた。

「次の砲撃には耐えられないよ。高威力の砲撃で一気に殲滅した方がいい。まだ全然本気の威力は出てないからすぐに第二射が来る。」

メデューサモンは苦し紛れにタイキ達に告げた。そしてタイキは考えた。何を使えば有効か、と。

「スパロウモンもベルゼブモンも居ない。この状況で……」

辺りを見回した時、割と傷の浅いグレイモンとメールバードラモンが眼に入った。

「閃いた!!」

タイキは一つ作戦を思いついた。

その頃、ディアナモンの幻影の中では、同じようにフェイトがある事を閃いていた。そして、閃いた途端に、

「なのは!今すぐディバインバスターを放てる?!」
と訊いた。

「え?まあやろうと思えば出来るよ。」

突然の事に驚いたなのはだったが、できない事でもないのだから答えた。

「それから、えつと……？」

次にディアナモンを見て言葉につまった。お互いに名前を知らなかったのだ。

「ディアナモンです。」

ディアナモンはすぐにこう言った。

「ディアナモン、この場所だけ幻影を解除できる？」

フェイトはスパロウモンの向いている方向を指差して訊いた。

「出来ますよ。」

ディアナモンは即答した。

「それじゃあ、ディアナモンは私が合図したらその場所の幻影を解除して、そしたらそこになのはがデイバインバスターを放って。あとはみんなスパロウモンにしがみ付いていればいいから。」

フェイトは、この場にいる皆にこう説明すると、スパロウモンにくっ付いた。

特にする事を言われなかったベルゼブモンも同じように空いた手でスパロウモンの翼を掴んだ。

「今だよ！」

フェイトの合図と共にディアナモンは、フェイトに言われた場所の幻影を解除した。敵の攻撃が入ってくる前に、

「デイバインバスター！！」

なのはが得意とする、桃色の魔力光線が放たれた。突然の攻撃に驚いたのか、空中のデジモン達は一瞬だけその光線の道筋からそれた。行って！スパロウモン！」

その途端、幻影全てが消えたと同時に、黒と黄色の混ざった光の矢がデジモン達の間通り去った。群れの中から飛び出したスパロウモンは、そのままニアレールへと向かって飛んで行き、そのまま激突した。

「スパロウモン・ソニックフォーム、二度と使わないようにしよう。」

フェイトは、自分の切り札である「ソニックフォーム」を自らでは

なく、スパロウモンに装備したのだ。結果、スパロウモンのスピードは一時的に増したがブレーキが利かなくなり、みんなそろって激突したのだ。

突然の結果に呆れながらも、気にする必要のある要素がもう無い、と判断した工藤タイキは、

「みんな、今から黙って俺の指示に従ってくれるか？」

と、仲間のデジモン達に訊いた。

「俺はタイキに従うぜ！」

「勿論だ。」

と、シャウトモン×2とドルルモン、

「いいだろう。」

「お前はキリハが認めた男、従うのも吝かではない。」

と、メールバードラモンとグレイモンが答えた。

皆の答えを聞いたタイキは、クロスローダーを掲げると、

「シャウトモン×2、ドルルモン、グレイモン、メールバードラモン、デジクロスー！」

と、叫んだ。そして四体のデジモンが光に包まれ、その光が静まると、身体の大きさは完全体のフリードの五倍はあるだろう、巨大な炎の翼を持つ飛竜型デジモンが現れた。

「シャウトモン×3 GMー！」

シャウトモン×3 GMは、合体が完了すると同時に飛び上がり、上空のデジモンの群れに向かっていった。

「ブレスオブペルーンー！」

そして口から吐き出した破壊光線で、ギガシードラモンの周りにいる飛行デジモンを一体残らず吹き飛ばした。

「ブリリアンスタガーー！」

最後に残ったギガシードラモンは、炎の翼でバラバラに切り裂いた。

「ギガシードラモン部隊、全滅。」

モニタの前で件の現場を眺める男に、後ろでパネルを操作していた女は淡々とした口調で言った。

「やはり、ガジェット運搬用のデジモンでは相手にならなかったか。」

男は、残念そうな印象が持てない、むしろ嬉しそうな口調で言った。

「やったねティア！初任務無事に成功だよ。」

スバルはレリックの入った入れ物を抱えながら隣を歩くティアナに言った、しかしティアナは微妙な口調でスバルの言葉に答えた。

今回の事件が、ティアナの心に影を落とした事は、まだ誰も知らない。

第四話 逆転のシャウトモン×3GM（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回紹介するデジモンは、今話初登場。俺の考えたオリジナルデジモン、メデューサモンです。」

モニタモンA

「我らでは詳しいデータは分からないので、説明をお願いします。」

カットマン

「メデューサモンは女性天使型デジモン、旧デジモンシリーズらしく説明すれば、彼女はウィルス種、世代は究極体だ。必殺技は相手を石化する目で相手を破壊する「バインド・オブ・ゴルゴン」携える剣「アロンダイト」で敵を切断する「スレイ・エレイン」また携える盾「アイギス」で攻撃を防御する「シール・ザ・アイギス」イメージCVは大原さやかさんだ。」

モニタモンA

「そこまで考えてあるんですか。ではどんなデジモンのですか？」

カットマン

「基本は誰かの上に立つか、一人で行動する孤高のデジモンだ。たまに気まぐれで誰かに従う事もあるけど、飽きたらすぐに見限って居なくなるんだと。仲良くなれば割といい奴なんだけど。」

モニタモンB

「扱いが大変ですな。」

モニタモンC

「ところでどうやってクロスハートに入ったの？」

カットマン

「……次回もお楽しみに。」

モニタモン達

「誤魔化したな。」

ブツツ……、ガサガサガサ（テレビの砂嵐の音）

次回予告

骨董品オークションの密輸品取締りと、ガジェット襲撃のさいの安全警護のため「ホテル・アグスタ」へやって来た機動六課の面々。

そんな彼らに、ガジェットと共に巨大な襲撃者が襲い掛かる。

次回「ホテル・アグスタ、古代竜の襲撃」

五話更新記念の回

ここは、とある管理外世界のとある場所、とある部屋の中。

カタカタカタ、

ここでは一人の男がパソコンの前でキーボードを叩いていた。やがて、その男は立ち上がって伸びをしながらこう言った。

????

「よっしゃ、これで更新したエピソードは五つ。息抜きに取っておいたバカデミーでも見ようっと。自分へのご褒美にアイスも用意してと……」

彼の名は、「超人カットマン」そう、言わずと知れた（多分殆ど知られてない）この小説の作者だ。彼が憩いの時間をすごそうとした瞬間、

????

「何調子こいてんだカットマン!!」

突如、赤い服を着たピンク色の髪の娘にぶっ飛ばされた。

超人カットマン

「って！お前は今度発売される魔法少女リリカルなのはA'sの最新ゲームの主要登場人物の一人「キリエ・フローリアン」じゃないか!!」

カットマンは驚きの余り説明的な台詞をかました。

超人カットマン

「んで？何しに来たの？」

カットマンは体勢を整えながらキリエに訊いた。

キリエ

「決まってるじゃない、この小説でいつ私に出番が来るか訊きに来たの。」

キリエはさも当然のように言い放った。

超人カットマン

「言っておくが、この小説は「Strickers」を原点にした小説だぞ。A・Sの特別編のゲストキャラクターのお前に出番がある訳ないじゃん。」

???

「では、私の出番も当然無しと。」

すると、どこからか赤い髪で青い服を着た娘が現れた。

超人カットマン

「今度はアミティエ・フローリアンかい。」

キリエの双子の姉、アミティエが現れた。

アミティエ

「ピンクの不肖の妹が迷惑をおかけしました。」

アミティエがカットマンにこう言うと、

キリエ

「それ以前に頭にこないの、私たちの出番無いんだよ。」

キリエはアミティエにこう言った。

アミティエ

「そりゃあ……猛烈に頭にくるよ!!」

何故か爆発したアミティエに、

超人カットマン

「はいはい、今度ミッドチルダ全域で放送されるアニメの先行配信PV見せてやるから機嫌直せ。」

カットマンはブルーレイディスクを取り出して言った。そして、プレイヤーにディスクを入れると、再生ボタンを押した。

これはPV風今後の展開予告である

これは、絆の物語、

(BGM 水樹奈々 Phantom minds)

工藤タイキ「ここは……」

クロスハートが飛ばされたのは、時空の海の第一世界「ミッドチルダ」彼らはそこで機動六課の魔道士と出会う。

八神はやて「うちらがタイキ君がもとの世界に戻るのに協力する、

だからそれまでうちにいてな。」

スバル「私は、皆を守る為強くなりたい。」

ティアナ「証明するんだ、ランスターの弾丸はなんでも貫ける。」

エリオ&キャロ「僕達が護るノみんなの帰る場所を。」

絆と魔道が交錯し、新たな伝説が幕を開ける

巨大な黒い竜に、スターソードでは無くハンマーを装備して立ち向かうシャウトモン×5

トライデントアーム、ギガデストロイヤーでビースト型ガジェットを吹き飛ばすメタルグレイモン

空中からデイベインバスターを放つのは

ハーケンスラッシュと素早い動きでデジモン達の中を掻い潜るフェイト

スターソードを装備し謎の騎士と戦うシグナム

チームクロスハートのあるデジモンの技をまねて、容赦のない連続パンチを放つスバル

攻撃力を持つ幻影と背中合わせになって敵を迎え撃つティアナ

完全体フリードに乗って現場へ向かうエリオとキャロ

空から巨大な魔法を放とうと構えるはやて

上記の映像が順番に流れ、BGMが終わる

緊迫感のあるBGM

彼らの前に現れる謎の少年

少年A「あなた達のやり方じゃ埒があきません。ここは俺に任せて下さい。」

少年B「(はやてに耳打ちしながら) 本当はそちらの粗探しに来たんですよ。」

彼らの正体、目的は一体

少年B(街の路地裏にて)「これは、ろくな事は起きないな」

少年A「まさか連中は、D5を企んでるんじゃない。」

カリム「新しく予言が更新されたわ、絆の将と魔王が手を結ぶ時、偽りの竜王の野望打ち砕かれる」

カリムの預言書に追加された、この文の意味は

八神はやて「いまここで、機動六課設立の本当の意味を話すな。」

機動六課設立の本当の意味とは

そして運命の日

???「さあ、一夜限りの宴を始めようか」

謎の人物のこの一言と同時に、山が割れて竜の姿をした怪物が姿を現す。

驚愕の色に染まる機動六課の面々の顔が映った後

工藤タイキ「デジクロス!!」

(アニメ第一話のような感じ) クロスローダーを掲げた工藤タイキの
声が響く

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士 始まります

アミティエ

「ちよつと！何よP.V.の中の謎の少年AとB、それなら私たちが出
た方が遥かに読者に分かりやすいんじゃない!!」

カットマン

「確かにそうだが、お前らはまだ情報が少なすぎるんだよ。アミテ
イエは運命の守護者でキリエは時の操手でお互いに争っている。そ
んな設定のお前らが協力して何かしていたりしたら文句言われるよ。」

キリエ

「つまりその二人は最終的には味方になるわけね。」

カットマン

「げ！お前ら謀ったな！」

アミティエ

「そつちが勝手に言ったんじゃない。」

カットマン

「まあいいや、とにかく次の話だが、これから読者の方々の質問を受け付けようと思うのだが。」

キリエ

「つまり？」

カットマン

「この小説の展開や登場人物、登場人物本人への質問を募集し、このコーナーで一つ一つ回答しようと思うのだよ。当然、後者の質問はあくまで小説本編に出ているキャラクター限定だけだね。」

アミティエ

「結局私たちが天下を取る事はないと。」

カットマン

「安心しろ、実は して×××する企画がついこないだ持ち上がったんだ。」

キリエ

「え?!じゃあいずれ私たちがジエネ……モガモガモガ!」

カットマン

「次の話だが、この小説内で人気投票を行っただよ。」

アミティエ

「二次創作小説では恒例のイベントですね。」

カットマン

「一票を入れる方は、感想欄に投票するキャラクターの名前を書いて下さい。但し、投票が有効になるのは小説本編に登場したキャラクターのみになるので悪しからず。」

アミティエ

「とりあえずキリエは悪さをしないよう縛っておきましたから。」

カットマン

「そうか。じゃあアミティエ、何か適当にデジモンを言ってみてくれるか。」

アミティエ

「?じゃあデッカーグレイモンとか?」

カットマン

「そうそう、こうしてデジクロスしたデジモンに票を入れた場合、そのデジクロスを構成するデジモンにそれぞれ票が入る。例えばシヤウトモン×4Bに票を入れた場合、シヤウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモンに票が一票ずつ入る。」

アミティエ

「票を入れたいデジモンが二体以上いた場合の裏技って訳ですね。」

カットマン

「そういう事、でもそろそろ時間切れだから今日はここまで。」

アミティエ

「それでは今後の展開をお楽しみ下さい。」

二人

「それじゃあまたね」

キリエ

「モガモガモガ（縄を解け！！）」

最後にキリエの届かぬ叫びが響いた第一回目であった

五話更新記念の回（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「気を取り直して始めよう、今回のテーマはスターモンズ。」

モニタモンA

「スターモンは突然変異型のデジモン、必殺技は連れ歩いているピクモン達を投げつけて攻撃するメテオスコール。」

カットマン

「スターモンズは一体のスターモンを中心に、数多くのピクモンが集まって構成されているチームなんだ。落語会のような厳しい修業と上下関係を乗り越えた強者が新生代のスターモンになれるんだ。」

モニタモンB

「ピクモンは基本スターモンには絶対服従ですな。」

モニタモンC

「こりゃ大変だ。」

全員

「次回もお楽しみに！」

第五話 ホテル・アグスタ 古代竜の襲撃

リニアレールの襲撃事件から数日が経過したある日、機動六課のメンバーはヘリに乗ってある場所へ向かっていた。

「今回の仕事場所はここ、ホテル・アグスタ。」

リインが展開したモニタに、わりと綺麗な大きめの施設の映像が映し出された。

「ここで行われる骨董品オークションの人員警護と、違法売買の取り締まり、それが今回の任務。」

なのはが搭乗している面子に仕事の内容を説明した。

「それで、何故人員警護を行うかというと、出品される骨董品をレリックと勘違いしたガジェットが攻めてくるかもしれないからです。」

その後リインが、説明に付けたしをした。

「それで、これがレリック収集の大本とされている人物。」

その後、フェイトの展開したモニタには、不細工な訳でも気障っぽく見えるわけでも無いが、見ていると何かと腹の立つ顔の男が映し出された。

「ジェイル・スカリエッティ、違法な研究によって広く指名手配されているの。最もこの捜査は私がするんだけど。」

「とりあえず、みんなも顔だけは覚えててくれな。」

ここで、タイキに抱かれているピンク色のデジモン「キュートモン」が、

「ねえシャマル先生、下においてある荷物はなにっキユ?」

と、シャマルにたずねた。

「ああ、これね。隊長三人のお仕事服。」

と、シャマルは答えた。

数分後、機動六課メンバーはホテル・アグスタに到着し、前日から現場ではっているヴィータ、シグナム両副隊長と合流した。そして隊長三人は、

「こんにちわ、機動六課です。」

シャマルの言うお仕事服を着て、ホテルの中でも選ばれた人しか入れないオークション会場とその周辺に入っていた。いつもの制服では無く三人共ドレス姿なので、なんの違和感も無く入る事ができた。

その頃、リインとスバル、は何をしていたかと言つと、

「リイン曹長、何しているんですか？」

スバルは自分の頭の上でパネルを操作するリインに訊ねた。

「お仕事半分、趣味半分、この間の出動についての業務日誌を付けてるですよ。」

と、リインは答えた。

スバル自身も、あの事件の後小さい出動が数回あったので、現場の空気には慣れたようだった。

一方ティアナは、自分が所属する部隊について考えていた。

「今の六課の戦力は無敵どころか無茶苦茶すぎる、隊長三人は普通にSランク越えの魔道士で副隊長でもAAランクは普通。スバルは訓練校は主席で卒業の優等生だし、父親と姉は管理局の歴戦の勇者エリオはあの歳ですでにBランク所持で、キャロはたださえ珍しい召喚魔法の中でも強力で珍しい竜召喚士。」

そして、極めつけは民間協力者の工藤タイキである。彼はクロスロ

「ダーと呼ばれる不思議な機械を使い、デジモンと呼ばれる下手な召喚獣よりも強力な生き物を操り、拳句の果てには合体させて一つの戦士を生み出す。人を牽きつける魅力があるのか、デジモン達は皆彼を慕っており、凶暴すぎる為使役不可能とされるグレイモンですら彼には従うそぶりを見せている。」

また、彼本人には魔道士ランクAに相当するだけの魔力を持っており、持ち前の的確な判断力を用いて魔道士になれば、あつという間に出世街道をまっしぐらに進んでいくだろう。

「やっぱり、この部隊で凡人なのは私だけ。」

今になって考えれば、自分だけがこれといって飛び出た才能や特技がない事を改めて実感した。

「でも関係ない、私はここで証明する。ランスターの弾丸は何でも貫ける。」

ティアナはクロスミラーージュを見つめてこう思った。

一方、ホテルの中に入ったなのは、フェイト、はやてはというと。なのは、はやてはオークション会場のホールに、フェイトは外の廊下にいた。

「さすがに会場内の警備は嚴重だね。」

ちらほらと客の入りだしたホールを見渡しながら、なのははやてに言った。

「これなら、大抵のアクシデントには普通に対応できそつやな。」

はやてもなのはと同じように周りを見渡したら、出来る事なら何も起こらないことを祈った。

そしてフェイトは、廊下を歩きながら怪しい人物が居ないか確認していた。

「オークション開始まで後どれくらい？」

「2時間と23分です。」
バルディッシュの答えを耳で聞きながら、フェイトは会場へと戻っていった。

一方、ホテルより数百メートル離れた森の中に、黒いコートを着た背の高い男と黒いローブを身につけた少女が居た。

「どうしたルーテシア？お前の探し物はここにはないだろう。」
男はルーテシアと呼んだ少女に言った。

「でも、ドクターの探し物があそこにあるって。」
少女がこう言うと、彼女に連絡があった。

「ごきげんようルーテシア。ゼストやアギトも一緒かね。」
ルーテシアが開いたモニタに映ったのは、他でもないジェイル・スカリエッティだった。

「ごきげんようドクター、探し物？」

「ああ、先ほども話したがあの建物に私の探し物があるから、探して持ってきて欲しいんだ。」

挨拶もそこそこに、スカリエッティは単刀直入に話題に入った。

「いいよ。」

ルーテシアは即答した。

「ありがとルーテシア、今度お茶とお菓子でも奢らせてくれ。」

スカリエッティがこう言うと、ルーテシアの手の甲に付いている寶石のような物が一瞬光った。

「君のアスクレピオーズに詳しいデータを送つといた。」
すると突然、

「お話中失礼します。」

新しいモニタが開いて、紫色の髪的女性が映し出された。

「ウーノか、どうした？」

思わぬ乱入者に、ルーテシアでは無くゼストが答えた。

「そちらに”彼”は来ていませんか？」

ウーノと呼ばれた女性は単刀直入にこう訊いた。

「すまないが見ていない。」

ゼストは即答した、

一方ルーテシアは、指に止まっている画鋏に羽が生えたような生き物に少し話しかけた後、

「私の虫達が探してくれるって。」

と、ウーノに言った。

「では、よろしく願います。」

ウーノはこう言うと、通信を切った。

「では、健闘を祈っているよ。ルーテシア。」

そに続き、スカリエツティも通信を終えた。

「行くのか？ルーテシア。」

ルーテシアが脱いだローブを預かりながら、ゼストは訊いた。

「ゼストやアギトはドクターの事を嫌ってるけど、私はドクターは嫌いじゃないから。」

そう言うと、ルーテシアの周りに小さい虫が大量に現れた。

そして、ゼストとルーテシアがいた場所から更に数百メートル離れた場所では、他よりも少し高い木の上に竜を模ったプロレスで使うようなマスクを身につけた少年が居た。

「折角だし、俺達も参加しよう。」

数百メートル遠くにて交わされた会話を傍受していた彼がこう言う
と、

「なら私が行くぞ。」

彼の腰から女性の声が響いた。

「いいのか、お前が行ったらホテルと一緒に探し物はおるかこの辺

り一体が消し飛ぶだろ。」

その後すぐに、馬鹿にするような声が響いた。

「五月蠅い！ちゃんと手加減できるわ！それに、少し戦場を引っこき回すだけで良いんじゃない？」

女性の声がこう反駁すると、

「そういう事、それじゃあよろしく。」

少年はこう言って、腰につけていた水色の機械を掲げた。その瞬間、途轍もない生き物が姿を現した。

「それで、これをこうするの。」

「うーん、全然わからないっキユ。」

屋上で警備にあたっていたシャマルとキュートモンは、余りにやる事がないのであや取りをしていた。

筈をつくり、次に星をつくろうとしたら、

「敵反応？！今も増大中。」

自分の指輪型デバイス「クラールヴィント」に反応があった。

「みんな！敵よ！」

シャマルはデバイスを通して副隊長とフォワードに連絡した、

「スターズ3、了解！！」

「スターズ4、了解！！」

警備をしていたスバルとティアナは、連絡が来るなりすぐさま現場へと向かっていった。

一方、青い大型犬「ザフィーラ」と地下駐車場を警備していたエリ

オとキャロにも連絡が来た。

「では我が先行して厄介な敵を潰す。お前達は入り口前を固めるんだ。そこが護りの要となる。」

ザファイラは、二人に的確な指示を出した。しかし、

「え、ザファイラって喋れたの?！」

突然の襲撃より自分が喋れることのほうが余程驚きだったようだった。

副隊長が先行していつてから少したった所で、驚くべき事が起こった。突如入り口を固めるフォワード四人とタイキ達の前に魔方阵が現れ、そこからガジェットが大量に現れた。

「空間転送?! サーチャー作動させます。」

ロングアーチスタッフからの連絡が入りタイキも行動を開始した。

「リロード! モニタモン!」

すると、クロスローダーの中から緑色の忍装束を身に付け、背中にリュックを背負った、頭部がテレビの形をした忍者型デジモンが現れた。

「このあたりに魔道士が居るみたいだから探して姿を写してきてくれ。」

「分かりましたな。」

タイキの指示を受けた三人のモニタモンは、ガジェットのリーダーの隙をくぐり抜けて森の中へ入っていった。

「さて、いっちゃやるか!」

シャウトモンがいつものようにマイクを構えながら言ったとき、現場指揮を担当しているシャマルから連絡が入った。

「更に巨大な敵反応が接近中!」

その報告が来た瞬間、体長は以前見たギガシードラモンには劣るもそれでもなお巨大と言っても過言ではない黒い竜型のデジモンが現

れた。

「な、何あれ。」

「フリードどころかボルテールより大きいかも。」

突然の巨大な襲撃者に、ティアナとキャラは驚きを隠せなかった。しかし、

「か、か、か、格好いい!!」

スバルとエリオは目をキラキラさせて喜んでいた。

「あ、あの、エリオ君。なんで喜んでるの。」

と、キャラが訊くと、

「だってドラゴンだよ、ドラゴン!この世にドラゴンとメカに興奮しない男子は居ないよ。」

エリオは若干興奮気味だった。

「な、あれはインペリアルドラモンじゃ!」

しかし、クロスローダーから出てきたジジモンは驚きを通り越して驚愕といった様子だった。

「インペリアルドラモン?」

みんな聞いたことの無い名前を聞いたので、そろってジジモンに聞いた。

「昔デジタルワールドに存在した究極の古代竜型デジモンじゃ。生き残りがおったのか!」

タイキは突然の強敵に対応する為、クロスローダーを掲げると、

「リロード!クロスハート!!」

リリモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、リボルモン、ベルゼブモン、ディアナモン、メデューサモン、そしてバグラモンとの最終決戦の後仲間になった、ブルーメラモン、ルーチェモン、ピノツキモン、スパードモンを出現させた。その後、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、デジクロス!!」

再びクロスローダーを掲げ叫んだ、

「シャウトモンx5!!」

シャウトモン×3以降の一本角の生えた頭部から、三日月形の角が生えたトゲトゲした頭部になり、左腕にスパロウモンの胴体、背中にスパロウモンの翼がついたデジモンが現れた。

「×5、上空で奴を牽制してくれ！」

「応よー！」

タイキの指示と同時に、シャウトモン×5は空へ上がりインペリアルドラモンと交戦を開始した。

「フラウカノンー!!」

「ジャステイスブリッドー!!」

「グランドクロスー!!」

一方地上では、フォワード四人とクロスハートのデジモンで守りを固めていた。リリモン、リボルモン、ルーチェモンの放った光弾がガジェットへ飛んでいき、敵を打ち抜くかと思ったら、ガジェットは紙一重で攻撃をかわした。

「え？いきなりどうしたの？」

「どうやら、自動操縦から手動操縦に変わったようですぞ！」

リリモンの驚きに、ナイトモンが答えた。

そんな中、後ろで援護に徹していたティアナは、

（そんな事は関係ない）

と考え、一度に大量のカートリッジを消費し、自分の周りに弾丸のカートンを展開した。

「?!無茶よティアナ！一度にそんな量を放つなんて。」

現場の指揮をしていたシャルは、突然のティアナの行動に驚き、ティアナに声をかけたが、肝心のティアナはそれを聞かず、全ての弾丸をガジェットに放った。

飛んでいった弾丸は、ガジェットに次々と命中していったが、たっ

た一発だが先行して敵に当たっていたスバルめがけて飛んでいった。突然の事にスバルは驚いた、自分の元にめがけて弾が飛んでくるのだから。シャマルの連絡でフォワードの戦いぶりを見に来たヴィータが全速力で向かうもとても間に合わない。もう駄目だ、と思った瞬間、タイキは、

「デジメモリ！スレイプモン！オーデインズブレス発動！！」

クロスローダーに、赤い鎧を装備した馬の姿をした騎士の絵が書いてあるメモリを突き刺した。すると、スバルの目の前に絵に書かれた騎士が現れ、左手に装備された盾で飛んできた弾丸を防ぎ、更に発生した冷気でガジェット全てを凍りつかせ身動きを封じた。

「気候すら操る聖盾ニフルヘイム、弾丸一発を防ぐには贅沢すぎるな。」

一方、上空でシャウトモン×5と戦っていたインペリアルドラモンは、地上での戦いを眺めながら言った。

「おいおい、戦っている最中に余所見かよ！！」

シャウトモン×5は、スターソードでインペリアルドラモンを斬りつけながら言った。

「まあ、今の私の力は全力のおよそ3%だ、これくらいの余裕はある。」

対するインペリアルドラモンは、巨大な爪で剣を受け止めながら答えた。

「冗談だろ！インパクトレーザー！！」

「ポジترونレーザー！！」

シャウトモン×5は、持ち前のスピードで距離を取り、左腕に装備された銃からレーザーを発射するも、インペリアルドラモンは背中の砲台から発射されたレーザーでかき消された。

「メガデス!!」

続いて、インペリアルドラモンは口から暗黒物質の含まれた火炎を吐き出した。炎に飲み込まれたシャウトモン×5はそのまま墜落し、タイキ達の元に落ちてきた。

「×5?!」

タイキは落ちてきたシャウトモン×5を見た後、上空のインペリアルドラモンを見た。奴は攻撃しようとしてはいるが、何かを気にしているのか上空を旋回し、牽制と様子見に徹している。

（ひよつとして）

と、タイキは思うと、

「ディアナモン、地下駐車場を見に行ってくれるか。こっそりと。」

と、ディアナモンに耳打ちした。ディアナモンは、わかりましたと手振りで合図し、そのままこっそり地下駐車場へ向かっていった。

その後、上空のインペリアルドラモンを見て、

（×5Bじゃ奴の不意を突くことはできない。×5のスピードを損なわず一撃の威力を上げるには…）

と考え、あたりを見回した。そして、ヴィータがガジェットをハンマー型デヴァイス「クラーファイゼン」でぶん殴っている所と、その隣で「ブリッドハンマー」を放つピノッキモンが目に入った。

「これだ!!」

と、タイキは叫ぶと、クロスローダーを掲げて、

「シャウトモン×5、ピノッキモン、デジクロス!!」

と、叫んだ。すると、シャウトモン×5とピノッキモンが合体し、背中の翼が×の字型に変わり、スターソードがピノッキモンのハンマーを取り込んで変形した武器「スターハンマー」を装備したシャウトモン×5が現れた。

「クロスアップ! シャウトモン×5!!」

そして再び、インペリアルドラモンへ向かっていった。

「ポジトロンレー!!!」

インペリアルドラモンは背中の砲台から発射するレーザーで迎え撃

とうとしたが、スピードアップしたシャウトモン×5の攻撃をくらい未遂で終わってしまった。

「いくぜ！ネオメテオバスターアタック！！」

インペリアルドラモンへの攻撃の後、素早くさらに高い場所まで飛んだシャウトモン×5は、ハンマーを掲げ急降下を開始した。そのまま背中につつまみ、インペリアルドラモンの巨体を地面に叩きつけた。

「やったか？」

発生した砂煙が晴れた時、インペリアルドラモンは姿を消していた。

「何？！いねえ！！」

「恐れをなして逃げちゃったんでしょうか？」

グイータ、キャロの両名はあたりを見回しながら言った。

「いや、目的がすんだから撤退したんだろう。奴の狙いはどう考えても俺たちの気を引くことにあつた。」

「え？」

タイキの分析には、皆が驚いた。

その頃、警備が手薄になった地下駐車場では、人間の大人と同じくらいの大きさの生き物が、トラックから荷物を小脇に抱えて出てきた。足元にはこれまで警備をしていたが、その生き物に倒されたのだろう人間が数人いた。

早速生き物は荷物を持ってこの場から去ろうとした。しかし、

「動かないで、動いたら粉々にするよ。」

突如背後から発生した冷気に動きを止められてしまった。ディアナモンが現れたのだ。

「逃げたいのならご自由にどうぞ。でもそれは置いて行ってもらふよ。」

二人の間に緊張感が走ったその時、

「クラクラクラー！」

どこからかクラゲのような白い生き物が飛んできてディアナモンに張り付いた。

「あ、何なのよコイツ。え？、ちよつと待ってそこはダメー！」

クラゲのような生き物が何をしたのかは不明だが、とにかく謎の生き物はディアナモンから逃げ出した。

「うん、とりあえず襲撃者の殲滅には成功したみたいだね。」

「そうやな、私らの出番は無かったな。」

会場内のはとはやては、外の部下からの報告を見ながら言った。すると、舞台の上の演台に司会者が現れ、

「それでは、オークション開催に当たりまして、鑑定にあたって頂く考古学者の先生に挨拶を頂きたいと思います。ユーノ・スクライア先生です。」

件のオークションも、襲撃者が居なくなったところで始まった。

その頃、会場からしばらく離れた場所では、

「どうだった？」

竜のマスクを被った少年は、水色の機械に語りかけた。

「とりあえず、例のブツはちゃんと回収できたようです。途中妨害に入った者を妨害した時、俺の仲間が数体けがをしましたが、まあそれくらいです。」

水色の機械からは、報告をするような台詞が響いた。

「そう。」

少年はこう言った後、ホテル・アグスタの方角を向いて言った。
「工藤タイキか、もっと面白くなるといいな。」

第五話 ホテル・アグスタ 古代竜の襲撃（後書き）

カットマン

「カットマンとー!!」

モニタモンズ

「モニタモンズのー!!」

全員

「デジモン紹介のコーナーー!!」

モニタモンズ

「さて、今回のテーマはキュートモン。」

カットマン

「キュートモンは大きい耳を持ち、耳当てが特徴のデジモンだ。得意技は手で触れた部分の傷を瞬く間に治療する「キズナオール」とてつもない音程の歌で敵を攻撃する「ハイパーソニックウェーブ」だ。」

モニタモンA

「案外いたずら好きな性格で、時々いたずらのため人前に出てくるんですな。」

モニタモンB

「それより、シャマル先生とはどんな関係になるんですかな。」

全員

「確かにー?」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

失敗をおかし、すっかり調子が落ちたティアナ。ドルルモンは彼女をどう見るのか。

次回「ティアナの失敗、ドルルモンの過去」

第六話 ティアナの失敗、ドルルモンの過去

「よし、それはあっちへ持ってけ！」

ここは、一騒動あった後、無事にオークションを終えたホテル・アグスタ。機動六課の面々は、事後処理活動をしていた。

工藤タイキも積極的に作業に参加している。ふとそこへ、

「なあタイキ、ドルルモンを見てないか？」

リボルモンが現れタイキに訊ねた。

「ティアナと一緒にいるはずだけど…見てないのか？」

「それが、ティアナのところにも行ってみたけど、いなかったんだ。」

こう答えたりボルモンに、今度はタイキが、

「ところで、ティアナ本人はどうしてた？」

と、訊いた。彼にしてみれば今一番気になる事である。いわゆる「ほっとけない」である。

「うーん、負のオーラで覆われているみたいで近寄れなかった。」

リボルモンの答えを聞いたタイキは思った。レイクゾーンの二の舞のような事態にならなければいいが、と。

「うーん、ありませんね。」

背中に白い羽をたくさん持った天使型デジモン「ルーチェモン」は、あたりを見回しながら言った。彼は今、謎の襲撃者である「インペリアルドラモン」の痕跡を探しているのだ。

「お、これは。」

突然、一緒に同じことをしていた「ワイズモン」が声をあげた。彼の目線の先には、大きいわけではないが、金色の塊が落ちていた。

「間違えない、これはインペリアルドラモンの爪の欠片だ。」

「じっくりしらべる価値がありますね。」

二人は、サンプルを慎重に回収しながら言った。

「何か見つかったの？」

ふとフェイトが話しかけてきた。

「ああフェイトさん。重要なサンプルを調べたいんで、今度実験室を借りたいんですけど。」

これは良かったとばかりにルーチェモンは言った。

「うん分かった。今度私からシャーリに掛け合ってみるよ。」

フェイトは、ワイズモンが持っている「インペリアルドラモンの爪の欠片」を見ると、ほぼ即答と言えるタイミングで答えた。

「……ところで、あそこにいる彼は？」

今まで黙っていたワイズモンだったが、なのはと仲良さそうに会話する薄い金髪の青年を見てフェイトに訊いた。きっと自分と同じ二オイがするのであろう。

「ああ、彼はユーノ・スクライア。考古学者で私たちの十年來の友人、そしてなのはの魔法の先生。」

フェイトは淡々と説明した。

「やはりな、彼とは一度いろいろ話したいものだ。」

フェイトの説明を聞いたワイズモンはこう呟いた。この時、フェイトには二人が仲良く話す構図と一緒に、フェレットとなったユーノを解剖しようとするワイズモンの構図が浮かんだのは言うまでもない。

「それにしても、なのはさんの先生にしては若すぎませんか。」

ルーチェモンは先生と言われ、英雄の息子に勉強と格闘技を教えた麵類爺や、かつては世界最強と謳われたエロ仙人のような人物を連想したのだろう。フェイトにこう聞いた。

「なのはが魔法に関わるようになったのが9歳の時だから、同い年

とはいえユーノの方が経験は豊富だったから。」

とフェイトが言うと、

「なるほど、今の二人の関係は友達以上恋人未満といったところか。」

ワイズモンが遠目に観察しながら言った。おそらく何らかの方法で二人の顔の体温や、心拍数を調べたのだろう。

「そうなんだけど二人ともまるで進展しないんだよね。二人とも仕事中毒だから。なのはうちの部隊で副隊長兼教導官だし、ユーノは無限書庫の司書長だから。」

フェイトがこう言った時、

「無限書庫ってなんですか？」

ルーチェモンが食いついた、

「いろんな次元世界の本を集めた図書館のような場所のことです……」
フェイトがここまで言った時、

「何！！この世界にはそんなに素晴らしい場所が存在するのか！！」
！！」

今度は目をキラキラと輝かせたワイズモンが食いついた、

「うん、今度連れて行ってあげてもいいけど……」

フェイトは半ばひいた状態で二人に言った、ルーチェモンとワイズモンは本がたくさんある書庫の様子を思い思いに連想していたからである。

この事件の後、しばらくは事件は起こらず、機動六課の面々は日々訓練漬けの生活に戻った。ある日、変化が訪れた。ティアナー人が皆と離れ、夜中に一人で特訓をするようになったのだ。

「あんまり無理するなよ、明日の活動に差し支えるぞ。」

みかねたドルルモンは、彼女に声をかけた。

「分かってる、でもこれくらいしないと間に合わないの、凡人だから。」

ティアナは、元々強いあなたには分からないでしょう、とも言った。対してドルルモンは、

「そんな事はねえよ、俺なんてタイキやシャウトモンがいなけりや何もできねえよ。」

と言った。そして、

「強くなるのはいいが、半端な力を持ったところでどう努力しようとその力は恐怖の対象にしかない。」

こう言い残してその場を立ち去った。その後、偶然寮の入口でスバルと出会った為、思い切って訊いてみた。ティアナが強くなりたがる理由を知らないか、と。

「うーん、もしかしてあれかなあ。」

スバルは、心当たりがある、とドルルモンに言って。ある事件について話した。

数年前、執務官を目指して努力を続ける一人の魔道士がいた。名前は「ティード・ランスター」といい、ティアナという幼い妹がいた。彼はある日、とある事件の犯人を捕まえようとしたが、あと一歩のところまで犯人の攻撃を受け、それが致命傷となり殉職した。犯人はその後、彼との戦闘で疲労困憊となりグロッキー状態になっている所を別の管理局員に逮捕されたらしい。

しかしティードの上司はティードが犯人を捕まえられなかった事が不満だったようで、ティードの最後の仕事の結果と彼の死の事を、不名誉なうえ無意味だった、と評したのだった。

「たぶん、兄の死が無意味ではないと証明したいからこそ、ああして無茶してるんじゃないかな。」

一通り話し終えたスバルはこう言って話をしめた。ドルルモンは少し考えてから、

「無茶を言うようで悪いが、明日も朝早くからあいつは自主練を開始すると思う。この時はお前も参加してくれないか。」

と、スバルに頼んだ。これに対しスバルは、

「うんいいよ、元からそのつもりだったし。」

と、ドルルモンに言った。そして、

「そういえばドルルモンって元々はタイキ達の敵だったんでしょ。なんで今は味方になっているの？」

と、訊いた。さっき答えたんだからお相子でしょう、とも言っている。

「さあな、しいて言えば面倒くさくなったのかな。仲間を大事にしようとしないうちに軍にいるのがさ。」

ドルルモンは、かつて自分がバグラ軍を抜けるきっかけとなった戦場での出来事を思い出して、こう言つと、

「ティアナも仲間の本当の存在理由に気づいてもらえばいいが。」
と言つて、タイキの部屋に向かつていった。

そしてその頃、肝心のティアナはと言うと、長い練習の中で体力に限界が来始めた。胃の中身をリバーズしなかったのはほぼ奇跡であった。

（証明するんだ、兄さんの魔法は無意味なものじゃないと）

それでもなお動くのは、心に秘めた決意によるものだろう。再び立つて練習を再開しようとした時、近くの窓ガラスに映った自分の顔が歪み始め、ティアナの良く知る人物の顔になった。それは自分の兄、ティーダ・ランスターの顔だった。

「兄さん、なんで？」

ティアナは驚きを隠せないようだった。対してティードは、

「何、妹は元気かなと思って化けて出てきてみたんだ。」

と、冗談を交えながら言った。その後、

「ところで、調子はどうだ。」

と、ティアナに訊いた。

「ううん全然、まだまだ兄さんには及ばないよ。この間は失敗までやっちゃったし。」

ティアナの返答にティードは、

「いいかティアナ、僕たちみたいな部下の失敗には二つのものがあるんだ。」

真面目な顔で言った。

「一つは真正正銘の自分の失敗、二つ目は上司の責任転嫁の皺寄せ。後者は割と多いけど、前者は予想以上にまれだったりするのさ。でもまあ、今する話でもないか。」

そしてその後、

「お前だって凡人なんかじゃない。それを嫉妬して分かるうとしない相手には、力づくでも見せつければいいんだ。」

と言った。すると、

「そう、私は凡人じゃない。力づくでも分からせる……」

ティアナは意識が朦朧とするのを感じた。一瞬だけ何かが入ってくる感じがしたのが最後だった。

「そう、お前は凡人じゃない、力づくで分からせてやれ。」

ここはミッドチルダのとある場所。ここでは一人の女が鏡に向けて呟いていた。

「いい子ねティアナ、私が合図を出すまで普段どおりにしていなさ

い。」

そして、鏡に映った自分の顔を見ながらほくそ笑んだ。

「レイクゾーンのあの女の子より使えそうな子ね。しばらく自由にさせておくとするか。」

そして翌日、早起きしたティアナとスバルは早速特訓を開始した。

日頃の訓練もさることながら、自主練では手数を増やす練習をしたり、熱心に研究を重ねた。当然困難にぶち当たる事もあったが、そこはスバル、エリオ、キャロ、タイキ達がサポートし、着実に皆は繋がりを深めていったはずだった。

そして、問題の日となった。

「さて、今日は2対1で模擬戦をするよ。」

一通りの訓練の後、なのはが皆に言った。

「最初はスターズ、ライトニングはその間ヴィータ副隊長と見学だよ。」

なのはにこう言われ、スターズはバリアジャケットを装備し、ライトニング部隊の二人はヴィータ、タイキ達とホログラムのビルの屋上に上った。

「ええ、模擬戦もう始まっているの?」

すると、フェイトが慌てながらやってきた。本人いわく、自分が模擬戦を担当しようと思ってきたらしい。

「最近のなのはの訓練密度濃いからな。夜遅くまで新人どもの訓練の映像見て分析も行ってるし。」

ヴィータがこう言うと、

「いつも見てくれてるんですね。」

エリオも隣で言った。

「本当にそうかな？あいつが何を目指して指導を行っているのかしつかり新人に伝わっていないなら、まだまだあいつの指導は不完全だな。」

しかし、ドルルモンはこう言っている。ヴィータは言い返そうとしたが、模擬戦が始まったので、そこに注目した。

スバルはいつも通り、気合で真っ直ぐなのはに突っ込んでいった。しかしティアナは、速いと言えば速いが味方まで危なくなるような弾道の弾を沢山放っている。

「ティアナの奴どうしたんだ？」

ヴィータは早くも気が付いた、

「スバルを罠に使ってる。」

なのは本人も気が付いているだろうが、あまり気にしていないのか、それとも含むところがあるのか。模擬戦を続行している。そして、

「防御を抜いてバリアジャケットを切り裂く、一撃必殺！！」

なのはの不意を突く形で、刃のエネルギーを放出した銃を振り下ろした。

「レイジングハート、モードリリース。」

なのはは静かにこう言うと、素手でスバルの拳とティアナの刃を受け止めた。

「ねえ、私の教導ってそんなに間違ってる？」

二人にこう言うなのはの口調は、静かだが槍のように突き刺さるものだった。ティアナは言われた瞬間にその場を離れると、

「私は！何も失いたくないから！強くなりたいんです！！」

力の限り叫び、なのはめがけて大量の弾を発射した。

「頭…冷やそうか…」

なのははこう言うと、大量の弾丸と共に一発のエネルギー波をティアナに打ち込んだ。

威力を加減し、なおかつバリアジャケットで守られているとはいえ、これだけの一撃を打ち込まれたからには普通は無傷では済まない。しかし、ティアナは無傷で立っていた。一人の和装束の女に守られて。

「あらあら、せっかく見に来たのにその光景が仲間割れのところなんてね。」

現れたのは、旧バグラ帝国軍の三元士、色欲を司る魔王型デジモン「リリスモン」だった。

第六話 ティアナの失敗、ドルルモンの過去（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはスパロウモン。スパロウモンは飛行機のような姿をした鳥型デジモン。必殺技は、所持した銃を乱発する「ランダムレーザー」翼に仕込んだ刀で相手を斬る「ウィングエッジ」高速で体当たりする「クラッシュムーブ」だ。」

モニタモンA

「飛んでいるときの動きを見れば、その時の調子はおろか、その時の機嫌まで分かる実に単純なデジモンですな。」

モニタモンB

「となると、やたらとアクロバットな飛び方をしていると、間違えなく浮かれてるいう事ですな。」

モニタモンC

「おやつあげたら曲芸するかな。」

カットマン

「それはともかく、スパロウモンが「ランダムレーザー」を撃つときに使う二丁の銃は「サナオリア」と言って、かのベルゼブモンが使う銃「ベレンヘーナ」を作った人が作ったんだよ。」

全員

「それじゃあまたね!!」

次回予告

突如機動六課を襲撃したリリスモン。ティアナを人質に組織を壊滅をたくらむリリスモンは、真に王たる人物についてタイキ達に言う。タイキはリリスモンの脅威から皆を守るため、全戦力を叩きこむ。

次回「リリスモンVS機動六課&クロスハート」

第七話 リリスモンVS機動六課& a m p・クロスハート

「あらあら、せっかく来たのに仲間割れの最中なんてね。」

突如現れたリリスモンは、静かな声で言った。

「リリスモンだと?!」

「なんであいつが?」

クロスハートの面々は一様に驚いている。

「あの人だれ? タイキの知り合い?」

スバルが訊いた、

「あいつはかつてデジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍三元士の一人リリスモンだ。」

スバルの問いに、いっしょに模擬戦を見学していたピノッキモンが答えた。

「久しぶりだねえ、工藤タイキ。」

リリスモンはタイキの方を向いて言った。

「何のようだ、リリスモン?」

タイキはリリスモンに訊いた。

「ふふ、作戦行動よ。機動六課の戦力と顔ぶれを確かめて来いと命令をもらったの。」

と、リリスモンが言うと、

「しかしご苦労なもんだな。もういないバグラモンのためにまだ世界征服しようとしてるのかよ!」

とシャウトモンが言った。

「バグラモン? まさか、私はそんな紛い物の王に仕えるつもりはないわ。私が今仕えているのは真に王たる王、確か竜王だったかしら。」

「シャウトモンの問いに、リリスモンはこう言った。
(真に王たる王? 竜王?)」

タイキはリリスモンの一言が気になったが、本人のいう事をそのま

ま解釈すれば、少なくとも味方としてここに来たわけではない、と考えたので。

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモン、デジクロス!!」

と、クロスローダを掲げて叫んだ。

「シャウトモン×4B!!」

クロスローダーの光がデジモンたちを包み、光が弾けると、シャウトモン×4に黒い足が追加された、ケンタウロスのような姿の合成型デジモンが現れた。

これだけでは終わらない、

「メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、デジクロス!!ピノッキモン、リボルモン、ブルーメラモン、デジクロス!!グレイモン、メールバードラモン、デジクロス!!」

次々とデジモンをリロードし、次々とデジクロスさせた。

「メデューサモンNP!!」
ナイザリンセス

「ピノッキモンRM!!」
リボルバーメリケン

「メタルグレイモン!!」

デジモン達を包む光が次々と消え、クロスハートの戦力が現れた。

「おいおい、いくらなんでも私一人にこの戦力は大袈裟なんじゃないかい?」

リリスモンは、味方から見れば壮観とも言える光景に文句を言ったが、

「どのみち変わらないか、こちらには人質がいるからねえ。」

と言って、傍にいたティアナの首筋に自分の爪をあてがった。

「って、ただ首筋に爪を当ててるだけじゃねえか。」

グイータは、いざという時のためにバリアジャケットを身に着けながらリリスモンに言った。しかし、

「うっん、あれが爪というだけでもう、それこそクラナガンと同じ表面積がある隕石が落ちてきた並みに大変なのよ。」

メデューサモンNPは、それこそ今の比喩と同じ状況に立ち会った

観測者となったようにヴィータに言った。

「それに今のままじゃティアナの救出もできねえ。あいつが動けないと何ともならねえ。」

シャウトモン×4Bも困ったように言った。

「そこまでよ!!」

その時、どこから聞いたことのある声が聞こえてきた。見ると、模擬戦を見学していたメンバーのいたビルの屋上に、バリアジャケツトを身に着けたティアナが現れた。

「ええ!!」

「ティアナ?! なんで?!」

この様子を見た機動六課、クロスハートの面々は驚いた。それはもちろんリリスモンも同じである、

(なにあの子? 本物はここにいるはず...)

リリスモンが、ほんの一瞬ではあるが自分の手元のティアナから目を放した。その瞬間、銀に光る矢のような何かが、リリスモンの手からティアナを救出した。

「とりあえず成功みたいですな。」

ティアナの救い主は、どんな環境に置かれても過剰着衣なんじゃないかと思われる分厚い防寒着の重ね着を脱いだ。そこから現れたのティアナモンであった。

「うまくいきましたな!!」

今までティアナが立っていた場所には、ふつうのモニタモンより少し大柄で、黒い装束を着たモニタモンが現れた。

「そうか!! だからティアナモンは「ハイビジョンモニタモン」を貸してくれ、って言ったのか!!」

タイキは、以前ディアナモンがハイビジョンモニタモンを借りていった事を思い出した。ディアナモンはこんな事態になった時のために、自分の幻を見せる能力で作り上げたディアナの幻をハイビジョンモニタモンに録画させ、いざこの事態になった今、ハイビジョンモニタモンに幻ディアナを幻影という形で再生してもらい、自分が決死の救出を行ったのだ。

「でも、なんであんな厚着？無い方が動きやすいんじゃない？」

スバルが疑問を口にするのと、

「よく見ている、その理由が今からわかる。」

と、メタルグレイモンが言った。

すると、ディアナモンが脱ぎ捨てた数多くの防寒着がドロドロと溶け始め、最終的には消えてしまった。

「えええ！！」

「腐って溶けちゃった？！！」

見ていた機動六課のメンバーは一様に驚いた。

「あれがリリスモンの必殺武器「ナザルネイル」触れた物質という物質を腐らせる効果があるというのは聞いたことあったけど、見たのは初めてだな。」

機動六課の面々に、どこからか現れたスパロウモンが説明した。

「そんな事より、スパロウモン！！」

ディアナを安全地帯に連れていったディアナモンの合図をもらい、

「ディアナモン、スパロウモン、デジクロス！！」

タイキはこの戦いで使う最後のデジクロスを行った。

「ディアナモンDS！！」
ダブルディバー

銀の忍装束から、金に近い色合いの軽い鎧を身に着け、クレイモア風の双剣を帯びたディアナモンが現れた。

さらにハイビジョンモニタモンとルーチェモンも戦線に加わり、リリスモンと向かいあった。

「しかし容赦の無い布陣だねえ。でもまあいいか。」

リリスモンは構えを取って攻撃に備え、クロスハートとリリスモン

の機動六課を混ぜた因縁の対決が始まった。

最初に行動を起こしたのはルーチェモンだった。

「デバインフィート!!」

ルーチェモンは自身の魔力を開放し、仲間たちの移動力、攻撃力を高めた。

「アクセルシューター! シュート!」

「ハーケンセイバー!!」

すぐさま、なのはとフェイトが同時に得意技を放った。

「ふん、そんな技が効くわけ…」

しかしリリスモンは、普通が存在なら回避不可能、防御でもなお難しい攻撃を余裕で退けた。だがこれだけでは終わらない。

「フリード! プラストフレア!!」

キャロの指示を受けたフリードが、リリスモンに炎を浴びせた。不意を突かれ、リリスモンの動きが止まった一瞬のすきに、

「我が求めるは焰、機械の竜に炎の加護を。」

得意の強化魔法をメタルグレイモンにかけた。

「お願いします!」

キャロの合図とともに、

「メガフレーム!!」

メタルグレイモンは、口から鉄をも溶かす熱量を発する炎を大量に吐き出した。彼が普段戦う相手の場合、この一撃だけで終わるところだ。しかし相手はリリスモン、炎に包まれてもピンピンしていた。

「くそ! アイツは化け物かよ!!」
ヴィータは叫んだ、

「そりゃそうよ、でも本気の彼女はその化け物よりも恐ろしいよ。」

次に飛び出したのは、メデューサモンPNだった。

「スレイ・エリン！！」

メデューサモンPNは、どこから取り出した超巨大な剣をリリースモンに振り下ろした。しかし、リリースモンは剣を軽々と受け止め、メデューサモンPNを軽々とぶん投げた。

「雑魚が何人こようと結果は同じだよ。」

リリースモンがこう言った瞬間である、

「それはどうかな、だったら俺を捕まえてみな！！」

背後からシャウトモン×4Bの声が響いた。リリースモンは気が付くや否や攻撃を打ち込んだが、シャウトモン×4Bは一瞬で消えてしまった。

「残念だったな、俺はここだ。」

その後、現れたかと思うと消え、消えたと思うと現れを繰り返し、さながらモグラ叩き状態になった時。

「スターズブレイドセレストライク！！」

突如シャウトモン×4Bが、腰の二丁の銃を乱射しながらリリースモンに正面から突っ込んできた。普通に考えればどう考えても無謀な行いである。しかしシャウトモン×4Bは、リリースモンのナザルネイルが触れるか触れないか、ほんの一瞬の間にリリースモンの前から姿を消した。

「またか。」

リリースモンはこう呟いて周りを見回し、ハイビジョンモニタモンの姿を捉えた。

「そうか、これまでのシャウトモン×4Bはあいつの作った幻影。」

リリースモンがこう分析した瞬間、

「俺はここだ！！」

背後から本物のシャウトモン×4Bが現れた。

「何！？今度は本物？！」

リリースモンはうまく相手の動きに反応し、大振りに振られたスターソードを後ろに跳びながら受け、衝撃を和らげると同時に相手との

距離を取った。

「よし、最後は私!!」

距離を取ったリリースモンの前にディアナモンDSが現れた。大振りの双剣を二振りとも振り上げリリースモンを斬りつけようとする。リリースモンはナザルネイルを応戦しようとしたが、

「なんちゃって?」

突然ディアナモンは剣を降ろした。見ていた者は一様に驚いたが、その理由がすぐに分かった。彼女は自分の足に、スターソードが変形することで構成されるピクモンズのデジクロス・ピクワイヤー」を括りつけていたのだ。シャウトモン×4Bとメタルグレイモンが引くことで、ディアナモンはその場を離れ皆の元に戻っていた。

結果リリースモンの爪は空をかすめる結果に終わった。

「いくぞスバル! ヴィータ!」

「はい!!」

「応!!」

リリースモンの隙を突き、ピノッキモンRM、スバル、ヴィータが突っ込んできた。ピノッキモンRMとスバルは渾身のパンチで、ヴィータはハンマーでリリースモンを殴り飛ばした。

「今だみんな!!」

タイキが叫ぶと同時に、

「ディバインバスター!!」

なのは得意の高威力砲撃魔法を、

「ギガデストロイヤー!!」

メタルグレイモンは背中の中翼と主砲からの破壊光線を、

「サンダーレイジ!!」

フェイトは自分のデヴァイスが発生させた雷を、

「バーストショット!!」

ピノッキモンは両手のリボルバーからの銃弾乱射を、

「フリード! プラストフレア!!」

キャラはフリードの吐き出す渾身の火炎を、

「ブリザードブラスター!!」

ディアナモンDSは周りを凍りつかせる振動を発する斬撃を、

「行きますヴィータさん! グランドクロス!!」

「応よ!!」

「「連技! 惑星直列!!」」

ルーチェモンとヴィータは、ルーチェモンの得意技「グランドクロス」を自身のハンマーで加速を付けて飛ばし、

「メデューサモン! ストラダーを使って下さい!!」

「はい!! グングニル!!」

メデューサモンPNは、エリオから借りたストラダーをグングニルに変形させて投げつけ、

「スバル殿! 行きますな、雷電閃!!」

「うん! デイバインバスター!!」

ハイビジョンモニターモンは自身の得意技「雷電閃」を、スバルのデイバインバスターに乗せて撃ち、

「x4Bフルファイア!!」

最後にシャウトモンx4Bが、頭部のバルカン砲、両腰の銃、カオスフレア、スリービクトライズの複合攻撃を放った。

皆の放った飛び道具は、全弾リリスモンの倒れているだろう場所に着弾した。普通ならばどんな存在であっても肉片一つ残らない、容赦ない殲滅砲撃だったが、肝心のリリスモンは立ち上がった。そして、

「傷?... 私の顔に傷を?...」

自身の顔に傷が付いた事を知ったリリスモンは、

「皆殺しい!!!!!!!!!!」

と叫んで、途轍もない殺気を放った。そして、足は両生類、体は昆虫、顔は獣の化け物へと変身した。特徴的なのは目と口で、目は顔中にびっしりと付いており、口は顔全体と同じくらい巨大だった。

「えええー！！！！」

「大きくなっちゃった?!?!」

「ってゆうか、姿自体変わってない。」

機動六課の面々は、突然のリリースモンの変化に驚いた。

「なるほど、あの時アイツも復活して、その時にあの姿になる事が出来るようになったのか。」

ベルゼブモンは冷静に相手を観察している。

「っていうか、何か生ゴミみたいな二オイが充満してないか。」

ピノッキモンRMは特徴的な長い鼻をつまみながら言った。因みにこの時、機動六課の隊舎の周囲二キロの範囲で、物を食べたり飲んだりした多くの人間が腹痛を訴えたとかないとか。

「生ゴミのような二オイはある意味摂取物に反応する猛毒ですね。」

普通に呼吸で吸う分には問題ありません。」

ディアナモンDSは、大きく息をしながら魔獣リリースモンの生ゴミ臭について分析した。

「っていうより、早くやつをなんとかしないと、六課の隊舎はおろか、クラナガン一体がメチャクチャになるぞ!!」

シャウトモン×4Bの一言で、クロスハート、機動六課の面々は再び攻撃の態勢に入った。

一方、肝心のリリースモンは、

「あらやだ、私ったらまたいつの間にか爆発してた?でもまあいいか、厄介な敵を始末できる事だし。」

と、魔獣化した肉体の中で考えていた。

そして、再び相手が自分に攻撃を加えようとしている所を見ると、
「ふうん、この姿になった私と戦おうというの？」

と考えて口を開いた。

機動六課、クロスハートの面々が再び先ほどの攻撃と同じ攻撃を放とうとした時である。魔獣リリスモンが口を開き、そこから黒い煙のような物が大量に出てきた。

「ぐえええ、臭え！！」

流れてきた気体のあまりの異臭に、皆は一樣に鼻をつまみ、拳句の果てには二オイが目染みて涙を流すものでも現れた。

「かすかに腐卵臭がしますから、恐らく硫黄の成分を含む気体かと。」

今にも意識が飛びそうになる悪臭の中で、ディアナモンは必至に分析を行った。

「そんな事より、これをなんとかしないと！！」

フェイトは息苦しそうにディアナモンに言った。

その時、

「硫黄の成分があるなら燃えるよね。」

フェイト、なのはは知らないが、他のメンバーが良く知る声が響いてきた。

「メガデス！！」

次に声が聞こえた時、機動六課勢のいた場所に巨大な爆風が発生した。爆風が収まってから、奇跡的に無事だった皆が空を見ると、黒を基調とした体に赤い翼をもつ巨大な竜「インペリアルドラモン」がいた。

「っておい！！あのガスを燃やすなら最初に何か言え！！！！」

ヴィータが空に向けて叫んだ時、インペリアルドラモンの背中から二つの影が降りてきた。

一つは、黒い甲冑のような装備を身に着け、両手に剣を携えた武人のような姿の竜。二つ目は、その竜の背中を持つている、全身を青い鎧で固め、背中に金色の翼を十枚持つ天使のような姿をしていた。二人が地上に降りると、真っ先にタイキの元に行き、

「君が工藤タイキ殿だね。」

と、青い鎧を身に着けた天使が言った。

「私の名はセラフィモン、そして彼はガイオウモンだ。訳があつて理由は語れないが、君たちに加勢しよう。」

「うおおおお！！ぞんぶんに暴れてやるぜ！！！！」

セラフィモンの言葉に続いて、剣を振り上げながらガイオウモンは叫んだ。

「んな！前は敵として出てきた奴の仲間をこの場だけ信じろって言うのかよ！」

彼らの言葉に、ヴィータは敵意を丸出しにして言った。それに対し、二人は静かに頷いただけだった。

「分かった、よろしく頼む。」

タイキは少し考えたが、二人に言った。

「っておい！！」

ヴィータはタイキの判断に面食らったが、

「そりゃ確かに、今は足に手は代えられない状態だけど。」
と、言った。

（いや、それを言うなら、背に腹は代えられない、だろ）

今この場にいる皆、クロスハートや機動六課の面々はもちろん、リスモンやセラフィモン達もこう思った。

「！！ともかく、奴に対抗するため、まずシャウトモンを×4の状態にして、私たちとメデューサモン、ディアナモンをデジクロスさせてくれ。」

セラフィモンに気を取り直して作戦の説明を受けたので、

「クロスオープン！シャウトモン×4B！！」

言われた通り、シャウトモン×4Bを×4にして。

「シャウトモン×4、メデューサモンPN、ディアナモンDS、セラフィモン、ガイオウモン、デジクロス！！」

と叫んだ。

クロスローダの光の中から現れたのは、シャウトモン×5の翼の無いボディに純白の白い翼が六枚装備され、手にはガイオウモンの剣を取り込んだ形状に変化したスターソードを持った合成型デジモンが現れた。

ジャッジメントモード

「シャウトモン×5JM！！」

シャウトモン×5JMは飛び立つと、魔獣リリスモンに向かっていった。

「ふん、何がデジクロスしようと無駄だよ！！ダストプロミネンス！！」

魔獣リリスモンは、迎撃のためにとても臭い炎を吐き出した。しかし、

「エクセリオンバスター！！」

「バーストショット！！」

「ギガデストロイヤー！！」

なのは、ピノッキモンRM、メタルグレイモンの攻撃で阻止された。行くぜ、アロー・オブ・セブンズフィール！！」

至近距離でシャウトモン×5JMは、スターソードを弓の形状に変化させ、特殊な形状の矢を七本発射した。

飛んで行った矢は全発リリスモンに命中し、当たった個所が氷始めたり燃え始めたり、乾燥し始めたりした。

「なるほど、七つの星の特徴的な環境を命中した時に発生させる矢か。」

インペリアルドラモンの背中の上にいる、竜のマスクを被った少年はこう分析した。見ている間にも、どんどん戦況は変化していった。

「これでとどめだ！ガイアリアクター・デッドエンド！！」

シャウトモン×5JMは、天まで届くんじゃないかと思えるほどの巨大な炎を発生させた剣を振り上げ、リリスモンの体を真つ二つに斬った。

「くっ！ま、まさか！！」

リリスモンは思いもしなかった結果に驚き、何故だあ！！、と叫びながら消えていった。

「うーん、やはり素晴らしい。」

ミッドチルダのとある場所にて、リリスモンのやられる場面を見ながら男は言った。

「でも勿体ないですねえ。結構強い戦力だったんですが。」

隣で同じようにモニタを眺めながら、白いコートを羽織った女が言った。

「あのまま”彼ら”を介入させずに済ませば、厄介な連中を一網打尽にできたのに。」

しかし男は、

「そうはいかない、彼らはこれから始める劇の大事な役者だからね。」

と、モニタを眺めながら言った。

「はあ、なんとか撃退できたな。」

セラフィモン、ガイオウモンがインペリアルドラモンと一緒に去っていくところを見届けながらタイキは言った。

「またあんな奴が攻めてきたらどうなることか。」

エリオもフラフラの状態であった。

「でもそれより気になるのが、あいつだよ。」

ドルルモンはこう言って、ある方向を見た。そこには、先ほどからずっと気を失ったままの状態のティアナが言った。

第七話 リリスモンVS機動六課& a m p・クロスハート（後書き）

カットマン

「カットマンと！」

モニタモンズ

「モニタモンズの！」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはベルゼブモン。ベルゼブモンはベレンヘーナという銃を装備している魔王型デジモン、必殺技は相手の願いをかなえる代償に相手の自由を奪う「ダークネスクロウ」神速とも言われるスピードでベレンヘーナを撃つ「デス・ザ・キャノン」だ。」

モニタモンA

「多くを語らず誰にも群れない孤高のデジモンですな。」

モニタモンB

「友達はいるのかな。」

カットマン

「まあ、友達はいなくても、いつでも動ける部下はいるんじゃないか。仮にも魔”王”なんだし。」

モニタモンC

「今度調べてみよう。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ひたすらに強くなりたいと望むティアナ。その姿にかつての自分や、その後の好敵手の影を重ねたなのは、タイキ、ドルルモンは、ティアナに自分の経験を語って聞かせる。

次回「強さとは、仲間とは」

第八話 強さとは、仲間とは

ティアナが目覚めたのは、リリスモンによる機動六課襲撃からしばらく立ってからだった。

「あ、起きたっキュ。」

ティアナの傍にいたキュートモンは、シャルを連れて戻ってきた。「キュートモンの治療術はとても優秀だから体にダメージは無いと思うけど、痛いところとかはある？」

シャルはティアナに着替えを渡しながら言った。

ティアナは着替えを受け取った後、ふと時計を見て驚いた。午後八時をとくにこえているのだ。外を見ると、日は落ちて暗くなっている。

「きつと疲れがたまってたんだっキュ、電源を切ったみたいに静かに寝てたっキュ。」

キュートモンは、的確とも微妙ともいえる比喻を言った。

一方、かつてデジタルワールドで行っていた死闘当然の激しい戦いを終えたタイキは、隊舎の屋上で空を見ていた。

「浮かない顔ですね。そんなに心配な事でも？」

すると、メデューサモンが話しかけてきた。

「ああメデューサモン。リリスモンについて考えていたんだ。」

タイキはこう答え、

「今回はリリスモンだったし、途中で援軍が来たからよかったけど。もしこれがタクティモンやダークナイトモン、デスジェネラルのよくな実力者だったらどうなっていたことか。」

と言った。つまりは、リリスモンが蘇り、こうして自分たちを襲撃

したとなると、自分たちがかつて相手した実力派デジモン達と、再び干戈をまじえる事になるのだらうと。この事を危惧しているのだ。「大丈夫ですよ。そんな奴らを相手にしてきて、結局最後は私たちが勝つてるではありませんか。一度勝ったのならまた勝てます。」メデューサモンは先ほどの戦いの疲れを感じさせない元気な口調で言った。その後、

「でも、今最も気になるのはそれじゃ無いんでしょう。」

口調を変えてタイキに言った。

「ああ、ティアナの事なんだ。なんだか似てるんだ、お前の前の主人に。」

タイキがメデューサモンにこう言った途端。隊舎のあちこちに警報が鳴り響いた。

「一体なにがあったんだ。」

「困りましたね、みんな先ほど決死の死闘を繰り広げたというのに。」

しばらくすると、ヴァイスが駆け足で屋上にやってきた。タイキが何かあったのかと訊ねると、

「ここの近くの海の上で何十機かのガジェットが現れたんすよ。まあここに居ればいずれみんなやって来ますよ。」

ヴァイスはいそいそとヘリコプターに乗り込みながら言った。

しばらくして、なのは達隊長陣とスバル達フォワード隊もやって来た。新人たちの中にはティアナもいた。

「とりあえず今回は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長で出勤するから。みんなはシグナム副隊長と待機していて。」

部隊長との作戦相談で決まった事を簡潔に伝えたなのは、ティアナを見ると、

「今日はティアナは出勤から外れておこうか？」

と言った。

「そうだな、あの喧噪の中で今の今まで眠り続けられたんだ。今日は万全じゃないだろ。」

ヴィータは、昼間のリリスモンとの激闘の最中、ティアナはずっと起きることが無かった事を思い出して言った。

一方のティアナは、握っていた拳をワナワナ震わせながら。

「言う事聞かないうえに、簡単に敵に操られるような奴は、使えな
いって事ですか。」

と言った。

「自分で言いながら分からない？ まったくその通りだよ。」

なのはがこう言うと、

「訓練はちゃんと受けてますし、現場の命令だってちゃんと聞いて
ます！！それでも強くなる努力はしやいけないんですか！！」

ティアナはなのはに言った。この様子を見ているメデューサモンに
しては、どちらかと言えば不愉快な後継だった。

（まったくあいつと同じだ）

こう思った瞬間、メデューサモンはティアナの前に出て、彼女の頬
を思いつきり引つ叩いていた。普通の人間が行ったのなら、普通に
驚く程度ですんだ一撃だったが、デジモンの力で叩いた為、ティア
ナの体は遠くのフェンスの近くまで飛んで行った。そして無意識の
うちに、

「子供かあんたは！！少し自分の思い通りにならない程度でギャー
ギャー騒ぎやがって！！そんなに気に入らないきゃ出ていきなさい
よー！！」

と、ティアナを怒鳴りつけていた。

「……………」

初めて見たメデューサモンの本気の怒声に、機動六課の面々は勿論
の事、何よりクロスハートの面々が驚いた。
しかし、そうしていても仕方ないので。

「ティアナ、何か塞ぎ込んでるみたいだけど、戻ったらゆっくり話そう！」

三人の隊長は出勤することにした。なのはは必至にティアナに伝えようとしていたが、

「早く行こうぜ、メデューサモンに怒鳴られるぞ！」

ヴィータに引つ張られてしぶしぶ現場に向かっていった。

その様子を見届けてから、

「……まあ、なんだ、とりあえずロビーに戻るぞ。」

気を取り直したようにシグナムが皆に言った。

「それよりティアナは……無事みたいだな。」

ティアナのふっ飛ばされた方向を見て、ドルルモンは言った。

「まったく、あの子は”アイツ”より少しは利口だと思ったけど。」

メデューサモンがこう言うと、

「メデューサモン、確かに命令を聞くのは大事だし勝手な行動もよくない事を分かってる。でも、強くなりたいならそれ相応の努力をしてもいいと思います……！」

スバルがメデューサモンにこう言った。

「そうね、あなたのいう事に間違えは無い。でも断言してあげる。

あの子、今のままじゃどう努力したって強くはならない。」

と、メデューサモンは言い放った。

「ティアナには強くなる要素が欠けている。っていう事だろ。」

メデューサモンにタイキが言った。そして、参考にしてもらうため、かつての自分のライバルについて話した。

青沼キリハ、彼はデジタルワールドに名を轟かせた通称「青の軍」ブルーフレアのジェネラルである。グレイモンを始めとする強力な竜型デジモンを数多く揃え、その力はタイキ達「クロスハート」は勿論、バグラ軍にも匹敵すると言われた勇壮な軍を率いていた。

ある日、キャニオンランドと呼ばれる場所をバグラ軍の魔の手から解放しようとした時の事である。あと一歩の所まで敵のボスを追い

詰めたキリハだったが、敵の策略により敵に捕まり、その後共に戦っていたタイキ達と離反し彼らに敵意を示した。

しかし、そんな中での仲間の説得、中でも「デッカードラモン」の決死の説得により、本当に強い者は強い仲間を持つ、という事実に気づくことが出来たことを。

「それじゃあ、本当に強い奴が強い仲間を持つ理由はわかる？」

タイキが話し終えたタイミングを見計らって、メデューサモンは皆に訊いた。声色も普段通りに戻っている。

「……………」

皆は考え込んでいた。

「正解はね、言葉通りの意味で強い者は存在しないからよ。」
メデューサモンは皆に言った。

「たとえどんなに強力な戦士でも、必ず何か弱点があるものなの。その弱点を補える者がいることで初めて文字通り強力な戦士になれるの。本当に必要なのは強力な力ではなく、皆と協力すること。」

それを聞きながらシグナムは思った。何の共通点の無い烏合の衆と言っても過言ではないタイキ達が精強な軍として戦える理由はそこにあったのかと、

一方、なのは、フェイト、ヴィータがガジェットと交戦している海上のすぐ近くには、前にホテル・アグスタにやって来た黒いローブの少女、ルーテシアがいた。

「ごきげんよう、ルーテシア。」

するとモニタが開いて、ホテル・アグスタの時にもルーテシアに話を持ってきた男の顔が映し出された。

「ごきげんよう、ドクター。向ここの海でドクターの玩具が飛んでるけど何かあったの？」

と、ルーテシアに訊ねられると、

「残念ながら今日はレリックは関係ないんだ。これから花火が見れることになるからね。」

ドクターと呼ばれた男はこう答えた。そして、

「そうだ、近くに”彼”がいたら、今後は勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれないか。」

と、ルーテシアに頼んだ。

「うん、いいよドクター。」

ルーテシアは二つ返事で了承し、モニタを閉じた。

「なにやら海が騒がしいけど、何かあったの。」

すると、ルーテシアの背後に龍を模ったマスクを被った少年が現れた。普通なら不審者扱いされるが、ルーテシアは彼の事を知っているらしく。

「ドクターが、勝手な行動は極力慎んでくれ、と叱っておいてくれたって。」

と言った。

「そうなんだ、それじゃあ甘んじて叱られようかな。」

少年はそう言いながらルーテシアの立っている防波堤の上に腰かけた。

一方、機動六課の隊舎では、ティアナは海を眺めながら考えていた。結局私は兄の汚名を雪いで何をしたいのか、と、

「どうした考え事か？」

ドルルモンが話しかけてきた。

「うん、兄さんの汚名を雪いだ後何をしようかな、って。」

ティアナはこう言うと、

「そういえば、ドルルモンは何をきっかけにタイキ達の仲間になったの？」

しばらく前から気になっていた事を訊いてみた。以前も聞いたがはいまいにしか答えてくれなかったのだ。

「そうだな、あれは……」

ドルルモンは昔を思い出しながら語り始めた、

かつて自分は、先祖代々戦士の一族の元に生を受けた。そこで、常日頃から技を磨き、体を鍛えながら過ごしていた。その時、いつもこう考えた、

なんで自分たちは強くなるんだろう、と、

ある時、里を飛び出した彼は、当時デジタルワールドに覇を唱えようとしていたバグラ軍に入り、所属している三元士の中でも最強と謳われた「タクティモン」の部隊に入った。

そこで彼は一族の元で培った技を使って様々な戦場で大活躍し、あつという間にタクティモンの片腕とまで言われるようになり、「死神の風」の名で恐れられるようになった。

しかしある戦場で、彼は若い兵士で構成された部隊の指揮をして戦っていた時、突然タクティモンに本陣まで呼び出され、本陣についた途端、40体ものタンクモンが一斉に戦場に対して砲撃を開始し、自分の指揮していた部隊もろとも敵の主力部隊を殲滅した。

作戦的には何も間違えは無かったはずなのだが、なぜか彼には認められない結果になった。

そして後日、違う戦場で同じように犠牲になることになった部隊を独断で脱出させ、次いで自分も行方をくらました。

その後、親を探して旅をしていたキュートモンと出会い、彼と一緒に行動しているうちにタイキ達と出会ったのだ。

「實際一族の連中は分かっていたのさ。何かを犠牲にして得た強さは、敵を倒せても何かを守ることはできないと。滑稽な話だろ、俺は誇らしげに戦いながら、結局は戦うごとに一族の誇りに泥を塗っていたんだ。」

ドルルモンは、自分の思い出話を聞いているティアナに、

「なのはが戻ってきたらしっかり話をしておくんだ。あいつの思いを聞いてみる。」

と言ってその場を後にした。

しばらくして、出勤より戻ってきたなのはが現れた。

「あ、なのはさん。」

ティアナが気づくと同時に、なのはは彼女の横に座った。

「浮かない顔だけど、私がない間にすっかり絞られた？」

と、なのはに訊かれたティアナは、

「はい、みんないろいろな経験を経て強くなっていったんだと。」

と、答えた。

「そう、じゃあ私の話も聞いてみる？」

なのははこう言って、かつての自分について語り始めた。

かつての自分は、魔法を知らないのは勿論の事、そもそも戦う事自体ありえない普通の子供だった。それでも、ある時助けたフェレットと、自分が普通より魔力が強かった、それがきっかけで魔法と出会い、プレシア事件、闇の書事件と、多くの実戦を繰り返した。これまでにある時、仲間たちと共にアンノウンの対応に出動した際、これまでの苦勞がたたり一瞬の判断ミスで大怪我をした。一時は魔道士として活動するのはおろか、普通の人間として生活することもできなく

なると言われたが、無茶なりハビリで今の状態まで回復し、こうして現役として活動している事を。

「私の場合、一時”死にぞこない”って言われるくらいしぶとかったから良かったけど、みんなが私と同じようにできる訳じゃないでしょう。みんなの長所を殺さずどんな状況にも対応できるようにしたかったんだけど。私の教導地味でしょう。まるで進展があるようにじつれたかったんだよね。」

一通り話したなのは、最後にティアナにこう言った。

「明日くらいからティアナが執務官になれるように、個人戦のやり方も教えてあげるから。」

この後、ティアナが号泣する等、少し問題はあったが機動六課の面々はより強い繋がりを持つようになった。

しかし、この時は誰も知らなかった。これから第一世界ミッドチルダはおろか、次元世界すべてが危機に陥る一大事件が起ころうとしていた事を。

第八話 強さとは、仲間とは（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!!」

カットマン

「今回のテーマは、この小説のチームクロスハートオリジナル構成員ディアナモン。因みにイメージCDVは、魔法少女リリカルなのはシリーズでのフェイト役で有名な水樹奈々さんだ。」

モニタモンA

「ディアナモンは、ニンテンドーDS専用ゲーム「デジモンストーリー・ムーンライト」で初登場した神人型デジモン。得意技は背中 of 突起物を矢に変えて飛ばす「アロー・オブ・アルテミス」両足の「グッドナイトシスターズ」から月の光を放ち、浴びた相手を眠らせる「グッドナイトムーン」相手に幻覚を見せ、敵と判断すると即時斬り伏せる「クレセントハーケン」ですな。」

モニタモンB

「光と影を司る月のように、優しくも厳しい、美しくも恐ろしいデジモンですな。」

モニタモンC

「しかも絶対零度の中でも行動できますな。」

カットマン

「因みに、普段は仮面で顔を隠しているけど、素顔は輝く銀髪と美麗な顔立ちの美人らしいぞ。」

モニタモンス

「重要なようでどうでもいいですな。」

全員

「それじゃあまたね!!」

次回予告

ある日、機動六課の新人たちに一日休みが言い渡された。タイキ達も同様で、スポーツチームの助っ人としてミッドを回ることにした。そんな中で事件の歯車が動き出す。そして、あのキャラクターが特別出演

次回「機動六課のとある休日、前編」

第九話 機動六課のとある休日、前偏

朝も早い時間ではあるが、機動六課隊舎の演習場は喧噪で包まれていた。なのは達教官組が、スバル達新人組を鍛えているのだ。

最後の訓練が終わってから、

「さて、みんなの今の実力だけど。二人はどう思う？」

新人四人の前で、なのははフェイトとヴィータに訊いた。

「私は合格だと思うな。」

フェイトは即答し、

「まあ、あれだけやってるんだ。これくらいは出来てもらわねえと。」

少し考えてからヴィータも答えた、

新人四人には何のことかよく分からない、

「これからはみんなのデヴァイスのリミッターを一つ外して、もっと上の訓練をしようと思うんだ。」

と、なのはが皆に告げ、

「とりあえず、次の訓練は明日からな。」

と、ヴィータが言った。

「え？明日からって？」

新人四人が訊くと、

「最近は毎日訓練漬けで、ましてこの前はリリスモンに襲撃されて大騒ぎだったでしょう。だから隊長たちと相談して、今日一日はお休みにしようって事になったの。」

と、フェイトが説明し、

「だからみんなは今日一日、町に出てくるといいよ。」
と告げた。

新人たちは皆大喜びである。それもそうである、どんなにその競技や分野の練習をするのが好きな人でも、休みを喜ばない者はいない。
「所でさ、タイキ知らねえ？」

突然、ヴィータがその場にいる皆に訊いた。

「今日だけじゃなくて、この間もいなかった。何かあったのか？」
タイキは今日ばかりではなく、以前にも訓練にいなかった事があるのだ。

「あ、ええと、出勤中です。」

スバルは言いにくそうに言った。

「出勤中って、事件は何も起きていないのに。」

と、フェイトが言うと、

「ああ、事件じゃなくて、スポーツの助っ人です。」

と、ティアナが付け足した。

そして、そのタイキがどこで何をしていたかと言うと、

ミッドチルダの首都、クラナガンにある中規模な運動場。ここでは、腕と足にサポーターを付け、ヘルメットを被った選手が、楕円型のボールを小脇に抱え走り回っている。いわゆる「ラグビー」が行われているのだ。

その中でも、特に助っ人として参加しているタイキの活躍は目覚ましかった。

「おい！七番に三人つける！奴を止めれば流れは変わる！！」

タイキのチームの相手チーム選手の一人が叫んだ。タイキは七番の背番号を付けて試合に出ており、今まさにボールを小脇に抱えゴールの近くまで来ているのだ。

タイキは、自分が囲まれる直前に、

「ルーク！頼むぞ！！」

と言って、同じチームの選手のルーク少年にボールを渡した。

「よし！ナイス！！」

ボールを受け取ったルークは、そのままゴールに突っ込みトライした。これでチームに点が入り、その瞬間、

「試合終了！！」

ホイッスルの音と共に、審判の声がグラウンドに響き渡り、タイキ達のチームの勝利が決まった。

「ありがとうタイキ、あのタイミングで俺にパスしてくれて。」

最後のトライを決めたルークは、涙ながらに礼を言った。

「ルークがいつもトライの練習してること知ってたから。」

タイキはルークにこう言った。

「なあ、せっかくだし正式にうちのチームに入らないか？」

喜びの中で、選手の一人がタイキに訊いた。

「タイキ、マジで才能あるよ。試合中ずつと走り回れる持久力はさることながら、あんなに相手に囲まれて周りが見えてるなんて。」

他の選手も、この試合でのタイキのプレイを振り返り、それを称賛しながら言った。

「悪い、その話はまた今度な。」

しかしタイキは、即答ともいえるタイミングで答えを出した。

選手が、なんで、と訊いている中で、

「彼はこれからバレー部の助っ人に行くんですよ。」

美の神、芸術の神、そして造形の神が一堂に会し、何日もの試行錯誤を繰り返して至った結論のように、美麗な容姿の女性が言った。

髪の色は銀なのだが、老けた感じはまるでなく、大人びた感じを醸し出している。男も女も見とれるようなこの美女は、肩からスポーツバッグを提げているのでタイキの助手か何かなのだろう。

「はい私特性のエネルギー飲料。おにぎりも作っておきましたから向かう途中で食べて下さい。」

すぐさま次の会場へ向けて走り出したタイキに、彼女は水筒を渡し、会場への道順を説明したり、次の試合で使うユニフォームを渡したりと甲斐甲斐しく働いている。

ちなみに彼女は、戦闘用の装備をはずし現代風の服装をしたディアナモンであり、特に謎ではない。

「魔法の技術の進歩と進化はすばらしいものである。しかし、それゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とはくらべものにならない程危険度をましている。」

演台では厳つい顔をした、いかにも武闘派と言える男が演説を行っている。その様子を、放送されているニュース番組の中で見ているルーチェモンは、

「何なんですか？このシャウトモンに引けを取らない暑苦しい演説をするおじさんは？」

新鮮な野菜がたっぷり入った鱈子スパゲッティを口に運びながら、隣のテーブルについているなのは達に訊いた。ちなみに彼のテーブルには、ワイズモン、ドンドコモン、チビカメモン、ジジモン、スパードモンが付いている。

「ああ、時空管理局地上本部総司令のレジアス・ゲイズ中将だよ。」と、フェイトが説明すると、

「このおっさん、まだこんな事言ってるよ。」

「レジアス中将は昔から武闘派だからな。」

演説を聞いたヴィータは呆れ、シグナムはルーチェモン達に補足説明をした。

「俗に言う”頑固者”カメ？」

チビカメモンが同じ席についている面々に訊くと、

「それはともかく、隅の方の席にいる三人は何者ぞい。」

ジジモンが自分の杖で、レジアスの隣にいる三人の老人をさした。

「右から、ミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役や。管理局

を創設以来支え続けている人なんよ。」

はやてがジジモンに説明した、

「これがいわゆる”大御所”カメ？」

再びチビカメモンは同じ席にいる面々に訊ねた、

「……………」

ワイズモンは画面を見ながら考え込んでいる。フードで顔は隠れているので表情はうかがえないが、きっと難しい顔をしているのだろう。

「どうしたの？ワイズモン？」

と、スパードモンが訊くと、

「いや、あの男の事がとても気になるんだ。」

と、ワイズモンは答えた。

「怪しいとかそんな感じですか？」

ルーチェモンが訊くと、

「そんな感じではないんだ。ただ我々はあの男に振り回されそうで、

」

と、ワイズモンは言った。すると、

「振り回されそうなんやなくて、実際に振り回されるで。」

と、はやてに言われた。はやてが言うには、レジアスは自分たち機動六課を目の敵にしているのだという。

「なんとしてもタイキ君の事が公になりすぎないようにしないと。それがばれたら大目玉になるからな。」

はやては最後にこう言った、

そして、スバルとティアナが町を回って買い食いをしたり。エリオ

とキヤロが海辺の道を散歩している時に、タイキが何をしていたかと言うと、

クラナガンにある中規模な体育館にて、タイキはバレーの試合に参加していた。

高くジャンプし相手のボールを止め、トスでボールを高く上げ相手のコートへボールを入れようとする。そのうちにタイキの放ったスマッシュが相手のコートに入り、その瞬間試合終了のホイッスルが鳴り響いてタイキのチームの勝利が決まった。

試合終了後、タイキ達は近くの河原でぶっ倒れていた。午前中だけで二試合を一度にこなしたので、当然と言えば当然である。

「よし、二つとも勝てた。」

「はあ、ラグビーもバレーも初心者なのに、一気に二試合助っ人なんて普通ならやりませんよ。」

ぶっ倒れるタイキに、ディアナモンが言った。タイキはこの世界にきてからも、時折元の世界にいた時と同じようにスポーツの助っ人を行っている。そしてここではディアナモンが、かつての陽ノ元アカリのように彼のマネジメントをしているのだ。

「でもさ、ラグビー部のルークは今度違う次元世界に引越すから今回がこのチームでの最後の試合だったんだ。バレー部のケビンも折角仕事で忙しい両親が見に来てくれる試合だったのに、メンバーのけがで人数が足りなくなっちゃって。」

そして彼は、涙ながらに頼みに来た二人の姿を思い出しながら言った。

「だから、ほつとけなくて。」

「アカリさんの苦勞が良く分かりましたよ。いつもこれでは我々の体力が持ちませんよ。」

タイキにディアナモンはこう言って、

「この後は何もありませんし、先ほど今日一日休みだという連絡が入りました。貰った給金使ってみんなで何か食べに行きませんか？」と、言った。ちなみにみんなとは、チームクロスハートのメンバー

の事である。

なので機動六課隊舎に戻り、皆を連れて町に出るため、タイキが立ち上がるうとすると、

「いた！ようやく見つけました！工藤タイキ！！」

薄緑色の髪、両目の虹彩の色が違う少女に声をかけられた。

「えっと？誰だっけ？どっかで見たような？」

タイキは突然の事に驚き、自分の記憶を必至に整理した。

「ほら、この間でなくてもいいと言われたストライクアーツの個人組手の大会でタイキに負けた娘。」

ディアナモンは少しだけ覚えていたらしく、タイキにこう言った。ちなみに、以前怪我のため出られなくなった選手の変わりにストライクアーツの大会で、団体組手部門だけでなく、本人からでなくともいいと言われていた個人組手部門にも律儀に出場し、決勝戦で彼女に勝利したのだ。

「名前なんでしたっけ？」

とディアナモンに訊かれたタイキは必至に記憶の中を搜索し、

「確か：パインアップルとかなんとか…」

苦し紛れに浮かんだ単語を言った。そしたら、

「アインハルトです！アインハルト・ストラトス！！」

少女は自分の名を名乗り、

「工藤タイキ、あなたに仕合を申し込みます！！」

と、単刀直入に言った。

「これまで戦った相手の中で、唯一あなたが霸王流を打ち負かしたんです。今こそあの時の雪辱を……」

「いや、あれはまぐれで。普通にやって俺が君に勝てる訳ないって。」

「意気込みに燃えるアインハルトにタイキがこう言つと、」

「まぐれでもなんでも、あの時私に必殺の一撃を打ち込んだあなたの目は真正正銘のグラップラーでした。」

「あのですね、タイキは今日午前の間だけで二試合をこなしてるん

です。たかが格闘技やってる暇はないんです。」

アインハルトとディアナモンの間で言い合いが始まってしまった。

「たかがとはなんですか？これは格闘家の誇りとプライドをかけた

……」

「何が誇りとプライドですか？っていうか同じです二つとも。」

その陰でタイキは、

（クラナ川の流れは今日も穏やかだ）

と思っていた。

するとそこへ、エリオとキャロから連絡が入った。路地裏で小さな女の子がレリックのケースを持って倒れているとの事だ。

「ディアナモン！」

タイキがディアナモンに呼びかけると、

「はい！！」

ディアナモンは素早く荷物を取り、現場へ向けて走って行った。

「え？あの、ちょっと？！」

いきなりの事にアインハルトが驚いているうちに、

「ごめん、また今度な。」

タイキはこう言い残して去って行った。

「あ、待って下さい、話はまだ……」

しかし、アインハルトの声は彼に届かなかった。

「もう。」

仕方がないのでアインハルトはいったん家に帰ることにした。この時はまだ想像もしていなかっただろう、これから二人である事件に立ち向かう事を。

第九話 機動六課のとある休日、前編（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー!!」

カットマン

「さて、今回のテーマはデジモンだ。」

モニタモンA

「デジモンはエンシエント型デジモン。デジタルワールドが創生された時から存在するといわれるもっとも古いデジモンの一体ですな。」

「

モニタモンB

「とても物知りで、なおかつ大樹のように老練な力を持つデジモンでもありますな。」

モニタモンC

「見た目はよぼよぼだけどね。」

カットマン

「デジモンはクロスウォーズを始めとしていろいろな作品に登場しているけど、ただ一つ共通しているのは長老として主人公たちの前

に現れる事だな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

一人の少女を保護した機動六課の面々は、レリックを求めて地下へと赴く。そして、レリックを探す謎の黒い少女と出会う。

次回「機動六課のとある休日、中編」

五話更新記念の回、その二（前書き）

二回目の五話更新記念の回です。

あとがきが本文より長くなってしまった。

五話更新記念の回、その二

ここは、とある管理外世界のとある場所

カタカタカタ

ここでは一人の男がパソコンを使用し文章を打ち込んでいた。彼は言わずと知れた（少しくらいは名が売れただろう）この小説の作者「超人カットマン」である。

超人カットマン

「さて、再び五話更新したぞ。」

という事で彼はいったん一服しようとした、すると、

???

「それならこのまま一気に最終話まですべて更新してはどうだ？」

背後から声が響いた

超人カットマン

「?????」

超人カットマンが振り向くと、背後には全体的に黒い服を着た茶髪の、幼いころの「高町なのは」に似た少女が立っていた。

超人カットマン

「って！お前は星光シュテル・ザ・デストラクターの殲滅者じゃねえか！！」

現れたのは、PSP専用ゲーム「魔法少女リリカルなのはA's
THE BATTLE OF ACES」に登場するキャラクター
の一人「^{シュテル・ザ・デストラクター}星光の殲滅者」だった。

シュテル

「それに私だけではない」

シュテルがこう言うと、幼い頃のフェイトにそっくりだが髪の色が
違う少女、幼いころのはやてにそっくりだが態度がデカそうな少女
が現れた。

はやて似の少女

「デカいのは夢と宝の詰まった女の象徴だけで十分よ。」

この台詞の意味と意義は不明だが、

超人カットマン

^{レヴィ・ザ・スラッシャー}
「今度は、雷刃の襲撃者に閻統べる王かい。」
^{ロード・ディアーチェ}

シュテル

「出てきたものに呆れている場合ではない。第一回目で募集した質
問が一つきているんだ。待たせた分しっかり答えなさい。」

シュテルはこう言って、どこから取り出した葉書を読みだした、

シュテル

「支配者、なる人物からの質問です。第四話に登場したシャウトモ
ン×3GMの使用した技「ブリリアンスダガー」「ブレスオブペル
ーン」がオリジナルな技かどうか聞きたいんだそうだ。」

ロード

「我に黙って支配者を名乗るだと、こやつ。」

レヴィ

「そこ関係ないよ。」

超人カットマン

「とりあえず回答するぞ。元々シャウトモン×3GMは、ニンテンドーDS用ソフト「デジモンストーリー 超クロスウォーズ」のブルード版、データカードダス「デジモンクロスウォーズ 超デジ力対戦」に登場した、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、グレイモン、メールバードラモンがデジクロスした時の姿だ。そして質問にある二つの技は超クロスウォーズの中に登場する技で、それぞれシャウトモン×3GMがLV45でブリリアンスダガー、LV82でブレスオブペルーンを覚えるんだ。」

シュテル

「さて、これで今回のノルマは達成しましたね。」

レヴィ ロード

「早?!?!?!」

超人カットマン

「しょうがないだろ、質問はこの一つだけなんだから。人気ランキングの途中経過をするにも全然票が入ってないし。」

ロード

「おぬしの才能が無いだけであろう。自由に感想をかけるようにしているのにこの体たらくでは。」

超人カットマン

「まあとにかく、今言った通り感想は自由に書けるようになってい
る。一見さんも十見さんも気軽に感想を書いてくれるとありがたい
です。」

とりあえず今回はこれで終わりだ。」

シュテル レヴィ ロード

「早すぎだあ！……！」

史上最短を更新した二回目であった

五話更新記念の回、その二（後書き）

???

「おはらっきー！ナビゲーターの小神あきらですーす！！」

???

「初めまして、白石みのです。」

あきら

「さあ、今回のらっきーチャンネルにはゲストをお呼びしました。超人カットマンさんです。」

「……………」

あきら

「あれれ？カットマンさんが出てきません。」

カットマン

「ちよつとまてえー！」

みのも

「ちよつとカットマンさん。出てくるときはもっと穏やかに。」

カットマン

「知るか！と言うかお前らは何をやっているの？！ここはデジモン紹介のコーナーであって、らっきーチャンネルの場じゃねえ。」

あきら

「今回は特例と言う事で、番組同士を共演させようという事になっ

たんですよ。」

カットマン

「ああ、そうなの。」

みのも

「そういう訳なんです。」

あきら

「そういえば作者さんは、らきすた、のアニメを全話完見たんですよ。」

カットマン

「まあ、一応。」

あきら

「カットマンさんは、あきらの事をどう思います?」

カットマン

「はい?????」

みのも

「ですから、あきら様はカットマンさんに自分の事を聞きたいんですよ。」

カットマン

「そうだな、たった五分くらいの出番であれだけのインパクトを残せるんだから凄いと。」

あきら

「ふうーん、たった五分ねえ。」

カットマン

（あれえ？）

みる

（ヤバイ、あきら様が不機嫌になってる）

みる

「いや、でも一話のメインキャラとして出ても名前を覚えてもらえない地味なキャラもいるんですから。」

カットマン「そうですよ。長々地味にいくなら瞬間的に派手にいきましょう。」

あきら

「そうですね。私目から鱗が落ちました。」

みる

「あきら様、目から鱗が落ちる、ってどういう意味か分かってます？」

カットマン

「分かってなきゃ言わないと思うぞ。」

あきら

「あれれ、もうお別れの時間？今回は超人カットマンさんをゲストにお送りしました。それじゃバイニー。」

カットマン

「バイニー？」

みる

「バイニー。」

幕が下りてから

あきら

「んで、肝心のデジモンの事聞けなかったけど。」

カットマン

「いやいや、あんたが最初に自分についての話をしたからでしょう。」

「

あきら

「あれあれえ、それじゃあ私が悪いって言うのぉ？」

みる

「あきら様、その辺で。」

あきら

「まあいいわ、とりあえずちゃっちゃんと説明して。」

カットマン

（なんかムカつく）

カットマン

「今回のテーマはインペリアルドラモン。インペリアルドラモンは古代デジタルワールドに存在していたと言われる古代竜型デジモン。必殺技は高威力レーザーを発射する「ポジトロンレーザー」暗黒物

質を含む火炎を吐き出す「メガデス」だ。」

あきら

「それだけ？」

みのる

「ええと、力が強すぎるため、環境によっては善の存在にも悪の存在にもなるとあります。」

カットマン

「そして、強すぎる力を完璧にコントロールできる姿があると言われている。」

あきら

「っていうか、なんであんたが参加してるのよ。」

みのる

「ああ、さっきカンペを渡されました。」

カットマンは、この後から何やらドロドロした雰囲気になったので、一目散にこっさり去って行った。

第十話 機動六課のとある休日 中編

エリオとキャロからの連絡をもらったタイキ達は、その足で件の現場へと向かった。そこには、体中傷だらけの幼い少女が倒れていた。「この子が例の……」

タイキが屈んで少女の様子を見ていると、

「傷がひどいっキユ。」

クロスローダーからキュートモンが現れた、

「キズナオール……!」

そして自分の手を緑色に発光させ、触れた場所の傷をふさぎ始めた。「傷は治したけど、疲れがたまってるみたいっキユ。しばらくは起きないっキユ。」

キュートモンはこう言ったが、命に別状は無いと分かっただけ良かったと、その場にいた面々は思った。

その後、少し遅れてきたスバルとティアナ、機動六課隊舎に残り「インペリアルドラモンの爪の欠片」の調査に専念していたデジモン達も合流し、皆で地下へ突入し、少女が地下に置いてきてしまったレリックを探しに行くことにした。

少女は後からやってきた、なのは、フェイト、シャマルに預け、機動六課のフォワード四人と、クロスハートのデジモン達は地下へと赴いた。

「みんな、短い休みは堪能できた? 今からはお仕事モードで行くわよ……!」

ティアナの言葉を受け、一同は張り切って進んでいった。しかし場所が地下道、暗いため足元が危ない、

「チビカメモン、ブルーメラモン、デジクロス……!」

なのでタイキは、クロスローダーよりリロードしたデジモンをデジクロスさせた、

「コウランブ、チビカメモン……!」

クロスローダーの光が収まると、頭のヘルメットと背中の中甲羅が光るようになったチビカメモンが現れた。

そのままチビカメモンを先頭に進んでいったとき、

「タイキ、向こうの角に誰かがいる。」

突然ワイズモンがクロスローダーの中から言った。

「え？」

「まさかお化け？」

皆が緊張状態に包まれる中、件の角から現れたのは、緑色の体をした頭のデカイ妖怪、では無く、

「あ、タイキ殿。」

以前ホテル・アグスタの警備に言った時、召喚魔法を使う魔道士を探しに行ったモニタモン達だった。

「モニタモン、なんでお前達が？」

と、タイキが彼らに訊ねると、

「前に追うように言われた魔道士らしき人物がここに来ているんですな。」

と告げ、

「そしてこれが我々が追っている魔道士ですな。」

自分の頭部を構成しているモニターに、黒い服を着た長い紫色の髪の少女、の映像を映した。

「この子が……」

「んで、こいつの名前は分かるか？」

スバル達が少女の顔を覚えていた中で、シャウトモンが訊いた。

「遠目だったのでよく分かりませんが、同伴していた人物は皆、ルーテシア、と呼んでいたはずですよ。」

「ルーテシアか。」

タイキは彼女を見ながら思った、かつてデジタルワールドで共にバグラ軍と戦った「天野ネネ」の、自分と初めて会ったときの雰囲気と、彼女の雰囲気似ていると。

「それより、ここからは我々に付いてきてほしい。モニタモンの探

査能力はここでは重宝するだろう。」
ワイズモンにこう言われたモニタモン達は、タイキ達についていく事になった。

その後、再び地下を進んでいる時、
「何か来ますな!!」
突然モニタモンが言った。

そして、怪物が暴れているような騒がしい音を響かせながら、怪物
と言うには無理がありすぎる美しい容姿の少女が現れた。

騒がしい音の正体は、彼女が壁を破壊しながら進んできた音である。

「あ、ギン姉!」

スバルが親しい相手に会ったように声をかけた。

「あの、こちらはどなたで?」

初対面のタイキはティアナに訊ねた。

「この人はギンガ・ナカジマ。スバルのお姉さんで、階級も年齢も
ちょうど二つ上なの。」

と、ティアナは答えた。

「それで、彼は?」

ギンガはスバルにタイキの事を訊いた。初対面なので当然である。

「俺は工藤タイキ。」

「俺はシャウトモン。」

「バリスタモン。」

「ドルルモンだ。」

「チビカメモン、カメ。」

「モニタモンですな。」

「ワイズモンだ。」

とりあえずその場にいる面子は全員簡単に挨拶した。

ギンガと合流した面々は、ひときわ広い場所へとやって来た。

「この辺りに大きいエネルギーの反応がありますな。」

辺りを見回したモニタモンは皆にこう告げた、

「となると、レリックはここに。」

ドルルモンがこう言った途端、

「カメー!!!」

チビカメモンが大きくふっ飛ばされ、そのまま気絶した。

「何かいるぞ!!!」

タイキはみなにこう叫び、チビカメモンをクロスローダーにしまい、ブルーメラモンを残してあたりを見回した。

「うわぁ!!!」

今度はエリオがふっ飛ばされた、

「どうやらタイキ、奴は素早く動き回ることに優れた奴のようだ。」
ワイズモンはこう分析した、

（動きが素早いと明るくても捕まえることは難しい、どうすれば）
タイキがこう考えている間にも、謎の襲撃者は次々と皆に襲い掛かっている。

「タイキ、このままじゃやられちゃうぜ!!!」

シャウトモンが叫んでいるのを見たタイキは、

「閃いた!!!」

一つ作戦を思いついた、

「シャウトモン、ドンドコモン、デジクロス!!」

タイキはクロスローダーを掲げて叫んだ。シャウトモンが光に包まれ、クロスローダーから飛び出た光と一つになると、太鼓のような姿をしたシャウトモンが現れた。

「ドンシャウトモン!!」

ドンシャウトモンは両手に持ったバチで自分の頭をリズムにのって叩き始めた。

「エリーゼのためにいゝゝゝ!!」

本人は”エリーゼのために”を演奏しているつもりなのだろうが、彼の演奏はリズムはあれど優雅さの欠片も無い騒がしいものである。そのうちに、タイキ達のいる空間に黒い影が現れ、しまいには停止し黒い昆虫のような生き物が現れた。

「あ、アイツは!!」

クロスローダーの中でディアナモンは声を上げた、

「この前骨董品盗んでいった奴!!」

ホテル・アグスタの警備のさいに、一度立ち会った事があるのだ。

「やっちゃって、ガリユー。」

するとガリユーと呼ばれた生き物の後ろから紫の髪の少女が現れた。彼女はモニタモンの録画した映像と同じ姿をしていた。

「君がルーテシアか？」

思わずタイキはこう訊いた。改めて見た彼女の雰囲気、天野ネネそっくりだった為、いわゆる「ほっとけない」が発動したのだ。

「だから？」

ルーテシアがこう言うと、

「なんで君はレリックを求めるんだ!？」

タイキは次の質問をした、

「関係ない。」

しかしルーテシアはタイキの話に耳を貸そうとしない。

そしてガリユーも、問答無用と言わんばかりに襲い掛かってきた。

それでも、先ほどのドンシャウトモンの演奏のショックが残っているのか、スピードは間違えなく鈍っている。

「姿さえ見ればこちらのもんだ。」

タイキはこう言ってクロスローダーを掲げると、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ディアナモン、デジクロス！」

と叫んだ。

結果シャウトモン×4は一回り小柄になり、体つきも細くなり頭部は竜のような形に変わり、両足にはグッドナイトシスターズが装備され、スターソードはディアナモンの鎌を取り込んだ形状に変わった。

「シャウトモン×4 A！」
アサシン

シャウトモン×4 Aはガリユーを見据えると、鎌のようになったスターソード「スターハーケン」を弓のように使ってガリユーに狙いを定めた。

「ちょ、相手はスピードが速い相手なのに、狙撃しようとしたらよけられる。」

ティアナはシャウトモン×4 Aにこう言ったが、当の本人は落ち着いている。ガリユーの爪がシャウトモン×4 Aを切り裂こうとした時、

「遅いうえにかかったな、罠に。」

と言うと、右手に持っている矢と思われる物を逆手に持ちガリユーを斬りつけた。ガリユー本人はうまく防いだが、衝撃で大きくふっ飛ばされた。

「これで終わりだ！！」

シャウトモン×4 Aは、ガリユーにとどめをさそうと飛び出した。しかし、スターハーケンがガリユーに触れる寸前で、突然発生した大きな炎にふっ飛ばされる事になった。

「ルール、大丈夫か！！」

続けざまに現れた少女がルーテシアに駆け寄った。大きさはリイン

フォース？と同じくらいだが髪は赤く、そもそも炎を操った時点でリインとは別物の融合機であることが分かった。

「アギト。」

ピンチにおいての援軍の到着にも、ルーテシアはほぼ無感情で反応した。

「ルール、レリックはいったん諦めて地上に戻ろう。この状態じゃちょっとやばいし、本局の魔道士もここに向かっている。」

アギトはルーテシアにこう告げて、その場から立ち去ろうとした。しかし、

「そうはいかん！出番が少ない分活躍させてもらおう！！」

ブルーメラモンが二人にめがけて青い炎の塊を投げつけた。

「な！？凍るだろ？！」

「凍ってるのに、すごく熱い。」

二人はブルーメラモンの投げつけた「アイスボム」の影響で足元が凍り付いて動けなくなった。

「ナイスですブルーメラモンさん！！」

「あとはアタシらに任せな！！」

そして上層部から、リインとヴィータが猛スピードで飛んできた。

リインは自身の能力で絶対零度の冷気が発生させ、ルーテシア、アギトの両名を氷漬けにした。

「よし、これで。」

ヴィータが近づいて確認すると、氷の中は何故かもぬけの空だった。その上、氷の一部に隙間のような部分が出来ている。

「逃げやがったか？！」

「おかしいですね？ブルーメラモンさんの氷の拘束は完璧だったはず？」

床にあいている穴を覗き込みながら二人が言っていると、

「ああ、しまった！！」

突然ブルーメラモンが声を上げた、それは、

「俺の氷は熱に強いが冷気に弱い事を忘れてた！！」

ブルーメラモンの体が青いのは元々、適度な酸素を含んだ健康的な炎により体温が普通より高いからなのだ。そのため炎の動きが安定しているのとブルーメラモンの能力が相まって一時的に凍ったようになったのだが、リインの本場の冷気で炎が鎮火してしまい、それで出来たスペースを使ってルーテシアとアギトは逃げたのだ。

「面目ないですう。」

リインは、いかにもがっくりきたと言うポーズを取っている。すると突然、タイキ達のいるスペースが大きく揺れ始めた。

「どうやら地上で人工的に振動を発生させ、ここを潰してしまおうとしているようだ。」

クロスローダーより感じる振動から、何かが地上で何かをしていると判断したワイズモンは皆に向けてこう言った。

「レリック見つけましたー！！」

ちようどのタイミングで、レリックを探しに行っていたスバルとエリオ、キャロも戻ってきた。因みに、灯りはジジモンの杖にフリードが火をつける事でなんとかしました。

「よし、スバル、ギンガ、上に向かってウイングロードを。」

ヴィータはギンガとスバルにこう言った。丁度自分たちがここまで来るのに使用したルートは、若干斜めになっているとはいえ、ほぼ地面と垂直に近いので最短ルートで地上に出られると思ったからだ。だが、ここでタイキが、

「いや、もしかすると地上に出たところで不意打ちに遭う可能性がある。俺に任せてくれ。」

と、言つてクロスローダーを掲げると。

「今から出すデジモンにみんなで掴まってくれ。」

と、この場にいる皆に告げ、声の限り叫んだ、

「リロード！！」

第十話 機動六課のとある休日 中編（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコナ。」

カットマン

「今回のテーマはドンドコモン。ドンドコモンは太鼓の形をした楽器型デジモン。得意技は聞いた者のテンションを上げる「ドンドコ音頭」演奏を邪魔するものを衝撃波で成敗する「乱れ打ちラッシュ」だ。」

モニタモンA

「ドンドコモンの太鼓の音は、聞いた者のテンションを上げる効果がありますから、競技会では盛り上がりますが、間違って喧嘩の場にも現れたら收拾がつかなくなりますな。」

モニタモンB

「頭を叩くわけだけど痛くないのかな。」

カットマン

「そういえば、前回お前らどこにいたんだ？」

モニタモンC

「ルーテシアを追い回してましたな。」

カットマン

「そうなんだ。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

戦いの舞台は地上に移行。新しいデジモンの絆のパワーアップと、メデューサモンのブルーフレア時代の幻のデジクロスが登場する。

次回「機動六課のとある休日、後篇」

第十一話 機動六課のとある休日、後篇

タイキ達が地下で何かを行っていた頃、一足先に地上に出てきたルーテシアはと言うと。傷ついたガリユーを帰し、新たに呼び出した黒いコガネムシ型の巨大な虫を使って即席の地震を起こしていた。この衝撃を利用し地下のタイキ達がいるスペースを潰してしまおうと言うのだ。

黒いコガネムシ「地雷王」も元気に活動している時、ふと地下から振動が発生した。

「???」

ルーテシアが環境探査の魔法で振動の正体を確かめようとしたら、地面から巨大な手が生えてきた。手と言っても、皮膚は緑色で見ただけでも頑丈そうなのが分かり、爪が三本生えていて、両側に突起物が広がっていた。

「うおおおおお!!!!!!」

次の瞬間、緑を基調とした色合いの皮膚を持ち、尾の先に鉄球のような物を付けた巨大なトカゲが飛び出してきた。

「ギガクラック!!」

トカゲは自分の背中に生えている腕を地面に叩きつけて地割れを発生させた。この一発で出てきていた三体の地雷王はバランスを崩した。

「スクラップレスクロー!!」

次に、自分の腕を使って地雷王の一体を掴むと、勢いを付けて別の地雷王の元へ投げつけた。

「地雷王!!」

ルーテシアは、偶然うまく態勢を立て直す事に成功した地雷王の自身の力を与えた。地雷王は角を使って攻撃を繰り返すも、

「メガトンハマークラッシュ!!」

尾についている鉄球の一振りで、逆に地雷王へ攻撃を弾き返した。

突然の事態にルーテシアが動揺していると、

「よくやった、グラウンドラモン！」

グラウンドラモンの後ろ足の裏からタイキ達が現れた。あの地下スペースでグラウンドラモンをリロードした後、グラウンドラモンが地上まで穴を掘り、タイキ達はそれに捕まってきたのだ。

「あいつら、もう出てきやがった！」

ルーテシアの傍にいたアギトが悔しがった時、突然アギトは何処からか発生したバインドに拘束された。ルーテシアも驚いたが、その後すぐに自分も同じように拘束された。

「もう逃がさないよ。」

拘束されたルーテシアの喉元にエリオが槍を突き立て、スバルやティアナが逃げられないように囲い込んだ。ガリユーはすでに帰還しており、地雷王も先ほどグラウンドラモンがボコボコにしたので、事実上二人は掴まった事になる。

機動六課の面々が二人を拘束する光景を、役目の無かったタイキ達は後ろで見えており、

（相も変わらず見事の手並みだ）

と、思った。

一方、現場からさほど遠くない別の場所。ここには二人の少女が立っていた。

「どお、ディエチちゃん。視界は良好？」

髪を二纏めにし、メガネをかけた少女が、隣で大砲のような物を構えている少女に訊いた。

「うん、空気も澄んでて障害物もない。よく見えるよ。」

ディエチと呼ばれた少女は機械を操作しながら淡々と言った。

「まあ問題ないと思いますけど、いざって時のためにちゃんと待機
していて下さい。」

次にモニターを開くと、通信先にいる人間に言った。

「はいはい、分かりましたよ、クワットロ。」

通信相手のメガネ少女に、通信を受けた少年は答えた。

「ところで、ルーテシア殿は捕まったみたいですよ。」

少年は、こうクワットロと呼んだ少女に言った。実際に現場では、
ルーテシアとアギトの二人が管理局員に捕まっていた。

「どうする？ちよっと拙くないか、連中が捕まると。」

少年がこう言うと、

「そうですね。ちよっとお嬢様に知恵を貸しましょう。」

クワットロはこう言うと、

「デイエチちゃんはそのまま”あれ”に狙いを定めていて下さい。」

と、デイエチに告げると、通信を聞かれないように繋げる事ができ
る裏ワザを使ってルーテシアにこう言った。

「お嬢様、今から私のいう事を繰り返してください。」

そして問題の現場では、

「……いいの？」

今まで黙っていたルーテシアが口を開き、皆に対してこう言った。

「大事なヘリをほつといていいの？」

当然これはクワットロがルーテシアに言わせている台詞である。最
後に、

（最後にそのチビにこう言って下さい。あなたはまた、護れない
かもね）

と、告げた。チビと言うのはヴィータの事である。

「あなたはまた、護れないかもね。」

言われるままに、同じ台詞を言った。

「デメエ！それはどういう！？」

ヴィータは頭に血が上ったのか、ルーテシアに掴みかかって行つた。ほかの面々がそれを止めている時、タイキはと言うと、

「ヘリをほっとく？」

周りを見ると、ついさっき救助した少女を乗せ、またシャル達も乗っているヘリが飛んでいるのが見えた。さらに見渡すと、ちょうど同じくらいの高さのビルが目に入った。

（まさか?!?!）

タイキはルーテシアの言葉で分かった、敵はヘリを何らかの方法で攻撃するつもりだと。ヘリに爆弾を仕掛けたとは思えないので、恐らくは飛び道具だろうと推理した時。

「俺をリロードしろ。」

「そしてグレイモンとメールバードラモンと私をデジクロスさせて。」

グレイモンとメデューサモンが言った。

「お前ら、あのデジクロスは二度とやりたくないんじゃないのか？」

と、メールバードラモンが訊いたら。

「今は四の五の言つてられない!!!!」

グレイモンとメデューサモンは二人同時にこう言った。

「分かった、グレイモン、メールバードラモン、メデューサモン、デジクロス!!」

タイキはクロスローダーを掲げ、声の限り叫んだ。その瞬間、タイキが見たビルから一筋の光がヘリめがけて飛んで行つた。

「何い!!!?」

現場の機動六課の面々は驚いた。空でガジェットを相手にしていたのは、フェイトも一応気づく事が出来たが、今から向かつてもほ

ば間に合わないタイミングだった。

やがて光がヘリに到達し、大きな爆発が発生した。この一発でヘリは大破した、皆がそう思った瞬間、無傷のヘリが煙の中から現れた。ヘリの前には、青を基調とした鎧を身に着け、大剣を装備した竜人型のデジモンが盾を構えていた。

「これぞ、マルチグレイモン!!」

メタルグレイモンの火力と機動力に、メデューサモンの身軽さと武術を合わせた「大武人形態」のデジクロス。マルチグレイモンが現れたのだ。

「な、何あれ?」

レーザーを発射したディエチは驚きの声を上げた。しかし、クワツトロは、

「大丈夫よディエチちゃん、こういう場合のために”彼ら”がいるんだから。」

まったく気にしていないのかこう言って、

「キサキさん、お願いします。」

モニタを開いて、通信先の相手に言った。

「了解、リロード!」

モニタからはこんな言葉が返された、

「レーザーを発射した相手はタイキ殿たちのいる場所から八時の方

向ですな。」

ビルの上で行動するディエチ、クワットロの様子を映しているモニタモンはタイキに告げた。

「ヴィータ、今すぐ隊長二人に連絡してくれるか?!」

タイキはヴィータにこう告げた、しかし、

「……………」

ヴィータは難しそうな顔をして考え込んでいる。でも、すぐにタイキに言われたことに気づいたのか、

「分かった!」

と言うと、空の制圧を素早く済ませ、大急ぎでこちらに向かっていくのは、フェイトにモニタモンが中継しているビルの場所を伝えた。

「何かきますな!!」

突然モニタモンが叫んだ。見ると、マルチグレイモンの護るヘリめがけて、赤い羽根の生えた巨大な翼を持つ巨大な鳥と、オウムのような姿だが両手がある鳥型デジモン「パロットモン」が飛んできていた。

「ヘリには羽根一枚付けさせねえ!!」

マルチグレイモンはこう叫ぶと、向かってくる二体のデジモンに向かって飛び出していった。

「あの赤い鳥は「アクイラモン」じゃ、飛ぶスピードも速い強敵じゃぞ。」

クロスローダー内のジジモンがこう告げた時、そのアクイラモンはマルチグレイモンの振り下ろした大剣を足で受け止め、ついでにマルチグレイモンの動きを止めてしまっていた。その隙に手の空いているパロットモンがヘリに向かっていった。

「閃いた!!」

タイキはその中で、一つ対抗策を思いついた、そして、

「ドルルモン、デジタルンス!!」

と、クロスローダーを掲げて叫び、

「ティアナ、クロスミラージュと融合させるぞ。」
と、ティアナに告げた。

すると、引金を引くデジモンのいない状態で「ドルルキャノン」の姿になったドルルモンは、ティアナの持っていた銃と融合し、クロスミラージュはドルルモンの姿を模った大砲のような形に変わった。
「クロスバスター！」

ティアナは上空のパロットモンに狙いを定め、引金を引いた。クロスミラージュから発射されたドリルのようなエネルギー弾は、寸分の狂いもなくパロットモンの翼を打ち抜いた。

「デイバインバスター！！」
続いて駆け付けたのはが、ダメ押しと言わんばかりにパロットモンを砲撃した。

墜落していくパロットモンに、アキラモンが目を取られた時である。

「ハーケンセイバー！！」
同じく駆け付けたフェイトの投げつけた斬撃を足に受け、剣を掴む足の力が弱まった所で、

「ドラモンキラー！！」
マルチグレイモンは思いつきアキラモンを斬りつけた。

「あらあ、ちょっと旗色悪いですね。」

ビルの上から様子を眺めていたクワットロは、唇をかみしめながら言った。なので、次の対策を考えようとした時である。

「雷電閃！！」

「デス・ザ・キャノン！！」

突如上空から巨大な落雷と弾丸が落ちてきた。見ると、二人の上空

から、右腕に巨大な銃を装備し、背中に黒い大きな翼の生えた、目が三つある背の高い男「ベルゼブモン」と、それに掴まって黒い忍装束を着た、顔がテレビのようになったデジモン「ハイビジョンモニタモン」が降りてきた。

「奴らですな！！」

「ああ！！」

ベルゼブモンとハイビジョンモニタモンは、着地するや否や素早い動きで、ベルゼブモンはディエチを、ハイビジョンモニタモンはクワットロを捕まえた。

「観念してもらうぞ！！」

「逃がさないですな！！」

しかし、その後すぐに驚くべき事が起こった。突如現れた高速飛行する何かが、捕まえた二人を連れて行ったのだ。

また、ルーテシアの掴まっていた現場でも、ルーテシアとアギトが消え、尚且つレリックの入れ物が奪われる、という大騒ぎが起っていた。

そして、事件の現場より少し離れた場所では、

「トーレ姉さま、助かりました。」

クワットロが自分をここまで運んだ短髪の女性に言った。

「まったく、キサキがうまくカバーしてくれたから良かったものの、あのまま捕まったらどうなった事か。」

トーレと呼ばれた女は、クワットロにこう言ったが、

「まあまあ、こうしてレリックが調達できたんですから。」

水色の髪の少女がこう言って、持っていた箱を開けた。しかし、中

には何も入ってなかった。

「何も入ってませんね。」

「そんなはずはない、ちゃんと確認したのに。」

仲間たちから、何とも言えない目で見られた少女は、自分の見た映像をもう一回検めて見ることにした。

映像を見てるうちに、トーレが突然、

「レリックはここだ。」

バリスタモンの腹部を指さして言った。

「え、その熱反応は動力部の熱じゃ。」

少女がこう言うと、

「よく見る、こことことと、二つも反応もあるだろう。」

頭と腹部の両方を指さして、トーレは説明した。この手の機械は腹部にはあまり重要なパーツを使わず、人間のように頭に思考を司る部分を入れるものであり、そもそも腹部はスピーカになっているのでそこまでの熱は放出しないと。

そして問題の現場では、ヴィータが本部へ今回の事の報告を行っていた。そんな中、

「タイキ、モウダシテイイ？」

突然バリスタモンがタイキにこう訊いた、

「ああ、そうだな。もう周りに奴らはいないし。」

タイキがこう言うと、バリスタモンの腹部が開き、てっきり持って行かれたと思われていたレリックが出てきた。

「え、なんでレリックがあるんだよ？」

ヴィータがこう訊くと、

「最初はキヤロの帽子の中に隠そうと思ったんですけど。探知されても他の何かと判断されるだろうから、ってバリスタモンの中に入れておいたんです。」

タイキに変わりティアナが説明した。

「でもまあ、みんな無事でよかつ……」

突然、タイキが倒れた。その場にいたみんなは、一部を除いて一様に驚いた。ヴィータは、どこかやられたのか、と大慌てだが、

「やっぱり午前中だけでラグビーとバレーをこなして、すぐさまこの任務じゃあ体力が持たないか。」

今日一日タイキに付き添っていたティアナモンは、半ば予想が済んでいたようで呆れながら言った。

仕方ないので、タイキはこのままへりに乗せて機動六課隊舎まで帰り、彼の部屋で休ませておくことになった。

その後ヴィータと新人四人は、外回りもかねて歩いて帰ることになったが、その途中、突然大きな音と悲鳴が聞こえてきた。その方向を見ると、

「おい！今すぐ金持ってきて来い！！でないとこのガキの命はねえぞ！！！！」

覆面を被った男が、傍にいる子供に凶器を当てて民家に立てこもっていた。

その子供の母親と思われ女性が必至になって助けを求めているが、皆一様に、

「無理ですよ、管理局に頼んでください。」
とか、

「急ぎの用があるんです。」

とか言つて、素早くその場からいなくなってしまう。薄情ではあるが、ある意味では普通の反応である。

この様子を見ていたヴィータは、

「薄情な奴らだな、こうなったらアタシが。」

と、いの一番に飛び出そうとした。しかし、

「やめておきなよ。」

突然現れた少年に止められた。

「君の服装から考えて大方、管理局だその子を放して大人しく出て来い、つて言つて、出てこなかったら実力行使でどうにかするつもりなんでしょう。そんな事すれば人質の子供はただじゃ済みませんよ。」

言つてしまえば、ヴィータは見た目が幼いので、少年は氣を使つて止めたつもりなのだろう。と言つても、彼にもこの事態をどうにか出来るとは、皆にも思えなかった。

（これがいわゆる”男の娘”か。）

彼の容姿は、その場にいた者が全員こう思うほどの、華奢な体付きと色白で可憐な顔立ちをしており、ぶっちゃけると女の子にしか見えない。そんな彼の表情には、絶対の自信が満ちていた。そして、
「あなたがたのやり方では埒が明きません、ここは俺に任せてください。」

少年はヴィータ達にこう言い残し、近くにあつた工務店に行くと、
「すいません、ちょっと貸して下さい。」

店主にこう告げて、持っていたコートのような上着に黒いペンキを塗り始めた。ちなみにこの世界のペンキは、色がはっきりして塗った後すぐに乾くばかりか、水で洗えば簡単に落ちてその上他に色が移らない優れものなのだ。

ペンキを塗り終わると、少年はそのコートを羽織り、首から十字架のペンダントをかけた。

「なるほど、尼さんになりすまして近づこうという事か。」

様子を見ていたティアナは彼の行いを分析しながら言った。

「確かにあの姿なら一番警戒されにくいですね。」

エリオも関心しながら言った。

そのうちに、白いフードを被り見た目は完璧に尼さんになった少年は、近くのコンビニからお菓子やら弁当やらを沢山持ってくる、民家の前に立った。

「私は尼です。ご覧のとおりあなたに食べ物をお持ちしました。」

少年はこう言って胸の前で十字をきると、持ってきた食べ物が入ったかごを見せながら言った。

「……そうか、入りな。」

男は少し考え込むと、少年にこう告げた。

そして、少年はゆっくりと民家の中に入って行った。

「やった、一つ目の問題はクリアだ。」

その様子を見ていたスバルがこう言つと、

「あとはどうやってあの子を救出するかですね。」

キャラコがこう言つて、隣のヴィータを見た。しかしヴィータは難しい顔をして考え込んでいた。

（今になって思えば、アタシはほんとに短慮すぎる）

今起こっていることも、冷静に言えば彼の言つとおりだった。あのまま自分が行っていれば、彼が言つとおり「管理局だ、その子を解放しろ」とでも言っていたはずだ。その結果頭に血が上った男は子供に危害を加えていただろう。

他にも、先ほどの現場でもそうだった。ルーテシアの言った言葉の意味を冷静に考えていれば、自分たちだけでもあの自体をどうにかできたはずなのだ。今回はマルチグレイモンがいたから良かったも

の、もしマルチグレイモン、そもそもあの場にタイキがいなかったらどうなっていたか。ヘリを砲撃され、救出した少女、シャル、ヴァイス、三人の命が失われていただろう。

考えてみれば、次々に反省すべき点が浮かんできた。

「あの、ヴィータ副隊長？」

今になって、キャラが顔を覗き込んできた事に気が付いた。

「彼、民家の中に入りましたよ。」

エリオにこう報告され、

「とにかく、何があってもいいようにいつでも突入できるようにしておけ。」

みんなにこう指示し、アイゼンを構えた。

そして、民家の中の少年は、問題の子供と男がいる部屋に着いた。

「よし、持ってきたものはそこに置いておけ。」

男にこう言われたので、言うとおりの指定された場所にかごを置いた。その時、すっかりペンキを塗り忘れた部分があらわになった。

「デメエ！だましやがったな！！」

その途端男は凶器を持って少年に飛びついた。しかし少年は少しも慌てず、着ていたコートを男に投げつけた。

外で待ち構えていたヴィータ達の耳に、中で何かが暴れているよう

な音が聞こえてきた。

「ああ、ばれちゃったの？」

スバルが驚くと同時に、

「お前ら、突入するぞー！」

と、ウィータは叫んだ。

すると、窓ガラスが割れて覆面を被った男が飛び出し、その後から少年が飛び出してきた。少年はそのまま空中で男を捕まえると、両腕を後ろから掴んで思いつきり引つ張った。

男は今の一撃で両肩がはずれ、受け身が取れないまま地面に落ちた。その後、人質となっていた子供も入口から出てきた。

「よかった、子供にけがはないみたいですね。」

様子を見るにとどまったスバル達は、皆一様に胸をなでおろした。

「あれ？あいつどこ行っただ？」

ウィータは慌てて周りを見回したが、肝心の少年の姿はどこにもなかった。

次の日、ミッド全域で発刊されている新聞は、皆一様にこの記事が載っていたという。

第十一話 機動六課のとある休日、後篇（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「今回のテーマは、この小説のクロスハートのオリジナル構成員ナンバー3「グラウンドラモン」だ。グラウンドラモンは翼が変化した巨大な手を持つ地竜型デジモン。必殺技は背中中の腕で相手を押しつつ「スクラップレスクロー」尾の先端についているハンマーで相手を殴る「メガトンハンマークラッシュ」全身を地表にぶつけて地割れを発生させる「ギガクラック」イメージCVは「中井和哉」さんだ。」

モニタモンA

「背中中の腕は、高速で地面を掘り進むためのものですな。」

モニタモンB

「さらに、鱗にはファンロン鉱が含まれ、とても頑丈ですな。」

モニタモンC

「どうやってクロスハートに入ったの？」

カットマン

「設定の上では、デジタルワールドのドラゴンランド出身。ドラコモンと一緒に穴を掘っていた所を見つかり、ドルツピクモン討伐後にクロスハートに入ったんだ。ちなみにその後の戦いで、思っていた以上に強かったことに皆驚いたんだとか。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

機動六課に査察が入ることになった。はやて達はなんとかタイキの存在をごまかそうとするも、厄介な相手が査察に現れた。

次回「事を知る者」

ふと思いついた話（前書き）

他の小説作品を見ている時に思いつきました。
後悔はしていない、はず。

ふと思いついた話

その女は、朦朧とした意識の中で、自分に必至で呼びかける少女を見ながら思った。自分は馬鹿らしい事をしていたな、と。ただ自分の愛娘に会いたい、ただそれだけで一人の少女の人生をメチャクチャにし、あげくの果てには一つの世界の存亡を危ぶめた。万が一このままアルハザードにたどり着けても、そのまま自分は死を迎えるだけであろう。

落ちたら最後、二度と上がれない虚数空間に落ちながら、最後にこう思った、

（フエイト、これからは幸せになってね）

彼女の名はプレシアと言った。この後から有名になる「プレシア事件」の首謀者である。

この時彼女は気づいていなかった、偶然開いた異空間の扉の中に落ちて行ったことを。

「あーあ、お腹空いたな。」

やわらかい日差し of 降り注ぐ森の中を、変わった格好をした一人の少女が歩いていた。スクール水着のような服の上に豚を彷彿させる着ぐるみのような装備を身に着けた彼女はデジモンであり。名前は「チヨ・ハツカイモン」である。

お腹が減るとすぐに狂暴化する性格を変えるため日々修行を重ね、今では腹八分目までは我慢できるようになっている。

彼女は偶然、倒れている人影を見つけた。

（だいぶ脈がうすい、息もかすかだし、人間の世界での不治の病にかかっているな。）

倒れている女の脈拍や呼吸を確かめながらチヨ・ハツカイモンは思った。そして周りを見回すと、特殊な液体で満たされ、中に少女が一人浮かんだケースが転がっているのを見つけた。

「こんなかの子供はもう死んでるな。でもなんでこんなところに？」

チヨ・ハツカイモンは一応考えたが、何も浮かばないので、

「しょうがない、サンゾモンさんの所に持っていこう！」

と言う事になり、倒れている女と謎のカプセルを担ぎ上げたチヨ・ハツカイモンは、駆け足で遠くに見える寺院のような建物へ向かっていった。

彼女が担いでいったのは、元いた世界では死んだと思われるプレシア・テストロッサだった。

チヨ・ハツカイモンにより担ぎ込まれたプレシアは、その後しばらくしてから目覚めた。驚くことに今まで死に掛けだったとは思えない程に気分は清々しく、所謂”生き返ったような気分”だった。

「お目覚めになりましたか。」

自分の寝ている布団の傍に座っていた、僧服を身に着けた美しい女性が見えた。

「…ええ、まあ、」

プレシアは簡単に返した。そして、ここはどこで、自分はいつたいたったのか、と考えた。すると、

「申し遅れました、私は「サンゾモン」ここはデジタルワールドの

「シュラインゾーン」です。」

プレシアが訊くよりも早く、サンゾモンが答えた。

（でじたるわーるど？しゅらいんぞーん？）

聞いたこともない単語を沢山並べられたプレシアは混乱した。元々自分は「ジュエルシード」を使って次元震を発生させ、その時の衝撃で空間に穴をあけ「アルハザード」へ行こうとしたのだ。

「ああ、それについてはこれから詳しくお伝えします。まずは…」

相手が混乱していることを悟ったのか、サンゾモンは詳しい説明を行おうとした。その途端、勢いよく扉が開き、誰よりもプレシア本人が驚く人物が入ってきた。

「ママー!!!」

元気よく入ってきたのは、綺麗な長い金髪の髪を二纏めにした少女。見た目はフェイトと瓜二つな彼女の名は「アリシア」かつての事故で死んだ、フェイトの姉である。

「え、アリシアなの？なんで？」

プレシアは目を疑った。もう二度と見れないと思っていた愛娘アリシアが元気に動き回る様子を自分は見ているのだ。これは夢なのではないかと思いつつ何回か自分の手の甲を抓ってみたが、紛れもなく現実が起こっている事だった。

ふと傍にいるサンゾモンを見ると、

（あ、えーと、これから詳しく説明します）

と言いたげな顔をしていた。

「ああ、ここにいやがった。」

続けて、全身黒い毛で覆われた、サルのような男が部屋に入ってきた。プレシアが、豊臣秀吉はこんな感じの人だったんだろうな、と考えていると。

「どうしたのですか、ゴクウモン？あなたにはアリシアの面倒を見るように言っただけですが。」

怒っている感じはないが、それでも自分に後ろめたい事があれば気圧されてしまいそうな口調で、サンゾモンは入ってきた男に訊いた。

「どうしたもこうしたも、どこで聞きつけたのか母親が起きたって聞いた途端、会いに行く、って言って聞かなくて、こんなに早くここを嗅ぎつけるとは。」

ゴクウモンと呼ばれた男は、息を切らしながらサンゾモンに言った。
「おじさんだらないなあ。」

アリシアがゴクウモンにこう言うと、

「あんまりおいたがすぎると、おっちゃん怒っちゃうぞ。」

と、返された。その途端、

「それはやだ!!」

アリシアは即答に近いタイミングでゴクウモンに言った。

プレシアは、アリシアの様子を見れたのは良かったが、話が進まないで、

「アリシア、ママはこれからこの人と話があるの。だからしばらくはこのおじさんと一緒にいてちょうだいね。」

と、アリシアに言い聞かせた。

「……分かった、行こうおじさん。」

アリシアはしばらく考え込むと、しぶしぶ了承したようで、ゴクウモンと部屋から出て行った。

「おじさんを困らせないようにね。」

プレシアは最後にこう言っておいた、

「さて、それでだけど。」

プレシアがサンゾモンに言うつと、

「分かりました、ではこれからこの世界について説明しますね。」

サンゾモンはデジタルワールドの説明を始めた。

デジタルワールドとは、人間がインターネットを普及させるより前から存在する、あらゆる事物がデータで構成された世界であり。人間のインターネットは、デジタルワールドに存在する”使われていない場所”を利用した物であること。

元々は人間界同様に一つの世界だったが、しばらく前にバラバラに

分解し、今では土地の種類ごとに分かれた状態になっており、ここには寺やそれに準ずる施設が集まっているため「シュラインゾーン」と呼ばれていること。

「それは分かったけど、どうして私の病気が治っているの？それにあの子が生き返ってる理由は？」

次にプレシアはこう訊いた。

「私のデジコアには、あるゆる難病を完治させ永遠の命を与える力があるのです。あなた様とアリシアに少し分け与えたのです。」

おかげで少し寿命が縮みましたが、とサンゾモンは笑顔で言った。「最初は勝手なことをしてしまったかと思ったのですか、」

サンゾモンはこう言っているが、プレシアに取っては願ったり叶ったりだった。元々、彼女を生き返らせるためにアルハザードを目指したのだ。結果的にたどり着いた場所は違ったが、結果オーライと言う事になる。

しかし、問題はこの後である。彼女は最後に自分に「妹がほしい」と言った。彼女にとって妹に当たる人物がいて、自分がその子にひどいことをしていたと知った時、彼女はどう思うだろうか。

「よろしければ、私が話を聞きますが。」

サンゾモンが話しかけてきた。

プレシアはふと外に目をやった。外では、ゴクウモンと一緒にバスケットボールのコートと思われる場所でサッカーボールで遊んでいるアリシアが目に入った。

「ええ、聞かなければ良かったと思わないならね。」

プレシアはこう告げて、これまでの事を簡潔に話した。

ある時、死んだ娘を蘇らせようと、本人の遺伝子を培養し一人の少女を生み出した。見た目や声は一緒だったが、性格や癖はまるで別人だったために、彼女を娘と扱わず、日々虐待と言っても過言ではない接し方をしていた事。

そして、失われた技術が多く揃うと言われる世界アルハザードを目指し行動を起こしたが、結局最後はこれまでひどい扱いをしていた自分の娘に止められてしまい、その後虚数空間に落ちて今に至る事を。

プレシアが話す間、サンゾモンは嫌な顔をせず最後まで聞いた。そして、彼女が話し終えると、

「そうなのですか。」

と、言った。そして、

「大丈夫でしょう。あなたがその事をアリシアに話した後、機会があればその娘も同じように娘と扱ってあげれば。あなたが目覚めるまであの子と何回か話しましたが、アリシアはとても聡明で寛容の心を備えた方だと分かりましたから。」

と、プレシアに言った。

「そう、機会があるならね。」

プレシアがこう呟くと、

「そういえば、これからについて何かあては？」

と、サンゾモンが訊いた。当然ながら、今のプレシア母娘にこれらのあてが有るはずはない。

「最近は大グ軍なる組織がデジタルワールドの各地を侵攻していますし、よろしければこちらにとどまって下さりませんか。」

サンゾモンはプレシアにこう告げた。なので、プレシアはアリシアと一緒に、元の世界に戻る算段が付くまで、シュラインゾーンにとどまることになった。

その後、プレシアはデジタルワールド内で科学者となった。バグラ軍に対抗する手軽な手段を模索するため、お忍びで各地を回り古文書などを調べ、ちょうどデジタルワールドにタイキ達がやってくる少し前にデジクロスについて発見し、それを可能にする機械「クロスローダー」の仕組みを考え出した。しかし何かの皮肉か、その技術は何故かバグラモンの手に渡り、結果的に「ダークネスローダー」制作の参考になってしまったらしい。

他にも、シュラインゾーンの中では医者としても活躍し、多くのデジモンから「プレシア先生」と親しまれるようになった。

アリシアは、ジェネラル兼戦士としてシュラインゾーンで育てられた。何故かと言うと、サンゾモンのデジコアの力で復活した彼女は、少しばかりであるがサンゾモンの力が使えたので、それを皆の役に立てたいと皆に言ったのだ。言うまでも無くプレシアは反対したが、それでも、アリシアは日々努力を続けてたくましく成長していった。

「えーと、これは5の 8だよね。」

「そうじゃぞい、でもどうせなら10の 2の方が正しいんじゃないか。」

プレシアから怠るなと言われた勉強については、かつて人間の子供と一緒にデジタルワールドを旅したことがあるというデジモン「ボコモン」から教わり。

「えーと、目ばかりを頼らず心の目を頼る。」

「そうそう、その間にも状況把握は怠るなよ。」

武術に関しては、ゴクウモンやサゴモンの指導を受けた。

そして、彼女に取ってパートナーと呼べるデジモン「ギルモン」に出会った時、シュラインゾーンに危機が訪れた。

これまではデジタルワールド内で唯一平和だったシュラインゾーンだったが、ある時バグラ軍の将「タクティモン」が大軍を率いて攻めてきたのだ。軍の中にはドルルモンもいた。

ゴクウモンを始めとする、戦闘能力のあるデジモン達が必至で応戦したが、あつという間にバグラ軍の兵士達にやられてしまった。

「うわあああ！！」

「ちっ、チヨ・ハツカイモンでもだめか。」

たった今、皆の中でも特に若く力も強かったチヨ・ハツカイモンがドルルモンにやられた。

「どうしよう、とんでもない事態に、」

アリシアは心の中で思った。自分もこれまでずっと戦闘訓練を重ねてきたが、教え主であるデジモン達がやられた以上、自分が勝てるどつりは無い。ギルモンも力自体は強いが、それでも日頃から実践を繰り返すデジモンには勝てないだろう。

「悪しき者たちよ、ここは御仏に護られた神聖な場所です。」

すると、突然どこからかサンゾモンが現れ、その途端バグラ軍の兵士達が何かを避けるように動き始めた。サンゾモンの「無限弾幕心経」である。これにより、バグラ軍の兵士の目には、多数の数珠が襲い掛かってくるように見えているのだ。

「猪口才な。」

しかしタクティモンは平気なようで、持っている刀を地面に突き立てた。その瞬間、大きな衝撃波が発生し、サンゾモンは大きくふっ飛ばされた。

その様子を見ながらアリシアは心の中で怒っていた。ここのデジモン達は何もしていない、ただ普通に平和に暮らしていただけなのだ。それなのに勝手な理屈をつけて攻撃をしかけてくるバグラ軍に。

（この力、前にも）

アリシアの隣のギルモンは、アリシアの中から溢れる力を感じながらこう思った。

「アリシア、一緒に戦おう！！」

ギルモンはアリシアにこう告げた、

「アリシアと一緒に戦おうと思えばできるはずだよ。」

アリシアは、ギルモンの言葉を聞きながら思った。自分だって戦士なのだから、戦わずしてなんとすると、

「うん！行くよギルモン！！」

そして、母親のプレシアの作ったクロスローダー初号機を掲げた、

「大丈夫か？」

「早く安全な場所へ。」

ふっ飛ばされたサンゾモンを担ぎながら、プレシアと隣の紫の人型のドラゴン「ストライクドラモン」は言った。

「にしても、あれは何だ？」

ふと、遠くの戦場を見たストライクドラモンはプレシアに言った。その場所からは、とてつもない光が発生していた。

（アリシア）
様子を見ながらプレシアは思った。

「うわあああ！何が起こったんだ！！」

ゴクウモン達は勿論、バグラ軍側も驚いた。アリシアが不思議な機械を掲げると同時に、彼女とギルモンを巨大な光が包んだ。そして、その光が一つになると。

「ギルモン、超進化！！」

ギルモンは背中には真紅のマントを身に着けた騎士の姿に変わった。
「デュークモン！！」

その様子を見ていたタクティモンは、

「何？！一瞬で進化した？馬鹿な、私がこの姿になるのにどれほどの年月を費やしたか。」

と、驚いた。

「うおおおお！！」

デュークモンは右腕に装備した聖槍「グラム」を構えて突進した。

「くっ！」

タクティモンは自分の刀「蛇鉄封神丸」で受け止めた。

「な、なんて力だ。」

遠くで様子を見ていたゴクウモン達は、

「すごいな、あのデュークモンとか言う奴、タクティモンと互角に戦うなんてな。」

と、思っていた。

「というか、アリシアはどこいった？」

周りを見渡しながら、黒い河童のようなデジモン「サゴモン」が言った。

その時である、突然巨大な岩が降ってきた。

「ええええええええ！！？？」

デュークモンとタクティモンの戦いの衝撃で飛んできたことは簡単に予想できたが、それでも皆驚いた。

岩が地面に落ちる瞬間、デュークモンの槍が飛んできて岩を砕き、細くなった岩をデュークモンの盾「イージス」が防いだ。

「大丈夫か？」

その場に居合わせた皆にデュークモンはこう訊くと、すぐさまタクティモンに向かって行った。

「あいつ、もしかしてアリシアか？」

皆一様にこう思った、

そういえば、人間とデジモンが合体することで、今までにない力が生まれたという伝説があっただけ、と

「ファイナルエリシオン!!」

デュークモンはイージスを構えると、そこから聖なる光を迸らせた。

「壱の太刀!!」

タクティモンは自分の刀を地面に突き立て、発生させた衝撃で光のエネルギーを切り裂いたが、軌道をそれた光は自軍の兵士達の元へ飛んで行った。

「ロイヤルセイバー!!」

「鬼神突!!」

デュークモン、タクティモンは決着を付けるため、それぞれの得意技をぶつけ合った。そして、二つの影が通過した後、タクティモンは背中に装備した銃を使って、花火のようなものを打ち上げた。

「信号弾か! 黒、白、黒、一時撤退だ!!」

上空を見ていたドルルモンは、自軍の兵士達に叫んだ。そして、兵士達を逃がしつつ後退を開始した。

最後にタクティモンは、鎧の傷が付いた部分を押さえながら。

「この痛み、決して忘れぬ。」

こうデュークモンに言い残して、その場を去って行った。

「やったか。」

デュークモンがこう言うと、デュークモンが光に包まれ、中からアリシアとギルモンが出てきた。ギルモンはともかく、アリシアは疲労困憊のようで、出てくると同時に倒れた。

「まったく、大した奴らだな。」

二人の元へ駆け付けたゴクウモンは言った。

「とにかく、今は休ませてあげよう。」

ギルモンをチョ・ハツカイモン、アリシアをサゴモンが担いで、皆はサンゾモンのいる寺へ戻って行った。

この後、シュラインゾーンのコードクラウンは「ダメモン」に盗ま

れてしまったが、相変わらず平和なゾーンとして存在し続けた。
バグラ軍統合後は「サイバーランド」の一部になったが、プレシア
がサンゾモンの力を再現する結界を開発し、寺の存在を「スプラッ
シュモン」や「ドリッピン」達にばれないようにしていた為、唯一
平和な場所となった。

その後、彼女たちもタイキとある事件に関わることになるが、それ
はまた別の話。

ふと思いついた話（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回のテーマはグレイモン。グレイモンは恐竜型のデジモン。必殺技は、灼熱の火炎を浴びせる「メガフレイム」頭の角で突進する「ホーンストライク」しっぽの刃物で相手を斬る「ブラスタールテイル」だ。」

モニタモンA

「とても狂暴性が高く、同族のデジモンですら食い殺す狂暴なデジモンですな。並大抵のジェネラルでは使役するのは不可能ですな。」

モニタモンB

「ちなみに、かつて登場したオレンジ色のグレイモンと区別をつけるため、ゲームではオレンジ色の方は「グレイモン レジエンド」と呼ばれていますな。」

モニタモンC

「レジエンドと今のグレイモン。どっちが強いのかな。」

全員

「それじゃあまたね。」

第十二話 事を知る者

機動六課のフォワード四人が、一度に二つの事件に立ち会った日の夜の事である。

「さて、あれとこれも買ったし後は、」

夜の闇のように黒い髪を長く伸ばした、少女のような容姿をした少年、以前ヴィータ達の前に現れた少年が買い物袋を持って人通りの少ない通りを歩いていた。

袋の中身を確認し、いざ家へ帰ろうとした時、

「プロレスラーのドラゴンマスクとお見受けします。」

突如頭上から声が聞こえた。

「あなたで確かめたいことがあります。」

そこにいたのは仮面を付けた少女だった。

「………… よく分かりましたね、公式的なデビューはしていないのに、」

少年は少し考え込んだ後、こう言った。マスクを付けて戦うプロレスラーにとって、素顔が知られるのは恥であることを考えた上である。

「それで、確かめたいことって？」

少年は買い物袋を適当な場所に置くと、少女にこう訊いた。

「あなたと私、どちらが強いんです。」

少女はこう答えると、少年に装備を付けるように言った。しかし、

「そんなものは無いよ。」

少年はこう言って、構えを取るだけだった。

「っていうより、まだ子供じゃん。なんでこんな事してるの？」

少年が少女にこう訊ねると、

「強さを知りたいんです。」

少女はこう答えた。

「ああ、そうです…か!!」

少年はこう言うと、ほぼ全力に近い初速で少女に近寄り、キックの連打を放った。しかし、少女は見事なフットワークでそれをかわした。

（凄いな、僕の不意打ちを軽くかわすなんて）

「強さを知りたいってどういう意味だ!!」

少年がこう訊くと、

「言葉通りです、そして私はもっと強くなりたい。」

と、少女は答えた。

「だったらこんな問題行動しないで、真面目に練習してればいいじゃん!!」

少年のいう事はもっともである、だが、

「私の戦う意味は、表舞台にはないんです。」

少女はこう言って、鋭い突撃を放った。

（ちっ、速い）

それでも少年は、相手の攻撃の威力を逆に利用し、少女を投げ飛ばした。

「列強な王達をすべて倒し、このベルカの地に覇を唱えること、それが私の戦う理由です。」

投げ飛ばされた後、受け身を取った少女はこう言った。

（もしかしてこいつは？）

少年はこう考えると、

「改めて訊くけど、お前は”霸王イングヴァルト”か?!!」

と少女に言った、

「はい。」

と、少女が言うと、

「なら竜王エイリオン、推して参る!!」

少年はこう言って、少女に飛びかかって行った。少女は迎撃しようと構えを取ったが、少年の方が途中で倒れてしまった、訳ではない。前転で少女の足の間をくぐると、腰を捕らえブリッジの容量で投げプロレス技「ジャーマンスープレックス」をお見舞いした。

「このままでは終わりません。」

しかし霸王を名乗った少女も負けてはいない、竜王を名乗る少年をバインドで捕らえると、

「ベルカ時代の戦いはまだ、私の中では終わってないんです。」

こう言つて、渾身のパンチを放った。

「霸王断空拳！！」

パンチは少年の腹部に直撃し、少年は大きくふっ飛ばされた。しかし、大技を喰らった後激しく動いた反動か、少女も気を失って倒れた。

「あーあ、ジャムパンつぶれちゃった。」

少年は大きくダメージを負ったようだが、腹部に仕込んだジャムパンで衝撃を和らげたようだ。少年が少女に近づくと、

「指一本触れさせないぞ！！」

建物の影から、耳がやたらと大きい白い生き物が出てきた。

（これは、テリアモンか）

少年は謎の機械を生き物に向けてこう言つと、とある住所を言つて

「そこにいけば、うまく保護してもらえますよ。お前みたいな生き物について詳しい奴がいるからさ。」

と、その生き物に言い残して、買い物袋を持って去って行った。その後、白い生き物は少女を担いで、言われた住所に向かっていった。

次の日である、

「まったく、昨日はあれ以来大きな事件が無かったから良いものの。」

「

タイキは朝一番からヴィータに説教されていた。昨日、いきなりぶつ倒れたことについてである。

「ヴィータ副隊長、そのへんで。」

新人四人も止めようとしているが、ヴィータは聞こうとしない。

「体の調子をしっかり整えられないようじゃ……」

時間的に、説教開始から30分になろうとした時である。

「あの、ヴィータちゃん。」

なのはがやって来た、

「あ、なのは、どうした？」

と、ヴィータが訊くと、

「実はタイキ君に会わせたい人がいるんだけど。」

なのははこう答えた。

なのはがタイキを連れて、問題の人物のいる部屋にやって来た。

「でもなんで俺に？」

こういうのは普通、部隊長である八神はやての役目じゃないのか、とタイキが訊くと、

「その人に同伴しているのがね、タイキ君に見てもらった方がいいタイプだから。」

なのはがこう言って扉を開くと、今まで寝ていた問題の人物は起きていた。そして、タイキと目が合うや否や、

「あー!!」

と、タイキと二人そろって叫んだ。

「工藤タイキ!!」

「えーと、パインアップル？」

「アインハルトです!!」

この様子を見ていたなのは、

「あのタイキ君?もしかして知り合い?」

と、タイキに訊いた。

「えーと、この間出た格闘技の大会で俺に負けたらしく。それ以来雪辱を果たそうとこうして……」

タイキが答えて、

「っていうか、なんでここにいるんだ?」
と訊いた。

「僕が連れてきたんだ。」

すると、アインハルトの寝ていたベッドの影からやたらと耳の大きい生き物が出てきた。

「え、デジモン?」

「ちよ、テリアモン。」

タイキもアインハルトも驚いた、

「これで分かったでしょう、タイキ君に合わせた理由。」

なのははこう言って、制服のポケットから薄緑色のクロスローダーを取り出した。

「え、何時の間に?」

何時の間にクロスローダーを取られたのかと、アインハルトは驚きを通り越して慌てた様子になっている。

一方、部隊長の八神はやてはと言うと、

「うー、どうしよう。」

頭を抱えて困っていた。隣のフェイトも難しそうな表情をしている。

何故かと言うと、明日やつてくる査察をどうするかで悩んでいるのだ。

「どうしよう、うちはただでさえツツコミどころ満載なのに。」

はやての悩みの種はこれだ、自分たち機動六課はおろか下手すると管理局全体の戦力と同等の力がある軍隊を所有するタイキをどうやって誤魔化すかである。精鋭の集まりとはいえ、そんな規格外の戦力を持ち合わせていては、明らかな大目玉になる。しかも、その査察をよこすのはかのレジアス中將である。恰好の情報になってしまっただろう。

「うーん、何とかして正当な理由でタイキをここから遠ざけられたいんだけど。」

フェイトがこう言った。

（事件を起こすわけにはいかないよね。そんな事したら査察が延期になる上、さらに大目玉だ）

フェイトがこう思っていると、

「フフフ。」

はやてが突然笑い出した。

（まったく、このタヌキ）

フェイトは心の中でこう呟いた。

「うち、ええ事思いついたで。」

はやてがこう言うと、

「ダメです！」

即答のタイミングでフェイトがこう言った。

「なんでや？うちはまだ何も言っていないで。」

はやてが文句を言うと、

「大方自分たちで事件をでっち上げてその対処にタイキを向かわせるか、自分がタイキをデートに連れて行くとかいうんでしょう。」

フェイトはこう言い放った。はやては少し考え込むと、

「なんではれたんや？」

と言った。

（つていうか、当たったー?!）

フェイトが心の中で呆れていると、

「フェイトちゃん、今大丈夫？」

なのはから通信が入った。通信の内容は、昨晚保護した少女についてである。

なのはから、名前はアインハルト・ストラトス、ベルカ時代の王様「霸王イングヴァルト」の末裔であること、デジモン持ちである事、タイキと少なからず関わりがある事を訊いたフェイトが、

「分かった。」

と言つて、通信を切った途端、

「閃いた！」

まるでタイキのようにこう言つと、ダッシュで部隊長室から出て行った。

そして、アインハルトは今も同じ部屋にいた。

（私は何をしてるんだろ。やらなきゃいけない事が沢山あるのに）アインハルトがこう考えていると、

「もーまんたい。」

頭上のテリアモンがこう言つた。

「ところでテリアモン、あなたが良く言う”もーまんたい”ってなんなの？」

折角なので、テリアモンの口癖について訊いてみた。

「気にするな、気楽に行こう。」

テリアモンがこう言つと、扉があいて八神はやてが入ってきた。

「気分はどうや？」

はやては部屋に入るや否やこう訊いた、

「まずまずです。」

アインハルトがこう答えると、

「単刀直入に言うな、図々しいかもしれへんけど、今回の事を見逃してあげるから、うちの頼み聞いてくれんか？」

はやてはアインハルトにこう言った。

「それでなんですか？」

とりあえずアインハルトはこう答えた。このままいても事態は何も変わらないので、変化を求めてである。

「実は明日な……して、……してほしいんや。」

はやては自分のお願いを耳打ちで伝えた。その途端アインハルトの顔全体が真っ赤になったのは言うまでもない。

はやては、明日一日タイキとデートしてきてほしい、と言ったのだ。

そして次の日、いよいよ機動六課に査察が来る時間になった。当然今機動六課隊舎にタイキはいない、アインハルトが（半ば強引に）デートに連れてったからである。

「こないなあ。」

はやては玄関に立ったまま、かれこれ30分待っていた。因みに時間では、本来の時間を15分過ぎている。

やがて、コートを着込み、帽子を被った少年がやって来た。

「初めまして、八神はやて部隊長ですね。自分は今回の査察を担当します、クラウド・クラウドウィウスです。」

少年はうやうやしく敬礼すると、

（本当はそちらの粗探しにきたんですけどね）

はやての手を取りながら、はやてにしか聞こえない小さい声でこう言った。

（なんやこいつ）

はやてはこう思った。自分自ら今回の目的を話すのは、何か裏がありそうだと考えたが、それを出すわけにはいかず。

「ところでお一人なんですか？」

と、訊いた。

「ああ、他の連中は道に迷ったようで。」

クラウドはカラカラと笑いながらこう言った、そして、

「まあそちらも忙しいでしょうし、こちらとしても早く帰りたいからさっさと済ませましょう。」

と、はやてに言った。

（ほんとうになんなんや、こいつ）

はやては完全に調子を狂わされた。

クラウドは、機動六課隊舎内を回りながら考えていた。

今回はレジアスより、絶対に教会やほかの連中を叩ける材料を持ってくる、と言われているのだ。

（悪いけど、あんたの思い通りにはいかないぜオッサン）

クラウドが心の中でこう思っていると、ふと一つの部屋が目についた。

「あの、ところでこちらは？」

と、はやてに訊くと、

「ああ、ここは実験室です。今は使用中で、事件の重要なサンプル

を調べてるんですよ。」

と、はやては答えた。

「その重要サンプルが何か教えては……もらえませんか。」

クラウドは少し考えてこう言った、

「まさかとは思いますが、この世界に存在しない生命体の体の一部とか言いませんよね？」

その途端、はやての表情が一瞬凍りついた。だがすぐに、

「まだ捜査中の段階なので、詳しい事の説明はできないんです。」
と、クラウドに言った。

因みに、クラウドの言ったことはあまり間違っていない。実験室内ではワイズモンとルーチェモンが、インペリアルドラモンの爪の欠片を調べているのだ。

「これは、」

爪の欠片を調べていたワイズモンは何かに気が付いた。

「これは特殊な力で一時的に増強された爪だ。おそらく。」

ワイズモンはこう分析したが、

「だが、いったいどんなデジモンが何の力を受けたんだ、これはタ
イキやキリハとは違う。」

最後にこう言った。

「それじゃあ、今日はこれで失礼します。」

査察も終わり、クラウドは最後はやてにこう言った。

（俺の本当の名はグランドラクモン。デジモンだ。今後ともよろしく）

そして、その場から去ってしばらく後、地上本部に連絡した。

「首尾はどうだ？」

「最悪に決まってるだろ。何もなかった。」

「何もないわけではないだろ。なにか怪しい捜査をしていたとか、」
「なかったよ。」

実際はバリバリあったが、とりあえず黙っておいた。

「んじゃ、俺はこのまま帰りますわ。」

「んな、ちよつとまて。」

相手の都合などお構いなしに連絡を切ると。ある場所へ向かっていった。

「それで、どうだった？」

査察が終わった後、フェイトははやてに訊いた、

「何だかな、完全に調子を狂わされた。なんなんや。」

はやては頭を抱えながら言った。

「とりあえずこちらの弱みは握られなかったはずやけど。実際はどうやろ、完全にこちらの事情を見透かされていた。」

はやては、査察中次々と痛いところをついてくるクラウドの様子を思い出しながら言った。

「さて、それだけど。」

クラウドは、繁華街にある中華店の一つに入ると、あらかじめ待ち合わせていた相手の席に座った。相手は、以前竜王を名乗ってインハルトと戦った少年だった。

「そちらはどうだった、連中の内部情報は分かった。」

少年がかなり大盛りのラーメンをすすりながらクラウドに訊いた。

「まったくもってメチャクチャな部隊だよ。部隊長は経験浅い若者で、隊長も移籍じゃなくて貸出、部隊長の保有する戦力を除けば後は新人だけ。しかも期間限定のインスタント部隊。」

「いわゆる使い捨て？よくまあ部隊長もやる気になったな。少し問題起こせば即切り捨てられるのに。」

クラウドの説明を聞いた少年はこう言った。

「まあ、こいつ自信これも望んだ結果だと思うぜ。」

クラウドはこう言ったが、その後、

「しかしまあ、ろくな事は起こらないだろう。」
と言った。

第十二話 事を知る者（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回のテーマはメールバードラモン。メールバードラモンは戦闘機のような姿をした猛禽型デジモン。必殺技はエネルギー弾を発射する「プラズマキャノン」上空から敵に襲い掛かる「ナイトホーク」尾で攻撃する「トライデントテール」だ。」

モニタモンA

「普通のデジモンよりも頭がいたため、ただ格闘技が得意なデジモンよりも強いと言われていますな。」

モニタモンB

「常に冷静な性格で、上空から敵を狙う戦法が得意ですな。」

モニタモンC

「デジクロスを行うことで、メタルグレイモンの鎧を構成しますな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

機動六課の査察中、タイキとアインハルトが何をしていたか。

次回、第十三話「タイキの初デート？」

第十三話 タイキの初デート？

その日、タイキはアインハルトと一緒に街中を歩いていた。その理由を説明するには、昨日の晩にさかのぼる。

昨日の夜七時頃の事である。タイキが自室に戻った時、彼の部屋に机の上に紙が置いてあった。そこには、「用があるので七時半に宿舍の前にきなさい アインハルト」と書かれていた。なので、タイキが言われた通りの時間に宿舍の前に行くと、顔を赤くしてブツブツ何かを言っているアインハルトがいた。

「あの、アインハルト？」

タイキがこう訊くと、

「アインハルトで…ああ、合ってるか。」

アインハルトはタイキが来たことに気が付いたようだ。

「タイキ、明日なんだけど、私と……」

アインハルトは単刀直入に言おうとしたが、重要な部分をいう事を憚られてしまった。

（ええいアインハルト頑張りなさい！あなたは霸王なの、これくらいできずにどうする）

そして、心の中のアインハルトに叱咤されていると、

「あのさ、明日何？」

と、タイキが訊いた。

「……明日私とデートしてください！！」

次の瞬間、アインハルトは何かを捨てたような勢いでタイキにこう言った。その瞬間、顔全体が真っ赤になったが、言われたタイキも、

は、何言つてんのこいつ、
と、言いたげな表情になっている。

「えと、あの、別に何か邪なことがあるわけじゃないんです！実は、
」
アインハルトは大慌てで事の次第を説明した。

次の日に機動六課に査察が来るうえに、査察をよこすのは機動六課
を目の敵にしている地上本部総司令レジアス・ゲイズなので、タイ
キの存在が公になると部隊の存亡が危うくなるので、タイキには明
日一日正当な理由で町に言つてほしい事を
以前の休みのときは、タイキは全然休みらしくなかったので、この
日だけのんびり遊んできてくれとも言っていた、とも伝えた。

「なるほどね、確かにワイズモンからレジアスについては聞いてる
よ。でもなあ。」

タイキはこう言つてアインハルトを見た。口に出しては言えないが、
自分がアインハルトを連れて町をうつろついていたら色々まずいんじ
やないか、と思つたのだ。

「その点については問題ありません。」
タイキの考えを察したのか、アインハルトは、
「武装形態。」

と言つて、自分の魔力を高めた。すると、アインハルトの容姿がタ
イキと同じ年くらいに変わった。

「この姿なら問題はないでしょう。」
確かにこれくらいなら問題はない。

「とにかく、明日は午前九時にここへ来ること、分かりました！」
アインハルトはこう言つと、そのまま去つて行つた。タイキはア
インハルトの語気に圧されて、断ることができなかった為、明日一日
のアインハルトとのデートが決まつたのだ。

そして今に至る、

「居づらい。」

タイキは心の中で思った。建前の上ではデートなのに、さっきから何も会話が無いのだ。

「なあアインハルト、デートはいいけど、予定は決まってるの?」

タイキはとりあえずアインハルトに訊いてみた。しかし、アインハルトは何も答えなかった。何故なら、

「何しよう。」

アインハルトも今回の事を勢いで決定してしまった為、今日一日何をして時間をつぶすか考えていなかったのだ。

それでも、タイキと一緒にさっきから何も会話が無いのはつらいと感じたのか。

「タイキはデートの時何をするのかわかりますか?」
と訊いた。

「えーと、服や入って服見たり、シネコンで映画見たりするんじゃない。後は見晴らしのいい展望台とかに行って色々話したり。」

タイキはとりあえず自分の知識にある、デートという行動でよく行う行動を言ってみた。

「じゃあ、それで行きましょう。」

アインハルトはタイキが言い終わるや否やこう言った。

(え?)

タイキは驚いた、まさか今回何するか一切考えてなかったのか、と。
「ちょうどあそこに服屋さんがありますね。」

アインハルトの指さす方向には、そこまで大きくない地元の人がよ

く来るようなブティックがあった。

「しかし、我らはなんでこんな事を。」

タイキのデートする様子を、まるで浮気の調査をする探偵のように調べる緑色の影があった。タイキがこの世界に来るにあたって、天野ネネのクロスローダーから移籍したモニタモンである。

「仕方ありませんな。はやて殿に頼まれたのですから。」
「そうだね。」

三人はそれぞれ、映像録画用カメラ、集音マイク、手帳を持っているが、やる気はまるで無いようで全然使っていない。

「それにしても、本来デートという行動には甘ったるい雰囲気が付くのですが、あそこまで清々したデートはありますかね。」

タイキとアインハルトのやり取りは、若いバカップルのような雰囲気は一切なく、いくなればもうすぐ結婚二十年を迎える夫婦のようだ。

「これはどうでしょうか？」

「いや、こっちの方が似合うんじゃないか。」

このやり取りにも、本来なら騒がしさが付くものだが、二人は落ち着いた雰囲気で品定めをしており。若者が着るような派手なデザインの物ではなく、落ち着いた色合いの素朴な服ばかりを見ている。

「あの二人はあんなでいいのでしょうか？」

モニタモンの一人がこう言ったが、残るモニタモンは何も答えなかった。

最後に、モニタモン達はそろって大きなため息をついた。

時計が十二時を指そうとした時である。何故か二人の腹が同じタイミングで鳴った。

「ハハハ、飯にするか。」

と、タイキが言うと、

「それじゃあ、あそこに行きましょう。」

アインハルトはこう言って、海沿いに立つ小さなイタリアン料理の店を指さした。

「おお、イカ墨パスタがあるじゃねえか！」

何故かシャウトモンがクロスローダーから飛び出し、メニューの書かれた看板を見ながら言った。

（そういえばアイツ、前に一回人間界に来たけど、そこでイカ墨パスタ食い損なつたんだよな）

タイキは昔を思い出しながら思った。そういえばこの時、シャウトモンはオメガシャウトモンに進化できるようになったんだ、と。

「アインハルト、僕もお腹空いたよ。」

そして、アインハルトのクロスローダーからもテリアモンが飛び出した。

「ちょ、テリアモン。」

アインハルトは突然の事に驚いたが、

「いいじゃん、皆で入ろうぜ。」

タイキはこう言って、店の扉を開けた。

「しかし何なんでしょう、あのまるで友達同士で来たような雰囲気は。」

デートの様子を遠くから見ていたモニタモン達は、近くのコンビニで買ったジャムパンを食べながら様子を窺っていた。

タイキは普通に大盛りのイカ墨パスタを食し、シャウトモンは念願のイカ墨パスタだったらしく、

「うめえー!!」

と、叫びながらぱくついている。

アインハルトとテリアモンはトマトソースのパスタを食しており、時折行儀の悪いテリアモンを注意している様子は、さながら姉と弟のようだった。

「しかし我々の食事もうちょっとどうにかならなかったんですか？」

モニタモンの一人が訊くと、

「こんな場所じゃ普通に幕の内弁当は食べられないでしょう。」

別のモニタモンが言った。彼らは電柱の上にしがみついており、通りかかる人は皆、

「何だこいつら？」

と言わんばかりの表情になって通り過ぎていく。

(すげえハズイ)

モニタモン達は一樣にこう思っていた。

食事を済ませたタイキ達は、海をよく見える公園にやって来ていた。「そういえば、アインハルトはどうやってテリアモンと出会ったんだ？」

海を眺めながら、タイキはアインハルトに訊いた、

「テリアモンとの出会いですか。」
アインハルトは、ちょうど今から一年前の事を思い出しながら言った。

テリアモンは、自分が家で特訓していた時に、突然家のコンピュータからクロスローダーを持って現れたのだ。クロスローダーがあればデジタルワールドに帰る事もできたはずなのに、テリアモンはあえてそれをしなかった。彼は、

「アインハルトがかつての友達に似ている」
とアインハルトに言ったのだ、

「かつて世界の危機になった時、最後まで助けようとしたけど結局倒すしかなかった友達がいたのだと言っんです。それが私の記憶の中にある”ある人物”の記憶と似ていて。」

アインハルトがここまで話したところで、

「ある人物って？」

タイキが再び訊ねた、

「私の先祖である「霸王イングヴァルト」の事です。」
と、アインハルトが答えると、

「お前の先祖って王様だったのかよ！」

シャウトモンが驚きの声を上げた。デジタルワールドの王を目指す彼にとって、王様の話はきになるのだろう。

「はい、私は断片的ではありますが、その霸王の記憶を受け継いでいるんです。」

アインハルトは、途切れ途切れではあるが、うまくつなぎ合わせれば自分の記憶として思い出せる、とも言った。

そして、霸王イングヴァルトの話始めた。

かつて、この世界がミッドチルダと呼ばれるようになるより遙か前、シュトゥラの王家の跡継ぎとして生を受けた「クラウド・G・S・

「イングヴァルト」は、列強の王達を制することで無双の強者となり、政の面でも民を思いやる善政者として歴史に名を残すことになった。それでも、彼が望むものは手に入らなかった。

「その、霸王が最後まで手に入れられなかった物つてのは……？」

「シャウトモンがこう言う」と、

「本当の強さです。大切な者を守る強さ。」

「アインハルトはこう言うて、

「彼には同じように武の道をたどる友がいたのですが、その人は自らの運命で命を落とし。何の皮肉かそのために彼は強くなったんです。」

と、説明した。

「だから、自分の拳を受け止められる相手を探して。」

と、タイキが言う」と、

「はい、もう守るべき民も国も無い今、強さを知るにはそうするか。」

と、アインハルトが言った。

「何も一人ですることは無いと思うぜ。困ったなら周りを頼ってもいいじゃん。」

「シャウトモンはアインハルトにこう言った。

「実際テリアモンは、お前に頼ってほしいはずだぜ。」

「シャウトモンがこう言う」と、テリアモンは一回頷いた。

「それに、俺たちだっているんだから。」

「タイキからこう言われた時、アインハルトの中で何か熱いものがこみ上げてくる感じがした。その時である、

「おい、タイキー！」

遠くから声がした。見ると、白いスポーツバッグを持った少年がこちらに手を振っていた。

「ああ、ケビン……！」

彼は、かつてタイキにバレーボールの試合の助っ人を頼んだケビン

だった。

「お前はこんなところでなにしてんの？」

ケビンに訊かれたタイキは、

「ああ、散歩だよ。」

途轍もない適当さを誇る答えを出した。

「そうなんだ、また何かあったらよろしくな。」

ケビンはタイキにこう言うつと、早く帰らないと弟にテレビを取られて録画したドラマが見れなくなる、と言いながら去って行った。

（誰からも頼られ、誰であつても必要に応じて頼る、か）

タイキの様子を見ながらアインハルトは思った。

そして、機動六課に今まさに査察が入っている時も、二人はあちこちを回って色々楽しんでいた。

最後に、タイキが行きたいと思っていた中華飯店で夕食を取ることにした。

「あの、今日はありがとうございます。」

アインハルトは顔を赤くしながらタイキに言った。

「いいよ、俺も楽しかったし。」

タイキは笑いながらこう言うつと、

「それでだけど。」

突然真剣な口調で言った。

（え？）

アインハルトは驚いた、そしてタイキは、

「これからの事なんだけど。」

と、アインハルトに言った。

（え、ええ？）

アインハルトは顔中真っ赤になりそうなので、とりあえずうつむいたままになった。

「これからとても厳しい戦いが始まると思うんだ、だからアインハルトにも力を貸してほしんだ。」

しかし、予想に反してタイキはこうアインハルトに言った。

（なんだ、そんな事か）

アインハルトは、若干がっかりした所もあったが、

「分かった、協力するよ。」

と、タイキに言った。

（格闘技に関してだけじゃない。ここで引き下がったら一生彼には勝てないかも）

アインハルトは心の中でこう思ってもいた。しかし、自分の協力を取り付けられたのがよほど嬉しかったのか、喜んでいるタイキを見ながら思った。

（覇王の力、しっかり役に立ててくださいね）

第十三話 タイキの初デート？（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回のテーマはチビカメモン。こいつは普通より小柄で、ヘルメットも目を覆ってないから「チビ」と呼ばれているけど。実際のカメモンはサイボーグ型のデジモン。必殺技は「メットタックル」「コーラガード」だ。」

モニタモンA

「マウスのような形をした甲羅は頑丈で、どんな攻撃でも防げますな。」

モニタモンB

「普通のカメ同様に手足を甲羅にひっこめることができますが、頭は入れられないのですな。」

モニタモンC

「頭隠して尻隠さず？」

カットマン

「ちなみに、亀の甲羅は骨が変化した物であって、間違ってもあの敵キャラクターみたいに脱げたりはしないんだ。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

なのは、フェイト、はやてと共に聖王教会へやって来たタイキは、これからの運命を決める予言、そして機動六課設立の理由を耳にする。

次回「戦いの予兆」

五話更新記念の回 その三

ここは、ミッドチルダのとある場所。

カチ、カチ、カチ

一人の少女が、パソコンのディスプレイにかじりついていた。

????

「キリエ、まだ見てたの？」

すると背後から、赤い髪の少女が話しかけた。

????

「何度見たって同じだよ、私たちはどの話にも出ていない。」

少女はこう言って、キリエと呼んだ少女を見た。少女の手は震えていた。そして、

キリエ

「なんじゃこれはー?!?!」

と叫んだ。後ろで少女が驚いているのに気が付くと、

キリエ

「アミタ！一体どうゆう事よ?!」

と、アミタと呼んだ少女の胸倉に掴みかかりながら言った。

アミタ

「知らないよ、いったいどうしたの？」

アミタがこう言うと、

キリエ

「ちょっとこれ見てよ。」

キリエはアミタをパソコンの前に座らせた。

アミタ

「ああ、私たちが出た最初の五話更新記念の回のPVで出てた台詞だね。あなたがたのやり方じゃ埒が明きません、ここは俺に任せてください。」

キリエ

「違う、そこじゃなくて。」

注目する点を間違えているアミタを制して、何話か戻すと。

キリエ

「ほら、この話からアインハルトが出てる。」

アミタ

「それが？」

キリエ

「それがじゃないよ。これは元々「Strikers」を原点にした話なのに、なんで四年後の「Vivid」のキャラクターが出てきてるのよー!!」

アミタ

「知らないよ。」

キリエ

「こうなったら四の五の言ってもらえない、今すぐカットマンの家に
行きましょう。」

こうして、キリエ・フローリアンとアミティエ・フローリアンはこ
の小説の作者の元へ向かっていった。

そして、ここはとある管理外世界のとある場所。

「よし、五話更新できたつと。」

パソコンの前でキーボードを叩いていた男が肩を伸ばしながら立ち
上がった。彼は言わずと知れた（知られてるのかな？）この小説の
作者「超人カットマン」である。

思えばこの時、ボディをがら空きにしていなければKOを取られる
ことはなかったのに。

???

「チエスト!!」

突然現れた桃色の髪の少女の渾身の飛び蹴りを、カットマンはモロに腹に喰らった。

カットマン

「って、また来やがったかキリエ・フローリアン。」

アミタ

「ピンクの不肖の妹が迷惑をかけました。」

キリエ

「どうしたもこうしたも無い。何なのよこの小説にアインハルト・ストラトスが出てるって？」

カットマン

「つーかお前、そこまで出たいの？この小説に。」

キリエ

「べ、別にそういう訳じゃないんだからね!!」

アミタ カットマン

(ツンデレのつもりかお前)

カットマン

「というか、お前らひどい目に合う役しかないぜ。」

キリエ

「酷い目に合う役って何？悪役？」

カットマン

「こんな感じ。」

ゲームの世界で大騒ぎ

アミタ

「ああ、さっきの戦闘で体力使いすぎた。」

アナウンス

「布団で寝れば体力を回復できます。」

アミタ

「そうなんだ、それじゃあお休……」

グキ（寝違えた音）

その瞬間、アミタの体が棺桶になった。

アミタ

「なんでえ！？」

アナウンス

「あーっと！優勝候補のアミティエ選手死んでしまった。どうやら寝違えたショックで体力がなくなってしまったようです。」

フレイムウィザーモン

「いや、どんだけ痛いんだよ！？」

キリエ

「ざまあないわね、この間に私はやるべきことをやるから。」

キリエが進もうとした瞬間である。偶然近くにある看板に足をぶつけ、その瞬間アミタ同様棺桶になってしまった。

キリエ

「だからなんでえ?!」

アナウンス

「あーっと、ここでもう一人の優勝候補キリエ選手も死んでしまった。どうやら看板の角に小指をぶつけ、体力がなくなってしまったようです。」

フレイムウィザーモン

「いやだからどんだけ脆いんだよ!!」

終わり

キリエ

「銀 ですか?! そりゃ声優が一緒な人いますけど。」

カットマン

「ああ、そうそう、質問が来てたから答えないと。」

アミタ

「こんな新参者の作品に質問する人っていたんですね。」

カットマン

「そういう事を言わない。今ではもうお馴染みとなっている「鳴神ソラ」さんからの質問だ。」

「ディアナモンへ、タイキと会会う前にジェネラルはいたのか？
byタクティモン」

カットマン

「と言う訳で、実際に訊いてみましょう。」

アミタ

「訊こうって、本人どこにもいないじゃん。」

カットマン

「えーと、これで良しと。」

プルルルルル……ガチャ

ディアナモン

「はい、もしもし。」

アミタ

「電話なの?!」

カットマン

「超人カットマンと申します。タクティモンさんが、タイキと会う前にジェネラルはいたのか、と質問されているのですが。」

ディアナモン

「ジェネラルですか？私の場合はジェネラルではなく、バグラ軍の地方司令官の部下だったんです。まあ困った人で色々苦労したんですけどね。って言うより、タクティモンがそんなぬるい質問をし……」

ガチャ

カットマン

「よし、今回のノルマ終わり。」

アミタ

「早いよ、っていうかさつきディアナモン最後に何か言いかけてなかった？！」

カットマン

「気のせいじゃない？」

アミタ

「いやいや、違うから。絶対最後にぬるい質問してきたんです……」

ドカーン

キリエ

「まったく、本来は私が用があつて来たのに、アミタの分際で出しやばりやがって。」

カットマン

「お前も張り切ってるな。」

キリエ

「当然よ！この間は途中で拘束されて、そのまま焼豚みたいに持ってかれちゃったんだから。」

カットマン

「と言つても、今回はこれで終わりなんだけどね。」

キリエ

「だから早いよ。もっと何かないの？」

カットマン

「無い！」

キリエ

「まったく、ところでクラウドっていったい何者なの？グランドラクモンとかなんとか言ってたけど。」

カットマン

「それはじきにわかること、グランドラクモンを説明するとすれば「魔王の中の魔王」人で表せば「BASSARA」ゲームの松永久秀だね。」

キリエ

「織田信長じゃないんだ？」

カットマン

「それでは閉店ガラガラ。」

キリエ

「っていうか待て、さっきも言っただけでなんでこの……」

そして、キリエに撃たれたアミタが目覚めるまで、この二人は喧嘩していた。

五話更新記念の回 その三（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「気を取り直していきましょう。テーマはブルーメラモン。ブルーメラモンは火炎型デジモン。必殺技は相手を凍らせる炎を投げつける「アイスボム」だ。」

モニタモンA

「超高温の体を持つのに技は殆ど冷凍系ですな。」

モニタモンB

「青いのは、空気を沢山含んだ健康的な炎だからですな。」

モニタモンC

「ところでなんで我らがここに？この前は何かの番組とコラボしてたじゃん。」

カットマン

「ああ、スタッフが、勢いに乗ってついやってしまった、今は反省してる、って事になってこうなったんだ。」

全員

「それじゃあまたね。」

第十四話 戦いの予兆

機動六課に査察が来た次の日の事である。

「突然だけど、すぐに出かけられる準備をしておいて。」

朝一番、タイキは起きるや否やはやてにこう言われた。なので、いつでも出かけられる準備をして部隊長の部屋に行くと、はやてともう一人、フェイトも一緒だった。

「とりあえずいつでも出かけられる準備はしたけど、どこかに行くんですか？」

部屋に入り、タイキが訊くと、

「これから聖王教会の本部に行くんや。そこで重要な話をするからタイキ君にも来てほしいんや。」

はやてはこう答えた、

「重要な話って？それならなおの事、」

タイキは、なおの事部外者当然の自分が参加するのはまずいのでは、と言おうとしたが、

「これからの動きにかかわる重要な話なんや、それにタイキ君に訊きたいこともあるし。」

はやてはこう言って、

「なのはちゃんはずき帰ってきたはずやけど。」

と言って、なのはと連絡を取ろうとした。しかし、回線がつながった時、聞こえてきたのはなのはの声ではなく、子供が元気に泣きじやくる声だった。

見ると、アインハルトと同様に両目の虹彩の色の違う幼い少女が、なのはにしがみ付いて泣いていた。当のなのはは困りきっており、周りにいるフォワードの四人も困っていた。

まさしく、迷子を見つけたはいいが、その子から家の場所も自分の名前も分からないと言われたお巡りさんのようだった。

（あれ、あの子は確か）

タイキはその様子を見ながら思った。そういえばこの間救出した女の子だ、と。

（うつ、どうしよう）

自分の目線の先には泣きじゃくる女の子。なのはは今猛烈に困っていた。

「行っちゃやだー!!」

彼女はそう言っで自分にしがみついている。

何故こんな事になっているかと言うと、病院に行っで彼女を連れてきたは良いものの、自分に懐いてしまったようで全然離れてくれない。なんとかスバル達に面倒を見てもらおうと思ったが、四人がかりでもまるで太刀打ちできていない。

「ああもうヴィヴィオ、お願いだから泣かないで。」

なのははこう言いながら思った、泣く子には勝てないと言うのが本当だ、と。

すると、扉が開いて、はやて、フェイト、タイキが現れた。

「エースオブエースでも勝てない相手がいるんやね。」

なのはは面白がっているはやて達に、

（なんとかして）

と、念話で訴えた。

様子を見ていたタイキは、

（それなら）

と考え、

「リロード！」

クロスローダーを掲げると、手始めにキュートモン、チビカメモン、スターモンズ、バステモンを出した。

「あれをどうにかできる？」

タイキは泣きじゃくるヴィヴィオを片目で見ながら、キュートモン達に訊いた。

「任せるっキュ！」

キュートモンはこう言って、先陣切って向かっていった。

「泣いたらダメだっキュ。」

キュートモンはヴィヴィオを撫でながら言った。

「そうだぜシスター！そしたら俺たちも悲しいぜ！」

続いてスターモンズもやって来た、少しばかり低くなっているとはいえ、相変わらずテンションが高い。

「僕たちヴィヴィオと友達になりたいんだカメ。」

チビカメモンも加わったところで、ヴィヴィオは泣き止んだ。最後にバステモンが、

「別にヴィヴィオはなのはさんに迷惑をかけたわけじゃないんでしょ。でもなのはさんはこれから大事な用事があって出かけなくちゃいけないの、でもヴィヴィオが泣いてるとなのはさんはいつまでも出かけられないし、この子たちは悲しい。だからなのはさんが帰ってくるまでお姉さん達といい子で待ってましよう。」

とヴィヴィオに言ったら、しぶしぶと言った感じだったが、ヴィヴィオは了承した。

と言うことで、タイキはクロスローダーの中のデジモンの中で、今の四体とドルルモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、ピノッキモン、スパードモン、ルーチェモン、ワイズモンをお守り係りとして残していくことにした。

また、バリスタモンはメンテナンスを行う為、グラウンドラモンは眠いという事で、機動六課の隊舎に置いて行った。

「それにしても、ええ物見せてもらったわ。」

ヘリに乗って移動する最中に、はやてがなのはに言った。

「もう、笑いごとじゃないよ。」

なのはにとっても困る事である。これから里親を探さないといけないというのに、このままではそれをヴィヴィオが承してくれそうにないからである。だからと言って、無碍に突き放すのもどうかと思われるが。

「せっかくだし、なのはさんが直々に里親になればいいんじゃない。」

クロスローダーの中のスパウモンが言った。

「無理に引き離す必要も無いと思うよ。」

なのは本人は、

「帰ったら私がもう少し話してみるよ。今は周りに頼れる人がいなくて、不安なだけだと思うから。」

と、言った。

そして一同は、聖王教会の本部へとやって来た。

「うおお！すげえ！！」

周りにそびえる教会を模した建物を見ながら、シャウトモンはクロ

スローダーの中で感嘆の声を上げた。

「確かにすごいな、教会をイメージして作ってるだけあって、なかなか凝ってる。」

タイキも周りを見ながら感心していると、

「こっちやー!!」

遠くではやて達が呼んでいたので、先を急いだ。

そして、教会の建物でも特に警備の固い施設「教会騎士団本部」とある部屋にやって来た。

「どうぞ。」

二回ノックをすると、中から落ち着いた女性の声が聞こえてきた。

「失礼します。」

とりあえず、まずはなのは、はやて、フェイトが入った。

「高町なのは一等空尉です。」

「フェイト・テストロツサ・ハラウン執務官です。」

仮にも上官に会うということで、二人は真面目な挨拶を行った。そして、最後に入ってきたタイキは、

「そいで、彼が民間協力者の工藤タイキ君。」

と、はやてが紹介した。

「いらっしやい、それに初めまして。私は教会騎士団騎士、カリム・グラシアです。」

そして、四人を出迎えた修道服を身に着けた金髪の女性カリムに案内された席には、先客だろう黒い服を身に着けた男がいた。

「それで、この人はクロノ・ハラウン提督。フェイトちゃんの義理のお兄ちゃんなんや。」

彼の事は、はやてが紹介した。

クロノと呼ばれた男は一回咳払いをした。余計なことを言うな、と言いたいのだろう。

しかし、いつまでも世間話のようなことをしていても何も起こらないので。

「とりあえず、今回はこれまでの活動のまとめと、今後の話、それ

と改めて機動六課設立の本当の意味を話すな。」

と、はやてが言った。

そして、部屋のカーテンが閉まったところで、話が始まった。

「知つてのとおり、六課設立の表向きの理由は、ロストログア、主にレリックの取り締まりと、独立性の高い少数部隊の試験運用。」
まずは、クロノが口を開いた。

「後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母で上官の「リ
ンディ・ハラウン」非公式とはいえ三提督の後盾もある。」

（少数部隊、それも試験運用でここまで贅沢な後盾。一体なんで）
ここまでの話を聞いて、タイキは思った。

「これについては、私の能力と関係があります。」

すると、おもむろに立ち上がったカリムがこう言っ、持っている
紙の束の帯をほどいた。

「私の能力、プロフィール・イン・シュリフテン。」

すると、彼女の周りを束になっっている紙が回り始めた。

「これは最短で半年、長いときは数年先の未来の出来事を詩文形式
で記録した予言書を作成する能力。二つの月の魔力がそろわないと
発動させられないため、年に一度しかページを作ることができませ
ん。」

そして、その中のうち三枚が、なのは、フェイト、タイキの元に飛
んできた。とりあえず、そこに書いてある事はちゃんと意味はある
のだろうが、タイキにしてみれば完全にチンプンカンプンである。

「書いてあることは古代ベルカ語で、解釈によつては違う意味にな
ることがあるので、的中率は割とよく当たる占い程度。」

カリムはあまり便利な能力ではないと言ったが、

「それでも、聖王教会や管理局の大物達はこの予言に目を通す。」

と、クロノが補足した。ある意味では事件の予防策の一環らしい。

「ちなみに、地上本部の指導者はこの能力がお嫌いや。」

と、はやても付け足した。その指導者の事を知るタイキとその仲間
たちは、

（確かに）

一様にあの強面を思い出しながら思った、

「そして、ここからが重要な部分だ。その预言書にある事件が書き出されてる。」

クロノがこう言つと、カリムは一枚の预言書を手に取り、その内容を読み上げた。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の元、聖地よりの翼が蘇る。死者たちが踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それをさがげに、あまたの海を守る法の船も崩れ落ちる。」

ここまで聞いた時、皆は思った。それはまさか、と。

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊。」

タイキはここで気が付いた、これに抗するため機動六課があそこまで贅沢な後ろ盾になったのだ。そして、

（しかし、死せる王とか、かの翼って？）

と、考えていると、

「ですが、ちょうどタイキさんとはやてが出会つたところに、新しい预言が追加されたんです。」

カリムはこう言つと、別の紙を取つてその内容を音読した。

「偽りの竜王の元、異世界の獣が世界を駆け、破滅の炎が森羅万象を焼き尽くす。」

ここまで聞いた時、タイキとデジモン達は気が付いた。

「それってまさかD5じゃ？！」

かつて、バグラモンがコードクラウンの力を使ってあらゆる世界を破滅させようとした事を思い出したのだ。

「D5とは？」

と、クロノがタイキに訊ねた。知らないのは当然である。

「DIMENSION（次元のパワー）、DELETE（で消去し）、DEADLY（あらゆるものを破滅させ）、DESTRUCTIO

N・DAY（破壊する日）、これを略してD5と言うんです。」

タイキはこの場にいる皆に、実際に人間界でこうなった時のことを話した。あらゆる生命体は活動を停止し、建造物は荒廃して、あのまま自分たちがバグラモンを止められなかったら、あらゆる次元世界が滅んでいただろうと。

「私達の知らないところでそんな事があったなんて。」

なのは達は驚いたが、一番驚いたのはカリムだった。何故なら、その事件は自分の能力で予言されていたのだという。

「というのは後回しにして、この予言には続きがあるんです。」

カリムはこう言って、続きを読み始めた。

「絆の将と魔王が手を与し時、真なる竜王と二人の王の元、偽りの竜王の野望打ち砕かれる。」

「つまり、俺がここに呼ばれたのも。」

ここまで聞いたタイキは気づいた、ここにいる皆は「絆の将」を自分の事だと思っているのだと。

「そうや、絆の将はタイキ君やと思ったからや。ところで、魔王と真なる竜王、二人の王に心あたりはある？」

はやてがタイキに説明を行うと同時に訊ねた。

そして、魔王が誰なのかを考えた時、この場にいる人間の目がすべてなのはに集まった。

「ええ?! ひどいよみんな!」

彼女は九歳のころから悪魔と呼ばれていたのだ、大人になったのだからそろそろ魔王に昇格する所だろうと考えたらしい。

（とりあえず、ベルゼブモンとルーチェモンは魔王型のデジモンだけど、竜王はともかく二人の王って何者だ?）

タイキも考えてみたが、自分の知り合いに該当する人物は一人もいなかった。それでも、分かったことが一つだけあった。

「つまり機動六課は、実際にこの予言の中に書かれていることが起こった時、すぐに対処できるように一年限定で?」

と、タイキは訊いた。ここまでの話を整理した結果、この結論に至

ったのだ。

「そうや、それでやけどな。きつとこれから今まで以上に厳しい戦いになると思う。そもそも君たちにとっては蚊帳の外やけど。でも私たちはこの世界を守りたいんや。だからこれからも機動六課に協力してくれへんか？」

はやては真剣な口調でタイキに言った。勿論、ここでのタイキの返答は決まっている。

「ああ、誰かが傷つこうとしてるなら。俺はほっとけない。」

「そう、ありがとうな。」

そして、この場での話はお開きとなった。

ちなみに、彼らが機動六課の隊舎に帰った時、隊舎が3割ほど壊れていたという。

第十四話 戦いの予兆（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「さて、今回のテーマはナイトモン。ナイトモンは鎧を身に着けた戦士型のデジモン。必殺技は持ち前の大剣を振る「ベルセルクソード」だ。」

モニタモンA

「途轍もない重さの鎧を身に着けながら、それでもなお巨大な剣を振り回す怪力の持ち主ですな。」

モニタモンB

「一説では強すぎる力を制御するために重い鎧を身に付けてるらしいですな。」

モニタモンC

「鎧の中は汗臭そうだな。」

全員

「それじゃあ、またね。」

次回予告

ある日の事、突如機動六課を竜王を名乗る少年「キサキ」が襲撃する。そして彼とタイキの全面抗争となる。

次回「絆の将と暴君の激突 タイキVSキサキ」

実はのお話（前書き）

ここで、あの日機動六課隊舎で何があったかを説明しておこう。

実はのお話

ある日、さまざまな機械が並ぶ工場で、なのはがドライバーを片手に何やら作業していた。

「さて、調子はどうバリスタモン？」

と、なのはに訊かれたバリスタモンは、ぶんぶん腕を振り回すと、
「ダイブイカンジダ。」

と、答えた。因みになのははこれでも生粋の機械オタクなのである。魔法と出会った記念すべき九歳の時にはすでに、普通にはんだごてを使いこなしていたほどだ。精密機械の精密部分でなければ彼女でも十分に修理可能である。

「にやはは、でもこの手の機械に関しては、シャーリやヴァイス君の方がもつと上手に修理できるんじゃないかな。」

なのははこう言った、だが、
「それはダメですよ。私はともかくヴァイスさんには前科がありますから。」

どこからか現れたシャーリが、なのはにこう言って説明を始めた。
あの日、何があって隊舎が壊れていたのかと。

はやて、フェイト、なのは、そしてタイキが聖王教会本部へ行った後の事である。スバル、ティアナが通常の仕事班、エリオ、キャロ、そして学校が終わり機動六課隊舎にやって来たアインハルトがヴィ

ヴィオの世話を担当することになった。

コンピュータ室で仕事をするスバル達と言うと、

「……よし、終わり！」

「早?!?!」

ワイズモンと共に、この間の事件の調査資料を纏めていた。

「ほら、少しこっちに回しなさい。手伝うから。」

ティアナは割と容量がいいが、スバルはこの手の仕事が苦手らしく手間取っている。

「それにしても、途轍もない力を発揮しながら魔力の反応が一切ないなんて、やっぱこいつら……」

スバルがまとめている資料を見ながらぶつぶつ言っていると、ティアナのデコピンが飛んできた。

「別にこいつらの正体がなんであれ、あんたが気にする事じゃないでしょう。」

ティアナはこう言って、作業を再開した。

（一体どういう事だ？）

同じように作業しながら、二人のやり取りを聞いていたワイズモンは、パネルを叩きながらこう思った。

そして一方、ヴィヴィオの世話をしているエリオ、キャロ、アインハルトはと言うと、

戸惑いながらも積み木を積み上げるヴィヴィオを見ながら、アインハルトは思った。

（真紅と深緑のオッドアイ。この子、あの人に良く似ている）

彼女の中にある、元祖霸王こと「クラウド」の記憶の中に、彼女にそっくりな女性の記憶があるのだ。

「ねーねー、アインハルト。」

突然、テリアモンがアインハルトを呼んだ。

「?!どうしたの?」

と、アインハルトが訊くと、

「ヴィヴィオが積み木を全部積んじゃった。」

テリアモンはこう言って、不安定ながらも微動だにしない積み木の塔を耳で指した。そして当のヴィヴィオは、積み木が飽きたのか絵を描いている。

その様子を見ながら、アインハルト同様にエリオにも気になることがあった。

（普通に生まれた子供にしては人格がはつきりしすぎてる。きっと自分の元になった人物の記憶があるんだ）

これまでにヴィヴィオの様子を見て、エリオは彼女の意思がはつきりしていることを不自然に感じたらしい。

（きつとどこかで続いているんだ。プロジェクトフェイトは）

エリオがこう考えた時、

「あの、エリオ君?」

キャラコが心配そうな顔で、自分の顔を覗き込んできた。

そして、ここからが重要な話である。丁度冒頭でなのはバリスタモンの修理をしていた場所。ここではヴァイスがバリスタモンの修理をしていた。

「すげえな、こんなにハイテクながら俺の技術で十分修理可能なんてな。」

事実、デジタルワールドではタイキの仲間である「剣ゼンジロウ」がバリスタモンの修理をしていたのだ。常日頃から機械いじりをしているヴァイスの手にかかればすぐに修理できるだろう。

「ん？なんだこれ？」

ふとヴァイスは、意味不明なパーツを発見した。そしておろかな事に、そのパーツに触ってしまった。その瞬間、

「ガギユイイイン！！！！」

という意味不明な騒音が発生し、工場が爆発した。

所変わって、エリオたちは何をしていたかと言うと、お外で遊んでいた。ルーチェモンが転がしたボールをヴィヴィオが受け取り、投げ返す遊びをしているのだ。

その様子を、遠くからドルルモン、ナイトモン、バステモンが見ていた。さらに、少し離れた場所ではグラウンドラモンが昼寝をしていた。

「何事も無くて良かったですね。」

バステモンが様子を見ながら隣にいる二人に言った時である。

「ガギユイイイイン！！！！」

という騒音と共に、機動六課隊舎の一部が壊れた。

「何事だ！」

と、ドルルモンが叫ぶと、第一級警戒態勢を知らせるブザーが鳴った。

「第一級警戒態勢、しかもここでって、どんだけ危険なのよ！」

「ティア、そんな事より早くー！」

書類仕事をしていたスバル、ティアナ、ワイズモンがエリオたちに合流した時、青と黒を基調としたボディに、両腰にマシンガンのような物、腹部にスピーカーのようなものを付けた、クワガタのような機械が歩いてきた。

スバル達が、新種のガジェットか、と身構えると、

「あれはダークボリューモン！なんであの姿にー！」

デジモン達は一様に驚いた。何故バリスタモンがあんな姿になっているのかと。

「ええ？あれバリスタモンなの？」

機動六課の面々ももちろん驚いた。しかし、

「どのみち、奴をほっとけばこの隊舎はおろか周囲一帯があつという間に壊滅する。」

ルーチェモンはこう言って、普段の天使のような姿から、背中が半分天使で半分悪魔の貴族のような姿に変わった。

「ルーチェモンがフォールダウンモードになるなんて、相手は強いです。」

バステモンは皆にこう言って、ヴィヴィオを庇うようにして後ろに

下がった。

「とにかく、みんな行くわよ!!」

と、ティアナが啖呵を切ると、

「マツハキヤリバー!!」

「クロスミラージュ!!」

「ストラダー!!」

「ケリユケリオン!!」

「セツトアップ!!」

四人はバリアジャケットを身に着けた姿になった。

「武装形態。」

アインハルトも、自分の魔力を高めることで、今の姿から一気に十六歳くらいの姿に変わった。

「なんとかしてすぐに止めるぞ!!」

ドルルモンは皆にこういうと、

「ドルルトルネード!!」

尾のドリルを使って竜巻を発生させた。それに続いて、

「メテオスコール!!」

スターモンの指示の元、沢山のピクモンが襲い掛かり、

「ウルトラソニックウェーブ!!」

キュートモンは破壊力のある特殊な音波を口から発射し、

「チェックメイト・インパクト!!」

ナイトモンはポーンチェスモンズと一緒に突撃し、

「ブルーブレイブ!!」

スパイダモンは持っている短剣から青い斬撃を発射し、

「ブレイジングファイア!!」

テリアモンは口から高熱のエネルギー弾を放ち、

「デッドオアアライブ!!」

ルーチェモンは二発のエネルギー弾を投げつけ、

「霸王流、旋翔波!!」

アインハルトは、霸王流に伝わる気弾攻撃を行い、

「デイベインバスター！！」

スバルは右の拳から一筋の閃光を放ち、

「クロスファイヤーシュート！！」

ティアナは分身すると、分身たちと一緒に弾丸の雨を放った。

「エリオ流、グングニル！！」

エリオはメデューサモンがデジクロスした際に使う必殺技を自分なりのやり方で行い、

「フリード、ブラストフレア！！」

最後にキャラが、フリードの火炎の威力を上げて攻撃した。しかし、

「ガギユイイイイン！！」

ダークボリキューモンは平気なようで、

「アルティメットスピーカー！！」

腹部のスピーカーから攻撃力のある音波攻撃を行った。

「くそ、このままじゃやられる！！」

と、ドルルモンが叫ぶと、アインハルトは思い出した。この日、タイキからいざつていう時の為のデジクロスを教えてもらっていたことを。

なので、自分の緑のクロスローダーを掲げると、

「キュートモン、ドンドコモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、バステモン、チビカメモン、ワイズモン、デジクロス！！」

と、叫んだ。本来はジジモンが対応すべきポジションはワイズモンを代用した。

「グレイテストキュートモン！！」

キュートモンは甲冑を身に着け、下半身が太鼓のようになり、さらに途轍もなく巨大化した。

「デジトランス、ルーチェモン、ドルルモン、スパードモン、スターモンズ！！」

そして、ルーチェモンをスバルのマツハキャリバーと、ドルルモンをティアナのクロスミラージュと、スパードモンをエリオのストラードと、スターモンズをキャラのケリユケリオンと合体させた。

結果、スバルのバリアジャケットはダークスーツのようになり、ティアナの銃は大砲のように、エリオの槍は西洋風の形状に、キャロのバリアジャケットは星の模様のちりばめられた物に変わった。

「グレイテストソニックウェーブ!!」

一連の行動が終わると、最初にグレイテストキュートモンが動いた。自分の口と太鼓から破壊力のある音波を放ったが、

「アルティメットスピーカー!!」

ダークボリキューモンの攻撃にかき消され、さらにグレイテストキュートモン本人にも被害が現れた。

「キュー!!」

グレイテストキュートモンの唯一の弱点、打たれ弱い事を突かれたグレイテストキュートモンは倒れた。

「行くわよドルルモン!!」

ティアナはクロスミラージュと一体化しているドルルモンにこう語りかけると、

「ドルルキャノン!!」

ティアナの弾丸のスピードと正確性、ドルルモンの突實力を得たエネルギー弾を放った。

「われが求めるは流星、我が願いを届けたまえ。」

キャロが祈りをささげると、空から隕石のような火炎弾が降り注いだ。

「エリオ君!!」

「行くよ! ストラダー! スパーダモン!!」

キャロの合図を受けたエリオは、槍を構えて突撃した。さらにキャロの支援も受けたその姿は、さながら大気圏に突入するスペースシャトルだった。

エリオの一撃でダークボリキューモンは吹っ飛ばされた。

「スバル! 決めて!!」

スバルはティアナの合図を受けると、持ち前の俊敏性でダークボリキューモンとの距離を縮めて、

「パラダイム・ロスト!!」

かの暗殺拳の必殺技のときスピードで連続パンチをお見舞いした。しかし、ダークボリューモンの固い装甲の前には、まるで効いていない。

「遊ビハ終ワリダ、アルティメットスピーカー、レベルMAX。」

ダークボリューモンの腹部に途轍もない力が集まり始め、皆がもうダメだと思った瞬間、突然上空が暗くなり、落下してきた巨大な何かにダークボリューモンが潰された。

「うるせえんだよ!!!!!!!!!!!!!!」

落下してきた何かはグラウンドラモンだった。あれほど騒がしかったので起きたようだ。その場にいた皆に怒鳴ると、そのまま元いた場所へ戻って行った。

「……………」

その場に残された面子は、グラウンドラモンの怒りのすさまじさに驚き、しばらくは何も話せなかった。ヴィヴィオも、今にも泣きそうなのだが、何かがつかえているようで泣かなかった。

（ああ、これが所謂泣く子も黙るってやつか）

（グラウンドラモンの昼寝だけは邪魔しないようにしよう）

皆がそろってこう考えていると、

「あ、あのー。」

背後から遠慮しがちに呼ぶ声が聞こえた。見ると、ユーノ・スクライアがやって来ていた。

「なのはに頼まれていた資料渡しに来ただけだ。なのはは……………」
ユーノは、機動六課の隊舎が少し壊れていることに触れないようにこう訊いた。

「えーと、なのはさんは今聖王教会の本部に行ってます。」

と、スバルが行った後、

「とりあえず、どこか安全な場所を知りませんか？この子を避難させたいんで。」

ルーチェモンが天使の姿に戻り、ユーノに訊いた。この子は勿論ヴ

イヴィオの事である。

「……………それじゃあ、無限書庫にでも来ますか？」

と言うユーノの提案で、ワイズモンとルーチェモンはヴィヴィオを連れて、一時無限書庫に避難することになった。

ちなみにこの後、ダークボリユーモンは機動六課のメカニックスが全総力を費やしてバリスタモンに戻しました。そして、ヴァイスに”バリスタモンのメンテナンス永久禁止令”が出されたのは言うまでもない。

そして、無限書庫に行ったワイズモン達は、

「うおおおお！本がこんなに、夢のようだ！！！！！」

ワイズモンは、無限書庫内の大量の本を見てテンションがおかしくなっていた。

「ここにはさまざまな世界の古今東西の本がそろってるから、調べ物をするとき便利なんですよ。」

ユーノはルーチェモンに無限書庫の説明をした。

「そうなんです、でもこれでは目的の本を探すだけで時間が無くなってしまうのでは？」

ルーチェモンは、シャウトモンを連れてきたら、入った途端にぶっ倒れるだろうな、と思いながらユーノに言った。すると、

「ここでの本の探し方は変わっているのですよ。見たい本のジャンルやタイトル、作者を想像するだけでその本が入った本棚がやって来ます。」

ユーノが補足説明をした。なので、ルーチェモンは政治に関する本の事を考えた。すると、どこからか政治の本で埋め尽くされた本棚が出現した。

「確かに、これは便利だ。」

と、ワイズモンが関心していると、大量の本を見ているが、それも理解できる内容ではないため、手持無沙汰なヴィヴィオが目に入った。

「とりあえず、私はヴィヴィオに絵本を読んであげていとうしよう。ルーチェモンは、」

「僕は調べたいことがあるんで、終わったら変わりますよ。」

こう告げると、二人は別れた。ワイズモンは適当に絵本を見繕うと、ヴィヴィオの所へ持つて行った。

ルーチェモンは、

「霸王イングヴァルトについて書かれた本はと？」

霸王について書かれた本を探した。すると、出てくるわ出てくるわ、小説や歴史読本、研究記録がところせましと並んだ本棚が沢山やってきた。その中でも、

「これは、霸王本人の書いた本。」

霸王イングヴァルトの書いた自伝を見つけた、その内容を速読で読んでみると、一つの項目にたどり着いた。そこには、イングヴァルトと一緒にヴィヴィオと同じ色の双眸異色の女性が写っている挿絵が入っていた。

「聖王オリヴィエか。」

ルーチェモンは、ワイズモンの持つてきた絵本を真剣に見ているヴィヴィオを見ながら思った。

（まさかね）

ルーチェモンは、ヴィヴィオは聖王と関係があり、それが何か大きな事件につながるんじゃないかと考えたのだ。しかし、そこに書かれていることがどれだけ本当かは分からないが、最後の聖王には生涯配偶者はいなかったと書かれていた。

実はのお話（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！」

カットマン

「さて、今回のテーマはルーチェモン。ルーチェモンは天使の姿をしたデジモン。パワーアップすると「フォールダウンモード」、さらにパワーアップすることで「サタンモード」になる強力なデジモンだ。必殺技は七つの光弾を投げつける「グランドクロス」この技はセラフィモンの「セブンヘブンズ」と互角の威力があると言われる。」

モニタモンA

「天使型の時は飛び道具を使いますが、墮天した姿になると格闘技を使うようになりますな。」

モニタモンB

「さらにサタンモードになると、本体は外側の肉体が抱えている「ゲヘナ」の中に移動しますから、並みのデジモンでは勝てないですな。」

モニタモンC

「魔王の中ではほぼ最強クラスですな。」

カットマン

「因みに、グランドクロスは天文学の用語で、特定の惑星が十字を描いて配置される状態を表すんだ。この並びは昔から不吉だと言われているんだ。」

全員

「それじゃあまたね!!」

第十五話 絆の将と暴君の激突 タイキVSキサキ

タイキ達が聖王教会の本部に行った次の日、目覚めたなのは気が付いた。自分の寝ているベッドにヴィヴィオとフェイトと一緒に何かがいる事に。

見ると、青色と白色の体に小さい角を持った竜のようなデジモンが寝ていた。

「ねえ、起きて。」

なのはヴィヴィオ達を起こさないように配慮し、慎重にそのデジモンを揺り起した。

「うっ、もう食べられないよ。」

そのデジモンは寝言でこう言った。仕方ないので、なのははうまくそのデジモンをベッドから引きずり出し、鼻をつまんだ。結果、三秒ほどでそのデジモンは起きた。

「うっ、なんだあ。」

そのデジモンが頭を振りながら言うと、

「別に何かしようとかいう訳じゃないの、ただあなたが何者が訊きたいだけ。」

なのはは優しい口調で言った。万が一敵の鉄砲玉だった場合、かなりの命拾いをした事になる。

「俺はブイモン。ところでここはどこ？」

ブイモンと名乗るデジモンはこう言って、

「ところで、俺の持ってきたクロスローダー知らない？」

と、なのはに訊いた。

「え？そんなものは見ていな……」

なのははそういつて周りを見渡し、ヴィヴィオの所を見た時、目が見えなくなった。ヴィヴィオが赤と青のツートンカラーのクロスローダーを持っているのだ。

「あ、俺のクロスローダー。」

その事に気が付いたブイモンは、ヴィヴィオを起こさないよう慎重にクロスローダーを取り上げようとしたが、クロスローダーは手から離れなかった。

「ダメだこりゃ、完全にこの子のことになってる。」

ブイモンはこう言つて、ヴィヴィオの元から離れた。困つたなのは、少し考えてから。

「仕方がないし、フェイトちゃんが起きるまでここに居て。」

ブイモンにこう言つと、新人たちの訓練に向かつていった。

そして、新人四人とタイキ達の集まつた訓練場では、
「本日より、ナカジマ陸曹が機動六課に協力してくれる事になりました。」

なのはが、皆にギンガが機動六課に来ることを紹介した。皆が簡単に挨拶した後、ギンガも一緒に訓練を開始した。
スバルとギンガ、シャウトモンはヴィータから、ティアナとキャロなのはがから、エリオはナイトモンと一緒にシグナムと訓練を行っている。

最後に、隊長チームとフォワードチームで模擬戦を行い、結果的には隊長チームが勝つた。そして、フォワードたちが今回負けた理由を話し合っている時、ヴィヴィオがブイモンと一緒に訓練場にやって来た。

「あ、ヴィヴィオー。」

と、なのはが呼んだ時である。ヴィヴィオが転んだ。傍にいたブイモンはすぐに起こそうとしたが、なのはが目配せする事で止めると、
「ヴィヴィオ、自分で立つてここまで来てみよう。」

と、ヴィヴィオに言った。ヴィヴィオ自信は半ば嫌そうだったが、頑張って立ち上がるうとしている。しかし、結局いい所でまた倒れてしまった。

「ママ。」

ヴィヴィオは涙ぐみながらなのはを見ている、

「うん、ママはちゃんとここにいるよ。」

いずれにしてもなのはは、この場でヴィヴィオが自分で立てるようになるのを待つらしい。

「ダメだよ、ヴィヴィオはまだ小さいんだから。」

でも最終的には、傍にいたブイモンがヴィヴィオを立ち上がらせた。

「もう、ブイモンはヴィヴィオに甘いよ。」

「なのはが厳しすぎるの、厳しくするのはもつと後でも十分だと思うよ。」

なのははブイモンに文句を言ったが、ブイモンは見事に切り返した。

（でも良かった、ヴィヴィオ、ブイモンと仲良くなれたんだ）

それでも、なのはは心の中でこう思った。思えば、昨日もデジモンを見てあまり驚くそぶりを見せなかったので、この手の適応力があるようだ。

（というか、ママって？）

様子を見ていた連中は一様にこう思った。彼らは昨日の夜、なのはがしばらく自分がヴィヴィオの親代わりになるとヴィヴィオに告げた時、ママと呼んでいい、となのはに訊ね、それをなのはが了承した一連の行動を知らなかったのだ。

その後、アインハルトもやって来たところで、再び訓練を再開した。

スバルはアインハルトと格闘技のスパarringをやっている。エリオはスパードモンの変化した槍を持って、ナイトモンと接近戦の訓練をしている。ティアナはリボルモンと早撃ちの勝負をして、キャラはシャウトモンとの連携の練習をしている。そしてギンガは、「タイキ君、ちょっとスパーの相手してくれる？」と、タイキに声をかけた。

「え？いいですけど。」

そしてその後、タイキがアインハルト戦でも見せた天賦の才と言ってもいいほどの格闘術を見せ、ギンガから自分の流派に弟子入りするようにと、散々勧められたのはいい思い出である。

「みんなの調子はどうかな、フェイトちゃん？」

なのはは、テリアモンとブイモンと遊んでいるヴィヴィオを横目で見ながら、隣にいたフェイトに訊いた。

「いい感じだと思うよ。間違えなくみんな強くなってる。」

「それにデジモン達との連携も取れるようになったし。これなら何の問題もねえよ。」

フェイトと一緒にヴィータがこう答えた時である。突然訓練場に、隕石のような勢いで何かが落ちてきた。

「なのはさん！訓練場に巨大な魔力反応が発生しました！！」

ロングアーチスタッフの連絡を受け、みんなでその場所を見に行くと、まるで未来からきた殺人口ボットのように一人の少年がその場にいた。ただし、ちゃんと服は着ている。

「あーあ、転送装置を使っただけで肝心の着地に大失敗とかありかよ。」

少年は、少女のような可愛らしい見た目には似合わない、乱暴な口調でこう言った。

「あー！！あいつは！！」

砂煙が収まり、少年の姿が明確に見えると同時に、ヴィータは声を上げた。何故なら、彼は以前ヴィータ達が出くわした立てこもり事件の現場に登場し、見事な手並みで事を収めた少年だった。また、

アインハルトと路上喧嘩を行った少年も彼である。

「あの時の――」

ヴィータがこう叫んだと同時に、

「えーと？誰？」

少年はこう言った。

「つーか！人に名を聞かずにまず名乗れ――」

ヴィータは、自分の事を知らないと言われ腹が立ったのか、乱暴な口調でこう告げた。

「俺はキサキ、えーっと、竜王とでも名乗っておこうかな。」

少年はその場にいる皆にこう言った。その瞬間、タイキ、なのは、フェイトは驚いた。カリムの予言の中に、真偽二つの勢力で出てきた「竜王」が目の前に現れたのだから。

「転送装置の着地に失敗したって言ったよね、何しに来たのか」お話”聞かせてもらえる？”

なのはが少年「キサキ」にこう訊いた。

「そうだね、”ふくしゅう”かな。」

キサキはこう言って、今にも走り出そうとする陸上選手のような態勢になった。

「気を付けて下さい。来ます――！」

アインハルトが皆に合図すると同時に、キサキは飛び出した、訳ではない。飛び出すと見せかけて、すぐさま立ち止まったのだ。このフェイントで、この場にいる全員の間合いがくるった。

キサキは、右手の人差し指と中指を立てて挑発を行った。これを見て、

「馬鹿にしてんのか――！」

一番最初にヴィータが飛び出した。ハンマーを構えて突進して言ったが、

「この間も言いましたよ、頭に血が上った状態での行動は成功しないって。」

キサキはこう言うと、ヴィータのハンマーを回避する動きと同時に

掴んで、巧みな動きでヴィータに隙を作り、渾身の蹴りをお見舞いした。

「うわああ!!」

ヴィータはうまく防御することが出来たが、それでも凄まじい衝撃を受け大きくふっ飛ばされた。

「次!!」

キサキはお化けと火の玉を合わせたような魔力弾を一瞬で作り上げると、渾身の力を込めて投げつけた。しかし、魔力弾は見当違いな方向へと飛んで行って爆発した。

「あれ？」

これには、その場にいる者は全員、当然キサキも驚いた。

「はあ、驚いた。」

なのはの傍でヴィヴィオを守っていたブイモンはため息をついてこう言った。しかしなのはは、

「当てることが出来なくてもあんな複雑な魔力弾を一瞬で作り上げるなんて。」

キサキの芸当に驚いていた。

「でもとにかく、早く何とかしないと!!」

スバル達はこう言って、キサキに飛びかかって行つた。

「四人同時ね。いいよ、来なよ。」

キサキはこう言つと、最初に柔道の要領でスバルを投げ飛ばし、続いて遠くから銃撃を行おうとしていたティアナを、素早い動きでスープレックスで投げ飛ばし、エリオをヴィータにやったのと同じ要領で転ばせた後、上空を飛んでいた巨大フリードを地面に激突させた。

「飛竜の焼印押し!!」

その様子を見ていたタイキは、

（なんて奴だ、仮にも普段から戦闘訓練を積んでる魔道士四人を一度に相手して無傷、その上息も上がってない）
と、思っていた。

しかし、問題のキサキは、

「あーあ、やっぱり手を抜いてればこの程度か。」
と、言い放った。

（どういう事だ？ただの見栄ならいいけど）

キサキの言葉を聞いたタイキがこう思っていると、キサキは腰から水色のマイクのような機械を取り出した。

「あれって！クロスローダー？！」

皆が驚くと同時に、

「リロード！エクスブイモン！ステイングモン！」

キサキはクロスローダーを掲げて、こう叫んだ。すると、クロスローダーから発せられた光の中から、頭に大きな角を生やし、腹部に「X」のマークが付いた水色の竜型デジモンと、深緑色の昆虫のような姿のデジモンが現れた。

「え？ステイングモン？」

現れたデジモンに、タイキ達は驚いた。ステイングモンとは以前会ったことがあるのだ。

「む、君たちは俺を知っているのか？済まないが、俺は君たちとはあったことがない。」

ステイングモンはタイキ達にこう言った。驚くタイキ達に、

「タイキ、アイツはきつと私たちがハニールランドであつた个体じゃない。きつともつと他のデジモンよ。」

メデューサモンが言った。

「んで、今回の相手は奴らなのか？キサキよ。」

そしてエクスブイモンがキサキに訊くと、

「ああ、それに今回は本気だしてもいいぞ。奴らを相手にするとなると、お前らだけじゃ少なすぎるかもしれないしな。」

キサキはこう答えた。

「そうか、そういう訳じゃ。観念して私と戦いなさい。」

エクスブイモンはこう言うのと、腹部のXマークから光線を発射した。
「エックスレイザー！！！」

皆はそれを間一髪で回避すると、最初にシャウトモン、バリスタモン、スパロウモンが向かっていった。

「ラウディロツカー!!」

「アームバンカー!!」

シャウトモン、バリスタモンは得意の打撃技でエクスブイモンに襲い掛かったが、エクスブイモンはそれを簡単に受け止めた。

「ナンティウ馬鹿力ダ。」

「まさかこの程度ではなかるう?」

「当然だ、このまま終わると思うなよ。」

また、ステイングモンとスパロウモンの方は、

「うう、速いうえに硬い。」

スパロウモンは自分の攻撃が当たらず、当たってもそんなに効いていないために困っていた。

「お前も凄いよ。ここまでのスピードは到底追いつくやつはいるまい。」

ステイングモン自身も、スパロウモンの素早さには苦戦しているようだ。

そして、ジェネラルは本陣で傍観していた訳ではない。キサキは戦いが始まるや否や、真っ先にタイキに襲い掛かった。

タイキ自身、戦闘中にジェネラルへ直接攻撃をするジェネラルに出会ったのはこれが初めてなので、対応にてこずった。

五発目の蹴りをなんとか回避したところで、シグナムが助太刀に入ってくれた。

「少なくともタイキは礼節をわきまえた人物だが、お前は違うようだな。」

と、シグナムがキサキに言うと、

「恋愛と戦争にはあらゆる戦法が使える、って言葉知ってます?」

キサキはこう言って、シグナムと距離を取った。

（あの子はここに来た理由を復讐って言ったけど、タイキに何か恨みでもあるのか?）

クロスローダーの中にいるジジモンは、タイキと繰り広げたこれまでの冒険を思い出していた。しかし、キサキと言う名の人間は、彼の記憶のどこにもなかった。

（それにしてもあ奴、誰に復讐しに来たんじゃ？）

ジジモンは心の中でこう思った。

そしてエクスバイモン達と戦うタイキ達は、いったん相手との距離を取った。

「あはは、お主たちやつぱ強いなあ。気にいったよ。」

エクスバイモンはシャウトモン達にこう言ったが、当のシャウトモン達は、

（強いだと、あれだけやりあつて息も上がらず、汗もかいてないなんて）

「奴らの実力は俺たちより上か？」

と、みんなで考えていた。そんな中、

「キサキ、でいいんだよね。」

なのはが前に出て、キサキに声をかけた。

「一体誰が目的でここに来たの？」

対するキサキは、

「ここに来たのはただの景気付け、俺の討伐対象はもつと大規模ですよ。」

と、答えた。その後、

「さてと、ここからが本気だー!!」

と叫んで、クロスローダーから赤い翼を持つ巨大な鳥「アクイラモ

ン」、白い猫のような生き物、古代に生きた草食恐竜のような生き物、背中に六枚の翼を持つ天使型デジモン「エンジェモン」を出現させた。

「な！テイルモンにアンキロモンだと?!」

「それにあのアクイラモン、この間へりを襲撃した奴だ!」

「しかもこの布陣は。」

タイキ達クロスハートの面々は皆驚きの声を上げた。そんな中で、キサキはクロスローダーを掲げると、

「エクスブイモン、ステイングモン、デジクロス!!アクイラモン、テイルモン、デジクロス!!アンキロモン、エンジェモン、デジクロス!!」

と、叫んだ。結果、体中を武装した竜型デジモン、白と赤の混ざった羽を身に着けた人型デジモン、土偶のような形のデジモンが現れた。

「パイルドラモン!!」

「シルフィーモン!!」

「シャッコウモン!!」

これにあわせタイキも、ディアナモン、メデューサモン、グレイモン、メールバードラモンを出す、

「グレイモン、メールバードラモン、デジクロス!!」

グレイモンとメールバードラモンをデジクロスさせた。その後、

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、スパロウモン、スパーダモン、デジクロス!!」

元々出ていたシャウトモン達もデジクロスさせた。

「メタルグレイモン!!」

「シャウトモンx5S!!」

そして、それぞれのデジモンが向かい合ったところで、再び戦いが始まった。

シャッコウモンとメタルグレイモンが組み合い、それに続いてシルフィーモンがディアナモン、メデューサモンと交戦を開始した。また上空では、シャウトモン×5Sの剣と槍の攻撃に、パイルドラモンが両手のスパイクで対応している。

その様子を見ながら、ティアナは思った。

（どうしたのかしら？ シャッコウモンはともかく、パイルドラモンとシルフィーモンはあまり派手な事をしていない）

シャッコウモンとメタルグレイモンの戦いである押し合いでは、両者ともに一步も譲らず、メタルグレイモンが飛び道具を使おうとしても、シャッコウモンが目から発射する光線で阻止するという五分五分の勝負を繰り広げているが、シルフィーモン、パイルドラモンの戦いは、相手の攻撃を防ぐか避けるかどちらかし行っておらず、シャウトモン×5Sやディアナモン、メデューサモンはやりづらそうなぞぶりを見せている。

そんな中、キサキはどうしていたかと言うと、

「悲しみの声は天を侵し、怒りの血は大地を蝕む。」

古代ベルカ語で、こういう意味になる言葉を紡いでいた。

「我が暴威はケイリスを包み、我が怒りは戦乱を惑わす。」

古代ベルカ語が分からないタイキ達やなのは達は、何言ってるんだ、と思っていたが、アインハルトは、

「この言い回し、まさか！」

唯一古代ベルカ語が少しわかったので、彼の言っている言葉の意味が分かった。

「ゆえに我は狂王、なれば我は暴君。竜王エイリーンの名の元、卿

が絶望の底に沈む事を所望す。」

キサキがここまで言ったとき、場の空気が変わった。

「気を付けて下さい！彼は……！！」

と、アインハルトが言った時、キサキはクロスローダーを掲げると、
「パイルドラモン、シルフィーモン、シャッコウモン、デジクロス
……！！」

と、叫んだ。結果、巨大な翼を六枚持ち、白い色をした聖竜型デジ
モンが現れた。

「セイントドラモン……！！」

そして、変化はキサキにも現れた。体中の彼方此方が変化を始め、
次の瞬間、光輝く青い竜になっていた。

「な？変身した？」

「あんな魔法、今まで見たことが無い。」

ヴィータとシグナムがこう言うのと、

「今は失われた魔法の一つです。古代ベルカ時代、ケイリスという
国に君臨していた暴君、通称「竜王」はあの魔法のために竜王と呼
ばれているんです。」

アインハルトが、自分の中にある霸王の記憶を頼りに皆に説明した。

「あの姿になればあらゆる身体能力が強化されま……」

アインハルトがこう言った瞬間、竜となったキサキの姿が消え、ア
インハルトがふっ飛ばされた。

「あのスピード、フェイトの三倍はあるな。私にも見えなかった。」
シグナムはこう言うのと、愛用する剣レヴァンティンを鞭のような形
状に変化させ、振り回した。

「よし、広範囲に攻撃すれば速いほど回避が難しくなる……！！」
ヴィータがこう言った時、キサキはレヴァンティンを握むと、投げ
縄のように振り回した。結果、レヴァンティンはシグナムの体に巻
きついた状態になった。

「さてと、このまま引つ張れば身体的にいろんな意味で拙い事に。」
キサキが面白そうに言うと同時に、

「ハーケンセイバー!!」
フェイトの投げつけた斬撃が飛んできた。キサキはそれを紙一重で避けると、上空へあがりフェイトと戦い始めた。

「スリービクトライズ!!」

「アロー・オブ・アルテミス!!」

「スレイ・エレイン!!」

「ギガデストロイヤー!!」

四体のデジモンは、セイントドラモンに渾身の攻撃を放った。だが、
「ホーリースパーク!!」

セイントドラモンの体から迸る聖なる電流に阻まれ、攻撃は一発も当たらなかった。

「アラミダマ!!」

続いて、目から発射した光線で、ディアナモン、メデューサモン、
メタルグレイモンを倒してしまった。

「ビクトリーブレイブ!!」

シャウトモン×5は一瞬の隙を付いて、槍で突こうと突進した。
しかし、攻撃は簡単に防がれてしまった。

「デメエ、ほんとにデジモンかよ!!」

「それもそうじゃ、それに私に手こずっていても、私の仲間のもつ
と強い奴も勝てんぞ。」

シャウトモン×5の言葉に、セイントドラモンはこう返した。

そして、超高速の空中戦を繰り広げるキサキとフェイトは、
(凄いスピード、まともによっても勝ち目は無い)

フェイトはソニックフォームとなってキサキと戦っている。しかし、
「いいんだ、そんな状態で俺の攻撃を喰らえば一撃必殺だよ。」

キサキはフェイトにこう言っ、口から青い炎を吐き出した。至近
距離からの攻撃だったため、フェイトは炎に巻き込まれ、墜落した。
「リロード！ベルゼブモン！！」

その様子を見ていたタイキは、ベルゼブモンをリロードしキサキに
当たらせた。これまでやったことが無い、人間にデジモンをあてが
うのには抵抗があったが。

「デス・ザ・キャノン！！」

ベルゼブモンは「ベレンヘーナ」から発射される固い弾丸をキサキ
に打ち込んだが、キサキは右手から発生させた光の剣ですべての弾
丸を斬り落とした。そして、長い尾の一撃でベルゼブモンを叩き落
とした。

「ベルゼブモンでもダメか。」

タイキがこう言った時である。突然キサキが動きを止めた。

「あ、あれ？」

見ると、キサキの体に罅のような物が発生していた。

「ちえ、残念、もう五分か、あと十秒は持つと思ったんだけどな。」

キサキはこう言っ、人間の姿に戻った。その時、彼の体は傷だら
けになっていた。

「セイントドラモン！終わらせろ！！」

キサキにこう言われたセイントドラモンは、シャウトモン×5Sに
めがけて突進した。

「ホーリーインパクト!!」

その時、セイントドラモンは「ホーリードラモン」を思わせるドラゴンの幻影を身に纏っていた。

「コスモビクトリー!!」

シャウトモン×5Sも、左手の槍を突き出して突進した。

結果、両者共に胸に大きな傷を作って終わる事になった。

「飽きたし帰るぞ!!」

キサキはこう言って、タイキ達の前から去ろうとした。

「待て、お前は何のために復讐を?!」

最後にタイキがこう訊くと、

「それはいずれ分かるよ。それに、次は俺に絶対勝てないと思い知るがいい。」

キサキはこう言い残して、セイントドラモンと共にこの場から去った。

「しかし、なんだったんだあいつ?」

ヴィータがこう言くと、

「どこまでも分からないやつではあるな。」

シャウトモンがこう言った。

（なんだあいつ、まるでダークナイトモンみたいな奴だな）

「でもどういう事だ、次は勝てないって?」

タイキがこう言うと、

「もしかしたら、彼がホテル・アグスタの襲撃、リリスモン襲撃時

の救援を行った人物だと考えると。」

と、ティアナが言った。その時、この場にいる皆が凍り付いた。

「そうじゃん、インペリアルドラモンやセラフィモン、ガイオウモンがまだいるじゃん。」

この時キサキがまるで本気じゃなかった、と考えると、物凄く恐ろしい事である。それよりも、

「訓練場がメチャクチャに。」

メチャクチャになった訓練場を見ながら一様に思った。

（今度請求しとこ）
と。

第十五話 絆の将と暴君の激突 タイキVSキサキ（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回のテーマは「ポーンチェスモン」ポーンチェスモンはネット上のチェスゲームのデータから生まれたパペット型デジモン。必殺技は持っている槍で敵を突く「ポーンスピアー」円形の盾で敵に体当たりする「ポーンバックラー」だ。」

モニタモンA

「味方と一緒に組む「ピラミッドフォーメーション」を行うと、大抵の敵は攻撃を躊躇いますな。」

モニタモンB

「出世一番に考えていますから、口癖は「前進あるのみ」味方は全員ライバルですな。」

モニタモンC

「ちなみに、クロスハートに所属するのは白いポーンチェスモン。いつでも先制攻撃が出来ますな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ついにやって来た管理局の意見陳述会。警備にかり出された機動六課の面々やクロスハートの面々、陳述会に臨む者たちや裏で動くものたちが何をしていたか。

次回「嵐の前の静まり」

第十六話 嵐の前の静まり

ここは、ミッドチルダのとある場所。ここでは紫髪の女が、目の前で正座しているミイラのような少年に説教をしていた。

「まったく、あなたの仲間に犠牲者が出てこなかったから良かったものの。いつも勝手な行動をするのは控えろと……、話を聞いてます?」

目の前の少年はうつむいたまま、

「よし、そこだ。ここから……」

と、呟いている。女が目を凝らして見ると、少年の耳にイヤホンが付いていた。

「何を聞いて……?」

女はこういつてイヤホンを取り上げた。すると、

「ただ今ゴール!!順位は一位から五番、七番……」

と、聞こえてきた。

「って!ボートレース聞いていたんですか!!」

女はこう言った後、

「そして結果は?」

「当然大当たり……しまった。」

少年は墓穴を掘った。

「別にボートレースを見たり聞いたりするなとは言いません!だからと言ってお金かけたり、ましてや説教の途中で聞いているなんて……」

……

女がこう言うと、少年がブツブツ言っているのが聞こえた。

「けが人を長時間正座で座らせて説教なんて、ウーノは鬼です、オニババ。」

「な!それが説教されている人間の言うセリフですか!!」

とうとう女の我慢も限界か、と思ったところで、

「まあまあウーノ、彼もそれ相応に反省しただろうし、このまま続

けられてキサキにやる気をなくされては困る。」

一人の男がウーノをなだめた。

「あ、ドクター。ですが……。」

ウーノは何か言い返そうとしたが、

「しかし気になる、君の戦闘機人としてのシステムをいつも点検していて思うのだが、何故キサキと接するときだけ君は感情的になるんだい？」

ドクターことジェイル・スカリエッティにこう訊かれたウーノは黙ってしまった。

「まあ、君が彼をどう思おうがどうでもいいけどね。それよりあれはどうなっている。」

スカリエッティがこう言うと、

「はい、すでにほとんどの準備が整っています。」

ウーノは普段通りの淡々とした口調に戻って言った。

「そうか、間もなく私の悲願も達成する。」

スカリエッティは、目の前にある大量のレリックを見ながら歓喜のあまり叫んだ。一方ウーノは、

「あ、逃げられた。」

フラフラと部屋から逃げていくキサキの背を見ながらこう言った。でも追いかけようとは思わなかったらしい。

また、同じ場所のべつのスペースでは、

「へえ、すごいっすね。あんなにたくさんあった余分なデータが一瞬で全部なくなるなんて。」

赤い髪の少女「ウエンディ」が、自分の前でパネルを叩きながら作業する、悪魔のような姿のデジモンに言った。

「まあな、俺たちのようなデジモンにとってデータは何にも勝る栄養源だからな。まあ、デジノワがあれば一切の文句はないんだが。」
デジモンはこう言って、パネルを閉じた。

「はあ、やつと逃げられた。」

すると同時に、キサキがフラフラな足取りでやって来た。長時間正座させられた為、足取りが覚束無いらしい。

「まったく、今日もたつぷり絞られたようだな。」

眼帯を身に着けた少女「チンク」がキサキに言った。

「笑いごとじゃないっての。」

キサキは、今までその場にいたデジモンをしまいながら言った。そして、

「そついや、ドゥーエやクラウドから連絡は来てない？」

と、その場にいる皆に訊ねた。

「いえ、来てませんよ。」

クワットロがパネルをいじりながら答えた。

「ええ、こんな大事なことが近づいている時に？」

キサキはこういうと、

「そりゃ、あつちはあつちで今度の意見陳述会の事で忙しいのは分かるけど。」

とも言った。

「ハックシュンー!!」

一方管理局地上本部では、今まさにクラウドがクシャミをした。

「どうしました、お風邪ですか？」

目の前のピンク色の髪の女が、心配そうな顔でクラウドを見た。

「いや、どこかで誰かが俺様の噂をしているようで。まあ、誰がどこで何を話しているか大体想像つきますけどね。」

クラウドはこう返すと、

「さて、表向きの会話はここまでにして、裏向きの話ね。」

と、目の前のピンク色の髪の女性に言った。

「ドゥーエさんはどう見ます、今度の意見陳述会。もしも連中の介入がなかったらどうなると思います？」

「それは分かりませんね。レジアスには最高評議会が付いてますからね。」

「最高評議会か。時代遅れな頭脳がどれほど通用するんだか？」

二人がここまで言ったところで、レジアスから連絡があった。クラウドを呼んでいると、

「と言う訳で、行ってきます。」

「お気をつけて。」

「で、なんですか？」

「何ですかではない！！！」

部屋に入るや否や、レジアスは怒り心頭な様子だった。

「お前は最近勝手な行動が増えているそうだが、いったいどういうつもりだ？」

レジアスがクラウドにこう訊くと、

「別に俺がどこで何をしていたっていいじゃないですか。」

クラウドはこう返して、

「あなたも最近となっては、随分聖王教会や機動六課を悪く言っているようですが、何かされました？」

と、訊きかえした。

「仕方ないだろう。今では優秀な人材のほとんどは空の連中に持っていかれて、地上の戦力は手薄だ。そんな中であんな少数部隊の試験運用。しかも聖王教会の後ろ盾があるとまで言われれば、こちらに喧嘩売ってんのか、って気にもなる。」

レジアスがこう言った後、

「聖王教会と言えば、オッサンは予言見ました？」

クラウドはこう訊いた。

「オッサン言わない。それに中將はその手のスキルが嫌いなお方ですから。」

しかし、クラウドの質問に答えたのは、レジアスではなく秘書のオリスだった。

「そうなんですか、そこにオッサンの最期が書かれてましたよ。現世の竜王、憎しみの炎を迸らせ、大地の指導者焼き尽くす、って。」

クラウドはこう言ってやった、因みにこれは、製作者本人が見逃していた予言である。

「フン、竜王は大昔の暴君だ。末裔がいたとしても何ができる。」

レジアスはこう吐き捨てた。

（まあ、あいつらならやりかねえな）

クラウドは心の中でこう思い、笑いをこらえた。

そして、肝心の機動六課では、

「さて、今回の任務は今度の意見陳述会の人員警護。」

隊長たちが集まり、新人他、クロスハートのメンバーに任務の内容を告げていた。この場には、民間妙力者のアインハルトや、ブイモ

ンをパートナーにしたヴィヴィオもいる。因みにヴィヴィオはこれまでの訓練の中で、デジクロスができるようになっていた。

「まずは私とヴィータ隊長、フォワード四人とタイキ達で行くよ。」
なのはは後ろのヘリを指しながら、この場にいる皆に言った。

「それなら、リロード!!」

タイキはこう言って、クロスローダーからグレイモン、メイルバードラモン、メデューサモン、ナイトモン、ポーンチェスモンズ、グラウンドラモンを出した。

「皆はここに残って、いざって時の警備をしてくれるか。」

「任せる。」

「ばっちり守つていてあげる。」

タイキはこの防衛を行うのが、シャマル、ザフィーラ、アインハルト、ヴィヴィオ、テリアモン、ブイモンだけでは少ないと思ったのか、自分のデジモンの一部を残していった。

そして、現場へ向かう途中、

「ところで、ヴィヴィオはどうするの。」

ふとスパロウモンがなのはに訊いた、このまま里親探しを続けるのか、と。

「確かに、せつかならこのまま自分の娘にすればいいんじゃないか?」

それに合わせて、ドルルモンもこう言った。

「うーん、厳しく接してるつもりなんだけど。」

なのはは困った顔でこう言うと、

「それでも受け入れ先は探すよ、あの子が幸せになれるような。」

皆にこう言った。

「でも絶対納得しないと思いますよ。」

「まあ確かに悩むよな、たった十九年生きただけで子供持ちなんて。」

最後にシャウトモンがこう言った。

（いや、そういう事じゃなくて）

その瞬間、この場にいる皆がこう思ったのは言うまでもない。

なのは達が現場に向かった後、隊舎に残ったアインハルトはヴィヴィオに、

「ところで、ブイモンを始めてみた時どう思いました？」と訊いた。

「え？かわいいなって。」

ヴィヴィオは無垢な笑顔でこう答えた。かわいいと言われ、ブイモンは、

「せめてカツコイイって言ってよ。」

と言っていたが、

「あの、変な生き物だと思わなかったんですか？」

「ううん、前にももっと違うけどこんな感じの生き物に会ったことがあるから。」

ヴィヴィオの純粋な答えを聞いたアインハルトは、

（やっぱり彼女は聖王の）

と思った、そして、

「静かですね、まるで嵐が来る前のような。」

空を見上げながら思った。自分が本気で力をふるう必要が出てきそ

うだ、と。

おまけ

「おねえちゃんのいじわる!!」

シャウトモンが、まるで幼い少女のような声を上げた。

「あはは、似てる似てる。」

「次はタイキの番だぜ。」

シャウトモンは笑っているタイキを見て言った。彼らは今、モノマネ大会をやっている。（暇なので）

「ああ、それじゃあ……」

タイキがモノマネをしようとすると、

「言っておくけど、真実はいつも一つ!、は無しだからね。」
と、ティアナが言った。

「すねちゃま。ってのはダメ?」

デジモン達やフォワード四人は最初、ネタが分からなかったようだが、

「ああ、なるほど。」

少し考えたら気が付けた。

「じゃあスバルな。」

タイキが順番をスバルに回した。

「それじゃあ、掃除しなさいボケガエル!!」

スバルは渾身のモノマネをしたが、

「なんかスバル自宅でよく言ってるぞ。」

シャウトモンにこう言われてしまった。

「うう、自身あったのにな。じゃあキャラ。」

スバルは少しテンションを下げながらキャラに回した。

「こういうのは、ありきたりなのをやると受けないんですね。」

キャラはこう言うと、

「吹き飛ばし！炎竜軍配撃！！」

普段のキャラからは想像できないような、低めな声を出した。

皆は一時呆気にとられていた、

「全然違和感がない。」

と、

「じゃあエリオ君。」

やりたかったモノマネを成功させたキャラは、ご機嫌な様子でエリオに順番を回した。そして、すっかり五対五に分かれた黒い長髪のカツラを被ると。

「スバルさん、僕以前から気になっていた事があるのですが。」

スコップを持ってスバルに言った。

「なんでリボルバーナックル片手にしかないんですか？そういうの凄いいライラするんですけど！！」

そしてスバルに喰いかかった。

「なんでだ？この状態のエリオは何か気に喰わん。」

特別審査員と参加しているヴィータはこう言った。因みにヴィータは一番最初にスパードモンのモノマネを完璧にやってのけた。

「となると、最後はティアナさんですね。」

エリオはカツラを外しながら言った。

「頑張つてティア、オオトリだよ。」

スバルがこう言うと、

「ねえスバル、あなた最近私に黙って色々してるよね。何してるのかな、かな？」

ティアナはうつむき気味にこう言った。

「え、ティア？」

スバルが顔を覗き込むと、

「ドルルモンも、最近は私を差し置いて現場指揮をしたりしてるけど。私邪魔かな、かな？」

今度はドルルモンに話のベクトルが向いた。

「え？ いや、そういう訳じゃ……」

ドルルモンがこう言っていると、

「嘘だ！……！」

ティアナは声の限り叫んだ。

（なるほど、上手ですね）

唯一ネタの分かったモニタモンズは、クロスローダーの中でこう思った。

その時、別な場所にいたなのはは、突如悪寒を感じた。

「どうしました、マスター？」

レイジングハートは、なのはに訊いた。

「うん、なんかこれまで感じたことのない恐怖が。」

なのははこう言って、見回りに戻った。

そして、また別の世界でも、

「はつくしょん……！」

一人の少年がくしゃみをした。

「アニキ、どうしたの？」

隣を歩いていたオレンジ色のトカゲのような生き物が訊くと、

「いや、なんかこれまで感じたことのない恐怖が。」

アニキと呼ばれた少年はこう言った。

「へえ、君が恐怖を感じるなんて珍しいね。」

「ふん、黙ってるトーマ。」

少年は自分の前を歩く金髪の少年の言葉に素っ気なく返した。

第十六話 嵐の前の静まり（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはバステモン。バステモンは獣人型デジモン。必殺技はベリーダンスを行い相手を惑わせ、操る「ヘルタースケルター」踊りながら敵に近づき吸血する「ヴァンパイアダンス」だ。」

モニタモンA

「ネコの女神と呼ばれ、派手好きでズル賢い性格のデジモンですな。」

「

モニタモンB

「アニメでは猫のような振る舞いが多いですな。聞くところによると、一日十六時間は寝ているとの事ですな。」

モニタモンC

「ところで、今回のエピソードの最後のおまけはなんなんですか？」

カットマン

「調子に乗ってついやってしまった。今はいろんな意味で」こうか

い”している。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ファンの皆様、お待たせしました。ディアナモンとメデューサモンのクロスハート加入の経緯が今明らかにあります。まずは最初にディアナモンのエピソードを語ります。

次回「ディアナモンの過去。テクノゾーンの美しき殺人姫」

第十七話 ディアナモンの過去、テクノゾーンの美しき殺人姫（前書き）

因みに、前回やったモノマネ大会の声優元ネタを公開しておきます。

シャウトモン 「となりのトトロ 草壁メイ」

タイキ 「ドラえもん（2005年以降） スネ夫のママ」

スバル 「ケロロ軍曹 日向夏美」

キャロ 「CR戦国乙女 武田シンゲン」

エリオ 「さよなら絶望先生 木津千里」

ヴィータ 「さよなら絶望先生 常月まとい」

ティアナ 「ひぐらしのなく頃に 竜宮レナ」

なのは 「ひぐらしのなく頃に 古手梨花」

アニキと呼ばれた少年 「ひぐらしのなく頃に 前原圭一」

第十七話 ディアナモンの過去、テクノゾーンの美しき殺人姫

公開意見陳述会が開催される前日、

「それじゃあ、今日もデジタルワールドの昔話聞かせてあげるから。終わったら寝るのよ。」

ヴィヴィオの寝ているベッドの傍で、メデューサモンは言った。

「今日は何が聞きたい？とりあえず前に世界を救った八人の子供の話をしたけど…」

最近メデューサモンは、ヴィヴィオを寝かしつけるため彼女にデジタルワールドの昔話をしてあげているのだ。

ヴィヴィオは即座に、

「メデューサモンとディアナモンの話を聞きたい。」
と、言った。

「そう、私とディアナモン…え？」

メデューサモンは驚いたが、自分として話して恥ずかしい事はないので、

「私はいいけど、ディアナモンは……まあいいよね、ヴィヴィオはこの事聞いたって黙っていられる？」

と、ヴィヴィオに訊いた。ヴィヴィオは頷いた。

（話すのはいいとして、この子じゃすぐに寝ちゃいそうね）

メデューサモンはこう思いながら話を始めた。

「これは私がクロスハートに入るより前の事だから、私もよくは知らないんだけど……」

かつてデジタルワールドがゾーンごとに分かれ、クロスハート、ブルーフレア、トワイライト、バグラ軍がデジタルワールドの覇権をかけた争いをしていた頃の話である。

「さて、次のゾーンはどこかな？」

シノビゾーンでのムシャモン軍との戦いの後、デジタル空間を抜けながら、タイキは言った。その後ろから、「陽ノ元アカリ」「剣ゼンジロウ」が付いてきている。

「ネネさんも仲間になってコードクラウンの数も増えてきたし、このままいけば簡単にバグラ軍やブルーフレア、トワイライトにも勝っちゃうんじゃないか？」

ゼンジロウはこうタイキに言ったが、

「いや、クロスローダーに触れていると何となくわかるんだけど。

シャウトモン×5の力で勝てるのは、運が良くてメタルグレイモンがやつとだと思う。たぶんまだダークナイトモンやタクティモンなんかには敵わないんじゃないか。俺たちもまだまだだよ。」

タイキはこう答えた。

「でも、確実に勝てる手を簡単に実行するだけでも十分に凄いと思うよ。」

アカリがタイキにこう言うと、

「へっ！俺たちは今が伸び盛りなんだぜ、すぐに連中より強くなつてやる！！」

「おう！！」

クロスローダーの中でデジモン達が言った。

前方を見ると、デジタル空間の終わりが見えてきた。そこを抜けると、これまでのように空中に出ることは無かった。代わりに、タイ

キ達が足を突いた地面は、綺麗に舗装された道路だった。

「どこだここ？」

クロスローダーから出たシャウトモンは、あたりを見回しながら言った。

「人間界に戻ってきた、って訳じゃないよな。」

ゼンジロウがこう言ったところで、

「ここはテクノゾーン。未来の科学が集う地です。」

どこからか声が聞こえた、見ると、銀色の軽装に身を包んだ女性がこちらを見ていた。

「え？誰？」

アカリは彼女が突然現れたことに驚いた、ほんの三秒前のその場所は見たばかりだったのだから。

「私はディアナモン。」

彼女、ディアナモンはこう言つと、

「抵抗はご自由にどうぞ。私は今からあなた方のすべての自由を剥奪します。」

こう宣言し、大きな鎌を携えて飛び込んでいった。

「な！いきなり攻撃かよ！！」

シャウトモンはディアナモンの鎌の攻撃をギリギリで受け止めた。

「うっ、背筋がゾクつとしたぜ。」

シャウトモンはこう言つと、

「ロックダマシ　！！」

炎の玉をディアナモンに投げつけた。しかし、炎の玉はディアナモンに当たるより前に消滅した。

「な？消滅した？」

シャウトモンが驚くと同時に、

「ハックション！！！！」

タイキ、アカリ、ゼンジロウの三人が同時にクシャミをした。

「なんだ、すげえ寒いぞ！」

ゼンジロウがこう言つと、

「当然です。私の力を使えば体感温度を通常より10 低く出来ます。」

ディアナモンはこう言った、

「だからロックダマシ が消滅したのか。」

シャウトモンがこう言うのと、

「だったらそれを上回り熱で挑むまでだ!!」

タイキがこう言って、クロスローダーを掲げた。

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、デジ

クロス!!」

そして、シャウトモン×4が現れた。

「こちらがあ有名な、お手並み拝見と行きましょう。」

ディナアモンは高速で動き始めた。

「おらおら!!」

シャウトモン×4は、頭上のバルカン砲、ブーメランやスターソードで攻撃を繰り返したが、まるで幻影でも斬っているように攻撃が当たらない。

「うち!なんてスピードだ。」

シャウトモン×4がこう言うのと、

「まさか、今この環境であなたがいつも通り動いていると?」

ディアナモンがこう訊いた。

「先ほども申しましたが、あなた方の体感温度は通常より10 低く、さらに私の冷気の効果で今の気温は氷点下7 です。そんな状態で素早く動けるとでも?」

ディアナモンはこう説明すると、

「因みに私は絶対零度の環境の中に水着で居ても平気ですけどね。」と、宣言した。

(絶対零度の中で水着?)

デジモン達ともかく、タイキ達人間はこう思った。一体何の自慢だよと。

「ともかく、ここからは私の時間です。」

ディアナモンはこう言うと、持っている鎌を弓のように使い、背中の突起物を矢のようにつがえた。

「こうなったら、スリービクトライズ!!」

シャウトモン×4は、遠距離から赤い光線を打ち出した。光線はディアナモンに命中したと思った瞬間、

「クレッセントハーケン!!」

隙だらけになっている背後から、ディアナモンが斬りかかって来た。クレッセントハーケンは、敵に幻影を見せ、敵と判断した時点で切り殺す技である。

「ぐあああ!!」

シャウトモン×4は、大きな傷を負った。

「アロー・オブ・アルテミス!!」

続いてディアナモンは、先ほどと同じように背中の突起物を自分の鎌につがえた。今回はフェイントではなく本当に放った。

放たれた矢は、シャウトモン×4を近くの建物の壁に押さえつけた。

「次は外れない。正確にあなたの心臓を打ち抜きます。」

ディアナモンはこう宣言し、再び背中の突起物を矢のように構えた。
(万事休すか?)

タイキがこう思った時である。

「デス・ザ・キャノン!!」

どこからか大量の弾丸が飛んできて、ディアナモンの足元に落ちた。
「遅いですね。」

しかしディアナモンは、自分めがけて飛んできた弾丸を、頭を動かすだけで避けてしまった。でも、それでも良かった。今の射撃はタイキ達を逃がすためであり、一瞬の隙を付いてタイキ達は姿を消していた。

「いなくなりましたか?」

ディアナモンがこう言うと、どこからか通信が入った。

「え? はい、わかりました。」

ディアナモンはこう言って、遠くに見える城へ向かっていった。

「はあ、助かったよベルゼブモン。」

まるでジャングルのような森の中で、タイキは救世主に礼を言った。
「にしても、随分厄介な相手に目を付けられたな。」

ベルゼブモンはこう言うと、

「あいつ、ディアナモンは今でこそこのゾーンの領主、「キングエデモン」の配下をしているが、ここに来る前はブラストモンの部下で、それこそ「殺人姫」の異名で呼ばれている。」

と、ディアナモンの説明をした。

「なるほどな、どうりでどこかで見たことがあると思ったが。」

ドルルモンは納得したように言った。かつては彼もバグラ軍の将「タクティモン」の右腕、通称「死神の風」と呼ばれたデジモンだったので、どこかで姿を見ていたのだろう。

「でも、なんでブラストモンの部下のデジモンがこのゾーンの領主の配下になってるんだ？」

ゼンジロウが言うと、

「建前の上では、ブラストモン側から降伏したテクノゾーンに派遣って事になってるんだ。とはいっても、主人筋はブラストモンなのだから、いくなれば目付け役って所じゃないか。」

ベルゼブモンがこう説明した。因みに目付け役と言うのは、主人筋の立場の者が部下を監視する目的で派遣する役人である。

「でも、これからどうするか。」

タイキはこれからの方針を決めるため、作戦会議を行う事にした。

一方、テクノゾーンの近くにある畑では、多くのデジモンが働いていた。ここでの農作業のため、町からかり出されたデジモン達である。

その中で一匹のデジモンが倒れた。

「デメエ！誰が休んでいいと！」

見張りをしていたデジモンの一体「メタルマメモン」が近づいていくと、

「やめて！父さんは病気なんだ！」

そのデジモンの子供と思われるデジモンが庇った。

「うるせえ！そんなの知るか！！」

メタルマメモンがこう言うと、

「いいじゃない、病気なら休ませてやりなさい。」

いつ戻ったのか、ディアナモンがメタルマメモンに言った。

「ディアナモン様、お疲れ様です。」

メタルマメモンは、ディアナモンにこう言うと、

「そういう訳だ、しばらく休んでいいぞ。ディアナモン様に感謝するんだな。」

と、デジモンの親子に言っつてその場を後にした。

そして、城の一番上の部屋では、

「余はデジノワがもつと食べたいのだ!!」

文字通り「バカ殿」と言えそうなバカ領主、キングエテモンが家臣にこう言っている。

「しかし、今季のデジノワは不作で…」

家臣のデジモンの一人がこう言うと、

「なら城のたくわえを出すがい。余が許す。」

「ですが、この城のたくわえは災害時の国民の非常食であり…」

勝手な領主のいう事に、もつともな意見で反論したが、

「国民なんてどうでもよい!!」

キングエテモンはこう言った。その時である、

「お呼びですか？」

ディアナモンが現れた、

「ディアナモンよ。ついさっきかの「クロスハート」の者どもがこのゾーンに来たと報告があった。」

キングエテモンがこう言うと、

「はい知っています、ここに来る前に交戦しました。」

ディアナモンはこう言った、

「そうか、では首尾はどうじゃ？」

「はい、見事に逃げられました。」

本来このやり取りには言い訳が付き物だが、ディアナモンはあっさり白状した。

「なんじゃと、この役立たず!!」

キングエテモンがこう言った途端、自分の座っている玉座にディアナモンの鎌が突き刺さった。

「今の言葉、訂正してもらえますか？」バカ領主”。」

ディアナモンがこう言うと、

「与えられた仕事もこなせず。ましてや余をバカ領主扱い等……」
キングエテモンの癪癢が限界に来そうになった。しかし、

「許してくれますよね？」

ディアナモンはキングエテモンに近寄ると、身に着けている服の襟を開きながら言った。そこからは細い体格の割にかなりデカい彼女の胸の谷間が覗いている。

「おお、よいぞ、よいぞ。」

キングエテモンの目が釘付けになった所で、

「グッドナイト・ムーン」

ディアナモンは両足に着けている「グッドナイトシスターズ」から白い光を発射した。その光を浴びたキングエテモンは眠ってしまった。

そしてディアナモンは、その場を後にしようとしたが、

「あの？どちらへ？」

家臣デジモンの一体がこう訊かれた、

「？、お花摘みだけど？」

ディアナモンはこう言っていると、その場から出て行った。

その後、家臣デジモン達は、

「しかし、お花摘みと言っても、何を摘んでくるんだ？食卓とかにあの方の摘んだ花が飾ってあるのを見たことがないんだけど。」

「実は噂で聞いたんだけどな、実は毒薬を調合する野草を摘んできて、キングエテモン様を毒殺するつもりとか。」

「まあ、あんなバカ領主がいなくなるなら万々歳だけど。」

と言っ内容の事をコソコソと会話した。

一方、作戦会議をしているタイキ達はと言つと、

「ダメだ、全然いい案が思いつかない。」

作戦が思いつかず、先ほどから一步も前に進んでいなかった。

とりあえずドルルモンとベルゼブモンの入れ知恵で、ディアナモンは素早く幻影を多用する戦い方をすると言うことが分かったが、素早さはともかく幻影をどうにかする方法が思いつかないのだ。

その時である、

「何かいるぞ！」

クロスローダーの中でワイズモンが叫んだ。見ると、作戦会議の最重要問題になっているディアナモンがいたのだ。だが相手はこちらに気づいていないようだ。

「あいつ、何やってんだ？」

その様子を見ながらシャウトモンは言った。ディアナモンはしゃがんで花を摘んでいるのだ。

「あれは、病気を治すヒールシンスに、滋養を付けるパワーレットだっキユ。」

薬草に詳しいキュートモンは、ディアナモンが摘んでいる花を見ながら言った。

「何に使うんだ？」

タイキは気になって、こっそり後を付けることにした。

「モニタモンズ、デジクロス！」

「ハイビジョンモニタモンズ！」

ハイビジョンモニタモンは、慎重にディアナモンに付いていった。タイキ達はその場でタイキし、ハイビジョンモニタモンが帰ってくるのを待つことにした。

ハイビジョンモニタモンズがやって来たのは、テクノゾーンの城である。

「何をしてるんですな？」

物陰でディアナモンの様子を確認しているハイビジョンモニタモンは思った。

（何故料理？）

ディアナモンは摘んできた薬草を細かく刻むと、鍋に入れてグツグツ煮込んでいた。所謂スープを作っているのは分かったが、誰に振る舞うのかと思っていた。鍋の中のスープは、一人でいただくには多すぎる量が入っている。

味を見ていたディアナモンは、これでよし、と言わんばかりに頷くと、鍋と一緒に食器を持って行った。ディアナモンが向かった場所には、病気で苦しんでいるデジモン達がいた。

「こちらをどうぞ。精が付きますよ。」

ディアナモンは、その場にいるデジモン達全員にスープを振る舞っていた。

（あいつはいったいなんなんでしょう）

ハイビジョンモニタモンは観察をここで切り上げて、タイキ達の元に戻った。

「ほんとなんなんだこいつ？」

その様子を見たタイキ達は皆一様にこう思った。

「やっぱこいついい奴なんじゃね？」

と、ゼンジロウが言うと、

「折角だし俺たちの仲間にしちまおうぜ。」

と、シャウトモンが提案した、

「はい?????」

シャウトモンの提案には、皆一様に絶句した。だが、

「まあ、敵にすれば厄介で、味方なら心強いのは確かだけど。」

と思った。なので、このコードクラウンを探すため、彼女に話を聞いてみることにした。

一方、テクノゾーンの城では、

「なにい！ディアナモンが謀反をたくらんでいるだー!!」

キングエテモンが部屋の中で叫んだ。

「はい、やつめあなた様の目を盗んで色々勝手なことをしてみたいで。」

家臣のデジモンの一人がこう言うと、

「許せん！余がじきじきに成敗してくれー!!」

と、叫んで部屋から出て行った。一方家臣のデジモンは、

「グッバイバカ領主、あんたごときがディアナモンどのに勝てる訳ないじゃん。」

と、キングエテモンに言った。

そして、タイキ達が町を歩いていると、目の前にいきなりいかにも「バカ領主」という言葉が似合そうな派手なサルスーツを着たデジモンがやって来た。

「各々控えよ、余の御前である!!」

そのデジモン、キングエテモンはこう言っただが、
「誰?????」

皆一様にこう思った、唯一彼を知っていたベルゼブモンが、
「こいつがここの領主、キングエテモンだ。」
と、皆に告げた。

「キイー、ディアナモンといい貴様等といい、何故誰も領主たる我を尊敬しない!!」

キングエテモンはこう言うと、

「こうなったら、侵略軍たる貴様等を余が自ら誅罰してくれる!!」
と叫んで、頭の王冠を取って振り回し始めた。

「な!いきなり攻撃してきた!!」

アカリが突然の事態に驚くと、

「けっ!戦わずゾーンを明け渡したお前に負けと思うなよ。俺はデジタルワールドのキングになる男だ!!」

シャウトモンは自分マイクを構えると、キングエテモンに宣言した。

「ふん、貴様のようなチンチクリンが王など、片腹……」

キングエテモンが胸を張ってこう言った瞬間、
「痛!!!!!!」

突然キングエテモンは何者かに蹴り飛ばされた。しかも蹴り飛ばした人物は、タイキが探していた人物、ディアナモンだった。

「ディアナモンか、貴様余に謀反を企んでいると……」

「それはこちらの台詞です!あなたは我が主に反旗を翻そうとして

いるという情報の裏が取れました！こうして主の討伐命令書も出ています！」

ディアナモンがキングエテモンに見せた紙には、キングエテモンを討伐せよ、byブラストモン、と書かれていた。紙の隅の方に「G級クエスト」と書かれていたが気にするまい。

「そういう訳で、彼らに加勢させてもらいますね？」

ディアナモンはこう言うと、傍にいたタイキを自分の豊満な胸に押しつけた。

「んなー！」

その様子を見ていたアカリは天地がひっくり返るほど驚いた。そして自分の視線を下に下し、そして絶望した。自分の完敗だと。

「き、貴様、なんて羨ましいことをー！」

キングエテモンはこう言っているが、当のタイキにとっては苦しいだけであった。自分の顔がすっかり埋まってしまっているため、息ができないのだ。

「なあディアナモン、そろそろ解放してやったらどうだ。」

見かねたドルルモンはこう言ってやった。そして解放されたタイキは過呼吸になりそうなほど空気を吸っている。

「貴様等、どこまでも余をコケにし負って。こうなれば余が自ら成敗してくれるー！」

キングエテモンはこう言うと、自分を連れ戻しに来た兵士達を吸収し巨大化した。

「このまま踏み潰してくれるわー！」

キングエテモンはこう言って地面を踏み鳴らし始めた。

「よし、シャウトモン×4Bだ。」

タイキはシャウトモン達を×4Bの状態にして戦おうとした。しかし、

「ダメですよ、あの状態のやつに弾丸は通じません。」

ディアナモンが止めた、

「私をご使役なさってください。うまく何とかして見せます。」

タイキは少し考えると、

「分かった、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ディアナモン、デジクロスー！」

と、クロスローダーを掲げて叫んだ。結果、シャウトモン×4は通常よりスマートになり、頭部もドラゴンらしい形に変化し、両足にグッドナイトスターズ、手にスターソードが変化した武器「スターハーケン」を持ったデジモンが現れた。

「シャウトモン×4 Aー！」
アサン

シャウトモン×4 Aは、降りてくるキングエテモンの足を見ると、スターハーケンを一閃した。結果、キングエテモンは足を怪我し、うまく立ち上がれなくなった。

「シャウトモンでしたよね。敵をうまく倒す方法、教えましょうか？」

シャウトモン×4 Aの精神体となっているディアナモンは、シャウトモンに訊いた。

「なんじゃそりゃ、そんな方法があるのか？」

シャウトモンはとりあえず聞いてみる事にした。

「戦おうとするから倒すのが難しくなるものです。討伐において重要なのは、戦うとするのではなく、殺そうとすることなのですよ。」

ディアナモンがシャウトモンにこう言っている時、目の前にはキングエテモンの拳が迫っていた。

「危ない！シャウトモン×4 Aー！」

と、タイキが叫ぶと、

「よく見て下さい、相手の死が見えませんか？」

ディアナモンはシャウトモンに言った。そしてシャウトモンは次の瞬間、

「ビクトライズイリジョンー！」

シャウトモン×4 Aは十人に分けられると、次々とキングエテモンの体を斬りつけた。結果、キングエテモンは体に合計50の太刀傷が刻まれた状態で消滅した。

「ところで、さっきの話本当なのか？」

戦いが終わってから、タイキはディアナモンに訊いた。

「いいえ、嘘ですけど。」

ディアナモンははつきりと言った。皆が驚いていると、

「流石にあのバカ領主のバカ政治をこれ以上ほっとくわけにもいきません。ですからこうしてみなさんの力をかりて討ち取った次第です。あなた方もこのコードクラウンを求めてこられたのですから、結果的には良かったと思いますが。」

と、ディアナモンは言って、

「コードクラウンでしたらこちらに。」

自分の服の胸元からペンダントのようなものを取り出した。それにディアナモンが息を吹きかけると、ペンダントは見る見る形を変え、コードクラウンの形になった。

「ええ、コードクラウンってディアナモンが持ってたの？」

ゼンジロウが驚くと、

「ここに来た当日にガメておいたんです。」

と、ディアナモンは答えた。本当にちゃっかりした奴である。

「でもまあ、とりあえずこのゾーンはバグラ軍の手から解放されたね。」

アカリがこう言った所で、タイキはコードクラウンをクロスローダーに突き刺した。結果、目の前にデジタル空間が現れた。次のゾーンへの扉が開いたのだ、

タイキ達がデジタル空間に入ろうとした時、ディアナモンが声をか

けた。

「せっつかくだし、付いて行ってもいいかな？」
と、タイキ達に訊いた。

たとえ相手がバカだったとしても、事実上ディアナモンは領主殺しと敵にコードクラウンを渡した謀反人としてバグラ軍に追われる事となるだろう。結果的にはディアナモンの自業自得だが、

「ああ、いいぜ！またあのデジクロスやろうぜ！！」

少なくともシャウトモンは彼女を歓迎した、最初に彼女を仲間にすると言いだしただけはある。

「良し行くぞ！！」

タイキはデジモンをクロスローダーにしまうと、アカリ、ゼンジロウと一緒にデジタル空間に入り、次のゾーンへ向かっていった。

第十七話 ディアナモンの過去、テクノゾーンの美しき殺人姫（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー。」

カットマン

「今回のテーマはリボルモン。リボルモンは腹部が銃器になった突然変異型のデジモン。必殺技は腹部から弾丸を飛ばす「ジャスティスブリッド」だ。」

モニタモンA

「悪を許さぬ性格で、悪人は徹底的に倒しますな。」

モニタモンB

「でもロシアンルーレットが好きで、相手が勝ったら見逃すなんて話があるよ。」

モニタモンC

「中途半端だな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

次はメデューサモンの話。ブレイブゾーン時代から、ブルーフレア時代、そしてタイキ達と出会うまでに何があったか。

次回「メデューサモン編 とある天使の戦い」

五話更新記念の回 その四

カタカタカタ

ここはとある管理外世界、ここでは一人の男がキーボードを叩いていた。

???

「よし、これで五話だ。」

彼の名は「超人カットマン」言わずと知れた（知ってる人手を挙げて）この小説の作者である。

カットマン

「さて、次は何を。」

カットマンが周りを見回していると、

???

「なら次の話の更新を急ぎなさい。」

どこからか幼いころの高町なのはそっくりな少女「シュテル」が現れた。

シュテル

「兄上、この小説が超人カットマンブランドの中で最も人気のある作品なのですよ。楽しみにしている者の気持ちを考えなさい。」

相変わらず容赦ない口ぶりである。

「???」

「そつだよお兄ちゃん、僕たちは十話に一回しか出番がないんだから。」

「???」

「せめて一話の更新速度を早くしないか!」

そして、幼いころのフェイトそっくりなバカっぽい少女「レヴィ」と、幼いころのはやてにそっくりな態度のデカそうな少女「ロード」も現れた。

カットマン

「いつも容赦ねえな。っていうか、お前らは自己のためか。」

レヴィ

「自己ではない。僕らのファンのためだ。」

カットマン

「ああそうかい。」

レヴィの言葉を耳だけで聞いたカットマンは、ゲームのホームページを見ていた。

ロード

「ポケ + ノブナガの 望だと。」

シュテル

「ロード、変に伏せすぎです。」

カットマン

「実際これを見て考えたんだけどさ。」

デジモン×恋姫 無双交友戦記

なんて小説どうかな。」

レヴィ

「何それ？」

カットマン

「言っちゃえば、恋姫？無双とデジモンのコラボだよ。外史で恋姫のキャラが経験する戦いにデジモンも混ぜるみたいな。今度短編と言う形で、予告を出すから。その感想の所で、やってほしいかほしくないかを集おうと思うんだ。」

シュテル

「随分遠回しですね。」

カットマン

「まあ、まだたたき台の状態だからね。それはそうと質問があったけ。」

レヴィ

「良かったじゃん。」

カットマン

「レヴィの言い方はともかくとして、今回の質問も毎度おなじみ」
鳴神 ソラ「さんからで、

タイキに質問？『初めてのストライクアーツはどうだった？』by
タクティモン

作者さんに質問『好きなデジモンは何ですか？』by黒狼

女性型デジモンズに質問『タイキさんへの好意はLIKE or LOVE
のどっち？』byネス

との事だ。』

ロード

「三つとは太っ腹だな。では兄殿、回答するがよい。」

カットマン

「いちいち態度デカいな。まあ最初と最後の質問はもう聞いてある
んだけどね。」

カットマンはこう言って、小型のレコーダーを取り出し、再生した。

その一

タイキ

「攻撃と防御の切り替えの難しさはあったけど、空手とおなじように
考えたらうまくいったよ。でもあの時のアインハルトは強かった
な、あの勝利はどう考えてもマグレだな。」

その二

バステモン

「私の場合は勿論LOVEですにゃ。」

メデューサモン

「私の場合はLIKEですね。彼はキリハと違って割と素直だからとても甘やかしがいがあるんですよ。」

ディアナモン

「私の場合もLIKEですね。言っておきますけど私の好意がLOVEになったら、その人生きていられませんよ。」

カットマン

「以上、キュートモンは女の子っぽいけど、一人称が僕で、自分も男の子と言ってるから省きました。」

シュテル

「案外”男の娘”かもしれませんよ。」

カットマン

「そういう事を言わない。次の質問だけど。俺様の好きなデジモン。うーん、やっぱりアイツ、じゃなくてアイツも捨てがたい、いやいや待て……………」

長考中

カットマン

「よし、俺様の好きなデジモンは”セラフィモン”だ。」

レヴィ

「お兄ちゃん、長考中って何考えていたの？」

カットマン

「しょうがないじゃん、好きなデジモン多すぎるから、全部上げる
ときりが無いし。」

ロード

「して兄殿。次は何を？」

カットマン

「いや終わりだけど。」

レヴィ

「前と比べたら長いけど、それでもほかの話と比べると短いな。」

カットマン

「別にいいだろ。つーかお前ら、いつから俺の事を、兄上だのお兄
ちゃんだの、兄殿などと呼ぶようになった。」

シュテル

「今日からですが。」

カットマン

「中途半端だな、おい！」

その後、お互いの呼称について長く話し合ったとき。

五話更新記念の回 その四（後書き）

???

「はい！！今日もタイガー道場始めるわよ！！司会はご存じ冬木の虎と。」

???

「みんなのアイドル、弟子一号です。」

???

「さて、今日は特別に弟子二号が来てるんだけど……」

カットマン

「それって俺の事か？」

???

「遅い、どこに行っていた弟子二号。」

カットマン

「すいません。ちょっと散歩してきました。」

弟子一号

「急用とかじゃないんだ。」

カットマン

「んで師匠、なんでこんな事になってるの？」

師匠

「うーん、ただ何となく。」

カットマン

「適当だな。」

弟子一号

「ところで質問がきてるんですけど。えーと、ペンネーム、匿名希望、あえて言うならマキリの虫爺から。」

君は虫が嫌いみたいだが、今度虫について語らないか、と。」

カットマン

「じゃあそいつに伝えてくれ、やだ!!!!!!!!!!!!!!!!、と。」

師匠

「随分適当ね。」

カットマン

「というか、毎回この部分はデジモン紹介に費やしてるんですけど。」

「

師匠

「それもそうね。」

弟子一号

「じゃあ説明よろしく。」

カットマン

「（人任せかよ）じゃあ今回のテーマはワイズモン。ワイズモンはあらゆることが謎に包まれた魔人型デジモン。本を憑代にすることでどこにでも出てこれると言われている。必殺技は時空席に敵を閉じ込める「エターナル・ニルヴァーナ」自分が記憶しているあらゆる

る攻撃手段を再生する「パンドーラ・ダイアログ」だ。」

師匠

「うーん、私には全然分からない。」

カットマン

「ところで、俺の相棒は^{モニタモンス}どこにやった。」

弟子一号

「ふっふっふ、やっちゃえ！バーサーCAR！！」

カットマン

「まてえ！それをやるのは俺が悪魔の実を食ってからにしてくれ！！」

カットマンの行方は誰も知らない。

第十八話　メデューサモン前編　とある天使の戦い

ここは機動六課隊舎のとある部屋。ここではメデューサモンがヴィヴィオに自分たちの昔話を聞かせていた。

「と言う訳で、ディアナモンはクロスハートの仲間になったの。」

メデューサモンはディアナモンの話が終わった所でいったん区切りを付けた。

「それでメデューサモンは？」

ヴィヴィオが目を輝かせながら訊いてきた、

「私の場合、それはね……」

と言うと、メデューサモンは自分の事を思い出しながら話を始めた。

かつてデジタルワールドがゾーンごとに分かれていた時代、フォレストゾーン同様にバグラ軍が進軍を遠慮するゾーンがあった。その場所は「ブレイブゾーン」フォレストゾーン同様に強力なデジモンが多く、その中でも精鋭と言えるデジモン達が防衛軍を結成しているため、バグラ軍も進軍を躊躇ったのだ。

しかし、三元士の一人「タクティモン」は、部下を率いてブレイブゾーンへ進軍した、その数およそ5万。対して、ブレイブゾーン防衛軍の数は、2万である。

「申し上げます！北東よりバグラ軍が来ます！！その数およそ五万

!!」

防衛軍兵士の一人、スラツシュエンジエモンが、防衛軍の総司令である「オフアニモン」に告げた、

「では、全軍に砦より出ず、籠城の構えで敵を迎え撃つと伝えなさい。」

オフアニモンが命令を告げた時である、

「どうせ相手の戦力がこちらより多いなら籠城したってどうにもなりません。一か八か出てみるのはどうですか？」

全体を白い装備でかためた天使型デジモン「メデューサモン」が言った。

「私が手勢のうち300人を率いて出てみます。」

だがオフアニモンは、

「ダメです、あなたは勿論、あなたの兵士達も失う訳にはいかないのですよ。」

と、メデューサモンに言った。しかし、

「全軍を持って城を囲まれ、持久戦となったらこちらに勝ち目はありませんよ。」

と返された。文字通り、ああ言えばこう言う、である。

「出撃許可を下さいな。いい策があるんです。」

メデューサモンはオフアニモンに言った。そして結局、すぐ帰ってくることを条件に、オフアニモンは出撃許可を出した。

「いって出撃……!」

メデューサモンは、自分の手勢の内300人の兵士を率いて出陣した。残る兵士は皆に残している。言うなれば、自分自らが前戦に出て敵の注意を引き、徐々に後退しながら全兵力を持つて釣られてきた部隊を一網打尽にする、いわば「釣の伏せ」を行おうとしているのだ。

メデューサモンが戦線に立った時、彼女は驚いた。部隊を率いるのは、タクティモンの部下でも「死神の風」を称するドルルモンで、率いているデジモンは、皆一様に幼いデジモンだった。

「まさか、こんな弱卒で私たちに勝てるんでも？」

メデューサモンは、部隊を率いるドルルモンに訊いた。

「勝ち目のないなら、ここに来たりはしないさ。」

ドルルモンはこう言うと、

「かかれ!!」

と、叫んだ。

「迎え撃て!!」

メデューサモンも同様に交戦を開始した。

最初の内は自分たちがおしていたが、敵もドルルモンの的確な指示によってうまく凌いでいる。そんな中、

「ドルルモン様!!タクティモン様がお呼びです!!」

突如上空からピコデビモンがドルルモンに呼びかけた。

「分かった!!」

ドルルモンはこう言うと、すぐさま本陣の方へ向かっていった。

「よっしゃあ!このまま殲滅だ!!」

メデューサモン側の兵士は士気を高めたが、

「いいえ、撤退します!!」

メデューサモンははっきり告げた、

「なんでさ?!」

兵士の一人が訊くと、

「これはタクティモンの策よ。きつとすぐに砲撃が飛んでくる。」
と、メデューサモンは説明した。

「でも、しつこいこの子たちはどうするんですか!!」

メデューサモンと仲の良い、ティンカーモンが訊いた。

「連れて行きましょう。」

メデューサモンがあっさりこう言うと、

「連れて行くって?うちの砦に?」

兵士の一人ピーターモンが訊いた。メデューサモンが肯定すると、

「その手に乗るか!!」

敵デジモンの一匹が襲い掛かって来た、どうやら罠だと思ったらしい。

「そう、なら。」

メデューサモンはこう言うと、

「バインド・オブ・スネーク!!」

自身の髪の毛を変化させた蛇を敵にけしかけた。蛇たちは敵に巻きつく、目が見えないようにするためグルグル巻きになった。

「さて、皆!!」

次の瞬間、メデューサモンは驚くべきことを言った。

「装備を置いていきなさい。」

メデューサモンの考えはこうである。装備をここに置いて撤退すること、いかにも自分たちが全滅したように見せかけようと言っただ。

そして、皆自分の装備を置いて撤退する際、なぜかメデューサモンは最後まで残った。

「逃げないんですか?」

と、最後の兵士が訊くと、

「あれを保つにはしつかり見てないと。」

メデューサモンはこう答え、グルグル巻きになっている敵の兵士を指さした。

「分かりました、ではお氣をつけて!」

兵士はこういうと、その場から去って行った。

(さて、この動きが見られてなきゃいいけど)

その背を見送ったメデューサモンはこう思った。因みに、今彼女は自分を見た者全員が石になるようにしている。誰かが本陣より望遠鏡などで見ていても、その時点で石になるはずなので、もし見られたのなら本陣はパニックになるはずだ。

一方、

「タクティモン様、戻りました。」

バグラ軍本陣に、ドルルモンが戻ってきた。

「そうか。」

タクティモンはこう言うつと、

「タンクモン部隊、前へ。」

と、命令した。

「な？何を？」

ドルルモンはこう言ったが、実際タクティモンが何をしようとしているのかが分かった。最前線にいる自分の部隊ごと敵部隊を砲撃するつもりなのだ。

「放て！」

タクティモンがこう言うつと、四十体のタンクモンは一斉に砲弾を放った。

一方、最前線のメデューサモンは、その様子を見ながら、
（やっぱりね）

と、思った。いままでここに進軍した軍は無いので、バグラ軍の自分たちの軍の知識が少ないと感じたメデューサモンの予想はあたった。

「シール・ザ・アイギス!!」

メデューサモンは背中に生えた六枚の翼を広げると、光り輝く盾を掲げた。

そして、四十体のタンクモンの砲撃を受け、盾が傷だらけになったとはいえメデューサモンは立っていた。周りには自分の羽が沢山散っていた。

「これでよし、少なくともこれで相手は私が無事だと思わないでしよう。」

そして、倒れているかつての敵兵を見ながら、

「ごめんね、やっぱりうちの砦には連れていけないわ。」

と、言い残し去って行った。

そしてこの後、この惨状を見たドルルモンは、メデューサモン部隊は全滅とタクティモンに報告した。

その後、ブレイブゾーンはしばらくの間平和だったが、再びある軍団が攻めてきた。

「荒ぶる竜の旗印、ブルーフレア軍です!!」

監視を行っていた兵士が報告した。

「青の軍ですね。」

オファニモンがこう言った時、

「大変です！メデューサモンの軍が青の軍と交戦を始めました。」
もう一人兵士が飛び込み、息を切らしながら報告した。

「すぐに援軍を送りなさい！！」

オファニモンはすぐさま命令を出した。現在オファニモンは大御所と言える状態の立場であり、事実上ブレイブゾーンの指揮官はメデューサモンにあるのだ。そしてもちろん、このコードクラウンも彼女が持っている。

「メタルグレイモン！俺たちの青い炎を見せてやれ！！」

青の軍のジェネラル「青沼キリハ」は、クロスローダーを掲げメタルグレイモンを繰り出した。

「ギガデストロイヤー！！」

メタルグレイモンはかなりの威力を誇る砲撃を行った。

「くそ！俺たちの力はこの間もんじゃねえ！！」

兵士たちが槍を構えて突撃しようとしたら、

「下がrinaさい！！」

メデューサモンが現れた。しかも今まで見せた事無い、ドラゴンのような魔獣形態になっている。

「撤退だ！！メデューサモン様は本気だ！！」

兵士たちはいの一番に逃げ出した。

「大將が出たら潔く撤退か？！随分臆病なんだな！！」

キリハがこう言うと、

「それはどうか！メデューサモン様と戦って、勝敗はともかく生きていられたら褒めてやる！！」
遠くから兵士たちがこう言った。

「キリハ、どうする。」

メタルグレイモンが訊くと、

「決まっていよう、完膚なきまでに叩きのめせ！！」

キリハはこう命令した、

「トライデントアーム！！」

メタルグレイモンは左手の籠手で殴りかかった。メデューサモンは回避するわけでも、防御するわけでもなくまともに喰らい、ふっ飛ばされた。

「は！大口叩いて結局それだk……」

キリハはメデューサモンの行った次の反応に思わず呆れた。彼女はかつこよく立ち上がったのではなく、

「うう、酷いです。女の子を相手にするんですからもっと手加減してください。」

いかにも、自分がか弱いです、と言いたげに振る舞っている。

「あの、とりあえず聞くけどケガは？」

メタルグレイモンは彼女に近寄って、一応訊いてみた。しかし、この行いがあだとなった。

「バインド・オブ・ゴルゴン！！」

メデューサモンはメタルグレイモンの頭を捕まえると、相手を石化させる自分の目を見せた。

「な、卑怯だぞ。」

動けなくなりそうな状態で、メタルグレイモンは抗議したが、

「ありがとう、最高の褒め言葉だわ。」

メデューサモンはこう言って、メタルグレイモンの尾を掴んで、ぶん振り回した。そして投げ飛ばすと、

「スレイ・エレイン！！」

かつて湖の神からもらったと言われる巨大な宝剣で切り裂こうとした。しかし、

「リロード！サイバードラモン、デッカードラモン。」

キリハは強力な二体のデジモンを同時にリロードし、メデューサモンの攻撃を阻止した。

「サイバーブリーダー！！」

「ヘビーテイルフック！！」

サイバードラモンは槍を持つての回転攻撃、デッカードラモンは太い尻尾でメデューサモンの剣を受け止めた。

「へえ、いいデジモンを持ってるんだ。」

メデューサモンは、相手と距離を取ると、

「聞かせてよ、あなたが戦う理由、全部否定してあげるから。」と、キリハに言った。

「俺は強くなる、失ったものを取り戻す為に！！」

キリハは決意に満ちた目でメデューサモンに宣言した、

（へえ、そうなんだ）

メデューサモンは心の中で思った、

「どうした？俺の戦う理由を否定するんじゃないのか？」

キリハがこう言うと、

「むしろ、あなたが強かった故に失ったものもあるのでは？」

メデューサモンはこう言い返し、キリハに四角い物体を投げつけた。

「これはコードクラウン、なんのつもりだ？」

メデューサモンの行動に、キリハは驚き、そして訊いた、

「それはあげるよ。でも代わりに私も連れて行ってね。別に、泥棒はまだ出来ないけどきつと覚えます、とは言わないけど。」

メデューサモンは一言こう言った、

ちなみに、メデューサモンがキリハ達と一緒にこのゾーンを去る時、陰で見ていたデジモンはオフア二モンに、
「メデューサモンは敵に捕まった。」

と、報告した。そのため、キリハしばらくの間、ブレイブゾーンの一部のデジモンに嫌われたという。

そして、ディスクゾーンでタイキ達クロスハートと再会する前に立ち寄ったゾーン「シーサイドゾーン」でのことである。

ブルーフレアの面々が何をしていたかと言うと、一部のデジモンは浜辺でくつろいでいた。主にくつろいでいたのは、ゴレモン、ガオスモン、サイバードラモン、デッカードラモン、そしてメデューサモンである。

「んで？お前はいつまでそうしているんだ？」

半ばあきれたキリハがメデューサモンの元にやって来た。

「そういう顔をしない。戦う前に参ってしまいますよ。」

メデューサモンはかけているサングラスを少しずらしてキリハに言った。

「まあ確かにここではくつろいで良いと言ったのは俺だが、だからってその服装は必要なのか？」

キリハは目のやり場に困っているようで、メデューサモンから目をそらしていった。ちなみに彼女は今、黒いセパレートタイプの水着姿である。

「海でくつろぐなら水着は必需品ではなくて？」

メデューサモンは態勢を俯せに変えながら言った。そしてキリハは、
(なんでこんなやつを仲間にしたんだ)

と、思った。だが今更後悔しても後の祭りである。ブレイブゾーンのコードクラウンは特殊で、それを守るデジモンと一心同体になっているのだという。言うなれば、メデューサモンと縁を切るには、ブレイブゾーンのデジモンにコードクラウンを返すか、誰かほかの軍のジェネラルに譲る必要がある。キリハの考えでいけば、いちいちブレイブゾーンに戻るのもめんどくさいし、だからと言って工藤タイキに頭を下げをお願いするのも癪である。

不謹慎ではあるが、このまま誰かにやられないか、と考えていた時、突然海の方こうからマンタレイモンの艦隊がやって来た。

「ああ、敵ですね。」

メデューサモンはこう言って立ち上がると、普段の装備姿に変わった。

「あれはリリスモンの手持ち戦力ですね。しかもリリスモンが直々に出てきています。」

どこから出したのか、望遠鏡で艦隊の様子を見ながらメデューサモンは言った。

「とにかく、今回はお前にも戦ってもらうぞ。」

キリハその隣でこう言った、

「はいはい、何をすればいいので、一騎打ち、それともデジクロス？」

メデューサモンはいかにもめんどくさそうに言った。

「デジクロスだ。」

キリハはこう言って、クロスローダーを取り出すと、

「グレイモン、メールバードラモン、メデューサモン、デジクロス！！！」

と、叫んだ。結果、メタルグレイモンのトライデントアームは両手に装備され、前傾姿勢から直立姿勢に変わると、背中に盾、右手に大剣を装備した姿になった。

「マルチグレイモン！！！」

「マルチグレイモン！俺たちの青い炎を見せてやれ。」

キリハが指示を出すと、マルチグレイモンはどこからでも見えるほどに巨大な青い炎の玉を作ると、

「ガイアフォース!!」

一気に手のひらサイズに圧縮し、渾身の力を込めて投げつけた。

投げつけた炎の玉は、マンタレイモン艦隊の中央に來ると、大爆発した。

「ほお、やるではないか。」

様子を見ていたデッカードラモンがこう言うと、

「まったく、いきなり攻撃なんて青の軍も容赦ないね。」

「ダメねダメダメ。」

上空からリリスモンとダメモンが降りてきた。

「出たなリリスモン、貴様にはここで倒れてもらう。」

キリハはリリスモンにこう言うのと、

「行け!マルチグレイモン!!」

と、叫んだ。

「ギガスラッシュー!!」

マルチグレイモンは海を真つ二つにするほどの巨大な斬撃を放った。

「一体どんなデジモンをクロスさせたんだい!」

リリスモンはこう言いながら、自身の必殺武器である「ナザルネイル」で斬りつけようとした。しかしマルチグレイモンは僅かな差で回避すると、

「トライデントナックル!!」

左手で渾身のパンチを放った。

「よし、いいぞー!!」

キリハは思った、もしかしたらこれは思いのほか当りかも、と。しかし、その考えは長く続かなかった。

突然デジクロスが解除され、メタルグレイモンとメデューサモンに分かれてしまった。

「な?いきなりどうした?!」

と、キリハが訊くと、

「時間切れですー!!」

と、メデューサモンが言った。

「元々デジクロスは相性の良いデジモン同士を合わせて強力な力に変える物なんです。私とグレイモンの相性はただでさえ悪いのに、おまけに最初から大技ばかり使ったのですから、そりゃデジクロスも解けるでしょう。」

メデューサモンの説明を聞いたキリハはがっかりした。やっぱりはずれか、と。

そしてリリスモンは、ここぞとばかりに反撃をするかと思ったが、思いのほかあっさり退いて行った。本人が言うには、

「なんの準備もなく、尚且つ自分一人で青の軍のデジモンに勝てる訳はない。」

との、事だ。

そして、戦いの舞台はディスクゾーンに移る。

他の三元士と違い、パワー溢れる三元士ブラストモンとの戦いの時である。キリハはメタルグレイモンとデッカードラモンをデジクロスさせた、「デッカーグレイモン」でブラストモンと戦っていた。

二体のデジモンの技がぶつかり合った後、

「ふん、そんな攻撃痛くも痒くも……」

ブラストモンはこう言った、しかし、

「かゆーいーし、いたーいー!!」

割り込んできたシャウトモン×4Kとディアナモンの飛び蹴りを喰らってふっ飛ばされた。ちなみに、かゆいがシャウトモン×4Kの

蹴りで、いたいがディアナモンの蹴りの反応である。

「っていつかディアナモン！お前なんでそっちにいるの！？」

そしてブラストモンは、ついこの間まで自分の部下だったが、突然音信不通となったディアナモンと再会し驚いた、

「こちらの方がそっちよりはるかに好待遇だったので、寝返らせていただきました。」

ディアナモンは笑顔でブラストモンに言った、

「なー！すげえナチュラルだな！おい！！」

ブラストモンは驚くと同時にがっかりすると、

「こうなったら、全員まとめて消しとばす。」

と、言つて。大量のエネルギーを収束し始めた。

「げえ、あれやるの？！」

ディアナモンは驚いた、そして、

「立ち上がれ！！私の分身！！」

と叫んで、大量の幻影を出した。またシャウトモン×4Kも、防御のため盾を構えて立ちふさがろうとしたが、なぜか肝心な所でデジクロスが解けてしまった。

「どうした、×4K！？」

タイキはシャウトモン達に駆け寄って行った。

「なんでこんな肝心な時に。」

ディアナモンはこう言つと、

「アロー・オブ・アルテミス！！」

自分の背中の突起物を矢のようにして、上空へ飛ばした。

「砕ける！！」

そして、地面に矢が刺さると同時にディアナモンは叫んだ。結果、ディスクゾーンの老朽化した床は砕け、ブラストモンは下へと落ちて行った。だが、床の崩落にシャウトモン、グレイモン、メールバードラモンも巻き込まれてしまった。

「しまった！！」

ディアナモンは幻影たちと手をつなぐことでシャウトモンを救出し

ようとしたが、結局は間に合わなかった。

そしてその後、シャウトモン達は無事に戻ってきたが、一足先にバグラ軍の本城に戻ったブラストモンの代わりのデジモンがやって来る騒ぎの後、皆が行った激しいバトルの衝撃に耐えきれなくなったゾーンがみるみる崩れていった。

「このままじゃ、ディスクゾーンとお陀仏ですね。どうします?」
メデューサモンがキリハにこう訊くと、

「言っておくが、お前と行動するのはここまでだ。」

キリハはこう言って、タイキにコードクラウンをパスすると同時に、メデューサモンをタイキのクロスローダーに移した。

「そいつはいったんお前に預ける。」

キリハはタイキにこう言い残して、ディスクゾーンから去って行った。

その時メデューサモンは、

（寂しいところもあるけど、解放されたと考えればいいものか）
と、思い。

「さてと、工藤タイキ、お手並み拝見と行きますね。」

と、クロスローダーの中で言った。

後篇に続く

第十八話 メデューサモン前編 とある天使の戦い（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー!!」

カットマン

「さて、今回はピノッキモン。ピノッキモンはジュレイモンのデータを元に作り出されたパペット型デジモン。必殺技は火薬を仕込んだハンマーで敵を殴る「ブリッドハンマー」だ。」

モニタモンA

「操り人形のように背中にひもが付いてますが、自分の意思で行動ができますな。」

モニタモンB

「性格はずる賢く嘘つきですな。」

モニタモンC

「ただし嘘をつくとき鼻が伸びますな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

メデューサモン編後篇、シノビゾーンでの出来事と、ブラストモンとの戦いが始まる。またあの人が登場。

次回「メデューサモン後篇 とある天使の戦い」

第十九話 メデューサモン後篇、とある天使の戦い

ここは、先ほどまで行われていた激闘の余波により、今にも崩れそうになっている「ディスクゾーン」ここには、ディスクゾーンの住人達と一緒に、工藤タイキらクロスハートの仲間たちが一緒に居る。「仕方ない、ここに居るデジモンを全員連れて、いったんシノビゾーンに引き返そう。」

タイキはこう言つと、自分の仲間たちと一緒にディスクゾーンのデジモン達を連れてシノビゾーンへと戻って行った。

因みに、テクノゾーンにはブラストモンがいそうなのでやめておくとの事だ。

「事情は分かりましたな。ディスクゾーンの皆様はこちらで保護しましょう。」

白い髭を蓄えたシノビゾーンの長老モニタモンは、タイキの説明を訊いてこう言つた。

「では、ここに蓄えているデジノワを振る舞いましょう。」

デジモン達は、

「やったー！デジノワだー！」

と、皆一様に歓声を上げた。シャウトモンも、少し考え事をしていたようだが、

「やったー！デジノワ デジノワ」

と喜び始めた。だが、考え事をしているのもう一人、

「タイキ？どうしたの？」

アカリはタイキの顔を覗き込みながら訊いた、

「これ、キリハから渡されたんだよ。しばらく預かっておけ、って。」

タイキは、ブレイブゾーンのコードクラウンを見せながら言った。

「その時に一緒にデジモンも来たんだよ。」

やって来たデジモンは勿論メデューサモンの事である。

「きつと傷ついているでしょうね。いきなり別なジェネラルのクロスローダーに入れられて。」

と、アカリが言う。

「それもあるんだけど、なんでコードクラウンまで一緒に？」

タイキはこう言って、クロスローダーを見た。すると、クロスローダーがひかりだし、中から白い装備を身に着けた、美しい女性型の天使デジモンが現れた。

「お初にお目にかかります、私はメデューサモン、どうぞよしなに。」

現れたデジモン「メデューサモン」は、何もなかったような雰囲気
で自己紹介した。

「え？ああ、どうも、ごていねいに。」

タイキは驚いた、なんでこんなに元気なんだ、と。普通ならショッ
クで暗くなっているはずである。

「ところで、なんでここに来たの？」

タイキがこう訊くと、

「特に理由はありません。言うなればブルーフレアをクビになりま
した。」

メデューサモンは笑顔で言った。

「それは良いけど、なんでコードクラウンまで？」

というタイキの問いに、メデューサモンは簡潔に答えた。

「うちのコードクラウンはちょっと特殊で、護り手と一身同体なん
です。ですからどちらかを移すには、一緒に移さないと行けないん

です。」

タイキは考えた。それにしてもなんでキリハは彼女をこちらに渡したのか、と。

（そりゃバグラ軍に渡すなら俺につて考えたならともかく。一体キリハの所で何をしていたんだ？）

タイキは、彼女はそこまで強い戦闘デジモンではないのか、と考えた。しかし、その考えはすぐに訂正する羽目になった。

突然二体で現れたブラストモンの分身を相手にした時、一体をメデューサモンが相手にしたのだが、「スレイ・エレイン」の斬撃一発でブラストモンの分身を倒してしまったのだ。

この力は、見ていたタイキ達人間は勿論、デジモン達も驚いた。

そして、ある日の夜の事である。タイキは、シャウトモンの不調について考えた。

「デジクロスもすぐ解けるし、戦う時も大変そうだし。何かあったのか？」

その時、キュートモンは気が付いた、シャウトモンは最近、バリスタモンと一緒にちよくちよく居なくなっていることに、そして今もない。

「分かったっキュ！シャウトモンは夜中にデジノワをつまみ食いしてるっキュ！だから調子が悪いっキュ！」

キュートモンはこう言った、そして、

「僕も見たカメ！二人が夜中にコソコソ出て行ったカメ！！」
どこからか現れたチビカメモンも言った。

「びつくりしたな、チビカメモン!!」

ゼンジロウは驚いた、

「いくらシャウトモンがデジノワ好きでも、盗み食いなんてするかな。」

アカリが首をかしげると、

「なら確かめるっキュ! 真実はいつも一つっキュ!!」

キュートモンは、あの探偵少年のような決め台詞を言った。

一方、問題のシャウトモン、バリスタモンは、森の中で何かをしていた。シャウトモンは大きい石を背負っている。

「イクゾ!」

「来い!!」

バリスタモンは手ごろな石を掴むと、シャウトモンに投げつけた。

シャウトモンはうまく回避し、間に合わない分はマイクで防いだが、五発目に当たってしまった。

「イテ!」

と、シャウトモンが言った時である。

「イテ!!」

シャウトモンの背後から声がした。

「やべ! 誰かに当たったか?!」

次の瞬間、枝をかき分け現れたのは、デジモンではなく妙齡の女性であった。その後ろからは頭にコブを作ったストライクドラモンが付いてきていた。

「あなた達、こんな時間、こんな所で何してるの?」
女性は二人に訊いた、

「別に余計なことかもしれないけど、石投げ合戦はもつと広くて明るい場所でやった方がいいんじゃない？」

シャウトモンは答えた、

「石投げ合戦じゃなくて、これでも特訓だ。最近デジクロスが簡単に解けちまうから、どんなクロスでも耐えきれるように鍛えてるんだよ。」

「デジクロスがすぐに解けるね。」

女はこう言つと、

「ちよつと診せて。」

と、シャウトモンに言つた。そして、心音や脈などを一通り見てから、

「あなた最近、相性の悪いデジモンとデジクロスしたでしょう？」
と、シャウトモンに訊いた。

「やっぱりそうか、この間ディアナモンとクロスして×4Aになったんだけど。」

シャウトモンはこう言つと、さらに、

「でもアイツには死んでも言えねえよ。あいつのクロスが原因で自分が不調だなんて。」

とも、言つた。

「俺は将来キングになるんだ、王様つてのはみんなの見てないところで努力するものだろ。」

シャウトモンの言葉を聞いた女は、

「そう、分かつたわ。」

そう言つて、隣のストライドラモンに言つた。

「活性蓬と増強茎出して。」

そして、ストライドラモンが鞆から出した生薬を混ぜ合わせると、「これを飲んで、力が付くし疲れも取れます。おそらく日頃の戦いの疲れと相まってデジクロスが弱化してると思いますから。」

受け取つたシャウトモンは一息で飲み込むと、

「ありがとよ！ところでアンタなんていうんだ？」

と、女に訊いた。

「私はプレシア・テストロッサ。デジモンドクターよ。それでこっちは相棒のストライクドラモン。」

女、プレシアはこう答えた、

「俺がキングになる日を楽しみにしてな。この日の礼をたっぷりしてやるからよ。」

シャウトモンは、まるで喧嘩を行ってやられた相手のような言葉をプレシアにかけた、

「そう、楽しみにしてるわ。」

プレシアは笑顔でこう言うと、その場を去って行った。

一方その様子を見ていたタイキ達は、

「シャウトモン、お前ってやつは。」

シャウトモンの言葉、王様は陰で努力する、自分の不調がディアナモンのせいとは死んでも言えない、という言葉に感動していた。

「あっちは問題なさそうだな。」

タイキはこう言うと、その場を去った。戻る途中、

「ボク、シャウトモンを疑っていたのが恥ずかしいっキュ。」

「僕もカメ。」

キュートモン、チビカメモンは反省していた。

そして自分たちが寝ていた小屋に戻ると、ドルルモン、ディアナモン、メデューサモンがいた。

「二人は気づいていたのか。シャウトモンの事？」

タイキは、ドルルモンとディアナモンに訊いた、

「薄々な。」

「私は最初から。」

二人は同時に答えた、

「何度あいつとデジクロスしてると思ってるんだ？」

「私だつて一応ブラストモンの片腕だったんです。仲間の健康管理くらいできます。」

そして、シャウトモンについて訊くと、

「アイツはすげえよ。なんだかんだ言つても、親分の器さ。」

「私も、彼について本当に良かったと思います。」

二人はこう答えた、

「メデューサモンはどうだ？」

タイキはメデューサモンに訊いた、

「私からは何も、さほど彼の事を知りませんから。」

メデューサモンはこう答えた、

「私たちはともかく、みなさんは早く寝たほうがいいのでは？必ず明日中にブラストモンが来ると思いますから。」

その後、メデューサモンは床の木目をなぞりながら言った。彼女が言うのは、これは「木目占い」といい、結構的中率が高いらしい。

翌朝、シャウトモンとバリスタモン、途中から二人の特訓に参加したベルゼブモンは、

「くそ、何回やっても10発目が避けられねえ。これが成功すればどんなデジクロスにも耐えられると思うんだけど。」

「最後が決まらないな。」

最後の最後で手こずっていた。

すると、どこからか、

「これがクロスハートのメインデジモン。テンポダウン、つまり拍子抜けね。」

黄色い装備を身に着けた忍者のようなデジモンが現れた。そして彼は、不思議な術で強力な重力を生み出すと、10発の弾丸を放った。(やべえ、このままじゃバリスタモンやベルゼブモンに)

シャウトモンはこう思うと、

「仲間には当てさせねえ!」

と叫ぶと、背中の大石を外すと、飛んでくる弾丸をマイクではじき出した。7発、9発、とクリアし問題の10発目が飛んできた。

「ノコリー発。」

バリスタモンがこう言った時、シャウトモンのマイクは10発目の弾丸に当たり、はじかれた弾丸は忍者デジモンに当たった。

「10発目クリア、特訓完成ね。」

忍者デジモンは、煙が晴れるとこう言った。そして、

「もうすぐブラストモンがここに来る。奴を倒してくれ。」

こう言い残し、去って行った。

「やっぱりシノビゾーン。部下の侵略記録から見覚えあったんだよね。」

シノビゾーンへやって来たブラストモンは、周りを見ながら言った。

「げえ! あんたまた来たの?!」

すぐさま駆け付けたディアナモンは、開口一発こう言った。

「私に会いたいのはわかるけど、もっと場所と時間を考えてよ。」

「んな訳あるか!!」

ブラストモンはパンチ攻撃をディアナモンにお見舞いした。

「俺様はクロスハートのコードクラウンを奪いに来たのよ。」
ブラストモンはディアナモンに言った。

「へえ、暗殺者相手に奪うなんて良く言うじゃない。」

武器の鎌を取り出しながら、不気味な笑みを浮かべて言った。

一触即発と言えるブラストモンとディアナモンの様子を見ながらタイキは思った。

（一秒でも長く時間を稼いでくれ）
と。

確かにディアナモンは強いが、ブラストモンに決定的なダメージを与えるだけの攻撃力はないだろう。メデューサモンも昨日、いざという時は自分が戦う、と言っていたが、ブラストモン相手ではどうなるか分かったものではない。

その時である、

「タイキー!! デジクロスだ!!」

遠くからシャウトモンとバリスタモンが走って来た。タイキは、

「ああ! 俺はいつだってお前を信じてる!!!」

こう言って、クロスローダーを掲げた。

「シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、ベルゼブモン、デジクロス!!」

この時、ディアナモンには援護に回ってもらうことにした。つい昨晚ディアナモンから、自分とシャウトモンのデジクロスは相性が悪

い、と聞かされたばかりだったからだ。

「シャウトモン×4B!!」

シャウトモンは、両腰に銃器を付けたケンタウロスのような姿になると、ブラストモンめがけて突進して行った。

「お馬さんがパワーで俺に勝てる……」

ブラストモンも同様に突進しようとしたら、いつ背後に回ったのか、ディアナモンに右腕を取られ、そのまま肘固めの態勢に取られた。

「負けるか!!」

しかしブラストモンは、得意のパワーでシャウトモン×4Bを押し返し始めた。

「どれだけメチャクチャなの？私の関節技受けたら大半のデジモンは動けなくなるのに？」

ディアナモンは締め上げを緩めることなく、鎌を地面に突き刺してブラストモンを止めようとしたが、ブラストモンの勢いは止まらない。

ディスクゾーンからやって来た非戦闘員のデジモン達も大急ぎで避難したが、その中の一人「ルナモン」が突然後戻りを始めた。

「ああ！危ない!!」

アカリが叫んだ時である。メデューサモンがブラストモンの進行方向に立つと、

「止まりなさい！ここから先は不可侵区域です!!」

静かな口調でブラストモンに言くと、巨大な剣を地面に突き立て、地下から水で出来た竜を召喚した。

「ストップ・ジ・ヒドラ!!」

水の竜が一斉にブラストモンを見た時、ブラストモンは青ざめた顔になり、停止した。まるで蛇に睨まれたカエルのように。

その隙にゼンジロウがルナモンを救出した。しかしそのすぐ後、復活したブラストモンの発生させた衝撃波で、ディアナモン、シャウトモン×4B、メデューサモンはふっ飛ばされた。これを見ると間一髪である。

「良かったな。」

と、ゼンジロウが救出したルナモンに言うと、

「良くないよ！シャウトモンからもらったデジノワの箱！宝物にしようと思つてたのに！！」

ルナモンは、シャウトモン×4Bの傍で潰れている、「元気出せ」と書かれたデジノワの箱を指差しながら叫んだ。実はシャウトモンが自分の分をあげていたのだ。

メデューサモンは、

「立ちなさいシャウトモン！あなたは王様になるんでしょう！あの涙を見てどう思う！！」

と、自分の後ろで倒れているシャウトモン×4Bに言った。そして、「ヒドラ、攻撃態勢。」

かつて、肉親とうぜんだったデジモンをバグラ軍のデジモンに殺された事を思い出したメデューサモンは再び剣を突き立てると、静かな声で言った。

「絶対許さない。」

メデューサモンの言葉を受けた水の竜たちは、一斉に口を開けてブラストモンに襲い掛かった。その姿は獲物に食らいつく蛇と言うより、むしろ自分や仲間の敵に襲い掛かる狼のようだった。メデューサモン自身の髪の毛も、ルナモンの大切なものを奪ったブラストモンへの怒りに合わせるように揺れているので、どこから見ても怒り心頭だと分かる。

そしてシャウトモン×4Bは、

「どうも思わない訳ないだろう。絶対守る、バグラ軍にもブルーフレアにもトワイライトにも絶対負けねえ。どんな小さな涙も見逃さねえ。」

立ち上がりながら宣言した、

「改めて皆に誓うぜ。俺はデジモンのキングになる、誰一人泣かすことのない、最強の王になー！！」

そして、飛び出したシャウトモン×4Bは、メデューサモンの操る

ヒドラを掻い潜ると、ブラストモンに猛烈な連続蹴りをお見舞いした。

「凄いやシャウトモン。」

その様子を見ているルナモンは、最初メデューサモンの怒りを怖がっていたが、シャウトモンの活躍が始まると泣き止んだ。

「バカ言ってんじゃないよ！美しさはディアナモンに譲るとしても、強さで俺様よりグッドなデジモンなんているか！！」

ブラストモンはシャウトモン×4Bの蹴りを喰らいながらこう言う
と、上空に離脱し攻撃の態勢に入った。シャウトモン×4Bが防御の態勢を取った時である。

「あなたより美しいデジモンに私は含まれないんだ。」

一体いつ来たのか、メデューサモンがブラストモンの目の前に居た。
「バインド・オブ・ゴルゴン！！」

そしてブラストモンは彼女の赤く光る眼を見た瞬間、動けなくなっ
てしまった。メデューサモンの技「バインド・オブ・ゴルゴン」は
相手を石化させる技だが、相手が強い場合少しの間だけ動けなくさ
せる効果になるのだ。だが、少し時間があるなら十分だった。スパ
ロウモンが背後からサナオリアの弾丸を撃ち込んだのだ。

「助けに来たわよ！タイキ君！」

そして、スパロウモンのジェネラルである天野ネネもやって来た。

「シャウトモン、いったん分離して×5になろう！」

スパロウモンは上空から提案した。ブラストモンはパワータイプの
デジモンなので、×4Bでパワー対決をするよりは、×5のスピー
ド勝負の方が分があると考えたからだ。勿論、自分よりベルゼブモ
ンが強いことを踏まえてもいる。

しかし、とうのシャウトモンは、

「面倒くせえ！このまま来いスパロウモン！！」

と言った。そして、

「タイキ、夢がかなうまでノンストップで行くぜ！！」

と、タイキに言った。

「ああ！一緒に行こうぜシャウトモン！今こそ×5を超えるんだ！
！」

タイキはこう言って、クロスローダーを掲げた。

「シャウトモン×4 B、スパロウモン、デジクロス！！」

そしてシャウトモンは、頭部がシャウトモン×5の形となり、背中にスパロウモンの翼が付いた姿になった。普通の×5と違うのは足が四本ある事である。

「うわ！全部くっついちゃった！」

アカリが驚くと同時に、シャウトモン×5 Bは上空へ飛び出した。

「くたばれ！！」

ブラストモンは空中より自身の体についている水晶を飛ばした。しかし、シャウトモン×5 Bの右を狙った水晶弾はディアナモンに撃ち落され、前から来た水晶弾はシャウトモン×5 Bが「インパクトレーザー」で撃ち落とし、左から来た水晶弾に至ってはメデューサモンが指を鳴らしただけで粉々に消えてしまった。

メデューサモンは、ただ自分の細い髪の毛を防御膜のように展開して、水晶弾が付いて碎けると同時に指を鳴らしたただだったが、ブラストモンは、

「なにい！あれだけの水晶弾を簡単に！お前ら何者だ！！」

当然のごとく驚いた、

「バーストダッシュストリーム！！」

シャウトモン×5 Bは、ブラストモンへの至近距離に入ると、まず×4の必殺技の「バーニングスタークラッシュヤー」を放ち、続いて×5の必殺技「メテオインパクト」を懐に打ち込み、最後に欠ける4 Bの必殺技「カオスフレア」でブラストモンを頭部以外跡形もなく消し飛ばした。

これがきっかけで戦局が動き、一気にクロスハートがコードクラウン争奪のトップに立つことになった。

「と、いう訳で。メデューサモンはクロスハートの仲間として認められたのでした。」

メデューサモンはこう言って、自分の話をしめた。ヴィヴィオは何故か疑うような目をしている。

「それ本当の事？」

ヴィヴィオが訊くと、

「ううん、嘘。」

メデューサモンははっきりと言った。

「ふーん。」

ヴィヴィオは、なにこの人、と言いたげな目でメデューサモンを見ている。

「いやいや、ちゃんと本当の事もあるから。実際お水を好きな形にできるし、髪の毛だって好きに動かせるし。」

メデューサモンはヴィヴィオに言った。言い訳のように聞こえるが、決して彼女は慌てる様子を見せなかったと言う。

第十九話 メデューサモン後篇、とある天使の戦い（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「さて、今回のテーマはまたしてもメデューサモン。今回は前回で語れなかったメデューサモンの能力について語るぜ。」

モニタモンA

「ただその時考えてなかったただけでは？」

カットマン

「（ギク！）メデューサモンの持っている剣は、昔彼女が湖の神様から貰ったものだと言われている。その剣には特定のエネルギーを自在に操る能力があり、その能力を使う事で「ストップ・ジ・ヒドラ」という技を使う。」

モニタモンB

「それに、秩序や聖を司る天使の姿のほかに、混沌や邪を司る「魔獣形態」と呼ばれる姿がありますな。この姿になると自分の力を100%使うことができますが、簡単に墜天するようになりますな。」

モニタモンC

「このデジモン紹介コーナー、特別版を除けば今までで一番長いんじゃない。」

カットマン

「因みに、デジモン×恋姫？無双 電腦大戦、の予告短編を公開した、連載版で見たい方はその感想欄に見たいと書いてくれ。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ついに公開意見陳述会開催。時を同じくして、ジェイル・スカリエッティの戦闘機人たちも、管理局地上本部と機動六課隊舎を襲撃する、そしてスカリエッティの口から語られる、自分の正体と目的とは、

次回「開戦、敵の正体とバラバラの戦い」

第二十話 開戦、敵の正体とバラバラの戦い

とうとう問題の公開意見陳述会の日になった。はやくやなのは、フエイトは陳述会に参加する為、フォワードの四人にデヴァイスを預け、会場に入っていた。

「そつだみんな、これを持っていて。」

外で待機するメンバーに、タイキは赤色をした通信機「リスター」を渡した。誰かが妨害を行うのであれば、まず最初に情報を遮断する、とワイズモンは予想したので、全員分のリスターを用意しておいたのだ。通常の通信手段が妨害されても、リスターならある程度は話を通す事ができるからである。

更にタイキは、

「リロード！モニタモンズ、ワイズモン。」

赤と緑のモニタモンズと、ワイズモンをリロードした。

「今回はお前達の探査能力が頼りになる。何も起こらない事にこした事はないけど、とりあえず警戒していてくれ！」

「分かりましたな！！」

「分かった。」

モニタモンズとワイズモンはこう言って、モニタモンたちはそれぞれ彼方此方を回り、ワイズモンは周辺の警戒を始めた。

（後は、陳述会終了まで何もおこらないかだ）

タイキはこう思って、機動六課の隊舎に残した仲間達を心配した。

一応グレイモン達を残してきたとはいえ、キリハの居ない状態では全力が出せないからだ。

そして、管理局地上本部の近くでは、いかにも張り込みをやっているという雰囲気のある少年「キサキ」が、他に潜んでいる仲間に合図を送った。

「後30分で作戦行動開始だ。クワットロ、準備はいいよな。」

「はい、いつでも何でもできますよ。」

クワットロは通信先にいるキサキに言った。

「とりあえず、連中をバラバラにして戦えば勝機は無くはない。でも、このデジモン達が変化したら教えて。これは俺じゃないと対処できないから。」

そしてキサキは、通信を聞いている面々全員に、シャウトモンとメタルグレイモンの写真を見せた。

「どという事かは分からないが、了解した。」

皆はこう言って、通信を切った。そしてキサキは、

「さてと、次のレースは二番の単勝でと。」

競馬の馬券を買っていった。

そしてしばらく後、公開意見陳述会をしている地上本部内で動きがあった。突然通信が遮断されたのだ。それに応答して数人の戦闘機人が本部内に侵入した。

「来ましたな！」

モニタモンの一人が動きを察知し、皆に伝えた。

「了解！」

フォワードの四人は本部内のなのは、フェイトにデヴァイスを渡すため本部内に入り、タイキは、

「リロード！クロスハート！！」

シャウトモンを始めとするデジモン達を出した、

「ディアナモンは上空の敵の殲滅、ルーチェモン、リリモン、リボルモン、ピノッキモン、ブルーメラモンは入口を固めろ、他は俺についてきてくれ！」

タイキはテキパキと指示を出すと、シャウトモン、バリスタモン、ドルルモン、スターモンズ、キュートモン、スパロウモン、ベルゼブモン、スパードモンを連れて本部内に入って行った。

そして機動六課の隊舎では、襲来したガジェットを相手にデジモン達が暴れまわっていた。

「ギガデストロイヤー！！」

「ギガクラックー！！」

メタルグレイモン、グラウンドラモンは大技で沢山のガジェットを潰し、

「ベルセルクソード！！」

「霸王流、旋翔波。」

ナイトモンとポーンチェスモンズ、シャマルとザフィーラは小技で確実にガジェットを倒した。今回は獣のような動きをする新型の「ビースト型ガジェット」が出てきたが、

「トライデントアーム!!」

メタルグレイモンは絶好調のようで、来る敵来る敵を次々と吹っ飛ばしている。

ちなみにメデューサモンは奥でヴィヴィオとブイモン、テリアモンと一緒にいる。そんな彼女たちの目の前に、いつ来たのかルーテシアとガリユーが現れた。

「なるほど、主力に外を任せ、大將は本陣を奇襲か。悪くは無い策ね。」

メデューサモンはこう言つて、ヴィヴィオとルーテシアの間に割つて立つと、

「でも、あなた達があつた暗殺者より優しくはないよ、私。」

床に剣を突き立て、天上のスプリンクラーの水を使つて、「ストツプ・ジ・ヒドラ」を形成した。

そして外では、ナイトモンと双剣を携えた戦闘機人の少女「デイド」が交戦を始めていた。

そして地上本部内部では、潜入していた戦闘機人三人とタイキ達がバツタリ出会つていた。

「お前が工藤タイキか?!」

赤髪を短く揃えた戦闘機人の少女「ノーヴェ」がタイキに訊いた、
「そうだ!」

タイキははつきりと言つた、

「あんたには悪いけど、ドクターから討伐命令が出る上にキサキさんの太鼓判まで押されるんですよね。ですから大人しくやられてくれませんか?」

そして、大きいボードを抱えた戦闘機人の少女「ウエンディ」が宣言すると、

「キサキまでいるのか!!」

タイキが訊くと、

「さてどうでしょう。」

水色の髪 of 戦闘機人の少女「セイン」が言つて、まるで水に潜るかのように地面の下に沈んでいった。これはセインの能力である「デープダイバー」である。無機物内を高速で移動できるようになるのだ。しかし、あと少し全体が沈むと言うところで、スパードモンが阻止した。それに続いて、

「タイキ達は行け!!」

「早くしないと大変なことに!!」

ベルゼブモンとスパロウモンが前に出て言つた。そして、スパードモンがセインを、ベルゼブモンがウエンディを、スパロウモンがノーヴェを止めることになった。

「頼むぞ!!」

タイキはこう言い残すと、キサキを探すと同時にスバル達に連絡した、

「どうやらキサキがここにきてるらしい。ここの人間に被害が出るかもしれないから、なのは達と合流したらその事を伝えてくれ。」

リスターの向こうでティアナが、了解と言つた時である。

「なあタイキ、先に行つててくれるか?」

突然シャウトモンが立ち止まり、タイキに言つた。

「どうしたシャウトモン?」

タイキが訊くと、

「少し気になることがあるんだ、すぐに追いつくからさ。」

シャウトモンはこう言つて、脇道にそれていった。その時である、

「タイキ! 通信妨害の大元を見つけた!」

ワイズモンから連絡が入つた。なので、シャウトモンは一時自由行動にして、キュートモンとスターモンズを連れて外へと向かつてい

った。ドルルモンとバリスタモンに内部に侵入しているガジェットを徹底的に潰すように言って。

「折角の私のシルバーカーテンを邪魔しないでくださいな。」

上空で様子を見ていたクワットロは、眼下にいるローブ姿の人物「ワイズモン」に言った。

「無理だな、どうあっても邪魔させてもらおう。」

ワイズモンはこう返すと、

（こういう荒事は苦手だが、まあたまにはいいかと、考えた。

そしてタイキ達から離れたシャウトモンは、ギンガと合流し、眼帯を身に着けた少女「チンク」と対峙していた。シャウトモンの後ろには傷だらけのギンガがいる。

「邪魔をするか？」

チンクは静かにシャウトモンに訊いた、

「邪魔するにきまつてるだろ！」

シャウトモンはこう叫んだ。チンクはため息をつくと、

「タイプゼロの回収は少し手がかかるな。」
と、言った。

「たいふぜろ？」

シャウトモンが訊くと、

「その娘の事だ、誰が作ったかは知らないが、彼女はかなり作りの良い戦闘機人だ。」

チンクはこう言った、

（そういえば、傷の所々から機械みたいな部分が見えてるけど）

シャウトモンはこう思った、それでも、彼の行う事は一つしかない。

「それでもほつとけるか！！」

今では工藤タイキやクロスハート軍は勿論、新人四人の合言葉にもなっている言葉「ほつとけない」その思いを持ってチンクの前に立ちだかるのだ。

「ソウルクラッシュャー！！」

シャウトモンは殺人級の大声を放ったが、チンクは投げつけたナイフを爆発させて音をかき消した。

「だったら接近戦だ！」

シャウトモンは続いてマイクを振り回し始めた。

「くそ、速い。」

チンクは持っている刃物で攻撃を受け止めた。

そして、管理局地上本部の中は勿論、周辺一体、機動六課の隊舎に突然多くのモニタが展開され、そこにジェイル・スカリエッティの顔が映し出された。

「ごきげんよう管理局の諸君、そしてチームクロスハートのデジモン達よ。私はジェイル・スカリエッティ。」

スカリエッティが挨拶をすると同時に、今まで意見陳述会を行っていた会場は大騒ぎになった。

「ジェイル・スカリエッティ？広域次元犯罪者がなんで？」

「というかデジモンって何？」

会場にいる人間が大騒ぎになる中、はやて達は思った、連中はどうやってこの情報を知ったのか、と。これまで工藤タイキらデジモンの存在はうまく隠してきたのだ、キサキにはばれているとはいえ、キサキが話さない限りばれないと思っていたのだ。

「さてクロスハートの諸君、今回私が用意した宴は楽しんでもらえているかな。そして管理局の皆様、私の作品の出来はどうでしょう。」

この言葉に、外でガジェットを潰していたディアナモンは、

「楽しいわけではないでしょう！」

と言っていたが、

「これまで我が崇高なる望みの為忍び続けたが、もう忍ぶ必要もないだろう。」

スカリエッティはこう言うと、一回指を鳴らした。すると、彼の容姿が変化し、背中に黒い翼の生えた悪魔のような姿になった。

「我が真名はムルムクスモン、以後お見知りおきを。」

魔王のような姿になったスカリエッティはこう名乗った。この姿を見たディアナモンは、

「な？！なんであいつが？私の暗殺対象になってながら見つからなかったのに！」

と、言った。ちなみに、ムルムクスモンは以前バグラ軍に悪事を行ったことがあり、ディアナモンにその始末命令が言い渡されていたのだ。悪事の内容は、ダークネスローダーの一号機盗難である。

そしてスカリエッティのアジトとなっている場所では、

「ドクター！　どういう事ですか？！」

ウーノがムルムクスモンに迫っていた。

「どうもこうも、見た通りだが。」

ムルムクスモンはこう言うと、どこからか一人の男を出した。その男は、広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティにそっくり、どころか同じ顔をしていた。

「知りたいことがあればこの男に訊くがいい、まあ何か知っていたらね。」

ムルムクスモンがこう言うと、

「ふざけないで！！」

ウーノはこう叫んで、その場になぜか置いてあった剣を持って飛びかかって行った。しかし、ムルムクスモンは片手で受け止めると、

「ゲヘナ・フレイム！！」

口から高温の炎を浴びせた、

「熱い！熱い！」

ウーノ自身戦闘機人であり、ムルムクスモンも手加減していたおかげで身もだえする程度で済んでいるが、普通なら即死の攻撃である。苦しむ様子は見ていて良いものでは無かった。

その様子を他の場所で見っていたキサキは、大急ぎでその場を離れ、管理局地上本部の方へ向かっていった。よそう以上にメチャクチャな事態になっている事への慌てもあったが、

（やっぱり、クラウドの言うとおりだ）

心の中でにやけていた。

（ムルムクスモン、せいぜい好きなだけ踊ってろ。俺の前では誰も生還することはできない）

一方地上本部の一番上では、クラウドが遠くを見ていた。

そこからは、レジェンドタイプのグレイモンやカブテリモン、ガルルモン、デビモンやクワガーモンと言ったデジモン達の大軍がここへ向かってきていた。その姿はさながらかつてデジタルワールドで頻繁に行われていたバグラ軍のゾーン侵略のようだった。

第二十話 開戦、敵の正体とバラバラの戦い（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー！」

カットマン

「さて、今回のテーマはスパードモン。スパードモンは「超クロスウォーズ」というゲームで初登場したデジモン。必殺技は斬撃を投げつける「ブルーブレイブ」だ。」

モニタモンA

「伝説の武器デジモンと呼ばれ、持った相手に世界を救うも滅ぼすも自由自在と言われていますな。」

モニタモンB

「甘いものが大好きな、デジモンとなのはファンを裏切らないデジモンですな。」

モニタモンC

「ちなみに、イカ（マリンデビモン）が嫌いですな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

突如明らかになったスカリエッティの正体。シャウトモン、メタルグレイモンは超進化ができないことで苦戦する。その中で目覚める希望の光、そして、クラウド&mp・キサキ参戦

次回「絶体絶命と希望の光」

第二十一話 絶体絶命と希望の光

地上本部に向けて進軍するデジモンの大軍が確認された時、機動六課隊舎では、

「なんだあれは？」

グラウンドラモンは遠くを見て言った。彼の目線の先には、アンドロモン、メタルティラノモン、メガドラモン、エクステイラノモン、メタルマメモンを始めとする、機械系のデジモンが大量に向かってきていた。先頭には黒い鎧を身に着けた竜人型デジモン「ブラックウォーグレイモン」がいる。

「きつとムルムクスモンが差し向けたんでしょう！」

最強の武装形態になっているアインハルトは、少年風の容姿をした戦闘機人の少女「オットー」を捕まえながら言った。

「それで、あれもお前たちの主の作戦の内か？」

ナイトモンは、先ほど倒したデイドに訊いた、

「知りません！」

デイドは即答と言えるタイミングで答えたが、嘘をついている感じは無い。

そして、タイミングを同じくして、隊舎の中からメデューサモンがルーテシアたちを抱えて出てきた。その後ろからはヴィヴィオ、ブイモン、テリアモンが付いてきていた。

「三人は隠れていて、今からさつき以上に危険になるから。」

メデューサモンは後ろの三人に言ったが、

「うつん、俺も戦う！」

「僕だつて戦えるんだ!!！」

ブイモンとテリアモンはこう言つて聞かなかった。

そして、キサキはビルの階段を駆け上がった。目指すはディエチが砲撃の為に居座っている屋上である。二段飛ばしで駆け上がり、屋上に着くや否や、

「やめるー！」

得意のジャンプでディエチの傍に行くと、ブレーンバスターをディエチにかけた。ディエチは驚くと同時に気絶した。いきなりふわりと浮いたと思うと、突然激突したのだから。

その後、彼は地上本部の方向とは反対の方向を見た。彼の目線の先には、グレイモン、ガルルモン、カブテリモン、デビモン、イツカクモン、クワガーモンと言ったデジモン達で構成された大軍が迫ってくるのが見える。この位置から分かった事だが、軍の中央に一体全身を金属で武装した黒いガルルモンのようなデジモン「ブラックメタルガルルモン」がいるのが見えた。

「大体1000体かな、少なくとも300体は削らないと、奴の力を使う前に。」

キサキはこう言うと、水色のクロスローダーを掲げると、

「リロード！メタルガルルモンX、ガイオウモン、ホーリーエンジエモン、エンジェウーモン、パロットモン、アンキロモン、エンジエモン、テイルモン、アクイラモン、ディアボロモン、ケラモンズ。」

二足歩行の狼型サイボーグデジモン、全身を鎧でかためた竜型デジモン、八枚の翼を持つ大柄な大天使デジモン、八枚の翼としなやかな体を持つ女性天使デジモン、オウムのような姿に両手の生えたデジモン、全身が棘棘した恐竜型デジモン、六枚の翼を持つ天使デジ

モン、白い猫のような姿のデジモン、赤い翼を持つ巨鳥型デジモン、悪魔のような姿の謎のデジモン、大量にいるクラゲのようなデジモン、を出現させた。

「進撃！敵軍を迎え撃て！！」

キサキの指示と同時に、デジモン達は敵軍に向かっていった。エンジェウーモンとパロットモン、ディアボロモンとケラモンズが上空から牽制し、他のデジモンが地上から攻撃を仕掛ける。そして、ブラックメタルガルルモンはメタルガルルモンXに向かっていった。

「コキュートスプレス！！」

「コキュートスプレス！！」

二体のメタルガルルモンの放った冷気は、上空でぶつかると氷の雨を降らせた。

「ところでキサキ、我らの出番は無いのか？」

キサキの持つクロスローダーの中で、エクスバイモンがキサキに訊いた、

「まだ、削れるだけ削ったら出番になるから。」

キサキはこう答えると、遠くの戦線を見た。デジモン自体の力では自分たちの方がはるかに上だが、数では相手の圧勝である。どんな地上本部へと近づいてきている。

そして、地上本部内部のクラウドはと言うと、

「ああ、すみません。ちょっと通してください。」

人をかき分け人を探していた。しばらくしてから、目的の人物を見

つけた、

「高町なのは一等空位と、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官ですね。」

彼の目的の人物は、なのはとフェイト、そしてはやてである。三人固まっけてくれたのが幸いした。

「えーと、確かクラウドさんでしたよね。」

はやては思い出しながら訊いた、

「はい、そうです。」

クラウドはこう答えると、先ほど地上本部の建物の屋上で見てきた様子を報告した。

「それで、今あなた方の部下がここに向かっていますが、あいにくエレベーターは動かない、非常シャッターが閉まってる状態なんです。」

クラウドはここまで言うつと、

「俺に付いて来てください。皆と合流します。」

と、三人に言った。

そして、外でクワットロと対峙していたワイズモンは、クワットロの魔法技術に手こずっていた。

「どうですか、殴り合いは苦手ですけど、この手の事は得意なんですよ。」

クワットロの様子は余裕と言った感じだ。

（仕方ない、あれをやるか）

ワイズモンは心の中でこう思うつと、

「パンドーラ・ダイアログ!!」

と叫んだ、

「あらあ、今度はどんな手品ですか？」

（まあ大丈夫でしょう、しっかりバインドはかかってますし、ここまでの距離も十分、大したことには）

クワットロはいかにも余裕と言いたい様子でワイズモンに言った。

しかし、すぐにその表情は絶望に染まった。目の前に黄金の巨人がそびえ、至近距離から今にも攻撃を行おうとしているのだ。

「あ、あああ…」

次の瞬間、容赦の無い砲撃が放たれた、

「いやあああああ!!!」

クワットロは砲撃に飲み込まれ、墜落した。ワイズモンの技である「パンドーラ・ダイアログ」は、自分の記憶している攻撃を再現する技であり、今再現したのは「シャウトモン×7」の「セブンビクトライズ」だ。

「ふむ、少しやりすぎたか。」

ワイズモンは目を回しているクワットロを見ながら言った。だからと言って、かの「デジタルブロンコ」の必殺技では一部地味なのがあるが再現が難しいという弱点がある。あまり彼が戦う所を見たことがないのだ。

一方その頃、地上本部の中のクラウドは、エレベーターの扉を開けるため扉を調べていたが、クワットロの制御が無くなった為、突然

扉が開いて、クラウドはエレベーターホールに落ちて行つた。

「ほんとに分からんやつぢやな。」

その様子を見ながらは yet は言つたが、

「でも急がないと、彼が言ったことが本当ならかなり大変な事に。」
フェイトがこう言つたので、エレベーターのロープを伝つて降りて行つた。半分降りて行つた所で、先に落ちて行つたクラウドに止められた、

「ここで停止、敵が来ます。」

クラウドがこう言つと、何かがこちらに上つてくるような音が聞こえた。

「すいません、ちょっと真上を向いてくれません。」

クラウドにこう言われ、三人は仕方なく真上を見た。その時、まるで断末魔のような叫びと何が飛び散るような音が聞こえた。恐る恐る目を下に向けると、

「ああ、もう大丈夫ですよ。」

クラウドが少し下に下がつて呼んでいた。

そんなこんなあつたが、何とか三人は新人四人と合流出来た。

「隊長大変です、キサキがここに来ているみたいです！」

スバルは大慌てでなのは達に報告したが、

「は？キサキは今頃賭け事してると思うけど。」

クラウドはこう言つた、流石にストレートに競馬と言うのは気がひけたらしい。

「はい？」

その場にいる皆がこう思っていると、突然クラウドに連絡が入つた。クラウドが出ると、

「やっと出た！今までなにしてたのさ！！」

怒り心頭なキサキの声が聞こえてきた、

「そついうお前はどこにいるの？」

クラウドが訊くと、

「現在敵の進軍を止めてるけど、壊滅寸前です！」

と、キサキは言った。

「何かよく分かんないけど、突然グレイモンとかガルルモンがデジクロスして、変な奴になってんだよ。」

そして、その様子をモニター越しに見せた、するとそこには、デジモン達が次々と吸収され、一つの怪物となって行くようすが映し出されていた。

グレイモンを基準にしているが、頭部の角はカブテリモンのようになり、デビモンやクワガーモンの腕を付けた、足腰にガルルモンの毛を生やしているデジモンである。

「なるほどキメラモンか、だったらあれを使って全力で叩き潰せ、あいつが残っていると後々まずいことになる。」

クラウドがこう言うと、

「言われなくても！」

こう叫んだキサキは、クロスローダーからエクスブイモンとステイングモンをデジクロスした姿「パイルドラモン」の状態で出すと、

「パイルドラモン！超進化！！」

と、叫んだ。結果、パイルドラモンは強烈な光に包まれ、強靱な四肢を持ち、巨大な赤い翼を生やしたドラゴン型デジモンに変化した。

「パイルドラモン超進化！！インペリアルドラモン！！」

インペリアルドラモンは一回翼をはたかせて飛び上がると、キメラモンに向かっていった。

「うわぁ、また変わっちゃった。あれもデジクロスの一つなの？」
スバルはその様子を見て驚いたが、

「なるほど、あれは超進化した姿なのか。それならあの力も肯けるな。」

突然背後に現れたバリスタモンとドルルモンにさらに驚いた、

「それより、超進化って？」

と、なのはに訊かれると、

「超進化と言うのは、特定のデジモンが特定の力を受けて、その姿を一時的に劇的に変える物だ。あいつの場合、キサキの竜王の力を受けて超進化するんだ。」

何故かクラウドが説明した、

「そういえば、タイキ君は？」

はやてがバリスタモンに訊いた、

「今八別行動だ、タイキ八外で戦闘機人ヲ探シテイル。」

バリスタモンがこう答えると、

「シャウトモンもこのどこかにいるんだ。」

と、ドルルモンが言った、

「そういえばギン姉も。」

スバルも思い出したように言った。

と言う事で、なのは、スバル、ティアナがシャウトモンとギンガを探し、フェイト、エリオ、キャロが隊舎を防衛するメンバーの援護に行き、はやてはバリスタモン、ドルルモンと共に外へ向かった。

そして、チンクの相手をしていたシャウトモンは、新しい敵の相手をしていた。緑色の骨の棍棒を持った鬼のようなデジモン「オーガモン」がどこからか現れ、襲い掛かって来たのだ。

「くそ、デジクロスも超進化もできないと。」

シャウトモンはオーガモンのパワーに押され、苦戦気味だった。彼の後ろでは、最初に挑みかかって秒でやられたチンクが倒れている。「おい！ギンガを連れて早く離れる！」

シャウトモンはチンクにこう告げた、

「何？！私は敵だぞ！」

チンクは驚いて、シャウトモンに訊いたが、

「今動けるのはお前だけだろ。」

と、シャウトモンは言って。オーガモンに「ロックダマシ」を放った。しかしシャウトモンの攻撃を、オーガモンは簡単に跳ね返した。

「ぐわー！！」

跳ね返された攻撃を受け止めたシャウトモンは、大きくふっ飛ばされた。

また、機動六課の隊舎でも「アンドロモン」「メガドラモン」「メタルティラノモン」「エクスティラノモン」「メタルマメモン」が合体し、「ムゲンドラモン」となっていた。

「トライデントアーム！！」

「ブースタークロー！！」

メタルグレイモンの手甲と、ムゲンドラモンの爪がぶつかり合い、火花を散らす中、グラウンドラモンは、

「メガトンハンマークラッシュ！！」

「グレートトルネード！！」

ブラックウォーグレイモンと戦っていた。しかし、威力はともかく

鋭さで負けてしまい。グラウンドラモンは右の腕に傷を負った。

そしてブラックウオーグレイモンは、次の標的を隊舎の入り口近くでクロスローダーを持って震えていたヴィヴィオに定めた。

「まだまだガキとはいえ、クロスローダーを持っているなら始末するか。」

ブラックウオーグレイモンはこう言って、ヴィヴィオに近づいて行った。

「しまった！ヴィヴィオ！！」

「ヴィヴィオさん！！」

メデューサモンとアインハルトは驚いた、そして助けに向かおうとしたが、合体に巻き込まれなかったデジモン達に阻止されその場へ向かうことができない。シャマルとザフィーラもほかのデジモンを食い止めている最中であり、その場を動くことができない。

そんな中で、ブラックウオーグレイモンに炎の玉が飛んできた。

「ヴィヴィオには指一本触れさせないぞ！！」

攻撃を行ったのはテリアモンである。

「豆鉄砲が、効くわけ……」

ブラックウオーグレイモンがこう言って、テリアモンのほうを向くと、

「ブイモンヘッド！！」

ブイモンの頭突きをまともに喰らい、地面に激突した。

（なんだと、そもそもこいつらは二体揃って戦っても、シャウトモンの足元に届くか否かのデジモンなはずだ。何故俺が？）

ブラックウオーグレイモンは思った。

（しかも、ブイモンとテリアモンの体から発せられる黄金の輝きは何だ？あいつらは本当に「ブイモン」と「テリアモン」というデジモンなのか？）

一方ヴィヴィオは、

「ブイモン、凄い。」

ブイモンの力に驚いていた。

「でもなんでしよう。あの光は。」

アインハルトが呟くと、

「きつと、彼らは進化しようとしてるんです。」

メデューサモンが敵の包囲を掻い潜り戻ってきて、説明した。

「そんなはずあるか！デジモンが進化するには気が遠くなるほどの時間がかかるものだ！」

ブラックウォーグレイモンはこう言ったが、ブイモンとテリアモンは、

（何だこの奇跡にも等しい強力な力は、これはヴィヴィオから？）

（アインハルトの力、これがあれば）

何か特別な力が自分たちに流れ込んでくるのを感じていた。

「ヴィヴィオさん、やりましょう。」

アインハルトはヴィヴィオに告げた、

「はい！」

ヴィヴィオは決意に満ちた目で立ち上がった。一緒に戦うんだ、と。
「クロスローダーを掲げて、私の考えが正しければこれで進化を行えるはず。」

メデューサモンの説明を聞いたヴィヴィオとアインハルトは、自分のクロスローダーを掲げると、

「ブイモン、超進化！！」

「テリアモン、超進化！！」

と、叫んだ。そして、クロスローダーから発せられた黄金の輝きは、ブイモンとテリアモンを包み込み、次の瞬間、全身を黄金の鎧で武装した竜人型の聖騎士デジモン。黄金に輝くボディを持つ、プードルのような姿のサイボーグ型聖騎士デジモンが現れた。

「マグナモン！！」

「ゴルドラピットモン！！」

二体の聖騎士デジモンが現れた時、メデューサモンは思った、
（いける、これならこの状況もなんとかできるかも）

第二十一話 絶体絶命と希望の光（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー!!」

カットマン

「今回のテーマはブイモン。ブイモンは「デジモンアドベンチャー02」にて、本宮大輔のパートナーデジモンとして登場した小竜型のデジモン。そして今回はヴィヴィオのパートナーとして登場。得意技は「ブイモンヘッド」と「ブンブンパンチ」だ。」

モニタモンA

「創世記に存在していた竜型デジモンの生き残りと言われ、さまざまな形に進化する可能性を持っていますな。」

モニタモンB

「わんぱくな性格ながら、戦闘に優れた種族ですな。」

モニタモンC

「所謂、悪ガキと言うやつですな。」

カットマン

「今回は、ヴィヴィオの持つ聖王の力を受けて「マグナモン」に超

進化するんだ。因みに余談だけど、進化の時には聖王「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」の霊が憑依する演出があるぜ。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

地上本部付近まで進軍し、破壊の限りを尽くすキメラモン。インペリアルドラモン、フェイト達も倒され、絶望的になった時、いよいよ”あれ”が登場する。

次回「逆転のオメガシャウトモン」

第二十二話 逆転のオメガシャウトモン

機動六課隊舎で、ブイモンがマグナモンに、テリアモンがゴルドラビットモンに超進化している頃、地上本部では、

「ハイブリッドアーム!!」

「王者の爪!!」

キメラモンとインペリアルドラモンが戦闘を行っていた。キメラモンは四本の腕を振り回し、インペリアルドラモンは巨大な爪で斬りつける。

「ヒートバイパー!!」

「メガデス!!」

続いてあらゆるエネルギーが含まれた火炎と、暗黒物質の含まれた火炎がぶつかり合った。

そして、その様子を見ていたキサキは、

「押し切れるか？」

と言った。しかし、キメラモンはいつまで経っても疲労する気配がない。見ると、今もほかのデジモンを取り込んでいた。

「ちっ！いくら傷つけてもその場で再生するか?!」

キサキはこう考え、自分も竜に変身して加勢しようかと考えた。しかし、まだほかの問題が残っている今、現状況では三分もてば恩の字の竜化を使う訳にはいかないと思い、何かがないかとあたりを見回すと、ディエチの使う大砲が目に入った。

（これだ）

キサキはこう思うと、大砲を拾いキメラモンに狙いを定めた。

一方キメラモンは再びヒートバイパーを放とうとしていた。炎を喉まで押し上げるため首をあげた瞬間を狙って、

「喰らえ！」

キサキは大砲を放った。発射されたビームは、キメラモンの顎に当たり、口を開くのが一瞬遅れた為、口の中で暴発した。これにより

キメラモンの動きが止まったので、

「デスブレイズジョー!!」

インペリアルドラモンはメガデスの炎を纏った牙で、キメラモンに噛みついた。

「よし、ダメージになった。」

キサキはこのままダメ押しをしようとしたが、

「次弾装填まで後20秒です。」

と、大砲に備え付けられた人格に言われた、

そしてその間に回復したキメラモンは、

「ハイブリッドアーム!!」

四本の腕でインペリアルドラモンを捕らえた、

「やべえ、ホーリーエンジェモン!、エンジェウーモン!、パロットモン!、ディアボロモン!」

キサキは大急ぎでまだ元気なデジモン達を、インペリアルドラモンの救援に向かわせた。ほかのデジモンはダメージが大きいので、いったんクロスローダーに戻した。

「エクスカリバー!!」

「ホーリーアロー!!」

「ミヨルニルサンダー!!」

「カタストロフィーカノン!!」

ホーリーエンジェモンは自前の光の剣、エンジェウーモンは自身の力を収束させた光の矢、パロットモンは頭の触覚のような毛から放つ雷撃、ディアボロモンは口から放つ破壊光線でそれぞれの腕を攻撃した。攻撃を受けたことで腕が離れる瞬間を狙って、インペリアルドラモンは渾身のメガデスを放ったが、

「ヒートバイパー!!」

メガデスの中から放たれたキメラモンの炎を受けて、ホーリーエンジェモン達と同様に墜落した。

「やば!戻れ!!」

キサキは大急ぎで残りのデジモンをクロスローダーに残した。そし

て、悔しいながらも黙って、地上本部へ向けて飛んでいくキメラモンを見送った。

そして一方、攻撃を受けている機動六課隊舎の応援に行くことになったフェイト、エリオ、キャラの三人は、空で二人の戦闘機人と出会った。飛行するデジモン達がディアナモンを押さえている間にここまで来たのだ。

「二人は一足早く機動六課隊舎に行つて。」

フェイトは、大きくなったフリードに乗っているエリオとキャラに言つて、目の前の二人の戦闘機人と対峙した。エリオとキャラは、自分達がいるとフェイトが集中できないだろうと考え、言われた通り一足早く機動六課隊舎の防衛に向かつていった。

そして、戦闘機人二人を相手にすることになったフェイトに、

「フェイトお嬢様、これは我らへの反乱ですか？」

光の細剣を両手に持った戦闘機人「トーレ」が訊いた、

「私が行うのは、犯罪者の逮捕だけ。」

フェイトはこう言つて、バルディッシュを構えて二人に向かつていった。

そして、地上本部内でスパロウモン、ベルゼブモン、スパイダモンと交戦していた、ノーヴェ、ウエンディ、セインの三人は、セインの能力「デーパーダイバー」を使ってうまく三体を出し抜き、シャウトモンとギンガと一緒にいるチンクと合流した。

そこには、赤い小竜と青鬼のような生き物が倒れていて、自分たちの捕縛対象の「タイプゼロ」ことギンガが壁に背を預けており、少し離れた場所に全身傷だらけのチンクが居た。

短気なノーヴェは最初、この事態をギンガがやった者だと思って、ギンガに喰ってかかろうとしたが、

「待ってくれ、彼女は関係ない。」

チンクに止められた、

「あいつと戦った時に付けられた傷だ。そして私は彼に護られていた。」

チンクは、最初にオーガモンを指差し、次にシャウトモンを指差した、

「そうなんすか。」

ウエンディは考え込む表情をしたが、その時、ブループレイブ、デス・ザ・キャノン、ランダムレーザーで壁を破壊しながらスパイダモン達が現れた。彼らもノーヴェと同様に、チンク達に喰ってかかりそうになったが、チンクが同じように説明し何とかなった。

そしてこれからどうするかとなった時、

「とりあえず外に出よう。ここは危険だ。」

スパロウモンにこう言われ、外に出ることになった。

「私、ギン姉が心配だから先に行くね!!」

地上本部内でギンガたちを探すことになった、なのは、スバル、ティアナは長い廊下を駆け抜けていた。スバルはブレードで爆走し、ティアナはなのはに抱えられて空を飛んでいる。

「私たちも急ごう!」

なのはも、抱えているティアナにこう言うと、スバルに付いて行っ
た。

そして、しばらく言ったところでシャウトモンとギンガを抱えたスパロウモン達とチンク達と合流した。チンク達は、形はどうあれ捕まった事に変わりはないので、この後ちゃんと自首する事を伝えてから。外にいる仲間の様子を見に行った。

スバル達も、傷ついたギンガとシャウトモンを連れて外へと向かった。

外では、地上本部付近までやって来たキメラモンが、大暴れをしていた。

そして、今まで空中で高速移動をしてでの戦いを行っていたフェイトと、戦闘機人の「トーレ」と「セツテ」はと言うと、キメラモンの腕を掻い潜っていた。

「くそ、こいつには人格が無いのか!」

トーレはこう言ったが、キメラモンは当然答えない。

「このままでは私たちまで、なんでドクターはこんなやつを？」

トーレもこう考えたが、答えが出る訳ではない。

（このままでは全滅だ）

フェイトはこう考えて、ダメもとで、

「このままでは自分達はおるかあなた達も無事ではすみません。私一人では勝率が低いので、ですからここは共闘しましょう。」

と、二人に言った。しかし心では、

（低いどころじゃない、私じゃ絶対に勝てない。それに二人が協力してくれるかどうか）

と、考えていた。しかし予想に反して、

「分かりました、協力します。」

二人はこう言った。その後すぐに、戦いが終わればあなたをひっ捕らえます、と言っていたが、
と言っ事で、

「行きます、ソニックフォーム！！」

フェイトは移動速度を劇的にあげるソニックフォームになり、トーレは自分の能力「ライドインパルス」を発動させ、それぞれ別方向からキメラモンをかく乱し始めた。そして、キメラモンの腕が動きにくい状態になった時、それぞれの必殺技を放ったが、キメラモンの硬い体には通用せず、逆にキメラモンの腕に捕まってしまった。

そして一方、戦いの疲れから昏倒しているシャウトモンは、
「くそ、俺はこのまま終わるのか。」

と、考えた。その時、自分の周りの光景が、舞踏会を行う城の広い部屋に変わった。壁は宝石のごとく光り輝き、一流の楽団が演奏する音楽が響いている。そして自分は王様専用の席に座っているように、様子が良く見えた。踊っている者は皆楽しそうだが、なぜかみんな仮面を付けていた。

「あれ、なんで俺はこんなところに？」

と、シャウトモンが言う。目の前に純白のドレスを身に着けた女神の如く美しい女性がやって来て。

「私は竜姫エイリーンと申します。私と踊ってくださいませんか。」と名乗り、ドレスの裾をあげてお辞儀した。

「ああ、どうも、ご丁寧に。」

シャウトモンはこう言ったが、

「だけど俺にはやらなければならないことがある。今ピンチになっている仲間がいるんだ。そいつらを助けないと！」

と、エイリーンと名乗った女に言った、

「そうですか。」

女は一言こう言うと、

「では私も協力します。あなたが一番望む力を与えましょう。」

こうシャウトモンに言って、優しくシャウトモンを抱いた。その瞬間、この世界のシャウトモンの意思は途切れた、

そして現実の世界では、キメラモンの腕に捕まったフェイト、トーレ、セツテがギリギリと締め上げられていた。

「あのままじゃフェイトちゃんが。」

なのはがこう言った時、

「なのはちゃん!!」

遠くから、はやとバリスタモン、ドルルモンがやって来た。

「タイキ君見てない?」

はやとはここに着くや否やなのは達にこう訊いた、

「あいつ、戦闘機人を捕まえたって言うワイズモンの所に言ったはずなんやけど。」

「戦闘機人って、もしかしてクワ姉じゃ。」

偶然近くで様子を見ていたセインがこう言った時、

「ちよっとお姉さんと”お話”しましょう。どこにいるのか教えてください。」

なのはは笑顔でこう言った。

「え、えーと、確かここから数百メートル先の所で……」

セインが、なのはの笑顔の中に隠れた鋭い気迫に気圧されながらこう言つと、

「わわ!なんだ!」

突然シャウトモンを抱きかかえているスバルが驚きの声を上げた。

見ると、シャウトモンの体が光で包まれ、スバルの手から徐々に浮いていくのだ。

「ナ、ナンダ?」

バリスタモンがこう言った時、この場にいる全員の目に、シャウトモンが白いドレスを身に着けた女神の如く美しい女性に抱きかかえられている様子が見えた。

「え?誰?」

この場の皆がこう思っている中で、女は静かに前へ進むと、上空のキメラモンを見据え、そして、

「マトリックスエボリューション。」

と静かに言った。そして女の姿は光の粒子となってシャウトモンの体の中に入ると、シャウトモンが目を見ました。そして、

「シャウトモン超進化！オメガシャウトモン！！」

シャウトモンは赤い小竜の姿から、全身を黄金に輝く金属で武装した背の高いデジモンに変わった。

「なに！タイキがこの場にいない状態で超進化したと！？」

ドルルモンがこう言って驚いた時、オメガシャウトモンは一瞬で姿を消した。そしてキメラモンが何かがかすって驚くと同時に、フェイト、トーレ、セツテを連れて戻って来た。

「三人を頼む。」

オメガシャウトモンはなのは達にフェイト達三人を預けると、キメラモンに向かっていった。

「凄い、今のスピード、トーレ姉のライド・インパルスの二倍、じやなくて十倍はあったよね。」

「凄い、あれがほんとにシャウトモン？」

その場にいる皆は、ただただ驚くだけだった。

「ヒートバイパー！！」

キメラモンは口から大量の火炎を浴びせるが、オメガシャウトモンは素早い動きで回避し、

「ハードロックダマシ　！！」

発生させた巨大な炎の玉を連続してキメラモンにぶつけた、

「ハイブリッドアーム！！」

火炎がダメならキメラモンは腕を振り回した、しかしオメガシャ

ウトモンは、自分の足から放たれる炎の斬撃「ビートスラッシュ」で反撃し、腕を使えなくした。

そうしてキメラモンの攻撃手段の中で、もっとも強力な二つを潰した所で、

「オメガ・ザ・フュージョン!!」

かつて最強と謳われた伝説のデジモン「オメガモン」の幻影を纏って、キメラモンに突撃し、地面へと叩きつけた。

その様子を他で見ていたクラウドは、

「やるじゃねえか。」

傷だらけになって倒れるブラックメタルガルルモンを踏みつけながら言った。

「少なくとも、これで厄介な布陣とはおさらばできるはずだ。」

第二十二話 逆転のオメガシャウトモン（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナ。」

カットマン

「今回のテーマはテリアモン。テリアモンは獣型のデジモン。必殺技は大きな耳で竜巻を起こす「プチツイスター」口から高熱の火炎を吐き出す「ブレイジングファイア」だ。」

モニタモンA

「獣型であると分かってはいますが、その進化系に謎が多いデジモンですな。」

モニタモンB

「おっとりした性格からは想像できないほど、戦闘になれたデジモンでありますな。」

モニタモンC

「たまに双子で生まれてくることがありますな。」

カットマン

「テリアモンは今回アインハルトのパートナーであり。彼女の霸王

としての力と、生来の優しさの力を受けて「ゴルドラピットモン」に進化する。その際、ヴィヴィオのブイモンと同じように、進化する際に霸王こと「クラウス・G・S・イングヴァルト」の霊が憑依する演出がある。

そして「ゴルドラピットモン」とは、「デジモンアドベンチャー02」の劇場版第一弾の「超絶進化黄金のデジメンタル」の方で登場した特別な進化系の事だ。詳しい名前がないので自分でつけてみました。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

ブイモンとテリアモンが進化に成功するも、ムゲンドラモンの強力なパワーに押され、次々と仲間たちが倒れていく。その時、メタルグレイモンに変化が起こる。

次回「ジークグレイモン再臨」

五話更新記念の回 その五

ここは、とある管理外世界のとある場所、ここでは三人の人間が、

「あけましておめでとございます。」

と、言い合っていた。

カットマン

「今年もとりあえずよろしく。」

ご存じこの小説の作者、「超人カットマン」は、目の前に和服姿でたたずむ二人の少女に言った。

????

「今年も色々よろしく。」

????

「とりあえずお年玉頂戴。」

まず最初に桃色の髪の少女「キリエ・フローリアン」があいさつし、それに続いて赤髪の少女「アミティエ・フローリアン」通称「アミタ」がお年玉を要求した、

カットマン

「いいとも。」

カットマンはこう言って、近くに垂れ下がっている紐を引いた。結果、どこからか魔力弾が飛んできて二人に当たった。

カットマン

「これぞカットマン名物、落とし弾だ。」

カットマンはこう言ったが、

キリエ

「お年玉も落とし弾もいいから、出番を頂戴よ。」

キリエはこう要求した、

カットマン

「無理！」

当然ながら、カットマンはこう言い放った。

カットマン

「それじゃあ、今から言う言葉を全部噛まずに言えたら考えてあげる。」

そして、

カットマン

「手術室で手術したマサチューセッツ州知事が、超高速増殖炉もんじゅを訪問、老若男女を代表して栃乃洋などに迎えられた。一方トリニダードバゴ行き火星探査車の左折車専用車線での事故が続発する中、魔術師が内容を調査中です。」

と言った。みんなもちゃんと言えるかやってみよう、

キリエ

「えーと。手術室で手術したマサチューセッツ州知事が、超高速じようそくりよ……」

カットマン

「はいダメー!!」

キリエ

「っていうか全部言えるわけないじゃん! あんな長い文章一度聞いただけで!!」

キリエがカットマンに文句を言うと、

アミティエ

「そういえば、年賀状が来てますよ。」

アミティエが葉書を持ってやって来た、

カットマン

「お、どれどれ。」

カットマンは勇んで見てみた、

カットマン

「お馴染みになっている「鳴神 ソラ」さんからの質問の葉書だ。えーと、

『こっちの作者がオースの小説で02の主人公の本宮大輔を登場させて仮面ライダーにしてるがそっち的にどう思う?』 byアंक

『作者さんの好きなデジモンをベスト10で例えるなら?』byタ
クティモン

『アニメデジモンの主人公陣のパートナーデジモンで一番好きなのはどれ?』byネス

ねえ。」

キリエ

「今回はあんたへの質問なのね。私にはないんだ。」

カットマン

「お前は出てないだろ。本編に。」

キリエ

「出てないじゃなくて、出られないの!元凶!」

カットマン

「俺は小吉だ!」

アミティエ

「それでさ、一番の質問はどうするの。作者は仮面ライダーオーズの事を知らない訳じゃないでしょう。」

カットマン

「映画は大ヒットだったな。にしてもオールライダーVS大ショツカー見たかった。」

キリエ

「おーい、帰ってきて!」

カットマン

「最初の質問だが、俺様的には何も問題はないと思うぜ。大輔って仮面ライダー風のキャラだし。そして二つ目の質問だが、

一位 セラフィモン

二位 シャイングレイモン

三位 ガイオウモン

四位 アーマゲモン

五位 メタルガルルモンX抗体版

六位 ギガシードラモン

七位 インペリアルドラモン

八位 アポロモン

九位 グランドラクモン

十位 デュークモン

だな。言うなれば。

そして好きな主人公陣デジモンは、セイバーズ版のアグモンだな。進化した時が一番がかっこいいと思うな。」

アミティエ

「それで、次に何を？」

カットマン

「そうだな、ネタバレ？」

キリエ

「もしかして本編の？」

カットマン

「いや、デジモン×恋姫？無双 電腦大戦の。」

キリエ

「一月一日午前一時に公開したあれ？」

カットマン

「そだよ。ほかの姫たちにもデジモンの相棒を付けてほしい、って意見があったから考えたんだよ。今回は蜀の勢力（桃香達）の仲間になる武將のパートナーを紹介するぜ、

趙雲 エンジェモン

馬超 シャウジンモン

馬岱 ライドラモン

諸葛亮 ワイズモン

鳳統 ウィザーモン

黄忠 サジタリモン

魏延 グラウンドラモン

嚴顔 バンチョーレオモン

魏や呉、他の勢力の姫のパートナーは徐々に明らかになるぜ。」

アミティエ

「その姫の特徴や特技に合わせてデジモンを付けたんですね。」

カットマン

「そういう事、馬超と嚴顔が一番大変だったぜ。」

キリエ

「私たちをほったらかしにしてこんなことをしていたと？」

カットマン

「ちょ、どうなさったのですかキリエさん。大剣なんて出して、っていつか何故そんな殺気を？」

キリエ

「せっかくゲームも発売されて私にも少しは運気が向くと思ったのに……」

カットマン

「やべ、落とし弾……」

ドガンー……という騒音を合図に、彼らはこの日ずっと大暴れを続けていた。

五話更新記念の回 その五（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー！！」

カットマン

「今回のテーマはエクスブイモン。エクスブイモンは頭に大きな角が生えた竜型デジモン。必殺技は腹部のXマークから光線を発射する「エックスレイザー」だ。」

モニタモンA

「強力な力を持つデジモンですが、頭がいいのでめったにその力をふるう事はありませんな。」

モニタモンB

「初登場した「デジモンアドベンチャー02」では、ステインゲモンとジョグレス進化を行うことで「パイルドラモン」になっていましたが、「ディノビーマン」というデジモンになることがありますな。」

モニタモンC

「中途半端なデジモンだな。」

全員

「それじゃあまたね。」

第二十三話 ジークグレイモン再臨

管理局地上本部にて、オメガシャウトモンがキメラモンに勝利した頃、機動六課隊舎では、

「プラズマキャノン!!」

「ラピッドファイヤー!!」

マグナモンとゴルドラピットモン、そしてブラックウオーグレイモンが激しい空中戦を行っていた。マグナモンとゴルドラピットモンの放ったミサイルを、回転で回避したブラックウオーグレイモンは、
「グレートトルネード!!」

両手の爪「ドラモンキラー」を突き出して突進した、

「くそっ、化け物か?!」

ブラックウオーグレイモンはこう言つと、海の上に言つて、大量の海水を集め始めた。

「ポセイドンフォース!!」

巨大な水の塊が完成すると同時に、マグナモン達に投げつけた。

「エクストリーム・ジハード!!」

マグナモンは全身から光を迸らせて、飛んできた海水をすべて蒸発させた。

そして、地上のムゲンドラモン戦はというと、一言で言つて不利な状態だった。

「ギガデストロイヤー?!」

ムゲンドラモンは体中から大量のミサイルを発射した、

「ギガデストロイヤー!!」

メタルグレイモンは必殺技で自分に向かってくるミサイルを撃ち落としたが、ナイトモンとポーンチェスモンズはシルードが耐え切れず、グラウンドラモンは攻撃をかわしきれずそれぞれダウンした。

（まずい、いくらなんでも分が悪すぎる）

メデューサモンは何とか耐え凌いだが、今からムゲンドラモン戦に加わっても、一発攻撃を庇うくらいの事しかできそうにない。ふとブラックウォーグレイモンと戦っている二体を見た。

（どちらかをこっちに回さないと、でないと勝ち目がない）

メデューサモンはこう思って、竜のような姿の異形の怪物に変身した。

「私の魂のすべてをかけて、アイツをぶった切る。」

メデューサモンはこう思うと、ゆっくりとブラックウォーグレイモンに向けて歩いて行った。

「ラピットファイヤー!!」

ゴルドラピッドモンは、攻撃の隙を付いて至近距離からミサイルをぶつけた。しかしブラックウォーグレイモンは背中に着けている盾「ブラックブレイブシルード」で攻撃を防いだ。

「この盾に通じる盾があると……」

ブラックウォーグレイモンがこう言うと、突然体中を鎖のようなも

ので高速され、地中から生えた柱に串刺しにされた、

「盾があるなら盾に構わなければいいだけ。」

シャマルはこう言うつと、

「デジモンに通じるか分からないけど。」

と言うつて、クラルルウィンドの鎖で円を作り、そこに手を入れた。

その結果、ブラックウォーグレイモンの心臓部からシャマルの手が生えた。その手にはブラックウォーグレイモンの電脳核^{デジコア}が握られていた。

「決めてマグナモン！アインハルトさん！」

シャマルのとなりで様子を見ていたヴィヴィオがこう叫ぶと同時に、マグナモンとアインハルトは一斉に飛び出し、

「霸王断空拳！！」

「マグナパンチ！！」

得意な打撃攻撃を、ブラックウォーグレイモンの電脳核に打ち込んだ。これでブラックウォーグレイモンはかなりのダメージを負ったが、

「滅びよ！！」

ドラモンキラーから発せられた滅びを誘う斬撃を受けて、皆一様にふつとばされた、

その時、魔獣形態となったメデューサモンが歩いてきた、まるで呪文のように何かを言う彼女の手には巨大な剣が握られ、その剣からは巨大なエネルギーが迸っている。

「生きている限り、湖だつて斬つて見せる！！」

メデューサモンはこう言うつと、ブラックウォーグレイモンめがけて剣を振り下ろした、

「スレイ・エレイン！！」

発生した斬撃は、まるで地を這う蛇のように進んでいき、ブラックウォーグレイモンをとらえた。

「二人とも、あとをお願い。」

メデューサモンは魔獣形態のままこう言い残すと、倒れた。

ヴィヴィオはその様子を見て、

「アインハルトさん、行つて下さい。」

と、アインハルトに言った、

「え？」

アインハルトが驚くと、

「私とマグナモンでブラックウオーグレイモンをどうにかします。ですからアインハルトさんたちはムゲンドラモンを。」

ヴィヴィオは真剣な口調で言った。アインハルトは少し考えると、
「分かりました。」

アインハルトはこう言つて、ムゲンドラモンに向かっていこうとした、

その時である、

「みんな大丈夫!!」

「今から加勢します!!」

エリオとキャロが駆け付けた、

「フリード!ブラストフレア!!」

「エリオ流、ビクトリーブレイブ!!」

キャロとエリオは、それぞれの得意な攻撃をムゲンドラモンに放つた。これによりムゲンドラモンの動きが少し止まり、その間に、キャロは自身が使役する竜の中でも最強と言える「ヴォルテール」を呼び出した。

「トライデントアーム!!」

「紫電一閃！！」

「ギガテンペスト！！」

メタルグレイモンは左手の手甲で殴りかかり、エリオは槍から発せられた電撃を放ち、キャロの召喚したヴォルテールは強力な破壊光線を放った。しかし、ムゲンドラモンは、

「ムゲンキャノン！！」

背中に装備された巨大な大砲から発射された破壊光線ですべての攻撃を吹き飛ばした、

「ギガデストロイヤー！！」

メタルグレイモンもギガデストロイヤーで応戦したが、パワーで勝つことが出来ず、徐々に押され始めた。

そんな中でもメタルグレイモンはあきらめなかった、

（強くなるにはまず誇りを持って）

かつて自分のジェネラルだった人物が言っていたことを思い出した、

（あんな誇りを持たぬ敵に負けるな）

「誇りを持たぬ機械に負けるか！！」

メタルグレイモンがこう叫んだ瞬間、メタルグレイモン、エリオ、

キャロ、そしてフリードとヴォルテールはふっ飛ばされた。

「ああ！みなさん！」

アインハルトはブラックウオーグレイモンの追撃を回避しながら叫んだ、

（そろそろ自分が本格的に奴と戦わなくちゃ）

ヴィヴィオとマグナモンがこう思っていると、

「俺たちの勝利だ！！」

ブラックウオーグレイモンはこう叫んで、必殺技の「ガイアフォー」を放とうとした。

「くそ、これまでか。」

メタルグレイモンは薄れゆく意識の中で思った。自分はここで終わるのか、と。

「無様ですね。青の軍最強の兵もこの程度ですか？」

すると、自分の目の前に白いドレスを着た美しい女性が現れた。

「何だと?!」

メタルグレイモンはこう言いかえしたが、

「ただ壊せばいいだけの機械も壊せず、こうして何もできず倒れている。そのような体たらくでどうにかできるのか？」

女はメタルグレイモンにこう言った、

「主がその程度の小物で無いというのであれば、もう一度立ち上がって戦ってみよ。まだ使える札はあるであろう。」

この時、メタルグレイモンの意識は途絶えた。

「俺たちの勝ちだ！ムゲンドラモン!!」

ブラックウォーグレイモンの言葉を聞いたムゲンドラモンは、機動六課隊舎に向けてムゲンキャノンを放とうとした。今後しばらくの間、大きな動きをできないようにするため、隊舎を木端微塵に吹き飛ばそうと言うのだ、

「くそ、ここまでか。」

マグナモンはすぐにムグンドラモンを止めに行こうと思ったが、ブラックウオーグレイモンがガイアフォースを放とうとしているので、その場を動くことができず歯噛みした。

そしてムゲンキャノンが放たれようとしたその時である。突如巨大な黄金の光が発生し、その光に包まれメタルグレイモンが立ち上がった。

「バカな！理論の上では消滅してもおかしくないダメージだぞ。」

ブラックウオーグレイモンがこう叫ぶと、メタルグレイモンの頭上に、白いドレスを着た女性が立っているのが見えた、

「おのれ、古代ベルカ時代はおるか、今になっても我らの邪魔をするか。竜王！！」

ブラックウオーグレイモンがこう言うつと、

「マトリックスエヴォリュション。」

竜王エイリーンと呼ばれた女は、静かにこう言つて、その身を光の粒子に変えると、メタルグレイモンの体の中に入り込んだ。その途端、

「メタルグレイモン、超進化！ジークグレイモン！！」

メタルグレイモンが黄金の光に包まれ、体中が黄金の金属で包まれた竜型デジモンが現れた。

「あれが…凄い。」

「話には聞いていましたけど。」

ヴィヴィオとアインハルトは驚いた。タイキやメデューサモンから話は聞いていたが、きっと見られないと思っていた「ジークグレイモン」が目の前にいるのだ。

「馬鹿な！青沼キリハの力を受けずに進化だと、理論上絶対にありえない！」

ジークグレイモンを見たブラックウオーグレイモンはこう叫んだ。その時、

「よそ見してんじゃねえ！！」

マグナモンとアインハルトのパンチ、ゴルドラピットモンとヴィヴィオの蹴りを喰らった。しかもヴィヴィオの姿は、今までの子供の姿から、一気に16歳くらいの姿に変わっていた。

「くそっ！いきなりなんだってんだ！」

ブラックウオーグレイモンはこう叫んで、再び四人と戦闘を開始した。

「ギガデストロイヤー?!！」

ムゲンドラモンは体中からミサイルを発射した、だがジークグレイモンは、

「デストロイススマツシャ　!!！」

高速で回転し、尾の先に付いた砲台で一発残らずミサイルを撃ち落とした。

「ムゲンキャノン……」

続いてムゲンキャノンを放とうとしたが、

「トライデントファング!!！」

ジークグレイモンは巨大な爪でムゲンキャノンに傷をつけ、

「プラスマレールガン!!！」

右手のレーザー銃で木端微塵に破壊した。

「これでとどめだ!!ファイナルストライクス!!！」

ジークグレイモンはこう言うと、黄金の翼で飛翔すると光を纏って突進した。ムゲンドラモンはまるでクラッシュしたレーシングカーのようにふっ飛んで行った。

「何い！ムゲンドラモンが負けただと。」

ブラックウオーグレイモンはこう言うと、

「一時撤退だ!!」

と叫んで。これまでにないほどの巨大な「ガイアフォース」を作り出し、機動六課隊舎めがけて投げつけた。ガイアフォースは着弾と同時に大爆発を起こしたが、

「ゴールドントライアングル!!」

「エクストリーム・ジハード!!」

「ジークフレイム!!」

ゴルドラピットモン、マグナモン、ジークグレイモンの技で、他の連中と機動六課の隊舎を守った。

（良かった）

ヴィヴィオはこう言うと、どっと疲れが来たのか倒れた。

「え?ヴィヴィオ!」

「ヴィヴィオさん!」

この時シャマルは気絶していた為、一時この場は大騒ぎになった。

第二十三話 ジークグレイモン再臨（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー！」

カットマン

「今回のテーマはステイングモン。ステイングモンは昆虫型のデジモン。必殺技は両腕のスパイクで敵をさす「スパイキングフィニッシュ」だ。」

モニタモンA

「昆虫特有の固い体と、素早く動ける羽を持つデジモンですな。」

モニタモンB

「俊敏な動きと的確な判断力を持つ、暗殺者のようなデジモンですな。」

モニタモンC

「とてもクールな性格ですな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

多くの被害が出た管理局地上本部と機動六課襲撃の次の日。ムルムクスモンが声明を発表し、クラウドは皆を集め、ムルムクスモンの目的や今後の動きについて話す。

次回「クロスハート&機動六課&ナンバーズ、異色の同盟」

話も佳境に入ったので、登場人物紹介（デジモン編）

クロスハート

工藤タイキ （CV高山みなみ）

ほっとけないが口癖のクロスハートのジェネラル。13歳。クロスローダーの色は赤。

デジタルワールドの復興に仲間たちと取り組んでいた所、「竜王エイリーン」に導かれてミッドチルダにやって来た。

お人よしなのは相変わらずで、ミッドチルダでも助っ人活動をしている。この時格闘技でアインハルトに勝利したことで、彼女からライバル視されている。

今回も的確な状況判断と驚異的な身体能力は健在。また魔道士ランクAAに匹敵する魔力値を持つ。

シャウトモン （CV 坂本千夏）

クロスハートのデジクロスを中心である小竜型デジモン。

事件の時以外は主にスバルとつるんでおり、よく格闘技の訓練を一緒にやっている。

今回はタイキ達同様「竜王エイリーン」に導かれミッドチルダにやって来た。今回は竜王の加護を受けたことで、任意で超進化ができるようになった。

バリスタモン （CV 草尾毅）

シャウトモンの相棒を務めるマシーン型デジモン。

事件の時以外は主にエリオとコンビで行動している。エリオに突き攻撃のコツを色々教えている。

一度だけ従来の姿の「ダークボリューモン」になり、隊舎の一部を破壊した過去がある。

ドルルモン (CV 櫻井孝宏)

クロスハートに所属する凄腕の大型犬型デジモン。

事件の時以外はティアナとコンビを組んでおり、二人で様々な連携を使いこなす。

ひたすらに強くなることを望むティアナをかつての自分と重ね合わせ、彼なりのやり方でティアナを導いている。

スターモンズ (CV スターモン 島田敏、ピックモン 桑島法子、チビックモン 菊池こころ)

クロスハートに所属するデジモンユニット。一番上のスターモンを中心に、大勢のピックモンとチビックモンで構成されている。事件の時以外はキャロと一緒におり、フリードとも仲が良い。連携技として「メテオストーム」と言う技がある。

時折シグナムの剣になって、他のデジモンと訓練をしている。

キュートモン (CV 桑島法子)

ドルルモンと一緒にクロスハートに所属することになった妖精型デジモン。

普段はシャマルと一緒に医務室におり、シャマルとも仲が良く、「けがの治療においては彼に敵う者はいない」とシャマルは言っている。

前にシャマルの料理を食べて、今は亡きおばあちゃんに会いにいきかけた。

ジジモン (CV 島田敏)

シャウトモン達の故郷である「微笑みの里」の長老。

デジモンに詳しく、タイキ達がデジタルワールドであったことのないデジモンに会った時に、解説を行っている。

ドンドコモン (CV 櫻井孝宏)

クロスハートに加入している、太鼓のような形のデジモン。
非戦闘員なので、デジクロスしないで戦う事は殆どない。

リリモン (CV 菊池こころ)

シャウトモンの幼馴染であるデジモン。

戦闘力はあまり高くないが、技の威力は高く雑魚であれば一人で相
手にできる。

チビカメモン (CV 白石涼子)

クロスハートに加入している、通常より小柄なカメモン。

戦闘に出ることは無いが、他のデジモンとクロスして他をサポート
することが多い。

ブルーメラモン (CV 三浦祥朗)

クロスハートに加入しているデジモン。

マグマゾーンで消滅したが、バグラモンとの最終決戦時に復活し、
その後クロスハートに入った。

様々な冷気技で戦闘に参加する。

ナイトモン (CV てらそままさき)

クロスハートに加入しているデジモンであり、ポーンチェスモンズ
(白)の隊長。

メデューサモンと相性がいいらしく、良く忠義や剣術の事に関する
話をしている。

騎士と言う立場上シグナムから気に入られ、良く練習相手になって
いる。

ポーンチェスモンズ

種類で言えば、白のポーンチェスモンが集まっている部隊。

任務時以外にも様々な所で仕事をしているので、機動六課隊舎のお

馴染みさんになっている。

バステモン (CV 河西智美 (AKB48))

ノリでクロスハートに加入したデジモン。タイキの事は「タイキ様」と呼んでいる。

余り何かをすることはないが、子供をあやすのが上手な一面を見せた。

リボルモン (CV 皆川純子)

探索能力に優れたデジモン。

銃撃が得意で、良くティアナの手本としてなのはの訓練に参加させられる。

ベルゼブモン (CV 岸尾だいすけ)

右手に巨大な銃「ベレンヘーナ」を装備したデジモン。

銃撃と空中戦に優れており、なのはの練習相手として訓練に参加している。ちなみにベレンヘーナは失くした後作り直しました。

ルーチェモン (CV 松野太紀)

ヘブンゾーンにて倒されたが、最終決戦の時に復活しクロスハートに加入したデジモン。

今回は以前同様に任意で通常のアнгルの姿と、墮天した姿である「フオールダウンモード」を使いこなせる。ヴィータと連携技である「連技 惑星直列」を使う。

ワイズモンと一緒に研究家のように行動することが多い。また最近は無敵書庫によく行っている。

ピノッキモン (CV 難波圭一)

ダストゾーンの住人。バグラ軍最終決戦後クロスハートに加入した。ハンマー使いということでヴィータと気が合う。デジクロスを行う

とデジクロスを行ったデジモンにハンマーとそれを使いこなす体力を与える。

ワイズモン (CV 速水奨)

クロスハートの頭脳として活躍するデジモン。

珍しいものを見るとすぐに解剖したがる。そのため、解剖されかかったフリードやリインフォース?に苦手とされている。

モニタモンズ (CV 丸山優子)

赤と緑がそれぞれ存在し、赤は元々クロスハート所属で、緑はネネのクロスローダーからの移籍。

高い探査能力と情報の共有能力を持っているので、偵察兵として活動するが、はやてから間違った形でその力を使われることが多い。

三体一緒にデジクロスすると、「ハイビジョンモニタモン」になる。

スパロウモン (CV 菊池こころ)

元々ネネのクロスローダーにいたデジモン。

可愛い口調と見た目を持つが、考えていることは物騒で、敵には容赦なく攻撃する。ディアナモンやなのはと馬が合う。

従来のx5のほかに、ディアナモンとデジクロスすることで、クレイモア風の双剣に変化する。

ディアナモン (イメージCV 水樹奈々 or 生天目仁美)

元々はブラストモンの部下で「殺人姫」の異名で呼ばれた凄腕の暗殺者デジモン。

ブラストモンの派遣した目付け役としてテクノゾーンにいたが、その領主だった「キングエテモン」に、作中では語られないが虐待的扱いを受けていた為謀反を起こし、ブラストモンとも離反しクロスハートに入った。

本人は戦闘向きではないと言っているが、素早い動きと幻影を使う

ことで相手を惑わし、急所に確実に一撃を与える戦闘を得意とする。また不意を付ければブラストモンを蹴り飛ばすこともできる。薬草にも詳しく、さらに料理上手である。

従来の装備の上に冷氣に強くなる忍装束を着込んでいる。（ただし、絶対零度の中で水着でも平気というのは事実）

メデューサモン （イメージCV 大原さやか or 山本麻里安）
ブレイブゾーン出身で、元々ブルーフレアに所属していたデジモン。高い戦闘力を保持しており、クロスハート勢のデジモンの基本戦闘力を比べれば彼女が最強である。

マルチグレイモンという強力なデジクロスが存在したが、ブルーフレアとは波長が合わないと言う事でクロスハートに移籍する。

力をセーブするため常に着脱可能な鎧を身に着けており、鎧を脱ぐと水着に羽衣を身に着けたような露出度の高い服装になり。必勝率が上がる。

シャウトモン達とデジクロスすることで「シャウトモン×6」という姿になる。

グレイモン （CV 草尾毅）

キリハのクロスローダーから移籍した恐竜型デジモン。

メデューサモンとどこまでも気が合いすぎるため、かなりの頻度で喧嘩を行い、激しくなると殺し合いに発展する。

竜王エイリーンに導かれてミッドチルダにやって来る。本来ならキリハの力がないと超進化できないが、竜王の加護を得て任意で「ジークグレイモン」になれるようになった。

メイルバードラモン （CV 岸尾だいすけ）

グレイモン同様にキリハのクロスローダーから移籍した猛禽型デジモン。

時折訓練でフリードに効率の良く速い飛び方を教えている。グレイ

モンとデジクロスすることで「メタルグレイモン」になる。
竜王エイリオンに導かれてミッドチルダにやって来た。

グラウンドラモン （イメージCV 中井和哉or浪川大輔）
ドラゴンランドでドラコモンと穴を掘っていた所を見つけ、クロ
スハートに加入したデジモン。

基本は穏やかだが、戦闘になると巨大な腕を振り回して暴れまわる。
良く昼寝をしており、邪魔されるとキレる。

クロノ・ハラウンと仲が悪いはずだが、何故かいつも息がぴった
り合う。

キサキのクロスローダー

キサキ・ランスター （イメージCV 高橋美佳子）

竜王の末裔である少年。名字から分かるとおりティアナの縁者。竜
王の一族の証しとして、流暢な古代ベルカ語の発音と、竜への変身
能力を持つ。ただし竜への変身は最大五分、短いと二分が限界。
微妙に黒みがかった紫髪を長く伸ばしており、顔立ちも可愛い
為女の子に間違われる事が多いが、れっきとした男である。（いわ
ゆる男の娘）

今までコソコソと過ごしていたので、ミッドでもデジタルワールド
でも表舞台には出ていない。競艇や競馬が好きで、的中率が高く彼
の副収入になっている。また意外とエロゲーム好きである。

プロレスの経験があるため戦闘力が高い為に、接近戦では高いポテ
ンシャルを発揮する。

水色のクロスローダーを所有し、メインデジモンは「エクスブイモ
ン」

ジェネラルへの直接攻撃や、進化やデジクロス中に攻撃する等、反
則とは思えない技を多く使用する。

エクスブイモン （イメージCV 小清水亜美）

キサキのメインデジモン。古風な女性口調をしており、一人称は「私」

戦闘好きであり、かつてキサキがブルーフレアと出会った時、メタルグレイモンを一人で倒す戦闘力を持つ。

ステイングモンとデジクロスし「パイルドラモン」となり、「シルフィーモン」「シャッコウモン」が加わると「セイントドラモン」となり、キサキの竜王の力を受けると「インペリアルドラモン」になる。

ステイングモン （イメージCV 森田成一）

エクスブイモンにいつも振り回されているデジモン。一人称は「俺」タイキがフォレストゾーンやハニールランドで出会ったのは別個体。エクスブイモンとのデジクロスで「パイルドラモン」になる。

メタルガルルモン （イメージCV 代永翼）

二足歩行のX抗体版のメタルガルルモン。数多くの飛び道具と飛翔能力で、高い戦闘能力を発揮する。デジクロスを行うことで「メタルアーマー」という鎧に変わる。

アキラモン （イメージCV 遠近孝一）

巨大な翼を持つ巨鳥型デジモン。

マルチグレイモンの剣を止めるだけのパワーを持ち、速い速度で空を飛ぶ。テイルモンとのデジクロスで「シルフィーモン」になる。

テイルモン （イメージCV 前田愛）

アキラモンの相棒を務めるデジモン。

身軽な動きと溢れるパワーで戦うファイター。暗いところでも活動できるので、斥候としても活躍する。

エンジェモン （イメージＣＶ 緑川光）

六枚の羽根を持つ天使型デジモン。

神聖系の力を発揮する為バグラ軍にとって大敵と呼ばれたデジモン。アンキロモンとのデジクロスで「シャッコウモン」さらに「ホーリーエンジェモン」「パロットモン」「エンジェモン」とデジクロスすることで「セラフィモン」になる。

アンキロモン （イメージＣＶ 浦和めぐみ）

おっとりしたエンジェモンの相棒。

硬い体と全身を覆う棘、尻尾の先のハンマーで豪快に戦う突撃兵。また強力な防御技もある為防御兵としても活動する。

ホーリーエンジェモン （イメージＣＶ うえだゆうじ）

強力な力を持つ高等天使デジモン。

冷静な判断力とあらゆる状況を打開する強力な力がある。前記した「エンジェモン」「アンキロモン」のデジクロス体「シャッコウモン」達とデジクロスすると「セラフィモン」になる。

パロットモン （イメージＣＶ 桑谷夏子）

オウムのような姿をしたデジモン。強力な雷系の技を使う。

後述する「エンジェウーモン」前述した「ホーリーエンジェモン」「エンジェモン」「アンキロモン」とデジクロスすると「セラフィモン」になる。

エンジェウーモン （イメージＣＶ 田中敦子）

美しい姿をした女性天使デジモン。

治癒能力を持ち、基本的に穏やかで優しいが、怒ったり悪人に会うと容赦がなくなる。キサキは皆に嫌われている中、デジタルワールドで最初に出会った彼女は「あなたはいい人」とキサキに言った。

それ以来キサキいじりが趣味になっている。キサキいわく「やんデレ」

ガイオウモン （イメージＣＶ 小杉十郎太）

甲冑を身に纏い、二振りの剣を持った武人型デジモン。

純粋な性格で暴れるのが大好き。セイントドラモンに次ぐ実力者でもある。

ディアボロモン （イメージＣＶ 藤原啓治）

悪魔のような姿をした謎のデジモン。

沢山のクラモンを従えており、本人も未知数の戦闘能力を持つ。

クラモン達とのデジクロスで「アーマゲモン」になる。

クラモンズ （イメージＣＶ こおろぎさとみ）

何故か沢山いるクラゲのような謎のデジモン。ディアボロモンを隊長に活動する。

エビバーガーモン （イメージＣＶ 甲斐田裕子&小林ゆう）

キサキの持つデジモンの中で唯一の非戦闘員。二体いる。

いつもエビの匂いがしているが、食べるとカニの味がするらしい。

料理が得意だが、エビ料理しか作らない。

アインハルトのクロスローダー

アインハルト・ストラトス （ＣＶ 能登麻美子）

古代ベルカの王様「クラウド・G・S・イングヴァルト」の血を引く少女。本名「ハイディ・E・S・イングヴァルト」。霸王の記憶を少しでも受け継いでいる。

格闘技が強くタイキとキサキ以外には全戦全勝している。

緑色のクロスローダーを所有し、メインデジモンは「テリアモン」

テリアモン （イメージCV 多田葵）

「もーまんたい」という口癖を持つ獣型デジモン。

アインハルトの練習相手になっていたので、通常の戦闘能力は高め。アインハルトの霸王としての力を受けて「ゴルドラピットモン」に進化する。その際、テリアモンに霸王イングヴァルトの霊が憑依する演出が出る。

ヴィヴィオのクロスローダー

ヴィヴィオ （CV 水橋かおり）

聖王の遺伝子を持つ少女。色々と謎が多い。

赤と青のツートンカラーのクロスローダーを持ち、メインデジモンは「ブイモン」

ブイモン （イメージCV 野田順子）

ヴィヴィオのパートナーをする小竜型デジモン。

戦闘種族の出身であり、強力な力を持つ。またスバルに匹敵する大喰らいである。

ヴィヴィオの聖王としての力を受けて「マグナモン」に進化する。その際聖王「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」の霊が憑依する演出が出る。

アリシアのクロスローダー

アリシア・テストロッサ （CV 水樹奈々）

デジタルワールドで戦士として育った少女。現在十五歳。お互いに会ったことは無いが、フェイトの姉である。

サンゾモンのデジコアの力で復活したので、サンゾモンの幻影を見せる能力が少し使える。

最初はフェイトと同じ髪型だったが、母親がやりづらいつので、今はショートカットになっている。

かつてキサキと共にデジタルワールドを回ったことがある。キサキは彼女を「最強のお節介娘」と言っている。

母親が作ったオレンジのクロスローダーを所有し、メインデジモンはギルモン。

ギルモン （イメージCV 野沢雅子）

おおがらな赤い竜型デジモン。

基本的に幼げな印象があるが、戦いになると生来の狂暴性を出す。アリシアとの融合を行って超進化することで「デュークモン」になる。融合が無くても超進化は可能で、その場合「フレイドラモン」になる。

サンゾモン （イメージCV 松来未祐）

シュラインゾーンを取り仕切っていた僧侶型デジモン。

何かを改めたいデジモン達に修行を施すデジモン。彼女のデジコアには癒しの力がある。

ゴクウモン （イメージＣＶ 杉田智和）

黒い毛で覆われたサルのような姿のデジモン。

アリシアは復活当時「おじさん」と呼んでいたので、今でもたまに自分の事を「おじさん」と言う。

年を取ってきているらしいが、老練なテクニックを持つ強力な戦士である。

チヨ・ハツカイモン （イメージＣＶ 日高里菜）

豚の着ぐるみのようなものを身に着けたデジモン。

一応女性天使型のデジモンだが、腹が減ると狂暴化する性質故、力をセーブする着ぐるみを着せられて追い出された後、シュラインゾーンにやって来た。

これまでの修行で、腹八分目減るまでは我慢できるようになった。

サゴモン （イメージＣＶ 佐々木望）

シュラインゾーンに住む河童のようなデジモン。（明石タギルがハントしたのとは別個体）

自分に何ができるか知りたくてサンゾモンやアリシアに付き従っている。

ボコモン （イメージＣＶ 杉山佳寿子）

シュラインゾーンに住んでいるデジモンの学者。常に腹巻を着用し、腹巻の中の百科事典を始めとするアイテムが入っている。

かつて人間の子供とデジタルワールドを旅したことがあり、人間界についても詳しく、アリシアに勉強を教えた。

ネーモン （イメージＣＶ 菊池正美）

ボコモンとコンビを組んでいるデジモン。常にズボンを着いている。ボコモン同様に人間の子供とデジタルワールドを旅した経験がある。

ボケることもしばしばで、ボコモンにゴムパッチンでお仕置きされる。

プレシアのクロスローダー

プレシア・テストロツサ （CV 五十嵐麗）

娘のアリシアと同様にシュラインゾーンに暮らす妙齡の女性。デジモンドクターを名乗っており、様々な病気のデジモンから「プレシア先生」と慕われている。かつてシャウトモンと出会っている。

以前はバグラ軍に対抗する手段を探してデジタルワールド中を回っていた、その経過でデジクロスを発見し「クロスローダー」を開発し、その後「強制デジクロス強制禁止」のシステムを開発すると同時に、超進化について発見し、一番最初にデジモンを超進化させた。紫のクロスローダーを持ち、相棒としてストライクドラモンを連れている。超進化させるとどんな姿になるかは秘密となっている。

ストライクドラモン （イメージCV 平川大輔）

誰が言ったか「孤高のデジモン」故郷のゾーンを侵略したブルーフレアのデジモンを追い返す経過で傷つき、倒れてた所をプレシアに救われ、それ以来彼女に付き従っている。

何故かプレシアと一緒にいると良いことがないらしい。

超進化可能である。

ムルムクスモン勢

ムルムクスモン （イメージＣＶ 神奈延年）

広域次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」に成りすましていたデジモン。

その実力や目的は謎に包まれている。

ベリアルヴァンデモン （イメージＣＶ 山崎たくみ）

ムルムクスモンに仕える「ムルムクスモン四鬼」の一人。

皆からは「ぶりぶりざえもん」と呼ばれ、本人も「自分は強い者の味方だ」と言っている。

オフアニモン・フォールダウンモード （イメージＣＶ 豊口め

ぐみ）

ムルムクスモン四鬼の一人。

実力や攻略法は謎に包まれている。

ムゲンドラモン

機械系デジモンが合成されているデジモン。メタルグレイモン達を簡単にふっ飛ばす力がある。

後述するキメラモンと合体すると……

キメラモン

デジモンの生体パーツが合体しているデジモン。インペリアルドラモンに勝利した。

前述したムゲンドラモンと合体すると……

ブラックウォーグレイモン （イメージＣＶ 立木文彦）

強力な力を持つ竜人型デジモン。

基本しつかりしているが、残念な結果しか出ないので、皆から「マダド」（まるでダメなドラゴン）と呼ばれている。
後述するブラックメタルガルモンとデジクロスすると……

ブラックメタルガルモン

強力な力を持つ機械獣型デジモン。

キサキのメタルガルモンと互角以上の戦いを見せたが、グランドラクモンには敵わなかった。

前述したブラックウォーグレイモンとデジクロスすることで……

その他

クラウド・クラウドイウス（イメージCV 小野坂昌也）

管理局地上本部司令官「レジアス・ゲイズ」に味方している謎の少年。基本帽子とコートを着込んでいる。（妖怪人間ベムのベムのよ
うな服装）

基本人間として振る舞っているが、実際はデジモンであり真名は「
グランドラクモン」

人間の姿でもある程度のレベルのデジモンは簡単に倒せるだけの
実力者。古代ベルカ時代を詳しく知っている。

話も佳境に入ったので、登場人物紹介（なのは編）

機動六課

高町なのは（CV 田村ゆかり）

管理局不屈のエースオブエース。ただし一部の局員からは、管理局一の死にぞこないと呼ばれる。

若いながら十年の経験を持ち、貸し出しではあるが幼馴染の「八神はやて」の部隊に副隊長として活動している。

スターズ分隊に所属し、部下であるスバルとティアナを自分なりの厳しさで指導している。現在はヴィヴィオの保護責任者をしている。デヴァイスは「レイジングハート」遠距離砲撃魔法を得意とする。

フェイト・T・ハラオウン（CV 水樹奈々）

なのはの幼馴染で管理局のエリート。執務官をしている。

ライトニング部隊に所属し、自分の保護児童であるエリオとキャロと共にジェイル・スカリエッティ（ムルムクスモンの事）を調べていた。

かつてあったジュエルシード事件の一番の被害者であり複製人間、「プロジェクトF」のFが名前^{フェイト}の由来。

デヴァイスは「バルディッシュ」雷を使った攻撃と斬撃による攻撃、素早い動きが切り札である。

八神はやて（CV 植田佳奈）

機動六課の部隊長を行う魔道士。

おちゃらけているように見えるが、割と真面目な人物である。また腹黒い一面を見せることも。

かつてあった「闇の書事件」の中心人物で、一部の管理局員から嫌われている。

デヴァイスは「シュベルトクロイツ」と「夜天の書」

シグナム (CV 清水香里)

はやてが個人で所有する特殊戦力の一人で、「烈火の将」を称する。
ライトニング部隊の副隊長。

生真面目な人物で、飄々としたキサキとは相いれないが、クロスハ
ートのナイトモンと馬が合うようである。

はやていわく、隠れ巨乳らしい。

デヴァイスは「レヴァンティン」

ヴィータ (CV 真田アサミ)

はやてが個人的に所有する特殊戦力の一人で、「鉄槌の騎士」を称
する。

子供のような容姿をしているが、スターズ分隊の副隊長をしている。
甘いものが好きであり、よく趣味の合うスパードモンと甘いもの
を食べ歩いているらしい。

デヴァイスは「クラフアイゼン」

シャマル (CV 柚木涼香)

はやてが個人で所有する戦力の一人で、「風の癒し手」を称する。
キュートモンと一緒にメディカルスタッフの筆頭として六課に所属
する。

料理がとんでもなく下手くそで、料理を食べたキュートモンをあの
世に送りかけた。

デヴァイスは「クラールヴィント」

ザフィーラ (CV 一条和矢)

はやてが個人で所有する戦力の一人で、「盾の守護獣」を称する。
人の姿を取ることもあるが、基本的には大型犬の姿で居るため、八
神家のペットと見られることが多い。作中では語られてないが、ワ
イズモンから解剖されかけた。

地中から棘を発生させて敵を貫く攻撃を得意とする。ブラックウォーグレイモンの鎧も貫いた。

リインフォース？ （ＣＶ ゆかな）

はやてが個人で所有する戦力の一人。

はやて、シグナム、ヴィータとユニゾン可能な融合機であり、後に分かるがキサキともユニゾンできる。

ワイズモンが苦手。

スバル・ナカジマ （ＣＶ 斉藤千和）

スターズ分隊の所属する新人魔道士。ティアナとコンビを組んでいる。

かつて事故に遭った時なのはに助けてもらい、それ以来なのはに憧れている。

華奢な見た目に合わず割と大食らいで、またアイスが大好きであり、時折ヴィータやスパイダモンと食べに行っている。

デヴァイスは「マツハキャリバー」

ティアナ・ランスター （ＣＶ 中原麻衣）

スバルとコンビを組むスターズ分隊の新人魔道士。執務官志望。キサキの従妹。

不名誉だと言われた兄「ティータ・ランスター」の名誉回復のため、執務官をめざし努力している。

デヴァイスは「クロスミラージュ」

エリオ・モンディアル （ＣＶ 井上麻里奈）

キャロとコンビを組んでライトニング部隊に所属する新人魔道士。

10歳だがすでに魔道士ランクBを所得している。

プロジェクトFの一環で制作された人造生命体である。それゆえ幼い頃から厳しい経験をしてきており、普通より少し大人びたところ

がある。

デヴァイスは「ストラーダ」

キャロ・ル・ルシエ （CV 高橋美佳子）

エリオとコンビを組んでいる新人魔道士。珍しい召喚魔法の中でも、特に強力で珍しい竜召喚の使い手。

支援魔法が得意で、攻撃パターンが荒々しいシャウトモン以外のデジモンへの支援も普通にやってのける。

同じ召喚魔法の使い手である「ルーテシア」を気にかけている。

ナンバーズ

ウーノ （CV 木川絵里子）

ジェイル・スカリエッティ（ムルムクスモンの事）が開発した戦闘機人の初号機。

クローン培養の女性であり、キサキが幼いころに事故死したキサキの姉の遺伝子が元になっている。真名は「エリカ・ランスター」

基本は淡々と物事を実行するが、キサキが絡むと姉としての愛情から感情的になる。

キサキとの関係は当然ナンバーズの他のメンバーは勿論、キサキ本人にも黙っていたが、クラウドの入れ知恵によりキサキに、さらにはクワットロにもばれている。

キサキ同様竜に変身できるが、激しい動きに耐える体つきではないため、一分も動き続けると大怪我する。

固有能力は、隠蔽と知能加速の能力「不可触の秘書」

ドゥーエ （CV 又吉愛）

暗殺と諜報活動が得意な戦闘機人。

レジアスの身边にいたので、クラウドと面識がある。性格が悪いが義理堅く、クラウドの依頼で色々なことを調べている。

固有装備は「ピアッシングネイル」で、好きな人間に化ける「偽りの仮面」という能力を持つ。

トーレ （ＣＶ 木川絵里子）

高速移動が得意な能力「ライドインパルス」を持つ戦闘機人。

セツテ達に技を教えた存在であり、最近はキサキを訓練相手として気に入っている。

「インパルスブレード」という装備を持つ。

クワットロ （ＣＶ 斉藤千和）

電子を操る能力「シルバーカーテン」を持つ戦闘機人。

クラウドの入れ知恵ではないが、ウーノが何者か知っている。そのため、陰では彼女を「エリカ姉さま」と呼んでいる。キサキからは性格が悪い、と言われているが、ウーノとキサキの関係を黙っている等、割と善人である。

固有装備はステルス機能を備えたマント「シルバーケープ」

チンク （ＣＶ 井上麻里奈）

隻眼の戦闘機人。

面倒見の良い性格なので、彼女より後ろのナンバーの戦闘機人に慕われている。

金属を爆発物に変える「ランブルデトネイター」という能力を持ち、ナイフのステインガーと合わせて使用する。

セイン （ＣＶ 水橋かおり）

無機質内に潜りこむ「ディープダイバー」という能力を持つ戦闘機人。

普段から明るい性格をしている。態度や振る舞いが子供っぽい為、他から姉扱いされていない。指先にカメラを仕込んでいる。

セツテ (CV 桑谷夏子)

トーレから戦闘訓練を受けた戦闘機人。

ここだけの話、賭け事が好きでキサキと気が合っている。そのためよく彼から、競馬や競艇の勝ち方を教わっている。

「ブーメランプレード」という装備を持ち、それを自由に操る「スローターアームズ」という能力を持つ。

オットー (CV 伊藤静)

女の子のような容姿のキサキと正反対の、男のような容姿の少女。戦闘機人である。

ディアボロモンの情報操作能力に興味を持っている。装備としてステルスジャケットを着込んでおり、「レイストーム」と呼ばれる大量の光線を放つ能力を持つ。

ノーヴェ (CV 斉藤千和)

赤髪の少年風の容姿をした戦闘機人。

攻撃的な性格で、その性格を姉たちからたしなめられている。キサキとよく喧嘩するが、一度も勝てなかったらしい。

「ブレイクライナー」と呼ばれる格闘戦術を使用する。

ディエチ (CV 升望)

砲撃を得意とする戦闘機人。

戦闘機人たちの中では割と良識的で、温厚な性格をしている。

固有武装の大型砲「イノームスカノン」を使用し、砲撃技「ヘヴィバレル」が使える。イノームスカノンはディエチ以外が使うと一発撃つのに二十秒かかる。

ウェンディ （CV 井上麻里奈）

何かと軽い性格の戦闘機人。

同じような能力を持つノーヴェとコンビを組んでおり、ノーヴェの世話が大好きである。

巨大な盾「ライディングボード」を持ち、それを飛行させる「エリアルレイヴ」という能力を持つ。

デイド （CV 伊藤静）

ナンバーズのラストナンバーの戦闘機人。

最後の機体と言う事だけあり戦闘能力は高いが、ナイトモンには敵わなかった。

何故か聖王に崇拜にも近い敬意をはらっている。キサキいわく「何かずれている」

双剣を武器にしており、「ツインブレイズ」という武器を持つ。

ルーテシア関連

ルーテシア・アルピーノ （CV 桑谷夏子）

召喚魔法を操る少女。

機械のように感情のないしゃべり方をするため、キサキからは憐れまれている。

何故かエリオとキャロに嫉妬に似た感情を持っている。

ディアナモンとメデューサモンに会ったことがあり、ディアナモンの場合、クラモンズやアギトのおかげで逃げられたが、メデューサモンにはガリューと一緒に挑んで負けた。

ゼスト・グランガイツ （ＣＶ 相沢正輝）

ルーテシアと行動を共にする謎の男。

経歴は謎に包まれているが、戦士としての実力は確かで、竜形態になったキサキの体に傷を付けられる数少ない人物。

後述したアギトとユニゾンすることができるが、短時間しか持たないらしい。

アギト （ＣＶ 亀岡真美）

ゼストやアギトに付き従うベルカ式の融合機。

珍しくキサキを悪く感じていない人物で、時折融合を行って彼の支援も行う。

ゼストを「旦那」と呼んで慕っている。

古代の王達

エイリーン・ドラクエイド （イメージＣＶ 柚木涼香）

ベルカ史において、暴君の名で語られる「ケイリス」という国の王。キサキの祖先。

暴君と呼ばれる過去のせいで、宗教的等の理由で人によつては嫌われている。（そのため、キサキは学校などで虐められた事がある）しかし、実際は誰よりも民を思いやる為政者だった。その中でムルムクスモンの策略にはまり、彼女を暴君と言わせることになる行動の片棒を担がされてしまい、ある理由から肉体を精神から切り離されている。

現在は女神のようになっており、キサキをデジタルワールドに転送しムルムクスモンに対抗できる戦力をデジタルワールドで集めさせ、

タイキ達をミッドチルダに導いた。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト （イメージＣＶ 伊藤かな恵）

古代ベルカにて「聖王」と呼ばれた人物であり、ヴィヴィオのオリジナル。

霸王とは幼馴染で、彼には一度も負けたことが無かった。

クラウドは、王とは思えないほど甘い人物、タイキの方がまだ厳しい、と評している。

クラウド・Ｇ・Ｓ・イングヴァルト （イメージＣＶ 平川大輔）

古代ベルカに存在した「シュトゥラ」という国の王で「霸王」と称された。アインハルトの先祖。

大切な者を守る力が欲しいと願い続けたが、彼の短い生涯の中でそれが手に入る事は無かった。そのため、この願いは子孫のアインハルトに受け継がれている。

ここで、地上本部襲撃に関わったスカリエッティ勢力の連中がどうなったか説明しておこう。

まずウーノは研究所内でムルムクスモンの攻撃を受けたが、その後やって来たキサキに救出された。それと同時に、キサキは多くの人造魔道士素体となっている人たちも救出し、病院へ連れて行った。トーレとセツテは、キメラモンと戦っている間にキメラモンの攻撃で気を失ったが、オメガシャウトモンに救出され、その後一緒に戦っていたフェイト同様なのはに預けられ、そのままお縄を頂戴された。

クワットロは、ワイズモンと戦闘になったが、「パンドーラ・ダイアログ」により再現された「シャウトモン×7」の「セブンビクトライズ」を受け気絶、その後駆け付けたタイキに捕まりました。チンク、セイン、ノーヴェ、ウエンディは、宣言した通り事が済んでから自首した。

ディエチはキサキ渾身のブレーンバスターを受けて倒れていた所を、クラウドが管理局直轄の病院へ連れて行きました。

オットーとディードは、機動六課本部での戦いに巻き込まれて気絶していた為、そのまま逮捕となった。

またルーテシアはメデューサモンに敗北し捕まったが、ゼストとアギトはキサキの妨害を受けるも、うまく脱出した。

何が言いたいかと言うと、現段階で地上本部襲撃に関わったスカリエッティ勢は、ほとんど捕まっていると言う事だ。

そして、機動六課勢もまた、重傷な隊員は病院で静養している。

その一つの病室にて、キサキはある人物と向かい合っていた。その人物は呼吸こそしているが、一向に目を覚ます気配がない。

その人物はウーノと呼ばれている、ナンバーズの筆頭である戦闘機人である。基本的に何事も淡々とこなす彼女だが、なぜかキサキに接するときだけは感情的になるのだ。

（俺自身、あなたが俺をどう思っているか知りたいんですけどね）キサキはこう思うと、彼女に顔に自分の顔を近づけ、そして……その後、何かに気が付いたようにその場所を去って、違う場所に行った。そしてその後、病室へやって来た看護師は途轍もなくビビったと言う。ウーノの火傷が完治と言ってもいいほどに治っていたのだ。

そしてタイキは、ある場所へスバル達と向かっていた。ギンガの病室である。

目的の部屋に着くと、扉を二回ノックした。

「はい、どうぞ。」

中からは割と元気そうな声が響いてきた。入ると、ギンガはベッドの上で身を起こしていた。

「良かった、割と回復したみたいだな。」

シャウトモンはギンガを見るや否やこう言った。

「シャウトモンは回復が早いのね。」

ギンガはシャウトモンにこう返した。彼自身ギンガを守りながら行った戦闘でかなりの傷を負ったのだが、オメガシャウトモンに進化した後シャウトモンに戻ると、完全に傷は完治し体力も全開だったという。

「ギン姉が元気ならそれでいいよ。」

スバルはこう言って、持ってきた缶ジュースをギンガに渡した。ギンガはぎこちない動きで受け取ると、ぎこちない動きでプルタブを開けた。

「ああ、それじゃあ俺たちは他に行きますね。」

タイキは何かの気を使っているのか、シャウトモン達とティアナとエリオとキャロを連れて病室を後にし、病室にはギンガとスバルが残った。

その後スバルとギンガは結構長く話し込んでいたという。

そして病室を後にしたタイキ達が次の病室に向かっていて、

「放して!!」

ある病室から何か叫ぶ声が聞こえた。これにはタイキ達は驚き、そして身構えた。昨日自分たちが捕まえた戦闘機人たちが逃げ出そうとして止められたのか、それとも変質者がいるのか、どちらにしても大事である。

タイキ達が問題の部屋に入ると、

「放して！！お母さんを助けにいかんきや！！」

「いや大丈夫だから！！ちゃんと救出されてるって！！」

ルーテシアが暴れており、それをキサキがフオールして止めていた。
「ああ、あんたらも手伝って！」

キサキは入って来たタイキ達を見るや否やこう言った。と言っても、キサキはルーテシアをほぼ完璧にフオールしているため、この状態を三秒保てば彼の勝利になるのだが。

とりあえず、何故こんなことになっているのかを訊いてみた。

キサキが言うには、キメラモンがオメガシャウトモンに負けた後、研究所に行つて人造魔道士の素体になっていたルーテシアの母親を救出したのだが、後になってからこれを知らないルーテシアが救出に行つて、今では管理局の局員が沢山いる研究所に顔を出して捕まらねないので、それを止めようと思つてきてみれば、案の定だったのでフオールして止めているのだと言う。

「モニタモン！見に行つてくれ！」

タイキは確認の為、モニタモンの一体に様子を見に行かせた。

「いましたな。」

モニタモンの顔には、仲間から送られてきた、静かに眠るルーテシアの母親「メガーヌ・アルピーノ」の映像が映った。

「医者話によると、ちゃんと治療すれば目覚めるってさ。」

キサキがこう言った時、ルーテシアは安心したのか、それともフオールされた時に体力を取られすぎたのか、ぶっ倒れた。

そして、ミッドチルダ中に新聞を発行している「ミッド広報社」のある部屋、ここでは社長と思わしき人物が伸びをしていた。昨日

の管理局地上本部襲撃のニュースをまとめた新聞の制作に追われていたのだ。

「社長！……！」

突然勢い込んできた社員に驚いた、

「何だ！」

社長が訊くと、

「特ダネです！とにかくこれを……！」

社員はこう言つて、一つの資料を渡した。そこに書かれていた内容を見た時、社長は一気に疲れを吹き飛ばした。

「今すぐ印刷会社に連絡！ほかの社員も呼んで記事にしる……！」

社長はこう社員に命令して、自分も彼方此方へ連絡を取った。

そしてクラウドは、クレープを片手に昨日の事件のニュースを報じる番組を見ていた。

「そりゃ今日は特番だよな。いつものこの時間は仮面ヤクザって番組をやってるんだが。」

クラウドはクレープをかじりながら番組を見ていた。すると、

「号外！号外！」

突然大きな箱を持って現れた男が、こう叫びながら紙のような物を配り始めた。クラウドはこっそり箱の中から一部かすめ取ると、その内容を見た。そこには、

時空管理局地上本部の指導者、レジアス・ゲイズの汚職発覚

という題字と共に、レジアスがジェイル・スカリエッツィの研究に協力していたという内容の事が書かれていた。

「ムルムクスモンのド派手な決別宣言っていう事か。」

クラウドがこう思うと、今まで二ユースをやっていたスクリーンが消え、代わりに違う場所の映像が出た。

昨日の戦いで倒れたヴィヴィオは、現在病院のベッドで寝ている。

傍で見ているなのはは、

「ヴィヴィオ、大丈夫かな。」

心配そうに見ていた、

「大丈夫だよ。ヴィヴィオは強いから。」

ブイモンはこう言っているが、それでも心配だった。やはり隊舎には残さず、別な所に置いておけばよかったかな、と思っていたと、ヴィヴィオが目を覚ました。

「あれ、なのはママ？」

何故か涙ぐんでいるなのはを見て、ヴィヴィオは驚いた、

「ヴィヴィオ！良かった！！」

泣きながら自分に抱き着くなのはに、また驚いたが、

（そのままにしてあげて）

と言いたげなブイモンの目配せで、そのままにしておくことにした。なので、

「でも聞いて、ブイモンって進化すると凄いだよ！」

そのままの態勢でなのはに報告した。

「なんかこう、ドーンとしてピカーとして！」

ヴィヴィオは身振りを交えて説明したが、

「そう、凄いね。」

なのはの反応があまりに薄かったので、

「なのはママ信じてないでしょう。」

と言つて、バイモンをこの場で進化させようとした。

「ちょ、ヴィヴィオ、ここで進化させたらとんでもないことに！」

バイモンはこう言つて止めようとしたが、間に合わなかった、訳ではない。何故か進化しなかった。

「あ、あれ？」

ヴィヴィオはなんどと言つて、クロスローダーを眺めはじめた。

（良かった、とんでもないことにならなくて）

バイモンはこう思うと同時に、

（そういえば昨日、ヴィヴィオが急に大人になったような）

という事を考えた、しかし結論は出ないので後で考えることにした。すると、部屋に備え付けられていたテレビが突然点灯した。

この映像は、甚大な被害を負った管理局地上本部や、機動六課隊舎は勿論、隊員たちが入院する病院や、無関係者の所にも流れていた。どこかの洞窟と思われる場所の映像が映っている。

「よし！終わりました！！」

画面の外から現れた大きな鎌を持った女が奥に呼びかけると、

「よし、分かった！」

奥から、両肩に動物の頭のようなものを付けた悪魔のような男が現れた。

「ああぶりぶりざえもん、ムルムクスモン様は？」

女が訊くと、

「言うことは出来ぬ、聞きたくば回答料100万円………って何を言わすか！」

男は、自分はベリアルヴァンデモンだ、と言った。

「貴様もいい加減他の世界のアニメに影響されるのをやめんか、オファニモン。」

オファニモンと呼ばれた女は、

「だってあなた強い者の味方でしょう。」

と、ベリアルヴァンデモンに言った。すると、

「戻ったぞ。」

奥のほうからブラックウオーグレイモンに連れられて、ブラックメタルガルルモン、キメラモン、ムゲンドラモンが帰って来た。

「ああ、戻ったんだ。”マダド”」

オファニモンはブラックウオーグレイモンにこう言った。ブラックウオーグレイモンはずつこけると、

「何だよマダドで?!?!」

と抗議した、

「”ま”るで”ダ”メな”ド”ラゴン、略してマダドよ。」

オファニモンはこう説明して、

「あなたいつも残念な結果しかないじゃん。」

と言った、

「残念ってなんだよ、俺だってこの前は!!」

ブラックウオーグレイモンがこう言うと同時に、映像は彼の言い争いの映像になった。

見ている者たちがコントか、と思い始めた時。突然大量の炎が流れてきて、六体のデジモンを包んだ。

「コントやってるのかお前ら!!」

遅れて出てきたムルムクスモンが、突っ込んだ所で、カメラ目線になると、

「ああ、今のところカットね。」

頭の上でバツ印を作り、こう言った。

「だからコントやってるのか！！！！」

この映像を見ていた人は皆、こう突っ込んだだろう。

「いや、これ生放送です。」

カメラの操作をしていると思われる者が、ムルムクスモンに言った。

「え、そうなの。」

ムルムクスモンは一言こう言うと、

「えーでは、これより我らユートピア軍の声明を発表する。」

咳払いして声明を始めた。

「我々はこれより一か月以内に主要な次元世界を破壊し、新たなる世界「理想郷」を作る所存だ。それゆえミッドチルダの人間は、我々に賛同するならば今から一週間以内に我らに降伏せよ。そうすれば確たる処遇と将来を約束する。だが敵対するならば、我らは容赦なく攻撃する。今から一週間は平和的に過ごすつもりなので、しっかり考え最善の選択をしてほしい。」

ムルムクスモンはこう言うと、後ろを指差して、

「そしてこれが、我が最強戦力、その名もムルムクスモン四鬼……」

と言った。指の先には黒こげになって倒れている六体のデジモンが居た。

「いつまでねてんだお前ら！！」

ムルムクスモンはこう叫ぶと、それぞれのデジモンの口にニガキ（世界一苦い木）の枝を突っ込み、シユールストレミング（世界一臭い発酵食品）を鼻にくっつけた。結果皆物凄い悲鳴を上げて起きた。

「これぞ、我が最強戦力、ムルムクスモン四鬼だ！！」

ムルムクスモンはこう言ったが、皆一様に口直しと鼻直しをしているため、全然しまらない。

「ああ、四なのに六いる理由は、」

ムルムクスモンはこう言うと、

「ブラックウオーグレイモン、ブラックメタルガルルモン、強制デジクロス！キメラモン、ムゲンドラモン、強制デジクロス！」

不思議な形のクロスローダー、ダークネスローダーを使って四体のデジモンをデジクロスさせた。結果、黒い騎士のようなデジモン。背中に大砲を持った化け物型デジモンが現れた。

「オフアニモン・フォルダウンモード、ブラックオメガモン、ミレニアモン、ベリアルヴァンデモン、こいつらに勝つ自信があれば我らに挑むがいい。」

ムルムクスモンがこう言うと同時に、放送は終わった。

「何故だ、なぜこんなことになっている！！」

レジアスは怒りのあまり怒鳴った。いきなり協力関係にあった相手に決別の置き土産に、自分の事を悪く言われたからである。

「オーリスとクラウドはどうした！！」

レジアスは近くにいた部下に怒鳴りつけた、

「事後処理であちこちを回っています。」

部下はおどおどしながらこう報告した。

はやては、事後処理ついでの外回りで、偶然クラウドと出会った。
「クラウドさんやったよね。今時間ある？拒否はさせへんけど。」
はやてがクラウドに言うつと、

「まあいいですけど。」

クラウドはこう答えた。なので、

「あの時の地上本部襲撃、あんたも何かかわりがあるんやないか？」
「」

単刀直入に訊いた、

「昨日の動き、ずっと見てたけどあまりにも無駄がなさすぎる。まるで次に何があるか知ってるみたいに。」

クラウドははやての問いに、

「まあ、確かに俺が何のかわりがない、と言ったらウソになりますね。」

と、答えた。

「詳しい話をしますんで、自分の部下で今すぐ動ける者、クロスハートの面々、ナンバーズの連中をここに集めてくれませんか。」
そういつて、はやてに地図を渡した。

「そう分かった。」

はやてはこう言つて病院に連絡を取った。

そして、ミッド郊外の古い博物館に、呼ばれたメンバーは揃った。

機動六課からは、なのは、フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。クロスハートからはタイキとデジモン達、アインハルトとヴィヴィオ。ナンバーズは「ドゥーエ」と呼ばれる機体以外は全員そろった。

「んで、聞かせてもらおうで。」

はやてがこう言うと、

「まず最初にムルムクスモンの目的だが、あれは完全にD5を狙っている。おそらく、予言の中の偽りの竜王もこいつだろう。」

クラウドはこう言った、

「それじゃあ真なる竜王は？」

はやてがこう訊くと、

「あいつだと信じたいね。」

クラウドはこう言つて、キサキを指差した。因みにキサキは居眠りをしている。

「それより、なんで偽りの竜王がムルムクスモンってわかるんだ？」とタイキが訊くと、

「奴は古代ベルカにこの世界にやって来たんだ。その時奴は竜王と一緒にいたんだ。そして竜王を暴君と呼ばせる結果となった悪政は全て奴が仕組んだものだっただよ。」

クラウドはこう言つて、

「理由は竜王を人から化け物に変え、何にも勝る生体兵器を手に入れることだ。それを自分に強制デジクロスで取り込むだろう。」

と、補足説明をした。

ここまで聞いた時、一部の聡明なメンバーは気が付いた。

（確かに、竜王の力程兵器として使えば有効な物は無い）

そしてクラウドは、

「まあ長い時間自身の肉体から切り離されてんだ、今の竜王はほぼ女神と言つてもいいだろう。なんせ肉体が無いのに、自身の膨大すぎる魔力を使えるんだから。実際タイキ達をデジタルワールドから呼び寄せ、一時的とはいえキサキをデジタルワールドに送り込んだ

のも彼女じゃねえか。」

と言った。

「ですが、竜王の力を使う為には強靱な肉体が必要です。生まれつきのキサキでも最大五分で肉体崩壊が始まるのに、いくらデジモンでも。」

ウーノの問いには、

「だから、ムルムクスモンはジェイル・スカリエッティの名を名乗って違法生体実験を行っていたんじゃない。」

いつ起きたのか、キサキが答えた。

「調べたけど、俺たちがジェイル・スカリエッティだと思っていた人物は生体学者じゃなかったぜ。あの男は少し生物系の成績がいい法律家だ。」

「えーと、つまり？」

フェイトは気になったようで、キサキに聞いた、

「みんなスカリエッティを表彰モンの科学者って言ってるけど、本当に勝算されるのはムルムクスモンだよ。奴の研究は竜王の肉体の力をつまぐ制御したり、より強くするためのものだったわけです。」

姐さん達だってその為の実験体として開発されたんだ。」

キサキはこう答えた、

(というか姐さんって？)

皆がこう思うと、クラウドは考えを見透かしたのか、

「これについては一番あんたが分かるはずだぜ、”エリカ”さん。」
ウーノにこう言った。

「はい????」

クワットロを除く戦闘機人たちは素っ頓狂な声をあげ、ウーノ本人は、

「何のことですか！」

と言ったが、

「」

クラウドが言った、特殊な言語を訊いた途端、

「私のスリーサイズとか恥ずかしい事言わないでください!!」
と叫んだ。

「はい????????????」

アインハルト、クラウド、キサキ、ウーノ以外の全員が素っ頓狂な声をあげた。

「今の古代ベルカ語でもかなり難解なケイリスの方言ですよ。わかつたんですか?」

アインハルトはこう言った。因みにカリムの予言の言語は、古代ベルカの共通言語である。

この時、ウーノは顔を真っ赤にして「しまった、とうとうばれた」と言っていた。

「あのー?これどういう事ですか?」

ウェンディが訊きにくそうに訊いてきた、

「生まれつき古代ベルカ語を完璧に理解し、竜に変身することができる。これが竜王家の人間の身体資質だ。丁度霸王の生まれつきの体力値の高さと、双眸異色みたいな。」

クラウドがこう説明したら、

「回りくどいですね。はつきり言ったらどうですか。ウーノ姉さま、と言うよりエリカ姉さまはキサキの実のお姉さん「エリカ・ランスタ」のクローンだって。」

クワットロがこうはつきり言った。

「ええええええええ!!!!!!!!!!!!」

この場にいた全員が驚いた、

「それにランスタって?!」

とスバルが言うと、

「ああ、ティアナの縁者だよ。俺たち。俺たちの母さんの弟がお前の父さんじゃないか。」

と、キサキが言った。

「良かったねティア、一人じゃなかったよ。」

スバルがティアナにこう言うと、

「あのさあ、話がさつきから全然進んでいない気がするんだけど？」
タイキが言いにくそうに言って、

「クラウドだったよな。そもそもあんたは何者なんだ？ただものじゃないことは分かるけど。」

と、クラウドに訊いた。

「ああ、今でこそクラウド・クラウドイウスなんて適当な名前で行動してるけど、俺の真の名は「グランドラクモン」デジモンだ。」
クラウドはこう言って、自分の身の上を語り始めた。

かつてデジタルワールドの自分の居城にいた自分は、突然発生した時空乱気流に巻き込まれベルカへとやって来た。そこで後の「最後のゆりかごの聖王」こと「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」に保護された、その後彼女の側近として竜王との戦に臨んだ時、ムルムクスモンと対峙し、彼があらゆるこの戦の元凶だと知る。

その後聖王も死に、霸王が天下を取った後も、彼はずっとムルムクスモンの動きを調べ続け、新暦75年の今日、こうしてムルムクスモンに対抗できるだけの戦力がそろったのだ。

「おそらく奴らはかの「プレシア・テストロッサ」の研究の大元の技術を持っていたんだ、きっと普通の竜王より強いコピーの用意もできているだろう。」

クラウドはこう言って、その場にいる皆に告げた、

「おそらくムルムクスモンの戦力は、今いるメンバー全員で挑んで勝てる確実は多くて3割弱。だけどお前らはそれでも戦うか？」

訊かれるまでも無く、皆の答えは一つである。

「ああ、俺は皆をほっとけない。」

とタイキ、

「うちは皆を守るためにこの部隊を作ったんや、絶対に逃げられへん！」

とはやて、

「そうか、戦闘機人じゃないけど戦闘機人代表のキサキと、デジモン代表の俺は戦う気満々だから。」

クラウドはこう言って、手を出した。

「もしかしてそれで？いくらなんでも古いんじゃない？」

タイキはこう言ったが、キサキ、はやてはそれぞれ手を出した。そして渋々ながらタイキも、

「今ここに、デジモン、魔道士、戦闘機人の三同盟が結成された。」
クラウドがこう宣言することで、皆はムルムクスモンと戦う、という気持ちを合わせた。

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー!!」

カットマン

「今回はアキラモン。アキラモンは巨鳥型デジモン。必殺技は頭の角でつくく「グラインドホーン」リング状の光線を発射する「ブラストレーザー」だ。」

モニタモンA

「マツハのスピードで空を飛ぶことを可能にする強靱な翼を持っていますな。」

モニタモンB

「鳥系デジモンは基本狂暴ですが、こやつは礼儀正しいですな。」

モニタモンC

「バードラモンとどっちが強いかな。」

カットマン

「それじゃあまたね。」

次回予告

キサキがアリシアと行ったデジタルワールドでの戦いの物語。
次回「特別編、幻の里の伝説のデジモン」

特別編 幻の里と伝説のデジモン（前書き）

PV数が五万を超えたので、思い切って制作しました。

デジモンフロンティアの劇場版がモデルになっています。

因みに「エウレストゾーン」とは「超クロスウォーズ」で出てきたゾーンです。武器デジモンが沢山います。

特別編 幻の里と伝説のデジモン

これはまだデジタルワールドがゾーンに分かれていた時の物語。キサキはデジタルワールドで出会ったデジモン達とデジタルワールドを回っていた。といっても、コードクラウンは集めない、ただの観光のようなものである。そして彼らは今「エウレストゾーン」に来ている。

「~~~~。」

デジモンと同様に彼に付いて来ている少女は楽しそうだが、キサキは全然面白くない。

「しかしつまらんとこじゃのお。」

何もない周りの様子を見ながらエクスブイモンは言った。さっきからずっと歩いているのだが、一向に何も見えてこないのだ。

「ねえねえキサキ、次はどうする?」

キサキは自分に付いてくるショートブロンドの少女を見ながら思った、なんでこんなに元気なんだ、と。

「確か”し”だったよな。なら”白洲”。」

キサキは素っ気なく言った。

「じゃあスキンケア?」

少女がこう言ったところで、

「だからアリシア、なんでそこまで元気なんだよ?」

キサキは少女「アリシア」に訊いた。

「たく、いくら”しりとり”だからって、変な事思い出させることばかり言いやがって。」

キサキがこう言うと、

「ええ、別にいいじゃん、キサキは私の未来の妻なんだから。」

アリシアはこう言った。

「せめて夫と言ってくれないか、一応男なんだけど。」

キサキが言つと、

「うんうん、やっぱり可愛いよキサキ。」

アリシアはキサキに密着しながら言った。キサキは何も起こらない事で頭に來たのと、アリシアの割と豊満な胸の感触の為、頭に血が上っていた。

そしてそろそろ怒ろうか、と思った時、どこからか喧噪のような音が聞こえてきた。

「ん？どうしたの？」

「静かに！！」

顔を覗き込んできたアリシアを制して、キサキは耳をすませた。結果、その喧騒が近づいてきている事が分かった。

（この喧噪は祭りか何かじゃない。まるで戦争してるような）

キサキがこう思ったと同時に、どこからか武装したデジモンが数多く現れ、それぞれ戦い始めた。

「ええ？なに？！」

アリシアが驚くと同時に、空の上から何かが降って來た。それも爆弾ではなく、

「島だ！島が降ってくる！！」

キサキが叫んだとおり島である。その島が地面に着くと同時に、キサキ達は巻き上げられてどこかへと飛んで行った。

「ツツツ、痛ってえ。」

キサキが目を覚ますと、剣道の面のような物を身に着けた小竜型デジモンと、丸っこいデジモンが顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？ ケガはない？」

面を身に着けたデジモンはキサキが目覚めると、すぐさま訊いた。
「ああ、大丈夫。 お前らが助けてくれたの？」

キサキはこの場にいたデジモンに訊いた。

「そうだよ、僕はコデモン。」

コデモンはこう答えた。

キサキは、すぐさま周りを見渡した。すると、
「いてて。」

「何だったのよ本当に。」

近くには「ギルモン」と「チョ・ハツカイモン」が居た。そして自分の近くにオレンジのクロスローダーが落ちているのを見つけた。
(もしかしてアリシアとクロスローダーが入れ替わった？)

キサキはこう思うと、

「サンゾモン！ サンゾモンはいる！？」

とクロスローダーに呼びかけた。

「はい！ サンゾモンはここに！」

クロスローダーから声がすると、中から僧服を来た美しい女性型デジモン「サンゾモン」が出てきた。

「どうやらアリシアとはぐれたようで、他の仲間がどこにいるか分かる。」

キサキはサンゾモンに訊いた、

「どうやら、ここにいるのはアリシアのクロスローダーの中のデジモンのようですね。」

サンゾモンが少し目をつむって数珠を触りながら言うと、遠くからアリシアを探して「ゴクウモン」「サゴモン」が現れた。

「これで集まってないアリシアのデジモンは、ボコモンとネーモンか。」

キサキがこう言った時、遠くからにぎやかな音を立てて巨大な乗り物がやって来た。

「こりゃまた賑やかな。」

「何だ？祭りでもやってるのか？」

チヨ・ハツカイモン、ゴクウモンが近くにいたデジモン達に訊くと、
「うっん。」

コテモン達は俯きながら否定した。すると、

「ウオオオオオ！」

どこからか獣のような叫び声が聞こえた。見ると、獣型のデジモンの多くがこちらに走ってきている。

「わあ！ビーストデジモンだー！」

コテモン達はこう叫んだ、

（ビーストデジモン？）

キサキは疑問を感じたと同時に思い出した。デジモンによっては環境によって人の姿を取るものと、獣の姿を取るものが出て、まれにはあるが両方の姿を持つデジモンがいると言う事を。確かにコテモン達は人型であり、やって来たデジモンは獣の姿をしている。

「ビーストデジモンめ！よりもよってこんな時に――！」

また他の場所からは、背中に大剣を背負ったトカゲの姿をしたデジモン「ディノヒューモン」が現れた。

ディノヒューモンと付いてきた仲間のデジモンは、次々と敵を斬り伏せたが、最後に残った一匹が自爆したことで、ほとんどのメンバーがやられてしまった。

「みんな！仲間の仇を取りに行くぞ――！」

ディノヒューモンは残ったメンバーにこう言うと、町の外へ向けて走って行った。

「待ちなさい！」

すると、赤い装備を身に着けた天使型デジモンが皆を呼びとめた。

「憎しみの連鎖は何も生まない。」

「ダルクモン様！これ以上ビーストの悪行を見過ごすわけにも！」

ダルクモンと呼ばれた天使デジモンの言葉を、ディノヒューモン達は聞かないで飛び出していった。

ダルクモンは近くに落ちていた、戦死した兵士の装備を持ち上げる

と、

「皆の者！！犠牲になった仲間祈りをささげるのだ！！」
と、皆に言った。

その様子を見ていたキサキ達は、

「何だ？バグラ軍と戦争してるのか？」

と、コテモン達に訊いた、

「ばぐらぐん？なにそれ？」

コテモン達がこう言ったのはともかくとして、

「僕の仲間たちはここの反対側に住んでいるビーストデジモンと争
ってるんだ。」

というコテモンの話を聞いたキサキ達は、

「バグラ軍が各地を侵攻して大騒ぎって時に内乱って？どんだけ平
和なんだよ？」

と言った。その時キサキの目に、大きな鳥のような生き物の像が目
に入った。

「所であれなに？」

と訊いたところ、この辺りで守り神として崇められているデジモン
の「オニスモン」だという。

「そうだぞい！！」

その時、キサキの見ていた像の裏から、ボコモンとネーモンが現れ
た。

「そしてあれを見るぞい！！」

ボコモンが指差した先には、巨大な壁に赤い竜型デジモンと青い獣
型デジモンと一緒にオニスモンが描かれている絵があった。

「あれは竜型のが「エンシエントグレイモン」獣型のが「エンシエ
ントガルルモン」かつてデジタルワールドに君臨した究極のデジモ
ンだぞい！」

ボコモンは勢い込んで説明したが、

「ここの話は？」

ネーモンに突っ込まれて、

「おお、そうだぞい!!」

ボコモンは何かを思い出したかのように叫ぶと、

「キサキはん！エウレストゾーンの幻の里に迷い込んだら最後、永遠に元の世界に帰れないんじゃないじゃハラ!!」

と、キサキに言った、

「なんじゃそりゃ!!」

キサキは思わずこう叫んだ、

一方、アリシアとキサキのクロスローダー内のデジモン達と言うと、現在キサキ達のいる場所の反対側にいた。そして、そこで出会ったデジモンの「ベアモン」の家でごちそうになっていた。

「あ、これってカカオレンジだね。チョコの味がするから。」

アリシアがベアモンに訊くと、

「うん、そうだよ。」

小熊のような姿のデジモン、「ベアモン」はこう言って、

「いま僕らの仲間が君たちの仲間を探してる。きっとすぐに見つかるよ。」

と、言った。

「ところで、あれは戦車じゃな。」

ふと、クロスローダーの中のエクスブイモンが言った。

「誰かと戦いを始めるのか？私たちがここに来る前にも争っていたか？」

ベアモンは、言いにくそうに、

「実は。」

と言ったときである、

先ほど町を飛び出したヒューマンデジモン勢のディノヒューモンが攻めてきた。

「ヒューマンデジモン達だ!!」

ベアモンが叫ぶと、中からおおがらな熊型のデジモン「グリズモン」が出てきて、

「落ち着いて応戦しろ、ヒポグリフォモン様にも連絡しろ!!」

戦いの場に赴きながら部下に指示を飛ばした。

その間にも、ディノヒューモンと付いてきたヤシャモンは次々とビーストデジモンを斬り伏せている。そして、

「出て来いヒポグリフォモン!!」

ディノヒューモンは大声で叫んだ、

「ディノヒューモン!俺が相手だ!!」

全戦にグリズモンが出て叫んだが、

「グリズモンは引っ込んでろ!!ヒポグリフォモンを呼べ!!」

ディノヒューモンはこう叫んだ。すると、ビースト勢の戦車の一台が動いて、砲弾をディノヒューモンめがけて発射した。ディノヒューモンは何とか回避に成功したが、他のデジモンは爆風に飲まれて消滅した。

「卑怯だぞ!!堂々と戦え!!」

「その台詞、そのまま返してやる!!」

ディノヒューモンにグリズモンが叫ぶと、再び砲弾を発射した。しかし今度は完璧に回避され、ディノヒューモンもこの場から去って行った。

「ひどいことを。」

ディノヒューモンが去ってから少しして、戦車の中から大きな翼を持った獣型デジモン「ヒポグリフォモン」が現れた。

「もう黙ってはいられない!ヒューマンデジモンを排除すれば、我々の正義は保たれる!!」

ヒポグリフォモンが涙ながらに言うと、

「その言葉を待ってました!!」

というグリズモンの言葉を筆頭に、兵士たちは皆一様に士気を高めた。

その様子を、アリシア達は微妙な面持ちで眺めていた。

「つーか、ほんとにこの先なの？」

森の中の道を進みながらキサキは先導するコテモンに訊いた、

「うん、僕らの仲間から連絡があつたの。」

コテモンはこう言っでどんどん先に進んでいく、そして皆と合流すれば、

「キサキ様は勘違いしておいでござりまする!!」

と、エビバーガーモン、

「勘違いはエビバーガーモンの方だろ!エビのくせに力ニの味するくせに!!」

と、サゴモン、と言った具合に、キサキ組とアリシア組で喧嘩になった。

「ヒューマンデジモンは非道です、いきなりやって来て襲い掛かって暴れまわって!!」

「そういうビースト組だつてヒューマンの一般デジモンども次々と血祭に上げていきやがったんだぞ!!」

特にアリシアとキサキの喧嘩はたちが悪かった、

「なんでそんなやつを肩を持つんですか!?!」

「連中の悪口を言うなら許さんぞ!!」

そしてとうとう夫婦喧嘩並に手におえない争いになろうとした時、
「喧嘩はダメ!!」

コテモン、ベアモンらに止められた、そして、

「やめて!やめて!喧嘩はやめて!!」

他の丸っこいデジモン達も泣き出してしまい、仕方ないので互いに
矛を収めることにした。

「そういえば、なんであんなにヒューマンとビースト同士なのに
仲がいいの?」

チヨ・ハツカイモンが皆に訊いた、

「友達だもん。」

皆一様にこう答え、

「内緒だよ。」

とも言った。言うには、一緒にいるところを他のデジモンに見られ
ると叱られる。のだと言う。

「もし内緒にしてくれるなら、いい物見せてあげる。」

「付いて来て。」

ベアモン、コテモンはこう言って、再びキサキ達を先導して歩き出
した。

そして、再び皆でしばらく歩き続けると、洞窟のような場所にたど
り着いた。そこにはオニスモンと思われる巨大な生物の絵が描かれ
ていた。

「オニスモン、お願いします。」

「戦いを止めて。」

ベアモンとコテモンは、それぞれこう願った。因みにボコモンとネーモンは、他の場所に書いてあった古い文字を見ていた。

「ボコモン、なんて書いてあるの？」

アリシアが訊くと、

「所々かけてるんじゃないが。」

ボコモンはこう答えた。それでも何かわかるらしく、彼方此方を見回している。そして、

「デジコードを緑の羽根に満たすべし。」

と言った。しかし皆にはどういう事が分からなかった。

再び外に出た時、外は夕方だった。

「オニスモンはこの島の守り神で。」

「平和のシンボルと言う事か。」

ゴクウモン、ステイングモンはこう言った、

「デジコードを緑の羽根に満たすべし、この言葉が何かのヒントになっているのかもしれない。」

サンゾモンがこう言うと、

「ほんとに！」

コテモンとベアモンは揃って嬉しそうな顔になり、

「争いも止められるの!？」

と訊いた、

「それは分かりません。でも言い回しから察するに、何かを呼ぶ手がかりかもしれません。」

サンゾモンはこう答えた、

「それはきつと、オニスモンを呼ぶための儀式やおまじないのやり方じゃないかなー!」

アリシアがこう言った時である、どこからか剣が飛んできた、

「お前ら！何をしている。」

見ると、ディノヒューモンが部下と一緒にこの場に来ていた。

「危ねえだろー!」

と、キサキが叫ぶと、ディノヒューモン達はキサキ達の元へやって来て、ヒューマンデジモン組をビーストデジモン組から庇うように割って入った。

それと同時に、グリズモン達も突進してきた。ディノヒューモン達はそれをかわすと、やって来たデジモン達と争いを始めた。

「いい加減にしなさいよ!」

アリシアが、周りで泣いているデジモン達を横目で見ながらこう叫ぶと、

「よそ者が口出しするな!」

と、ビーストデジモンが、

「君たちも見ただはらずだ、連中は横暴な種族！許すわけには!」

と、ヒューマンデジモンがそれぞれ言った。その時、キサキとアリシア達は、覚えのある悪寒を感じた。見るとサンゾモンが俯いた状態で、拳をワナワナ震わせていた。

（あ、やばい）

この時、ほぼ同じタイミングでアリシアとキサキは思った、

「無限弾幕心経!」

サンゾモンが特殊な念仏を唱えると同時に、今まで戦っていたデジモン達は一様に目を覆って何かを回避するように動き始めた。

「戦いをやめなさい。」

サンゾモンは怒りのこもった静かな言葉で皆に言った。このままサンゾモンのありがたい小言に移行しなかったのは、ある意味では幸運であった。

それでも、この場はそれぞれ自分たちの町に帰ることで事は収まった。

別れ際、ベアモンとコテモンは寂しそうにしていたが、解散後、ふとエビバーガモンが気が付いた。

「この石、何か書いてある。」

そしてその日の夜、ヒューマンデジモンの町では、ダルクモンが皆に演説をしていた。

「ヒューマンは平和を愛するデジモンである。それゆえこれまで…

……」

それを横で聞くキサキに、ディノヒューモンは言った。

「今回は君にも戦ってもらいたいのだが？」

しかし、キサキは返事をしないでアリシアのクロスローダーからデジモンをこっそり解放した。

（やるべきことはわかってるよな？）

小声でデジモン達に告げた。

（ええ勿論です、コテモンを連れて他と合流しあの場所にですね）
サンゾモンはこう言って、チョ・ハツカイモン、サゴモン、ボコモ
ン、ネーモンを連れてその場を後にした。

そしてもう一方のビーストデジモンの町でも、ヒポグリフォモンが皆に演説して、他のデジモンが士気を高めていた。

ベアモンはその様子を遠くでつまらなさそうに眺めていたが、ふと誰かに呼び止められたのを聞いて、それに付いて行った。

「クラクラクラ。」

前を先導するクラゲのようなデジモン「クラモン」に付いて行くと、オニスモンの壁画のある場所に付いた。そこには一足早くこの場に来ていたサンゾモン達とコテモン達がエビバーガーモンと一緒に作業を行っていた。エビバーガーモンが、文字の書いてある石が落ちて、いることに気が付き、それをジグゾーパズルのように組み合わせ、何が書いてあるか確かめようと言う事になったのだ。

「ですがなるべく早く完成させましょう。外では今にも戦いが始まるうとしています。」

サンゾモンの言葉を受けて、一同は作業の手を早めることにした。

そして、ヒューマンとビーストの町の境目では、ヒューマンデジモンの軍団とビーストデジモンの軍団が睨み合っていた。これを最終決戦とするようで、互いに全戦力を叩きこんでいる。それぞれの陣

営にはキサキとアリシアもいる。ほかの目を集めるために、あえて参加しているのである。

そしてとうとう戦いが始まった。デジモン達が進軍し、戦車が砲弾を発射しその場所は文字通り「西軍対東軍」と言った様子になった。しかし、早くも問題が発生した。

「ダルクモン様を知りませんか？」

部下の一人がデイノヒューモンに訊いた、ダルクモンの姿が見えなくなっているらしい。

この報告を聞いたキサキはその場から飛び出した。ほかのデジモンが驚いていると、突然砲弾が降って来た。

「奇襲か?!」

見ると、物陰から戦車が飛び出していた。その様子を見たキサキは兵士をかき分けて進むと、

「いくぞ！ギルモン！ゴクウモン！」

「うん！」

「任せな!!」

残っていたギルモンとゴクウモンと共にうつて出た。

因みに、他の場所で戦の様子を見ていたダルクモンは満足げな表情だった。その様子は自分のヒューマン勢が不利な様子だったが。

一方、ビースト勢に加わっているアリシアはと言つと、
「こんなふざけた戦いなんてやめなさいよ!!」
と、グリズモンに言っていた。

「なにをお！！お前に俺たちの苦しみは分かるまい！！」

グリスモンはこう言いかえしたが、

「はっ！だったらあんた達にベアモン達の気持ちがわかると言うの？！！」

アリシアはさらに言った。

グリスモンは答えに困った様子を見せたが、

「どけ！！」

自ら戦場に立つたために出て行った。その様子を後ろから見ていたアリシアは、

「くだらない戦いね。」

と、一言言った。

「なんじゃ？やるのかアリシアよ。」

「キサキのクロスローダーをお前が使っても、パイルドラモンくらいは出来るはずだぜ。」

傍にいたエクスブイモンとステイングモンが言うと、

「ええ！行きましょう！！」

アリシアはこう言って、二体と飛び出していった。

「いい加減にしろ！！」

アリシアはエクスブイモンとステイングモンと一緒に敵味方関係なくデジモンを蹴散らしていく。また別の場所でもキサキがギルモンとゴクウモンと共に暴れまわっていた。

ダルクモンはその様子を見て、

「何をしている！邪魔をするなら血祭にあげよ！！」

と、自軍の兵士たちに命令した。そしてその後、なぜかグリスモンがヒポグリフオモンを呼ぶ声を聞いた時、難しい顔をした。

そして、オニスモンの壁画を再生させようとしているメンバーは、何とか一部だけが重要な部分をもとに戻した。

「ボコモン様、読んでくださいまし。」

壁画の傍から離れたエビバーガーモンは、ボコモンに言った。ボコモンは少し壁画を見つめると、

「えーと、にくしみの。」

と言った、

「にくしみの?」

と、全員が言うと、

「憎しみの血で塗られたデジコードを緑の羽根に満たすべし、つてええ?!」

ボコモンはここまで読んでから驚いて、大声を上げた。そして、

「オニスモンは平和の守り神じゃない!」

と言った、

「もしかしたら、この地に災いをもたらした言い伝えが風化して、守り神と言われるようになったんじゃない。」

ベアモン達と一緒にここまで来て、再生作業に協力していたエンジエモンはこう言った、

「言い回しから考えると、今以上に戦いが激しくなると、オニスモンは復活しますね。」

サンゾモンがこう分析すると、

「ねえ、ここみて!」

エンジエモンに付いて来ていたテイルモンが、皆にある窪みを指差して言った。

「この形、どこかで見たことない?」

皆は少し考えて、

「ダルクモン様の杖の飾り!」

「ヒポグリフォモン様の首飾り!!」

と、ほぼ同時に言った。

「争っているはずなのに、なぜか互いに同じものを持っている、か。」

「

エンジェモン達と一緒に来ていたディアボロモンが言った、

「これが緑の羽かもしれないな。」

と言う事で、エビバーガモンとクラモン、ディアボロモンとコテモン、ベアモン達はこの場に残って残る壁画の再生に努め、エンジェモン、テイルモン達はキサキとアリシアにこの事実を伝えに行った。

そして、キサキとアリシアが暴れまわっている戦場のすぐ近くに来たとき、エンジェモンは何かに気が付いて、他のデジモンを止めた、
「おい、あれは確かダルクモンだよな。」

「確かにそうだけど。それが？」

チヨ・ハツカイモンが訊くと、遠くに見えるダルクモンが突然ヒポグリフォモンに変わった。

「何だと？ヒポグリフォモンに？」

ガイオウモンがこう言うと、

「急いで伝えましょう!!」

デジモン達はサンゾモンの言葉を受けて、それぞれ散らばってキサキ達を探すことになった。

そして、ビーストデジモン勢に変化が訪れた、ヒポグリフォモンが現れたのだ。

「平和のために命を惜しむな!!」

ヒポグリフォモンの言葉を受けたデジモン達は、張り切って敵に向かっていった。すると、

「エクスカリバー!!」

どこからか巨大な光の刃が飛んできて、戦場を一刀両断した。

「争いはやめろ!!」

「みなは騙されているのです!」

見ると、ホーリーエンジェモンとエンジェウーモンが戦場の真上に立って、皆を見下ろしていた。

「悪いけど見させてもらったよ。」

「テメエ、さつきダルクモンからヒポグリフォモンに変わってたよな?」

続いて、上空から降りてきたパロットモンとガイオウモンがヒポグリフォモンに言った。

ヒポグリフォモンは驚いた顔になった、

「何を根拠に?!?!」

と、戦場のデジモン達が言うと、

「一緒なんだよ。ダルクモンの杖の飾りと。」

「ヒポグリフォモンの首飾りがね!」

どこからか出てきた、チョコ・ハツカイモン、テイルモンが言った、
「そういうことだったんだ。」

アリシアとキサキも事実が付いたようで、

「デイノヒューモン、ダルクモンはどこにいるの?せっかく敵の大

将が出たんだから、自分も出てきて一騎打ちしたら、って言いいたんだけど。」

キサキはディノヒューモンにこう訊いた、

「あ、そういえばダルクモン様はどこに？」

ディノヒューモンは気が付いた、この場にダルクモンが居ないことに、

「憎しみの血で塗られたデジコードを緑の羽に満たすべし、されば我復活せり。」

エンジェウーモンがこう言うと、

「なるほど、この戦いでオニスモンを蘇らせようとしたんだ。」

アリシアは大声でこう言った、

「ふざけないでよ、正義も平和もへったくれも無いじゃない!!」

ヒポグリフォモンは、

「何の事かな？」

と、言い張ったが、

「他を騙すのもいい加減にしろ!!」

と、キサキに言われ、もはやここまでと思ったのか、

「ヒポグリフォモン、スライドエヴォリューション!ダルクモン!

!」

ヒポグリフォモンはダルクモンに変わった。これには、多くのデジモンが驚いた、

「我が秘密、よくぞ見破った!!」

ダルクモンは持っている杖を掲げると、こう言った。すると、戦で犠牲になったデジモンの亡骸がどんどん杖の飾りに吸い込まれていった。その中でダルクモンは、

「かつてこの地に流れ着いた私は、偶然オニスモンの遺跡を発見した。」

オニスモンの事を話し始めた、

オニスモンは古代にデジタルワールドを散々荒らしまわっていた事。しかし、エンシェントグレイモン、エンシェントガルルモンの倒さ

れ、この地に封印されていた事。そして、オニスモンの封印を解いて、デジタルワールドを支配しようとした事を。

「俺たちを争わせたのも。」

「大量のデジコードを集めてオニスモンを復活させるためか!!」

グリズモン、ディノヒューモンも同時に気が付いた、

「今頃気が付いても遅い!!」

ダルクモンがこう叫ぶと、杖の飾りは宙へ飛び出し、はじけ飛んだ。そして、巨大な翼とくちばしを持つ、巨大な鳥型デジモンが現れた。

「あれがオニスモンか!!」

キサキがこう言うと、

「まだ齒向うか!よかるう、オニスモンよ、その力でデジタルワールドをわが手に!!」

ダルクモンはこう言っ、オニスモンに飛び乗ると。天使型の姿からアメーバのような姿になった。

「あれは、様々なデジモンに変身するメタモルモンじゃい!!」

ボコモンは変化したダルクモンを見ると、こう叫んだ。

「どちらにしても、このままではいけません!!」

アリシアはこう叫びながらキサキと合流し、入れ替えておいたクロスローダーを交換した。そして、

「マトリックスエヴォリューション!!ギルモン超進化!!」

と、叫んだ。

「ギルモン超進化!デュークモン!!」

アリシアと融合したギルモンは、赤いマントを身に着けた騎士型デ

ジモンに変わった。

「行くぞー!!」

デュークモンが叫ぶと、

「応!!」

ゴクウモン、チョ・ハツカイモン、サゴモンはオニスモンに向かっていった。

一方キサキは、

「エクスブイモン、ステイングモン、アクイラモン、テイルモン、アンキロモン、エンジェモン、デジクロス!!」

自身のデジモン達と合流し、他のデジモンもリロードすると、次々とデジクロスさせた。

「セイントドラモン!!」

結果、背中に翼を六枚持つ、全身が白い聖竜型デジモンと。

「ディアボロモン、ケラモンズ、デジクロス!!」

「アーマゲモン!!」

足が六本ある巨大なデジモンが現れた。そして、

「行けえ!!」

キサキの号令のもと、全員でオニスモンに突撃した。

「アラミダマ!!」

「アルティメットフレア!!」

セイントドラモン、アーマゲモンは得意な火力攻撃を放った、しかし、オニスモンにはまるで効いていない。

「ミヨルニルサンダー!!」

「エクスカリバー!!」

「ホーリーアロー!!」

続いて、パロットモン、ホーリーエンジェモン、エンジェウーモンが得意な飛び道具をメタモルモンに放ったが、軟体動物以上にやわらかいメタモルモンは全弾回避した。

「かくごおおお!!!!!!」

「ガイアリアクター!!」

「ロイヤルセイバー!!」

ゴクウモン、チョ・ハツカイモン、サゴモンは渾身の一撃を放とうとして、ガイオウモンとデュークモンはそれぞれの必殺技を放とうとしたが。メタモルモンの体を伸ばす攻撃に阻まれ、そのまま飛んで行った。

様子を見ていたデジモン達は、

「防衛態勢!!」

「ヒューマン、ビーストの関わりなく防衛せよ!!」

それぞれ防衛の態勢を取っていた。

そして、サンゾモン、エビバーガールモンと一緒に様子を見ていたコテモン、ベアモン達はと言うと、

「エンシエントグレイモン! ガルルモン! 戦いを止めて!!」

コテモンは壁画に向けて叫んだ。

「無駄でしょう。エンシエントデジモンはデジタルワールドの創世記に活躍したデジモン。生きていたとしても、オニスモンをどうにかするだけの力は持っていないのでは。」

サンゾモンはこう言った、しかし、

「いやだ!!」

コテモンはこう叫んで、祈るのをやめなかった。

その時、オニスモンが壁の隙間を破って顔を出した、

「無駄なあがきを、くたばれ!!」

メタモルモンがこう叫ぶと、オニスモンは口から強力な破壊光線を発射した。

「だめえ！！！」

コテモンは壁画を守るため、自ら盾になって攻撃を受けた。

「コテモン?!」

皆が上を見上げて驚いた時である。コテモンのデジコードが地面に触れると、幻影のような姿だが「エンシェントグレイモン」と「エンシェントガルルモン」が現れた。

「やったあ！二体が復活したあ！！」

様子を見ていたデジモン達が叫ぶと、

「黙れ！復活したオニスモンの敵ではない！！」

メタモルモンはこう叫んだ。すると、オニスモンは破壊光線を二体に浴びせたが、二体はダメージを負うそぶりも見せない。

「今だ！全員でとどめを！！」

キサキの言葉と共に、セイントドラモン、デュークモンはそれぞれ飛び出し。

「ファイナルエリシオン！！」

デュークモンは持っている盾「イージス」から迸る聖なる光をオニスモンに浴びせて目つぶしを行い。

「ホーリーインパクト！！」

セイントドラモンは「ホーリードラモン」の力を憑依させた突撃技で、オニスモンに隙を作った。

「この程度でオニスモンがやられると。」

メタモルモンがこう言った時である、目の前に巨大な翼を持つ青い竜が飛び出してきた。竜形態になったキサキである。

「竜星殲滅刃！！」

キサキは両腕から発生させた聖なる力を持つ刃でメタモルモンを焼き切った。そして、

「決める！エンシェントグレイモン！エンシェントガルルモン！」
と、叫んだ。

そして二体は飛び立ってオニスモンに向かっていくと、まずエンシエントガルルモンが持っていた大剣をオニスモンに突き刺し、エンシエントグレイモンがとめと言わんばかりに、吐き出した炎で焼き尽くした。

戦いが終わってから、

「あんな奴を信じて戦い続けた俺たちがバカだった。すまない。」

グリズモン、デイノヒューモン達はキサキ達に誤った、

「この地が救われたのも、君たちのおかげだ。」

デイノヒューモンが言うと、

「ここを救ったのはエンシエントデジモンだよ。」

キサキはこう言って、

「そして本当に礼を言うべきなのは、彼らですね。」

アリシアが、ベアモン達を見て言った。

「最後まで二つの種族を結び付けようとしたのですから。」

アリシアがこう言った時である。空から何かが降って来た。

「これってコードクラウン?！」

黄金に光り輝くメモリーカードのような物は「コードクラウン」ゾーンの持ち主に送られる支配者の証である。

「これは君たちが持っていてくれ。」

「これは俺たちで持ってましょう。」

デイノヒューモンやグリズモンの許可も得て、キサキがこう言って、コードクラウンをクロスローダーに差し込むと、

特別編 幻の里と伝説のデジモン（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー!!」

カットマン

「今回のテーマはテイルモン。テイルモンは獣型のデジモン。得意技は相手を殴る「ネコパンチ」「キャットテイル」だ。」

モニタモンA

「ネコのような姿をしており、尾に神聖系デジモンの証し「ホーリング」を付けていますな。」

モニタモンB

「ネコのような姿ですが、話によると「ハツカネズミ」らしいですな。」

モニタモンC

「付けている手袋は「サーベルレオモン」のデータをもとに作られていますな。」

全員

「それじゃあまたね!!」

次回予告

ムルムクスモンに立ち向かう事が決まったはいいが、移動手段と生活スペースについて問題が生じる。なのでクラウドは、聖地よりかの翼を蘇らせる。

次回「古代ベルカの最強必殺兵器、復活」

第二十五話 古代ベルカの最強必殺兵器、復活

クロスハートと機動六課、そしてナンバーズの同盟が結ばれてから、相変わらず皆激しい論議を展開していた。

「やつぱここは本部と交渉して当たれるだけの戦力で当たった方がいいんじゃない。」

はやてがこう言うと、

「いや、ここは今すぐ攻め込もう！」

と、クラウドが言った。

「アホか！何の対策もなしに当たって玉砕されたら話にもならんやろ……！」

とはやては言ったが、

「いえ、もしかしたら一番有効な策かもしれませんよ。」

と、エリカ（ウーノ）が言った、

「連中は猶予として一週間の時を我らに与えました。そしてその間あちらからは何も手を出さないと大々的に言いました。」

「なるほど、もし連中が何か難癖つけても、こっちに別の用がある、って言えば有効な期間って訳ね。」

エリカの言葉に、キサキが補足すると、

「そういう事。それに自分から最強と言った『ムルムクスモン四鬼』を持つているなら一週間も待たずにすぐ攻めてくればいいのに、あえて猶予を設けたのは、すぐさま大々的な戦闘が出来ないからとも考えられるだろ。」

クラウドは言った、相手の戦力や戦備が整わないうちに先制攻撃するのが良いと、

「なるほど、となるとそれまでの移動手段と生活スペースが問題やね。」

はやてはこう言って、

「ならアースラを使おう。引退間近だけど、移動手段にはなるはず

や。」

と、皆に言った。

「いや、もっといいのを知ってるぜ。」

しかし、クラウドはこう言った、

「あの、まさか”あれ”を使うつもりですか？」

エリカは不安そうにクラウドに訊いた、

「そうだよ。」

クラウドはこう言って、

「ヴィヴィオを借りていきたいんだけど。」

と、なのはに言った、

なのはは最初、何のことか分からなかったが、とりあえず自分が付いて行くことで了承した。

そして、クラウド、なのは、ヴィヴィオの三人は、不思議な場所にやって来た。

「それで、これをこうしてから。」

クラウドはパネルを操作し、ヴィヴィオは玉座のような場所に座り、なのははその傍にいる。

「んで、これでは聖王が来たことを読み込ませ、その上に別なプログラムを上書きしてと。」

クラウドはこう言つと、

「ああヴィヴィオ、少し痛いかもしれないけど、我慢してね。注射よりはまだましだと思っけど。」

と、ヴィヴィオに言って、

「聖王陛下、駆動炉共に異常なし、ゆりかご起動。」

と言っ意味の言葉を古代ベルカ語で言った。その途端、

「うわああああ!!」

ヴィヴィオが魔力の流れにのまれて苦しみたした。

「ヴィヴィオ!？」

なのはヴィヴィオの手をしっかりと掴んでヴィヴィオに呼びかけた。

「あと十秒で浮き上がる!それまでそのままで!!」

クラウドは二人にこう言って、魔力がなるべくヴィヴィオに行かないようにした。

そしてヴィヴィオは、覚えがないのに記憶にある、ある状況を思い出していた。目の前には凄惨な光景が広がり、自分の傍にはクラウドと同じ服装の男の人がいる。その男に自分は言っただ、
「もう泣かない!今より強くなる!!」
と、

(約束したんだ)

ヴィヴィオはこう考えて齒を食いしばっていた。

「あと三秒!!」

クラウドがこう言った時、突然部屋が揺れたした。そして、
「行くぜ!ゆりかご起動!!」

外には運よく誰もいなかったが、誰かいたら確実に大騒ぎになっていたろう。突然山が割れて巨大な船が姿を現したのだから。

「よし！！ゆりかご正常運転中、今こそ今の状況を永久継続状態にして……！」

船の中のクラウドはこう言って、猛烈な勢いでパネルを操作し始めた。そして、

「これでよし、そこから離れていいよ。」

と、ヴィヴィオに言った。

「クラウド、一体何をしたの？」

なのはに訊かれると、

「古代ベルカの遺産の一つ、「聖王のゆりかご」を復活させました。」

と、答えた。

「とりあえず、俺がここの中の掃除と整頓をしておきますんで。ほかの連中を呼んでみてください。」

クラウドはこう言って、掃除道具を持ってどこかに行ってしまったので、なのはとヴィヴィオはとりあえず戻って行った。

そして、他の連中が何をしていたかと言うと。はやてとウーノは作

戦会議をしていたが、他の連中は遊んでいた。

「よし、俺の五連勝！！」

「あー！また負けたっす！！」

キサキの持ち込んだゲームソフト、「ベルカBASARA3 TA
KENAWA」をやっているのだ。キサキの先祖である竜王がプレ
イヤーキャラクターになったことで有名になったソフトである。現
在ではマンガやアニメにもなっている。

「ごきげんよう、聖王の御嬢さんに霸王さん。」

純白の装備を身に着けた妖艶な印象を思わせる美女「竜王エイリー
ン」は、とある戦場で出会った「聖王オリヴィエ」と「霸王イング
ヴァルト」に言った、

「なあ、お前はこの竜王をどう思うんだ？」

タイキは、ゲームをプレイしている様子を見ているキサキに訊いた、
「どうって？」

「あんな感じに描かれているけど、実際と違うって思わないのか。」
「別にどうも思わないよ。実際の竜王にはあったことないし。それ
にああいう悪女もまた魅力的なもんだよ。」

キサキの答えを聞いたタイキは、改めて画面を見た。そこには戦闘
終了後の特殊ムービーで、「冥王イクスヴェリア」を倒した後の映
像が流れていた。見た感じは大人しそうなのだが、笑いながら敵を
蹂躪する等、生粋の悪人キャラになっている。

それはそれで、困ったのはアインハルトで、

「ええと、ここでこの人が来るからこの人を一分以内に倒して、そ
れから。」

攻略本を見ながら必死に、史実では聖王の最期の戦場となっている
ステージの情報を纏めていた。

「せめてゲームの中ではあの現実を変える！」

と言い張って、約八回そのステージをプレイしたのだ。おかげで覇
王のレベルはかなり高くなっている。

すると、部屋の扉が開いて、

「場所を移しますよ。」
と、エリカに言われた。

そして、一同は戻って来たなのは達に連れられて、ある場所へやって来た。そこには、真っ暗な中に、一本ロープが垂れ下がっていた。「あれ？なんでしょうかこれ？」
キヤロが気になって引く張ると、くすだまのようなものが割れて、大量の紙吹雪と一緒に、

「ようこそ聖王のゆりかごへ」
と、書かれた垂れ幕が落ちてきた。
「ああ、いらっしやい。」

どこからか掃除道具を大量に持ったクラウドが現れた、
「随分早かったね、もう大方掃除は終えたけど。」
クラウドはこう言って、紙吹雪と垂れ幕を片付けた。他の面々は周りを見回したが、床と壁はピカピカに輝いている。

「とりあえず、皆の部屋をそれぞれ用意しておいたから、荷物を置いたら集会所に集合ね。」

クラウドはこう言って、掃除道具を片付けに行ったが、皆一様に言った。

「自分の部屋も集会所の位置も分からない。」
と。しかし、クラウドは、

「このプログラムを変えといたから、どこに行きたいと考えればそこまで行けるぞ。」

と言って、あえて口に出して、

「荷物置き場へ。」

と、考えた。すると、クラウドの姿は一瞬で消えた。

「どうする？」

皆は思った、このままクラウドの言うとおりで上手くいくのか、と、「とりあえず、俺の部屋に。」

タイキはこう考えた、その途端、タイキは玄関から自分の部屋と思われる場所に飛んだ。そこには机とベッド、テレビやタンスと言った家具がそろっており、扉の外の表札のような物にも「タイキの部屋」と書いてあった。

「すげえ、一瞬で違う場所に。」

シャウトモンは外に出て驚いている。

（いやー、魔法ってすごいな）

タイキも驚きを隠せなかった。そして次に、食事の場にもなっている集会場に行った。そこには、可愛い帽子をかぶったピンク色の生き物が居た。

「おお！これなら私の腕もぞんぶんに振るえまする！！」

厨房内で喜んでいる生き物を見たジジモンは、

「あれはエビバーガーモンじゃな。」

と言った、すると、他の面々もどこからかやって来た。

「げえ、まさかアイツのエビ地獄ここでも。」

キサキは開口一発こう言った、すると、

「地獄とはなんですか地獄とは！？」

エビバーガーモンはこう言って、エビチリとエビフライの載った皿を出した。

「これから夕飯なんですから、ちゃんと並べて下さい。」

エビバーガーモンはこれ以外にも料理を用意しているらしい。

「まさか、クラウドがここに来たってのも、食事のため？」

他のメンバーは勿論呆れたが、とりあえず用意された席に料理を並べて行った。

そして、クラウドが来たところで、

「いただきます！！」
皆で手を合わせ、食事を開始した。因みにメニューは、エビチリ、エビフライ、エビピラフ、エビのバーベキュー、と言ったエビ料理ばかりである。初めて食べた連中にはうけは良かったが、もう既に食べ飽きたキサキは不満そうだった。

一方、ムルムクスモンが拠点にしている場所では、
「ムルムクスモン様、あなたが一番の脅威と見ていたクロスハートと機動六課が動き出しました。さらにはナンバーズもそれに加わっている。」

オファニモンがムルムクスモンに報告した、

「そうか、やはり一週間待ってくれるわけではないか。竜王のクロンはまだ成熟していないが致し方あるまい。」

ムルムクスモンはこう言うと、

「オファニモン フォールダウンモード、お前が行って食い止めてこい。」

と、命令した。

「畏まりました。」

オファニモンは短くこう言うと、そのままこの場所へ向けて飛んでくるゆりかごめがけて飛んで行った。

第二十五話 古代ベルカの最強必殺兵器、復活（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介コーナー。」

カットマン

「今回は「エンジェモン」だ。エンジェモンは六枚の羽を持つ天使型デジモン。必殺技は聖なる拳で敵を殴る「ヘブンズナックル」だ。」

モニタモンA

「完全な善の存在とされ、デジタルワールドの危機に現れると言いますな。」

モニタモンB

「エンジェモンとデビモンは元々同じデジモンだったらしいですな。」

モニタモンC

「エンジェモンは天界、デビモンは地獄と、生息場所の違いですな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

キサキはリインフォース？を連れて管理局地上本部へ向かうゼスト、そして任務をまっとうしようとするドゥーエを止めに向かう。そしてオファニモンとタイキ達の戦いが始まる。

次回「邂逅、オファニモン フォールダウンモード」

第二十六話 邂逅、オフアニモン フォールダウンモード

ある時、キサキはホーリーエンジェモン、エンジェウーモン、パロットモン、そしてリインフォース？を連れてある場所へ向かっていた。

「もつとスピードでないの？パロットモン?!」

「これで精一杯、私はアキラモンじゃない。」

キサキがパロットモンに言うと、パロットモンはこう言いかえした。

「ですけど急ぎましょう!」

しかしリインフォースはパロットモンの背中であつて言った。

何故キサキが大急ぎで空を飛んでいるかと言うと、話は少し前に遡る。

「うーん？何なんでしょう?」

朝食の時、クワットロがこう言ったのだ、

「何が?」

と、隣に座っていたディエチが訊くと、

「何か忘れてる気がするんですよ。」

クワットロはこう言つて、首をかしげた。

「確か今日何かあつた気がするんですよ。」

と、ノーヴェが訊くと、

と、クワットロは言った、

と、セツ
テが言つと、

と、クワットロは言った。

と、キサキが訊いた時である、

と、クワットロは叫んだ。

従来の予定でいけば、今日はドーエが最高評議会やレジアスの始

末を行つたのだ。

と、クワットロが言った。実は昨晚、彼女が出かけるところをクワ

ツトロが見つけたのだ。理由を聞いたところ、「管理局に野暮用」

と言っていたのだ。

キサキはうい言うと、

と、訊いた。クワットロが、丁度三時間前だと聞くと、

キサキはこう叫んで、部屋から出て行こうとした。

はやてが訊くと、

キサキはこう答えた、

「現世の竜王、憎しみの炎で地上の指導者焼き尽くす、ってやつか

？」

と、クラウドが訊くと、

「どういう事だ？」

と、タイキが訊きかえした。

「本来竜王の家系は性別に関係なく第一子が跡を継ぐんだよ。」

クラウドは、本来正式な竜王に当たるのは、キサキの姉であるエリカが持っているのだと言った。そして、エリカは少なからず大元の自分が死ぬ結果となった、戦闘機事故をもみ消した管理局を恨んでいると、

「確かに、問題だな。」

と、タイキが言っていると、

「っていう事は！ウーノ姉もドラゴンになれるんっすか？！！」
すると、ウェンディが目を輝かして訊いてきた。

「ま、まあ、クローンの情報として伝わっていれば、出来ない事は無いと思うぜ。」

クラウドがこう言っていると、

「ああ、やっぱカッコイイのかな？」

ウェンディは空想の世界に入り浸り始めた。それはともかく、
「しかしどうするんですか？今から出てインペリアルドラモンの速度で飛んで管理局の地上本部には四十分、その後沢山の職員の中から潜入に優れた能力を持つドゥーエ姉さまを探し、運が悪いとゼストさん達の相手をしないといけないんですよ。竜形態になっても五分じゃ終わらせられないのでは。」

クワットロがこう言っていると、キサキは、

「そういえば。」

と言って黙ってしまった。すると、

「それならラインがいくですよ。」

ラインが名乗りを上げた、

「私がユニゾンすれば一分くらいは時間を延ばせるですよ。」
ラインが言っていると、

「では私も行きましょう。」

続いてシグナムも言った、しかし、

「いや、今回は少数で行くよ、たぶん今日あたり誰かが訪ねてくるだろうし。」

と、キサキは言った。

「パロットモン、ホーリーエンジェモン、エンジェウーモン以外のデジモンはここに残すよ。」

「となると、キサキ、リイン、デジモン三体で行くんやな。」

はやては心配そうだった。もしも敵と出くわしたら、と考えたのだろう。しかし、

「いざつて時は「ヘブンスゲート」で逃げますから。」
と、言った。

そして、すぐさまパロットモンに乗って飛び出したのだ。

管理局地上本部への途上、キサキはある物を見ていた。それはボールペンである、

「何なんですか？それ？」

リインが訊くと、

「エリカ姐さんが俺に渡したんだよ。ボールペンくらいは持ち歩けて。」

キサキは、ただのボールペンだと思えない、と言った。

「そんな事より、あれを見て下さい！」

リインに言われた方向を見ると、融合騎を連れた大男が地上本部へ

向けて飛んでいた。

「ゼストか?!ゼストの事か!!」

キサキは意味不明な一言を言うと、パロットモンの上から飛び降りた。

「はい止まれ!!武器をそこらへんに置いて投降しろ!!でいいの?」

キサキはゼストとアギトの前に立つと、こう言った後、続いて降りてきたリインに訊いた、

「キサキか、やはりそちらに付いたのか。」

ゼストがこう言うと、

「まあ成り行きで、そちらは相変わらず十数年前の事を?」

キサキはこう答え、ゼストに訊きかえした。

「ただ友人に会いに行くだけだ。どいてもらおう。」

ゼストはこう言って、キサキに槍の切っ先を向けた、

(あれが旦那が唯一認めた男。見た目は女みたいで弱そうだけど、立ち振る舞いに一切の隙がねえ)

アギトはゼストの隣でこう思った。

「どかないのなら無理やり通るまでだ!騎士として推して参る!!」
アギトはこう宣言すると、ゼストと一体化した。結果、ゼストの髪は金色となり、槍には炎が纏われ始めた。

「騎士とかそうじゃないとか!こたわるから戦いになるんでしょ!!」

リインはこう言うと、キサキと一体化した。結果、キサキの紫髪は輝く白金色になり、かつての「リインフォース」を思わせる姿になった。

(ともかく、竜形態はギリギリのキメ時で一回使うぞ)

キサキがリインに念話で方針を伝えたと、ゼストは目にも止まらぬ速度で突進した。

「な、早!!!」

キサキは驚いて魔法盾を展開したが、すべて切り払われてしまった。

すると、突然キサキの持っていたボールペンが飛び出すと、

「竜王陛下に危機発生、緊急迎撃に移ります。」

古代ベルカの言葉でこう言って、大振りな剣に変化しゼストの槍を受け止めた。

（あのボールペンはインテリジェントデバイスだったんですね）
リンがキサキの中でこう考えると、

「以外にへボいな、この剣。」

キサキはまじまじと剣を見ながら言った。

「うるせえ！！」

すると剣の鍔の部分の丸い鏡のような部分の顔が現れ、口を開いてこう言った、

「テメエが次の竜王かよ。まだ子供じゃねえか。」

標準語でキサキにこう言うと、

「剣の分際で生意気だな、おい。」

キサキが言くと、

「はっ！生意気は貴様の方だ。」

剣の「グレートカリバーン」は言くと、

「俺を使う以上、ビシビシ鍛えなおしてやるから覚悟しておけ！！」
と、言った。

「はいはい、じゃあ第一回剣術指南お願いします。」

キサキはこう答え、剣を構えた。

そしてそのころ、聖王のゆりかごでは「オフアニモン・フォールダ
ウンモード」がゆりかご上に出てきたタイキ達と向かい合っていた。

「ごきげんよう工藤タイキ様。そして機動六課の皆様と他数名。我が主に何か御用ですか？」

オフアニモンは空の上から皆を見て言った。

（他数名って？）

ナンバーズの皆はこう思っていたが、

「そういうそちらはどうした？ただ偶然出くわしたわけじゃないだろ。」

と、タイキが訊くと、

「ええ、向かう敵あらば止めるとは言われて来ました。痛い思いをさせるつもりはありません。お構え下さい。」

オフアニモンはこう言って、黒い炎を纏った巨大な鎌をかまえた。

「フレイムヘルサイズ！！」

そして、途轍もない大きさの斬撃を発射した、

「うおお！！危ねえ！！」

皆は間一髪で回避した、

「デモンズクリスタル！！」

休む間も無く、黒い水晶を大量に投げつけた。

「このままじゃやられるぞ！！」

と、ヴィータが叫ぶと、

「シャウトモン、超進化！！」

「ブイモン、超進化！！」

「テリアモン、超進化！！」

タイキ、ヴィヴィオ、アインハルトはそれぞれクロスローダーを掲げた、

「オメガシャウトモン！！」

「マグナモン！！」

「ゴルドラピットモン！！」

それぞれのデジモンが進化したところで、

「グレイモン、メールバードラモン、デジクロス！！」

グレイモンとメールバードラモンをデジクロスさせて、メタルグレ

イモンにすると、

「メタルグレイモン、超進化！！ジークグレイモン！！」

メタルグレイモンは自身の力を限界まで高め、自力で進化した。竜王エイリーンの与えた力である。

「ヘヴィメタルバルカン！！」

「プラスマシユート！！」

「ラピットファイヤー！！」

「ジークフレイム！！」

進化した四デジモンは、それぞれの得意技を放った、

「中々いい攻撃ですね、ですが。」

オフアニモンがこう言った時である。オフアニモンは攻撃に包まれた、

「よっしゃあ！！一撃だぜ！！」

オメガシャウトモンがこう叫んだ時である、

「クリスタルコーデイナー！！変わり身の術！！」

と、オフアニモンの声がした。見ると、攻撃が当たったのは、オフアニモンの形をした黒水晶だった。

「ええ！？いつの間に！？」

「奴はどこに？！！」

皆が驚いていると、

「ここだ！！」

オフアニモンは蛹から出てくる虫のように、オフアニモンの水晶像の背中を破って出てきた。

「変わってねえじゃん！！！！！！！！！！」

皆が一緒に叫んだ時である、

（あれえ、こんなのどっかで見たような？）

中でもなのは、疑問に思っていた。前に何かでそういう風に戦う奴を見たのだ、

「隙あり！！デモンズクリスタル！！」

その中で、オフアニモンは大量の水晶を投げつけた。完全に油断し

ていた皆はかわすことが出来ないと感じ、防御の態勢を取ったが、
「せえーの！！！」

メデューサモンの髪の毛に攻撃を阻んでもらい、一撃も通らなかった。彼女の髪は通常の鉄線の数十倍の強度があるのだ。

「な、ななな？」

オファニモンはメデューサモンを見て絶句した、そして、

「あなたはまさか？！伝説の”イカ娘”？！！！」

と、叫んだ。

「誰がイカ娘でゲソ！！せめて乙女妖怪と言いなさい！！！」

メデューサモンは、”うっかり”こう叫んでしまった、

「ゲソって何さ？」

皆が一樣にメデューサモンを見た時、メデューサモンは、しまった、
と言いたげな表情になった。

「再び隙あり！！フレイムヘルサイズ！！！」

オファニモンは隙を見逃さず、大きな鎌から斬撃を発射した、

「クリスタルレヴォリューション！！！」

しかし、クラウドが発生させた水晶の壁に阻まれ、攻撃は通らなかった。

「分かったろ！奴は隙に付けこむ戦いをしてくる、速攻で片付けろ
！！！」

クラウドがこう言うと、

「オメガシャウトモン！ジークグレイモン！スーパークロス！！！」

タイキはオメガシャウトモンとジークグレイモンをデジクロスさせた。
た。

「シャウトモンDX！！！」

ジークグレイモンの武装を中心に、頭部と右手がオメガシャウトモンで構成されたデジモンになると、

「ブレイブビートロックダブルクロス！！！」

強烈な業火を纏って突撃した、

「えーと、ここは。」

オフアニモンはこう言って、

「クリスタルコーディネーター、チンロンモン!!」

水晶を使って、最強と称される竜型デジモン「チンロンモン」を思わせる竜の像を一瞬で形成すると、投げつけた。

シャウトモンDXと水晶の像は激突するも、シャウトモンDXの方がパワーが上だったので、水晶を押し返し始めた。しかし、オフアニモンは投げつけた水晶の上を高速で走り抜けると、シャウトモンDXを回転で叩き落とした。

「フレ임ヘルサイズ!!トルネード!!」

そして、水晶から飛び出した勢いを利用し、強烈な縦回転でゆりかごに突撃を始めた。丁度、ランニングマシーンで転んだ時にひっくり返る力を利用したのだ。皆は一樣に飛び道具で止めようとしたが、クラウドは、

「さて!攻撃するな、よけいに回転の威力が上がるぞ!!」
と、叫んで。

「グランドラクモンヒューマン、スライドエヴォリューション!!」
グランドラクモン、ビースト!!」

人型のクラウドから、四本足の強靱な下半身としなやかな上半身を持つ魔王型デジモンに変わった。

「クリスタルブレード!!」

グランドラクモンは水晶で剣を作ると、オフアニモンにぶつけて攻撃をそらした。

「畜生、いつもなら真つ二つなのに、長い事人間だったから勘が戻らねえ。」

グランドラクモンは罅だらけになった剣を見て言った。

第二十六話 邂逅、オフアニモン フォールダウンモード（後書き）

カットマン

「カットマンと。」

モニタモンズ

「モニタモンズの。」

全員

「デジモン紹介のコーナー。」

カットマン

「今回のテーマはアンキロモン。アンキロモンは鎧竜型デジモン。必殺技は相手を尻尾のハンマーで殴る「テイルハンマー」その巨体で敵を押しつぶす「メガトンプレス」だ。」

モニタモンA

「とても固い皮膚の上に、硬くて鋭い棘を持っていますな。」

モニタモンB

「高い攻撃力と危険な見た目と違い、基本は大人しいデジモンですな。」

モニタモンC

「すっかり踏まないように気を付けるのですな。」

全員

「それじゃあまたね。」

次回予告

機動六課連合VSオファニモンの戦いに、キサキとグランドラクモンも参戦する。

グランドラクモンの実力、そしてキサキが目指す竜王とは、次回「竜王キサキ」

五話更新記念の回 その六

ある日、超人カットマンはお供の三人と一緒にいた。

カットマン

「そういう訳で、この小説の今後について話合いましょう。」

カットマンの一言で会議は始まった、

シュテル

「というか、お供の三人ってなんですか？」

カットマン

「細かいことは気にするな。」

レヴィ

「それより今後は？」

ロード

「話も佳境に入り始め、クライマックスまでもう少しか。」

カットマン

「まあ、これ以降は忙しくなるから更新が遅くなるけどね。」

ロード

「ピンクの塵芥が文句を言いそうだが。」

レヴィ

「そういえばそのピンクの人に鳴神 ソラさんから質問が来てたよ。」

もし本編に出たらどうする？ byタクティモン

だつて。」

カットマン

「そういえば、あいつから本編に出て何をしたいか聞いたことなかったけ。」

カットマンはこう言って、電話をかけた。

カットマン

「ああアミタ、バカ妹いる？」

アミタ

「はい、今変わります。」

キリエ

「何よ、私は忙しいのに。」

カットマン

「お前本編出たら何をする気だよ。」

キリエ

「決まってるじゃない、デジタルワールドを征服して、その技術を持って帰ってエルトリアを復興するの。」

カットマン

「そうかい。」

カットマンは電話を切った。

カットマン

「さて、続いての質問は鳴神 ソラさんから、さっきのキリエの質問と合わせて。

もしデジモンの主人公陣を仮面ライダーにするならどのライダーにする？ byアंक

主にデジモンのカップリングで好きなのは？

なんでオフアニモンとかベリアルヴァンデモンとかブラックウオーグレイモンはなんであんな設定に？ byネス

だな。それでは回答します。」

カットマンはこう言って、企画書を取り出した。

カットマン

「自分の考えるデジモン主人公陣が最も相応しいと思えるライダーは「仮面ライダー龍騎」だ。これは自分にとってもかなり印象に残った作品であり、尚且つライダーは皆「ミラーモンスター」と呼ばれるパートナーを持ち、主人公は「ドラグレッダー」と呼ばれる竜型のミラモン（ミラーモンスター）の事を連れているからだ。」

シュテル

「確かこの作品で初めて女性の仮面ライダーが登場したのですよね。」

レヴィ

「シュテルんそんな事知ってるんだ。」

シュテル

「常識です。」

カットマン

「いや、この間クライマックスヒーローズやっただろ。」

ロード

「ネタがさっぱり分からのだが、もう少しわかりやすく説明せよ。」

レヴィ

「やっぱりフォーゼのオープニング曲はかっこいいよね。」

シュテル

「私としてはファイズの方が良かったのですが。」

カットマン

「やっぱりオーズだろ。早くゲームのタジャドルとプティラコンボ使いてえ。」

ロード

「いでよ巨獣!!ジャガーノート!!」

三人

「ギャー!!!!!!!!!!!!!!」

ロード

「ほかの質問も答えんか!!」

カットマン

「とりあえず、ネスさんの二つ目の質問は、魔法少女系の話のラストは絶対シリアスな展開になるだろ、だから敵をコミカルな感じにしたんだよ。丁度「トミカヒーロー レスキューフォース」のような感じ。」

レヴィ

「お兄ちゃんはフォースとファイヤー、どっちが面白いと思うの？」

カットマン

「どっちも面白いぜ。まあ俺としては「トミカヒーロー レスキューポリス」なんてのがあっても面白いと思ったのだが。」

ロード

「それで、好きなデジモンのカップリングはいるのか？我はディアナモンとスパロウモンが物騒な会話をしている所が好きなのだが。」

シュテル

「私はグラウンドラモンとバステモンの寝ている所ですね。」

レヴィ

「シャウトモン×5とベルゼブモンの協力戦線だよ。とても強そうじゃん。」

カットマン

「俺はメデューサモンとグレイモンのやり取りだな。登場人物紹介で書いたが、こいつらは仲が悪いんだよ。こんな風に。」

定食屋で会った場合（デジモンである点を無視して）

メデューサモン

「そちらの一つ隣のギガ盛りのお客様、肉じゃがとおでんと、とろろと天ぷらをごはんにのせて、そんな気色悪いもの食べられたらこちらが迷惑なんでどうしてもらえます。」

グレイモン

「そういうお前も、ごはんに小豆かけて食うなんてどういう了見だ。誰かとやったのか？」

メデューサモン

「小豆とごはんと一緒に食べて悪いの？大学生の多くは赤飯のおにぎりを朝ごはんにしてるのよ。」

グレイモン

「それなら昔から多くの人がごはんに色々な食材を混ぜて食ってた。」

メデューサモン

「小豆ごはんを舐めないでよ。これはかつて小豆とごはんを別々に食べるのがたまった、サンドイッチ元帥が考えた由緒正しい食べ物なんです。」

グレイモン

「それを言うならこれだって、かつておかずとごはんを別々に食うのがたまったカオス提督が……」

メデューサモン

「それじゃあどっちがましか、こちらの人に食べ比べてもらいます？」

グレイモン

「上等だー!!」

そして、彼らの食っていた食べ物を食った人は、気絶しました。

シュテル

「銀 ですか？これなら映画館やサウナであつたら何をするか想像が付きますね。」

カットマン

「それはともかく、前にやった五話更新記念の回で話題になったデアアナモンの答え、その真相がわかったぜ。」

ロード

「そうなのか。あ奴は自分に愛されたら生きることとはできないと言っていたが。」

カットマン

「ここでデジモン紹介コーナーだ。」

シュテル

「なんでですか？」

カットマン

「文句言わず参加しろ、今回のテーマは「ホーリーエンジェモン」
ホーリーエンジェモンは大天使型のデジモン。必殺技は空間に特殊
な扉を開いて、入った相手をどこかへ飛ばす「ヘブンスゲート」だ。

レヴィ

「背中に翼は八枚あって、エクスカリバーって剣を持ってるんだよ
ね。」

カットマン

「そうそう、八枚の羽は大天使の証しと言われてるんだよ。」

シュテル

「ところで、何故いつも後書きでやっているデジモン紹介をここで

」

カットマン

「ディアナモンの話を本格的に行うと、残酷描写ありな上にR指定
が来そうなんだよ。その警告ね。残酷描写、R指定、それが何と
言う人は後書きへ、ダメな人は回れ右をして次の話の確認、もしくは
これまでの話のおさらいをしてください。ちなみに被害者は工藤
タイキではないので。」

全員

「それじゃあまたね。」

五話更新記念の回 その六（後書き）

ディアナモンの妄想

「ディアナモン、俺はあんたを愛してる。」

は私に抱かれながら言った。彼は今私によって切り裂かれ、そこから内蔵を喰らいつくされたのだ。それにしてもやはりバグラモンの魂操術は便利だ、彼が生きていればこんなことはできない。でも、精神だけを狂わせた状態でい生かし、肉体を殺してしまえば、

もはや彼は私のお人形。何をしても平気な私だけの玩具になる。

「俺はディアナモンが好きだ、あんたが居れば何もいらない。」

こうやって、好きな言葉を言わせることもできる。できればこれを永遠に続けていきたいのだが、そうもいかない。しばらくすると、私の集中力が切れて、彼は爆ぜて肉片に変わってしまう。

でも、それでいいのだ。私の望みはそこにある。ただ彼を私だけが知っていて、私一人が愛していればいいのだ。

「、愛してる。」

私はそう言って、彼の肉片を、血液を体に取り込んだ。この時が、私にとって一番幸せなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5138w/>

デジモンクロスウォーズ 絆の将と魔道の戦士

2012年1月14日15時51分発行